
紅の装甲竜騎兵

鯨井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の装甲竜騎兵

【Nコード】

N1505P

【作者名】

鰺井

【あらすじ】

天才少年パイロット山矢健太は突然、異世界に引き込まれる。新たな肉体を得た彼は竜にまたがり大空を駆ける。

1 始まり

その日、街の郊外のその地点から見上げた空は、真っ青に晴れ渡っていた。

本来ならやや濁って見えるその空も、都心から流れてくる排気ガスが昨日の雨と冬の先触れかと思われる冷気によって流されてしまったせいか、その青色の鮮やかさだけが強調されて見えた。まさに「天高く馬肥ゆる秋」などという使い古された言葉を実感せざるを得ない、そんな空模様だった。

とは言え、その日の空は気象学で言うところのいわゆる快晴ではなかった。なぜなら、ほんの2つ、3つではあったが、白い綿雲が空の片隅から中央へと、時ならぬ寒風に吹かれて漂っていたからである。

その場所の周囲には、あまり建物が建て込んでいない。電柱のたぐいも少ない。だから、ひとたび空を見上げれば、その視界には吸い込まれそうな青空と雄大な白い雲の見事な競演しか目に入らなくなる。

また、大きな道路からも離れているため、車のエンジン音や、気短なトラック運転手が鳴らすクラクションの音に聴覚を邪魔されることもなかった。耳に聞こえてくるのは、少し離れたところにある住宅地からの、かすかな生活音だけだった。

いや、違う。

よく耳を澄ますと、ごく小さくだが、どこからか低い唸り声のよ

うな音が聞こえてくる。

しかも、だんだん大きくなってゆく。

大きくなるにつれ、その音がどこから発されたものであるか、明瞭に知覚されるようになった。それは、西の方向、しかもやや上方から聞こえてくる音であった。

ふと西の空に目をやると、先程まで白い綿雲が陣取っていた空を、一筋の赤い矢のようなものが切り裂いていた。

もちろん、本物の矢ではない。なぜならその赤い一筋は弓から放たれたかのようにまっすぐ的をめがけて飛んでいるわけではなく、むしろ、画家が青いキャンバスに赤い絵の具の付いた筆を走らせるがごとく、複雑な曲線を描いていたからである。

そう、それは、真っ赤な複葉機だったのである。

「すごい……」

言葉を発したのは、高校生と思しき制服姿の少女であった。

「ほんと……」

相づちを打ったのは、やはり制服姿の少女だった。

2人はぴつたりと肩を寄せ合って西の空を見上げている。まるで気を許すところの青空に吸い込まれてしまいそうだとも言わんばかりである。もっとも、片方の少女は背がやや低く、もう片方はむしろ長身なので、肩を寄せ合っていると言うよりは肩と肘をくっつけ

合っていると言つべきかもしれない。

そんな2人のつぶやきを聞いてますます得意になったわけでもな
かるうが、赤い複葉機が描く模様は更に複雑さの度合いを増した。
楕円や8の字は単純な方だった。少女たちは今まで、飛行機がV字
型の軌跡を描くなど想像したことなかった。

「あつ、落ちちゃう!」

複葉機が機首を下に向けたまま地面すれすれまで落ちてきたとき、
背が低い方の少女は悲鳴を上げ、口に手を当てたまま身をこわばら
せてしまった。背の高い方の少女はすでに喉さえ凍り付いてしまっ
ていた。

と、その途端。

「大丈夫よ」

少女たちの背後から柔らかな女声が響いた。

すると、あたかもその声が合図であつたかのように、複葉機は機
首を下に向けたままふわっと浮き上がったかと思うと、カクンと機
首を上に向け、今度は勢いよく、それこそ赤い弾丸のように一気に
青空を駆け上がっていったのだった。

「びつくりしたあ」

背の低い少女は自分の感情を素直に言葉で表現した。他方、背の
高い少女は手を胸で押さえながら控えめに安堵のため息をついた。

赤い複葉機が東の空の彼方に小さくなり、辺りに再び静かな秋のひとつが戻ってきたことを確認すると、少女たちは、背後にいないの、先ほどの声の主を求めて振り返った。

そこに立っていたのは、これまた同じ制服を着た少女だった。

肩のあたりで切りそろえられた髪、日焼けした肌、恐らく体育系のクラブ活動をしているのだろう、見るからに活発そうである。

視線を向けられたというのに、その少女は依然として小麦色の顔を東の空のほうに向けいていた。

背の低い少女はそんな彼女の様子にはお構いなしに、あくまでも自分のペースで

「ほんと、すごいんだね、山矢君って」

と言った。その大きな瞳は、喜び、楽しさ、興奮、好奇心といった、すべてのポジティブな感情ではち切れんばかりにきらきら輝いていた。

一方、背の高い少女は

「ほんと。でもちょっとびっくりしたわ」

と、口の中でつぶやくように言った。背の低い少女とは違い、自分の心の中にある弾け出しそうな興奮をどう扱ってよいのか判じかねている様子だった。

そこでやっと小麦色の顔をした少女は視線を天空から地上へと降

ろし、

「でしょ」

と言って、心底嬉しそうに微笑んだ。

背の低い少女は即座に言葉を返した。

「うん。あたし、山矢君のこと見直した。あんなすごいことが出来るなんて」

背の高い方もそれに続いた。

「あたしも。だって山矢君って、普段はあんまり目立たないでしょ。いつも教室の窓辺でぼーっと空を見上げてばかりで」

小麦色の顔をした少女はちょっといたずらっぽくそれに応えた。

「目立たない、とかじゃなくて、変な奴って、はっきり言ってくれてもいいんだよ」

背の高い方が「そんなつもりは」と言い返す前に、背の低い方が言葉を挟んだ。

「ははは、変な奴か。でもほんとに変な奴だと思ってた」

このはつきりしたものの言い方に背の高い少女はいつもはらはらさせられている。

しかし、小麦色の顔の少女は、むしろ我が意を得たりといった様

子で

「そうなんだよねえ。なんか得体の知れないやつなんだよね」

と応えた。「それに顔がとりたてていいわけでもないし、背もあまり高くないし」

「なのに」背の高い少女はおそろおそろ口を挟んだ。「なのに『あの人』なの？」

普段口数の少ないこの少女にペースを合わせたつもりなのか、小麦色の顔の少女は少し間をおいてから無言のままゆっくりとうなずいた。

「あ、帰ってきたよ」背の低い少女はそう言って東の空を指さした。

見ると、やや茜色を帯びてきた陽の光をその機体に反射させながら、赤い複葉機が軽やかに、優雅に舞い降りてきた。

「い」

小麦色の顔の少女はそう言って二人の友を促しながら、すでに駆けだしていた。

その間にも複葉機は見る見る高度を下げ、やがて柔らかくなでるように滑走路へと滑り込んだ。

小麦色の顔の少女の走るペースは、普段のクラブ活動で鍛えているせいか、はたまた別の理由からか、小走りと言うにはいささか速すぎた。

「ああん、美玖、速い。ちょっと待ってよ」

彼女の2人の友が息も絶え絶えに不平をこぼしているのが、彼女の耳にはもう届かないらしい。彼女の関心は駐機場に入って行く赤い飛行機を目で追うことにのみ注がれている。活発な彼女と、運動がそれほど得意でない2人との間の距離は開く一方だった。

数分後に追いつくことが出来たのは、彼女が友の要求を聞き入れたからではなく、何か他の理由でぱったりと足を止めたからである。そこは駐機場のど真ん中だった。

駐機場と言っても、もちろん旅客機の飛び立つ大空港のそれとは違う。この飛行場にあるのは大きくてもせいぜい個人所有の小型ジェット機にすぎない。それも頻繁に出入りするわけではない。辺りは閑散としていて、プロペラ機が1、2機、エンジン音を響かせてはいるが、案外静かなものだ。

美玖と呼ばれた小麦色の顔の少女が足を止めたのは、先ほど舞い降りた赤い複葉機から30メートルほど離れた場所だった。

「美玖ったら」

やっと追いついた2人の友は改めて不平をこぼそうとした。しかしすぐにやめた。相手にその不平を受け入れるだけの余地がないことに気づいたからである。そう、美玖という少女の視線は複葉機に
　　と言うよりも複葉機の操縦席横の扉を開けて出てこようとする人物に　　釘付けとなっていたのである。

それは、小汚い野球帽をつばを後ろにしてかぶり、ゴーグルを目

ではなく額にかけ、真っ白なＴシャツの上に古ぼけた革のジャケットを羽織り、黄土色のゆったりしたズボンをはいた少年だった。

彼は地面に降り立つや否や周りの様子には目もくれず機体の前に回り、慣れた様子で今し方停止したばかりのプロペラをいじり始めた。

「山矢君」

美玖は声をかけた。そして、山矢と呼ばれたその少年がちらつと自分のほうを見、またすぐに視線をプロペラのほうに戻したのを確認してから、ゆっくりと複葉機のほうへ歩みだした。

美玖の２人の友人には、その様子がまるでビデオのスロー再生のように映った。次の瞬間に何が起るのか予想がつかなかったからである。

美玖はどんどん進んでゆき、山矢少年のほんの１メートル手前でやっと足を止めた。

しかし山矢の視線は完全にプロペラに固定されているようだった。

「ちいーっす」少し腰をかがめて山矢の顔を覗き込むようにしながら美玖は言った。「調子どう？」

山矢はそこで再び視線を美玖に向け

「ああ、いつもどおりだ」

と応えた。

「そっか」

美玖はとても嬉しそうにそう言った。

「ああ」

山矢もわずかに口元をほころばせながらそう応えた。

その瞬間、美玖の友人たちの心のVTRは、スロー再生から通常の再生へと変わった。

「今日ね、友達連れてきたんだ」

美玖はそう言葉を続け、友人たちのほうに視線をよこした。

「同じクラスの川名理恵と本多智美。知ってるでしょ」

すると山矢もつられて視線を向けてきた。ちよつと怪訝そうな顔をしている。

「山矢君、こんにちはーっ」背の低い少女は待つてましたとばかりに複葉機のほうへ駆けだした。

一方背の高い方は小さな声で「こんにちは……」と呟きながら、ためらいがちに飛行機のほうに近づいた。

山矢は二人の挨拶に対しぶっきらぼうに

「おう」

と応え、またすぐに機械いじりに戻った。

アクロバット飛行による緊張の余韻なのか、それとも、先程まで熱く燃えていたエンジンのすぐそばにいるせいか、山矢の額には大粒の汗が光っていた。一心不乱にエンジンを見つめるその眼差しは、普段学校では決して見ることでできないものだった。

しかし、美玖の友人たちをもっと驚かせたのは、山矢の眼差しよりも、むしろそんな山矢を見つめる美玖の眼差しだった。

まるで、持てるすべての感情を、想う相手にぶつけようとしているかのような……。

彼女たちが機体のそばまでやってくると、山矢は機械を見つめたまま

「相良、おまえ、部活はいいのか？」

と美玖に尋ねた。

美玖はちよつとばつが悪そうに

「うん……。今日はサボリ」

と答えた。

「出なくていいのかよ」

「いい……ことない」

「じゃあ出るよ」

「うん……」

さつきから何か言いたくてうずうずしていた背の低い方の友人はここぞとばかり口を挟んだ。

「ねえ、山矢君、美玖が山矢君の飛行機の練習を見に来たら迷惑なの？」

背の高い方の友人は、あまりにも直接的なその言い方に仰天し小声で「ちよっと、理恵ったら」と囁きながら彼女の制服の袖を引っ張った。

しかし、当の本人はおるか、山矢も美玖もさほど気にしていない様子だった。美玖など逆に、いいことを訊いてくれたと言わんばかりの表情だった。

山矢は答えた。「いや俺のほうは別に構わないんだけどさ、相良が部活続けられなくなったらやばいじゃないか」

「なるほどね」背の低い少女の応えは意外にも素っ気なかった。しかしその表情が何かに納得したことを物語っていた。

そこで山矢は機械いじりの手を止め、やにわに歩き出した。「部品が足りない。取ってくる」

彼の姿は、50メートルほど離れたところにある倉庫の中に消えていった。

その途端、背の低い少女は美玖に向かって

「許可します」

と言った。

美玖は当然「何を？」といぶかった。

「美玖が山矢君に告白することを、です」

友人はわざとくそまじめな表情を作ってそう答えた。

美玖は呆れたように肩をすくめて

「理恵、あんたいつからあたしの保護者になったの」

と訊いた。

「小学生の頃、あなたと同じクラスになったあのときからです」

「はいはい、それはどうもありがとう」

「ではもう一人の保護者の許可もいただきましょう」

「はあ？」

背の低い理恵は、背の高い智美を見上げ発言を促した。

「どうですか、保護者その2」

智美はいきなりコメントを求められ、狼狽した。

「え？いえ、そんな、許可とかそんなのじゃなくて、その……、ただ、美玖が好きな人がどんな人なのか、ちょっと見てみようと思っただけで、別にそんな……」

「そういうこと」美玖はいかにも納得したと言いたげにうんうんとうなずいて見せた。「それで突然、山矢君の飛行機の練習と一緒に見に来たいなんて言いだしたわけね」

「そうです」理恵はまだ保護者口調だった。「それでたったいま許可を与えてもよいという決定を下しました」

「はいはいありがたく頂戴いたします」美玖はおどけて、何かを受け取り拝むような仕草をして見せた。

「でも……」智美は申し訳なさそうに、大きな体を縮こめながら言った。「山矢君がどんな人かはわかった。その……ちゃんとした人だって。だから……あたしも許可を与えてもいいかな……」

美玖はちよつと嬉しくなった。口調は依然として「わかりました、保護者様、ありがたく頂戴つかまつります」などとおどけていたが、自分のことを心配してくれる友人たちに感謝したい気持ちで一杯だった。

「山矢君ね」美玖は語り始めた。「実は帰国子女なんだ。飛行機の操縦もアメリカで覚えたんだって。山矢君自身はずっとアメリカに住みたかったらしいんだけど、親に反対されたみたい」

「じゃあ、あんまり喋らないのは……」理恵が美玖を見上げた。

「うん、小さい頃は日本に住んでいたし両親も日本人だから発音は全然普通なんだけど、単語があんまりわからなくて、からかわれたことがあるらしくて」

「そうだったの……」智美はまるで我がことを悲しむかのような表情をした。

そこへ、山矢が戻ってきた。山矢は3人がいままで何か真剣な話をしていたらしいことに気づいているふうではあったが、敢えてそれを無視して再びエンジンいじりに取りかかった。

智美は思った。山矢は決して鈍感ではない。ただ、いま美玖が語ったような事情でぶつきらぼうになっちゃったただけだ。さっきだって美玖の部活のことを心配してくれたではないか。

一方、理恵は美玖がなさなければならぬ重要な仕事を思い出した。

「ねえ、美玖、あれ、渡さないと」

理恵に肘をこづかれて、美玖もその用件を思い出した。

その用件。それは、その日の昼休み、気の弱い家庭科教師を丸め込んで（脅して）半ば強引に調理実習室を借り切り、こっそり持ち込んであった食材で作り上げた手作り弁当だった。山矢がいつも飛行機の練習の後、ファーストフードやコンビニのサンドイッチを頬張っているのを見て思い立った作戦だった。

「そ、そうね、渡さなきゃ」

美玖はめずらしく緊張気味だった。料理の腕にそれほど自身があるほうではなかったからである。

しかし彼女はうじうじとした行動を好まない。何事に付けてもやる時は思い切ってやってしまふ。それが彼女の持ち味なのである。

美玖は覚悟を決め、弁当箱の入った巾着袋を山矢の目の前に差しだそうとした。

ところがその瞬間。

「やまやくうううん」

どこからか、ねばねばと糸を引きそうなほど粘つく甘ったるい女の声がした。

美玖とその友人たちは、声の出所を探るべく首をぐるりと一周させた。しかし少なくとも背後には誰の姿も見あたらなかった。

発見できたのは、首を体と共に360°回転させ、元の向きに戻したときだった。驚いたことに、いつの間にか美玖と山矢の間の2メートルほどの空間に一人の女が割り込んでいたのである。

美玖たちはあまりの唐突さに、文字通り呆気にとられた。

女は確かに美玖たちと同じ制服を着ている。しかし彼女のことをここで「少女」と表現するのはいささか無理がある。なぜならその制服が描き出すボーダーラインがあまりにも成熟したものだからで

ある。いや体だけではない。女の顔立ち自体が、少し日本人離れしているせいもあってか、艶っぽい、大人の色香を醸し出しているのである。

しかし美玖たちを驚かせたのはその登場の仕方や容姿だけではなかった。

女はあろうことか、馴れ馴れしく山矢の腕を取ってその豊かな胸に包み込み、あげくその唇が相手のそれに触れてしまいそうなほど、顔を接近させたのだった。

「ハーイ、山矢君。お元気？」

女のなまめかしい唇から甘ったるい吐息とともにそんな言葉が漏れた。

山矢はそれに対し、無表情のまま「おう」と答えただけだった。

「山矢君たら、相変わらず素っ気ないんだから」女は不満げだった。「ねえ、『ケンタ』って呼んじゃだめ？同じ帰国子女同士なんだから、別に構わないでしょ。そしたらもつと親しくなれると思わない？」

「やめろよ」山矢はあくまでもクールだった。「苗字でいい」

美玖の友人たちはようやく初期の混乱から立ち直りつつあった。冷静になった頭でよく考えてみると、あの女には見覚えがあった。確か彼女はスペイン人だったかイタリア人だったかのハーフで、今年の4月に美玖たちの高校へ転校してきたばかりの2年生だったはず。一応、美玖たちの1年先輩ということになる。

「あの」理恵は、智美よりもさらに10センチ背の高いその女を見上げながら訊いた。「山矢君のお知り合いですか」

女は大袈裟に驚いて見せた。いま初めて美玖たちの存在に気づいた、と言わんばかりに。「山矢君、彼女たちは誰？」

「同じクラスの女子たちだ」

「ふーん」

女は彼女たちを値踏みするような目つきで、美玖、理恵、智美の順に眺めた。そして最後にもう一度美玖の顔を睨み付け、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「わたしは八木沢ソーニャ。山矢君の最も親しい友達。そしてたぶん……恋人候補」

さつきからずっと固まったままだった美玖が体をぴくりとさせた。

「ち、ちがうだろ」さすがの山矢も少し狼狽したようだった。

ソーニャと名乗った女は「うふっ」と妖艶な笑みをこぼした。

美玖たち3人はまず理恵がはつきりとした口調で

「川名理恵です」

と名乗り、次に智美が消え入りそうな声で

「本多智美です」と続き、最後に美玖が、彼女にしては珍しく呟くような声で

「相良……美玖です……」

と自己紹介した。

「よろしくね」ソーニヤは感情のこもらない口調でそう答えた。もはや彼女の関心は美玖たちにはないらしい。「ねえ、山矢君」

「なんだ」

ソーニヤは手にした小さなバッグの中から何かを取り出し「これ」と言つて山矢に手渡した。「プレゼント」

山矢はそれを手でつまんで目の前に垂らした。それは銀色の鎖にぶら下げられた紫色の小さなペンダントだった。

「あなたにあげる」

「俺に？」

「もうすぐアクロバット飛行競技会があるでしょ。この紫色の石は値段は高くないんだけど、わたしの生まれ故郷では幸運と安全のお守りとして大事にされているものの。山矢君の実力なら史上最少優勝は間違いなし。でも万が一ってことがあるから」

山矢は瞬時、黙り込んだ。そして、ペンダントとソーニヤの瞳を見比べた。きつとそれは時間にすれば1秒にも満たなかっただろう。しかし、美玖たちにしてみればそれは永遠にも等しい長さだった。

なぜなら山矢が次にとる行動が予想できなかったから　いや、本当は、予想はできていたのだが、その予想通りのことが現実起こって欲しくないという願望があったから　だった。

「わかった。もらつとくよ」山矢は無情にも、それを受け取ってしまった。

理恵の傍らで再び美玖の体がぴくりと動いた。

「あ、あの……、山矢君……」美玖はなんとか声を絞り出した。「あたしたちそろそろ帰るね……」

山矢は視線を久々に美玖のほうに向けた。

「そうか……」

山矢の反応は相変わらずぶっきらぼうだった。しかし理恵と智美にはその口調が、いつも通りの素っ気なさにも思えたし、いつもとは違う、何か余韻めいたものを残しているようにも思えた。

「じゃね」美玖はくるりと向きを変え、来たときと同じ勢いで駆けだした。

理恵と智美はその場で一礼をしてから美玖の後を追いかけた。

2人が次に美玖に追いつくことができたのは飛行場にほど近いバス停のベンチ前だった。1分ぐらい前に到着していたはずの美玖は、すでにベンチに腰掛け、弁当箱入りの巾着袋を手に提げたまま、がつくりと肩をうなだれていた。

そんな彼女を前にして、友人たちはかけろべき言葉を見つけあぐねた。

「ふふっ」突然、美玖が小さな笑い声をあげた。「あたし、何やってんだろ」

「美玖……」

「なんか、バカみたい。一人ではしゃぎまくって。山矢君はあたしにアクロバット飛行競技会のこと教えてもくれてなかった。でもあのソーニャって女は知ってた。あたしは山矢君の練習を見に来るようになってからまだ2ヶ月。きつとあの女はもつとずっと前から山矢君と親しかつたんだよ」

「そんなことわからないじゃない」理恵が言った。

「だってあんなに親しそうだったし」

「彼女は外国育ちなのだから、きつとあれが普通なのよ」智美が反論した。

「いくら外国育ちでもあれは特別だよ。バカみたい、あたしバカみたい。理恵や智美にも迷惑をかけてお弁当作るの手伝わせたりして、ホント、バカみたい」

「ううん、それは違うわ」智美が珍しくきつぱりと言った。「迷惑なんかじゃない。あたしたちがあなたの世話を焼いたのはそうすることが楽しかったから。うまく言えないけど、あたしたちはあなたと喜びや楽しみを共有したかったの。決して迷惑なんかじゃないわ」

「でも」

「智美の言うとおりよ」理恵はいつも通りはつきりとものを言った。
「あんたにバカなところがあるとするれば、それは現実を見てないところよ。山矢君、あのソーニャって女に抱きつかれて喜んでた？恋人候補って言われて肯定した？美玖、あんたは勝手な想像を膨らませてうじうじと思い悩むようタイプじゃないでしょうが」

「理恵、智美……」美玖は顔を上げ二人の友の目を交互に見つめた。
「きっと大丈夫よ」智美が応えた。

「今日はお弁当渡し損ねたけど、次は必ず、ね」理恵もそう励ました。

「うん……、わかった」

美玖は自嘲に満ちた作り笑いを捨て、やっと本来の晴れやかな笑顔を取り戻した。

その後、理恵が学校でそれとなく探り出したところによれば、実は山矢はアクロバット飛行競技会のことを美玖にもソーニャにも誰にも言わないつもりだったのに、山矢がコーチと話すのをソーニャが立ち聞きして知ってしまったらしい、とのことだった。

もちろん美玖は山矢に、競技会に応援に行くことを申し出た。山

矢は、こちらでも当然のごとく難色を示した。競技会の会場が遠くて交通の便が悪いことがその理由だった。しかし、美玖は持ち前の積極性でなんとか山矢から同意を取り付けた。ただそれと引き替えに美玖が部活をさぼって飛行場へ練習を見に来るのを控えるよう約束させられた。その結果、先日失敗に終わった弁当作戦に再チャレンジする機会が、競技会の当日まで訪れないこととなってしまった。

それから10日後の日曜日、遂にその日が来た。

美玖は朝3時に起きて弁当の支度にかかった。某県にある競技会場までは電車バスを乗り継いで2時間半ほどかかる。その上、日本の競技会に出るのが初めてである山矢は、新人扱いのため、演技の順番が早いのである。もつともそのおかげで、演技が終わった後にお昼ご飯としてゆっくり弁当を食べてもらうことができるのだが。

5時に最寄りの駅前で理恵、智美と待ち合わせていつもの路線に乗る。普段はお目にかかることのできない閑散とした都心を抜けるころ、ようやく陽が昇り始めた。某県方面へ向かう電車は対面式クロスシートだったため美玖と理恵は遠慮なく体を伸ばして居眠りをした。智美も眠くて仕方がなかったが乗り過ごすことを心配して結局、一睡もしなかった。

某駅から乗り継いだバスの中で、智美は持参してきた雑誌を拡げて美玖に見せた。そこには『史上最年少で優勝を狙う天才パイロット山矢健太』という記事が小さく掲載されていた。この前ソーニャが言っていた「山矢君なら優勝間違いなし」という言葉は、決して大袈裟ではなかったのである。

そのうち美玖と理恵がうつらうつらし始めた。心配性の智美は乗り過ぎはしないかとまたやきもきした。しかしそれは杞憂だった。

「見て」

理恵が窓の外を指さした。

3人で山矢の練習を見に行ったあの日と同様、いやあの日以上に晴れ渡っている真っ青な空に、セスナ機が一機、ぐるりと輪を描いたのだった。

バスを降りた後も美玖たちは会場までの道のりを迷うことはなかった。青空の中で優雅に舞踊する飛行機を目指して歩けばよかったからである。

彼女たちは一般の客席を通り過ぎ、関係者以外立入禁止という看板の前で睨みをきかせている係員に、山矢に昨日渡されていた通行証を見せ、奥へと進んだ。

山矢たちが陣取っている場所はすぐにわかった。観客にアピールするために派手に塗装された無数の飛行機の群の中にあっても、あの真っ赤な複葉機はひときわ目立つ存在だった。

「山矢君」美玖は機体のそばに立つ山矢の背中に声をかけた。

山矢はすぐに振り向き「おう」と、いつも通りぶっきらぼうな相づちを返してきた。

美玖は彼のそばまで歩み寄り

「頑張つてね」

と言った。

「おう」

「あの、山矢君」美玖は今度は一瞬もためらわなかった。「これ、お弁当。演技が終るころちょうどお昼でしょ」

「ああ」山矢は、美玖が差し出した巾着袋をまじまじと見つめた。

「食べてね」

理恵と智美はそのとき初めて見た。あの山矢健太が本当に嬉しそうに微笑むところを。

「ああ、わかった」

瞬間、山矢と美玖の存在するその空間が、暖かい色で包まれた。理恵と智美にはそう感じられた。それは本当に心地よい空間だった。本来第3者にすぎない彼女たちにとってさえそうなのである。美玖本人の感じている喜びが一体どのようなものなのか、彼女たちには想像もつかなかった。

しかし次の瞬間、その空間の調和は、突然流れ込んできたドギついピンク色によって乱されてしまった。

「やまやくうううん」

ソーニャだった。ド派手なピンク色の超ミニワンピースを着たソーニャが、その大きな体からは信じられないような敏捷さで、山矢と美玖の間にすると割り込んだのである。

「ハロー、山矢君」

「お、おう」山矢もびっくりした様子だった。

「頑張つてね。絶対優勝してね」ソーニヤはこの前と同様、山矢の腕を取って胸の谷間に押しつけ、彼の顔から10センチほどのところにまでその唇を近づけて話した。

「ああ、頑張る」

「ねえ、わたしのあげたお守り、持ってる」

「あ？あの紫色の石のついたペンダントか？たぶんどこかにあると思う」

「お願い、演技中は必ず首に掛けて。大切なお守りだから」

「ああ」

「絶対よ」

「わかったよ」

山矢とソーニヤが仲むつまじく話すさまを他人が見れば、まず間違いない恋人同士だと思うだろう。理恵と智美は心配になって、恐る恐る美玖のほうに目をやった。

ところが美玖は、堂々と胸を張ってソーニヤを睨み付けていた。口元に不敵な笑みさえ浮かべている。

理恵と智美は取り敢えず安心した。ただ、ここでもう一つ別の心配事が生じた。美玖のあの挑戦的な視線にソーニヤがどう反応するか、ということである。

ソーニヤも美玖の視線に気づいた。まさかこんなところで修羅場を演じることになるのだろうか。智美の心配症はその度を極めた。

ソーニヤはしかし、その視線を軽い微笑みでいなし、山矢に「じゃあね」と声を掛けてから、出現時と同じ敏捷さで、するりとその場を去っていったのだった。

後に残された4人は呆然とその背中を見送った。

彼らがようやく我に返ったのは「おい健太」という、男の人の声がしたときだった。

「コーチが呼んでる」山矢が言った。「俺、そろそろ準備しなきゃ」

「うん、わかった」美玖が応えた。「頑張ってね」

「ああ」

「じゃあ、またあとで」美玖はきびすを返そうとした。

「あ、相良」山矢は唐突に美玖を呼び止めた。

美玖はちよつとびつくりした。「何？」

「俺、演技が終わったらお前に言いたいことがある。ずっと前から

言いたいと思っていたことなんだ」いつも伏し目がちに話す山矢が珍しく美玖の目を見つめていた。

美玖は最上の微笑みを返した。「うん」

「じゃあな」山矢はくるりと背を向け、複葉機のほうへ歩いていった。

「さて」美玖は友のほうを振り返った。「あたしたちは観客席のほうへ移動しよ」

「うん」理恵と智美はうなずいた。

いよいよ山矢の演技の順番が回ってきた。

「エントリーナンバー3番。山矢健太」

DJふうの場内アナウンスがそう告げると、それほどたくさんはいない観客たちの間から控えめなどよめきがわき起こった。山矢健太の名は結構有名らしい。

「山矢君」

美玖は祈るように独り言ち、弁当箱入りの巾着袋を握りしめた。そして少し離れたところにある飛行場からあの赤い複葉機が飛んでくるのをじっと待った。

ところがどういう訳か、いつまで経っても山矢の機体は現れる気配を見せなかったのである。

2 マキナスの森

その日、アヴニ村近郊のその地点から見上げた空は、真つ青に晴れ渡っていた。

いつもはやや霞がかって見えるその空も、近隣の山々から流れてくる湿気が、真冬の再来かと思われる冷氣によって流されてしまつたせい、その青色の鮮やかさだけが強調されて見えた。まさに「春爛漫」などという使い古された言葉を実感せざるを得ない、そんな空模様だった。

とは言え、その日の空は魔道学で言うところのいわゆる快晴ではなかった。なぜなら、ほんの2つ、3つではあつたが、白い綿雲が空の片隅から中央へと、時ならぬ寒風に吹かれて漂っていたからである。

その場所の周囲には、あまり樹木が立て込んでいない。立っていてもまだほとんど葉を付けていない。だからひとたび空を見上げれば、その視界には、吸い込まれそうな青空と、雄大な白い雲の見事な競演しか目に入らなくなる。

また、川のせせらぎからも離れているため、水が岩の間を流れ落ちる音や、村の女たちが洗濯がてら発する陽気な話し声に聴覚を邪魔されることもなかった。耳に聞こえてくるのは、カッコーの巣で小鳥たちがたてる、かすかなさえずり声だけだった。

いや、違う。

よく耳を澄ますと、ごく小さくだが、どこからか低い唸り声のよ

うな音が聞こえてくる。

しかも、だんだん大きくなってゆく。

大きくなるにつれ、その音がどこから発されたものであるか、明瞭に知覚されるようになった。それは、西の方向、しかもやや上方から聞こえてくる音であった。

ふと西の空に目をやると、先程まで白い綿雲が陣取っていた空を、一筋の赤い矢のようなものが切り裂いていた。

もちろん、本物の矢ではなかった。なぜならその赤い一筋は弓から放たれたかのようにまっすぐ的をめがけて飛んでいるわけではなく、むしろ、親鳥から飛び方を教わったばかりの小鳥のように、ふらふらと危なっかしい軌跡を描いていたからである。

「あれは……？」

言葉を発したのは、白魔道士と思しき少女だった。

「竜騎兵……」

問いに答えたのは、少女自身だった。と言うより、その場には彼女一人しかいなかった。

「こんな田舎に竜騎兵が現れるなんて……珍しいわね……」彼女は独り言を続けた。「ここもそのうち戦場になるのかしら……」

やがてその危なっかしい赤い一筋は、ぐにやりときこちなく向きを変え、少女の立っている場所へ向かって降下を始めた。

「こっちへ来る……。アヴニ村に用があるのかしら」

その途端。

「あつ」

その赤い物体から黒い煙が上がった。よく見ると、その物体は頭と思しき部分を下に向けていないばかりか、むちゃくちゃに回転しながら高度を下げつつあったのである。

「降下じゃない。墜落しているんだわ！」

そう叫ぶや否や、彼女は脱兎の如く走り出した。

彼女の推測によれば、その物体はおそらく村の向こう側、マキナスの森の辺りに落ちるはずだった。

彼女は一目散に村へ駆け戻った。

村ではすでに、異常事態を察知した村人たちが多数、広場や街路に出て西の方向を仰ぎ見ていた。

「お父さん！」

少女は、村人の群の中に自分の父親を見つけ、そう叫んだ。

「ルーミア！」父親はそう言って少女に一瞥をくれたが、すぐに赤い物体のほうへ目を戻した。

ルーミアと呼ばれた少女は「竜騎兵の乗った竜が墜落するわ」と言い残して駆け足のまま父のそばを通過した。

「わかった、お父さんもすぐ行く。おい、ルーミア、待て、危ないぞ……」ルーミアが足を止めなかったため、父親の声は背後でフェードアウトしていった。

彼女が反対側の村の出口を出、マキナスの森の入口に達したとき、地響きと共にどーんと大きな音がした。

「泉の近くに落ちたみたいだわ」

アヴニ村の村民にとって、マキナスの森は食糧の供給源であり、憩いの場であり、子供の遊び場でもあった。自分の家の裏庭と同じくらいマキナスの森を知っていた。ルーミアの足は、ルーミア自身が知覚するよりも前に泉への最短進路をとっていた。

しかし彼女は、泉があったはずの場所に彼女の知っている光景を発見することができなかった。

「すごい火……」

彼女の足は、山のように巨大な炎の前で、すくんで動かなくなってしまった。

火の周りでは、彼女に先んじていた勇気ある若者たちが、すでに消火活動を開始していた。ある者は人手の不足を、ある者は泉の水を汲み出す桶の不足を、ある者は森の樹木へ引火することの危険性を叫びながら、まさに決死の覚悟で炎と格闘していた。

そこへ、数人の男たちと共にルーミアの父親が追いついてきた。

「ルーミア！」父は、身をこわばらせているルーミアの肩を抱き、火から遠ざけようとした。「危ないからルーミアは村へ戻れ」

「お父さん」

「あの火は油が燃えている火だ。きっと敵の城に火をかけるつもりで油をたくさん積んでいたのだろう」

「油？」

「そうだ。油の中には爆発する種類のものもある。そうなったら辺り一帯は火の海だ。早く戻れ、ルーミア」

そう言っているうちにもルーミアの父は2歩3歩とルーミアを火から遠ざけていた。

そのときルーミアは見た。炎の中で人の形をした物が、ばさつと崩れ落ちるのを。

「お父さん、人！」

父は炎には一瞥もくれず、更に5歩6歩と我が娘を後退させた。

「あの竜騎兵には可哀想だがあれだけ炎が強くては骨の髄まで黒焦げになるだろう。もはやおまえが『再生の術』を用いたとしても助からん」

突然、ルーミアは

「だめ！」

と叫んだ。

「あたしが助ける！」

父は文字通りびっくり仰天してしまった。「何を言い出すんだ、ルーミア。爆発するかもしれないんだぞ。火の海になるんだぞ。向こうを助けるとか言う前にこっちが助からないかもしれないんだぞ」

ルーミアは激しく首を振った。「あたし、お母さんの命を病氣から救ってあげることができなかった。ずっと悩んでいたの。これじゃ何のために白魔道士になったのかわからないって。お願い、お父さん、助けに行かせて。あたしこれ以上人が死ぬのを見たくない」

「ルーミア……」父親はこれ以上止めても無駄であることを悟った。「わかった、ルーミア。一緒に火を消そう。1分でも1秒でも早く火を消せば、残った魂のかけらからあの竜騎兵の肉体を再生できるかもしれない」

「ありがとう、お父さん」ルーミアは父親の腕をふりほどき燃えさかる炎へ向かって駆けだしていった。

父もそのあとに続いた。

魔法が使える彼ら父娘の仕事は、念動力で複数の桶をいつぺんに操って泉から水をすくい、その一部を若者が腕力で運ぶのに委ね、残りをそのまま念動力で炎にぶちまけることだった。

父は思った。我が娘はいつの間にかこんなに責任感の強い人間にな

ったのだろう。ついこの間まで、人見知りする、気の弱い小さな子供にすぎないと思っていたのに。それに引き替え、人の命を救うという本来の仕事を放棄して真っ先に逃げようとした自分は白魔道士失格だ。もし万が一のことがあったらこの命に代えても娘のことを守ってやるう、と。

その後数時間に渡って、アヴニの村民たちは炎との死闘を繰り広げた。

夢には2種類ある。

一つは現実起こったことを回想する夢、ないしありふれた日常の光景を見る夢。

もう一つは全く起こりそうにない、非現実的な光景を映す夢である。

山矢健太がそのとき見ていた夢は前者、それも現実起こったことをVTRのように忠実に再生する夢であった。

夢の中で、彼は愛機である真っ赤な複葉機の操縦席に座っていた。目の前にはコーチの顔、次に誰かが出発の合図をする光景が映し出された。

そうだ。俺はいまアクロバット飛行競技会の演技を始めるところなんだ

彼がペダルを踏み操縦桿を引くと、彼の愛機は軽やかに大空へ舞い上がった。

機体のコンディションは完璧、体調も万全だった。程良い緊張感が集中力を高める役割を果たしていた。

そしてその精神の真ん中には闘志が、静かに激しく燃えていた。

更にその奥、彼の本能が存在する部分に、もつと根元的な、別の感情が陣取っていた。もちろんその感情が集中力や闘志を邪魔することはなかった。むしろ彼の心身にエネルギーを注ぎ込んでいるようにすら感じられた。

彼は不思議だった。今までこんな気分になったことはなかった。と言うより、このような感情は肉体的にも精神的にも妨げにしかないだろうと想像していた。

ふと、彼は胸に何かがぶら下がっていることに気づいた。

ペンダント

そう、複葉機に乗る前に誰かに言われて首に掛けたのだった。誰に言われたのか今は思い出せない。

彼は演技のための十分な高度を確保するために愛機をどんどん上昇させていった。もちろん上昇と言っても、地上にいる観客や審査員が演技を見られる高度までである。その程度の高さでは、空気が薄くなって息苦しくなるなどということもないはずである。

なのにどういう訳か、彼は息苦しさを覚えていた。

どうしてこんなに息苦しいのだろう

すると彼の心の奥底から、聞き覚えのあるようなないような声が囁きかけた。

《ペンダントを外して》

そうか、息苦しさの原因はこのペンダントか　彼は声の命
ずるまま、ペンダントを右手でひっ掴み、首から取り去った。

と、突然。

右手の中でペンダントが紫色の光を強烈に放ち始めた。

なんだこれは？！

次の瞬間、彼の目の前の青空が裂け、どす黒い割れ目が現れた。

彼は身の危険を感じ、その得体の知れない割れ目を避けるため操
縦桿を右へ倒そうとした。

操縦桿が動かない！

彼の愛機はすでに前方に進むことさえやめていた。右とも左とも
上とも下ともわからない方向へ、とてつもなく強大な力で引っ張ら
れていたのである。

ぐわあああああああつ

割れ目から噴出した真っ黒いもやのような物が彼の体を包み込んだ。やがて彼の肉体から徐々に感覚が失われていった。

もやのような物は、次に彼の精神を浸食し始めた。だんだん意識が遠のいて行く。

彼の脳裏からすべての感覚とすべての記憶とすべての感情が消えつつあった。

意識を完全に失う直前、精神の中に最後に残されていたものが実体となって見えた。それは見覚えのある顔だった。

相良……美玖……

そこで彼の意識はすっぱりと黒いもやの中に埋没してしまった。

山矢が意識を取り戻したとき、彼はまだ暗闇の中にいた。

一瞬、まだあの黒いもやの中にいるのか思い、叫びだしそうになった。彼をパニックに陥る一歩手前で引き戻したのは、遠くから聞こえてくる、朗らかなカツコーの鳴き声だった。

聴覚によって、取り敢えず自分があのだ忌まわしい黒いもやの中にいるわけではないことを理解すると、彼の関心は視覚のほうへ移った。

しかし、目を覆っていると思われる何かを取り払うために本能的に手を動かそうとした瞬間、彼の精神は新たなパニックを引き起こそうになった。

手が動かない

手だけではなかった。腕も肩も、膝も足も、首も唇も、いやうめき声を上げるために喉や舌を動かすことも息を送り込むこともできなかったのである。

彼は心の中で声にならない叫び声をあげてわめいた。しかし、心をどんなに大きく揺さぶってみたところで、彼の肉体は１ミリの１００分の１すら動かなかった。シヨックのあまり彼の精神は崩壊寸前かと思われるところまで興奮の高みに上り詰めた。

ふと、そのとき。

彼は、鈴を鳴らしたような優しい柔らかい音色を聞いた。

最初それが何の音なのかわからなかった。やがて落ち着きを取り戻すと、それがどうやら人の声 恐らくは若い女の声 だと理解できるようになった。

次に女が声を発したとき、山矢はその声が何と言っているのか理解しようと耳を澄ませた。

彼は小さい頃から言葉に苦労させられていた。両親の仕事の関係でアメリカに移り住んだときは英語に悩まされ、帰国してからは日本語に悩まされた。そう言う経験があったから、彼は相手の言っ

いることが理解できない場合、それは相手のしゃべり方の問題ではなく、自分の聞き取り能力の欠如によるものだと考える癖がついていたのだった。

ところが女の発した音声は、彼の脳裏にあるいかなる単語とも英単語とも日本語の単語とも 符合しなかったのである。

声のほうはわからなかったが、彼女の発した足音が彼のすぐそばまで近づいてきたことはわかった。続いて、彼女が彼に覆い被さるような体勢を取り、体のあちこちをいじっているらしいことも理解できた。幸いにして、感覚神経のほうは手や足の先を除けばほとんど問題ないらしかった。

女がまた何か言った。改めて聴覚を研ぎ澄ませてみたが、やはり理解できなかった。

そのうち女は彼の目の辺りをさわり始めた。目の周りの皮膚感覚から判断すると、どうやら目の周りに包帯が巻かれているらしかった。いや、目の周りだけではなかった。全身の皮膚感覚を最大限に動員して感知したところによれば、彼は頭のとっぺんから足の先まで包帯でぐるぐる巻きにされているようだった。

そこで女の足音は一旦、彼のそばを離れた。そのときにも2言3言喋ったようだったがもちろん山矢に理解はできなかった。

山矢はふと考えた。女の話す言葉、よく聞くとポリネシア系の人たちが話す言葉に似ていないこともない。両親と共にハワイを訪れたとき聞いたことがある。もしかしたら自分は何かの事故に巻き込まれて太平洋に墜落し、そのまま南の島にまで流されてしまったのではないだろうか。

その次に聞こえてきた音はカーテンを閉めるような音と、再び女が近づいてくる音だった。引き続き、女の手が彼の目の周りをまさぐる感覚が伝わる。彼女が目を覆う包帯をほどこしているのは間違いなかった。

遂に包帯は解かれた。瞼が周囲のひんやりした空気に触れた。しかし山矢はそれで見えるようになるとは考えていなかった。瞼も眼球も自分の思い通りに動いてくれないことは、先ほど嫌と言っほ思ひ知らされたからである。

ところが、女が手のひらを彼の目に当て、口の中で経文のようなものをぶつぶつ呟くと、だんだん目の周りが温かくなり、こわばっていた神経が、ピザの上のチーズのように、柔らかく溶け出していたのである。

女が何か言った。恐らく目を開けて見ろ、という意味なのだろう。言葉ではなく彼女の心が伝わってきた。そんな気がした。

山矢はゆっくり目を開けた。目の前には、ヨーロッパ人ふつの顔をした少女が自分を見つめながら微笑んでいる光景が映し出された。

ルーミアが墜落現場で助けた竜騎兵と思しき人物は、順調に回復しているようだった。

ほとんど完全に肉体が焼け焦げてしまった状態からわずか1ヶ月

後に意識が回復するまでになったのは、ひとえにルーミアの父の白魔道治療のたまものだった。少なくともルーミアはそう考えていた。父は、ルーミアのかけた再生の術が素晴らしかったからだと珍しくルーミアを褒めた。でもルーミア自身は自分など亡き母の足下にも及ばないと思っていた。

肉体的な回復の順調さとは裏腹に、医術に携わる者のもう一つの務めである患者の精神的なケアのほうは、あまり芳しいとは言えなかった。なぜならその患者には言葉が全く通じなかったからである。

ルーミアは、地元のアウスグ語と、魔道学校に通うために3年ほど王都エランに滞在していたとき覚えたエラン語は問題なく理解でき、あと魔道書を読むために習った GANG 語と古代ヒルバニア語なら何とか理解できた。しかしそのいずれの言語で話しかけても、その患者は反応してくれなかった。もっとも、古代ヒルバニア語などという、とつくの昔に使われなくなった言葉が通じるとは、最初から思っていなかったが。

患者が竜騎兵であるとすれば、ルーミアたちと同じエラーニア王国民の兵士か、さもなければその敵対国であるハバリア人の兵士である可能性が高い。エラーニアのいわば「標準語」であるエラン語が全く通じない以上、患者はハバリア人と考えるのが筋だろう。

ルーミアは父に、ハバリア語ができる人が知り合いの中にいないか、さもなければハバリア語の辞書を手に入れる方法はないか尋ねた。

しかし父はルーミアの推論に異を唱えた。回復状況を確認するために何度か包帯を解いてみたが、顔の皮膚が再生するにつれて、患者の顔立ちが東洋系のものであることがはっきりしてきた。なぜ東

洋人がこんなところを竜で飛行していたのかはわからないが、もしかしたらハバリア帝国では戦力を補うために東洋人の傭兵を雇うこともあるのかもしれない、と。

ルーミアは考えた。意思を疎通させるには、自分が相手の言葉を覚えるか相手に自分の言葉を覚えさせるしかない。自分が相手の言葉を覚えるためには相手に主導権を握ってもらわなければならないが、あの患者はいまそういうことができる状態ではない。とすれば、こちらの言葉を相手に覚えてもらうほうがよいということになる。たとえ寝たきりでも自分や父の話す声、窓の外で誰かが会話している言葉を漏れ聞いているうちに覚えるということもあるだろうから、きつとそっちのほうがいはず。

そう思い立つと、ルーミアはすぐさま身の回りのものを手当たり次第かき集めて例の患者の病室に持ち込み、それらを床に並べた。患者はまだほとんど体を動かすことができなかったが、ルーミアが何か騒々しい音を立てているのを聞き取って、目と瞼だけで怪訝そうな表情をした。

ルーミアはまず「これ」「あれ」という最も基本的な単語から始めた。患者は最初戸惑っていた様子だったが、すぐにルーミアの意図を察し、積極的に反応してくれるようになった。とは言え、相手はまだ声が出せない。反応といっても、ルーミアが身振り手振りで「わかった?」と尋ねるのに対し、「YES」の合図として瞼を一回閉じる、ということしかできないのである。

ルーミアの父はその話を娘から聞いて、できるだけ早く患者の喉を再生して、声を出せるように努力しよう、と申し出た。ルーミアはその日が一刻も早く来ることを祈った。

父の努力の甲斐あって、それからわずか5日後に患者の声が出るようになった。ただその声は、白魔法の力によって無理矢理繋げた声帯が不安定なため、かすれていると言うよりは、カエルを踏みつぶしたような奇妙きわまりない音声だった。あまりの奇妙さに、ルーミアは思わず腹を抱えて大笑いしてしまった。ルーミアの父でさえ笑いをこらえるのに必死だった。患者はせつかく出せるようになった声を使わずに目の動きだけで気分を害したことを表現した。父は、声帯を酷使しなければすぐに元通りの声が出せるようになるから、ということを身振り手振りで伝えた。患者はやつと機嫌を直し、最後には、ルーミアを笑わせるためにわざとゲコゲコ鳴いてあげるほどの余裕を見せるようになった。結局のところ患者の精神的ケアに一番有効なのは意志疎通なのである。ルーミアの父は改めてそう思った。

その翌日から、アウスグ語のレッスンは急速にはかどり始めた。やはり、反応をすぐに見ることができるとできないのでは雲泥の差だった。

ルーミアの生徒はかなり優秀な生徒だった。レッスン1日目から床に並べてあった日用品の類を彼女が指さすと、患者は次々とその名をカエル声で呼び上げた。3日後には家の中にあるものと病室の窓から見えるものはすべてその名を言えるようになっていた。ルーミアは家の中にまだ何か覚えていない単語はないかとぐるりと見渡してみた。

そのとき彼女はふと、本来最も早く覚えさせるべき単語をまだ教えていないことに気づいた。彼女は自分の愚かさを呪わずにはいられなかった。

ルーミアは患者から見えやすい位置に立ち、自らを指さして

「わたしはルーミア・クフルツです」

と言った。

すると患者はたどたどしく、しかしはっきりした口調で

「ヤマヤ・ケンタ」

と応えた。

開け放たれた病室の窓から見える青空を、今日も1匹の竜が横切
っていた。

自分を看護してくれている少女　確かルーミアと名乗った
の説明によると、あの竜は1週間に2度、近隣の町から遠くの町へ
定期的に郵便物を運ぶために往復しているのだという。

あれがヘリコプターでも飛行船でもなく、本当に生きている竜だ
と知ったとき、山矢健太はそれほど驚かなかった。なぜなら、アク
ロバット飛行競技会でのあの「事故」以来身の回りに起こったこと
を総合的に判断すると、どう考えてみても、現在自分のいる場所が
今まで住んでいた世界ではないことは明らかだったからである。

最初、ルーミアやその父が自分を治療するのに手から緑色の光を
出したり、物に手を触れることなく動かしたりするのは、奇術か何

かだと考えることにした。言葉のレッスンの中でルーミアが世界地図だと言って見せてくれた紙片に、山矢の全く見たことのない形が描かれているのも、この地では、衛星写真から作られた正確な地図ではなく、いまだに何百年も前の古地図を使っているのだろう、と自分自身を説得した。しかし、毎夜、病室の窓から夜空を見上げているうちに気づいた事実は、決定的なものだった。夜空に浮かぶ月が、形は満月のまま欠けることがなく、表面の模様だけが毎日少しずつ変化していたのである。

山矢は覚悟を決めた。というより、他にどうすることもできなかった。こうなった以上、一刻も早く体を治し、自分がこの世界に迷い込んでしまった原因を探り、そしてできるならば元の世界へ帰る方法を見つけないといけない。

とは言え、24時間ベッドに縛り付けられているという今の状況は拷問に近かった。有り余る時間を少しでも効率よく消費するためには、言葉を覚えることに没頭するしかなかった。

小さかった頃、周りの子供たちにからかわれながら英語を習い覚えた経験が、こんなところで役に立った。幸い、アウスグ語は発音が難しくなかった。実のところ、彼の英語の発音はあまり流ちょうなものではなく、それがからかわれる主たる原因となっていたのである。しかし今覚えつつあるこの言語は、少なくとも発音の点で彼を悩ませることも、からかいの原因となることもなさそうだった。

しかも昔と違い今は周りに自分をからかう者はいない。いつも傍らにいてるのは、自分が単語をたった一つでも覚えるたびに、お世辞ではなく心の底から祝福してくれる、優しい少女だけだった。

山矢は最初、ルーミアは自分よりも年上だと思った。彼女は責任

感が強く、看護師　山矢はそう思っていた　という仕事に対してとても勤勉で、また誇りを持っていた。すごく大人びて見えたのである。

かと思えば、とんでもなく幼いことをするときもあった。昨日、山矢が発音練習中に不意にゲコゲコツとした声を出してしまったときなど、彼女は例によって大笑いしたあげく、何を思ったか突然緑色の服に着替えてきて、カエルのような作り声で「わたしはあなたの妹ガエルよ」と言い出す始末だった。

そこで山矢は、女性に年齢を尋ねるのは失礼かとも思いつつも、まず自分は１６になったばかりだと告げてから、思い切って彼女に歳を訊いてみた。この世界の１年が彼の世界の１年と同じ長さなのか確信はなかったが、今までに聞いた話から判断すると、大きな違いはないだろうと思われた。

すると彼女は、自分は１５歳だと答えた。

山矢がルーミアは年上だと思っていたことをうち明けると、彼女は自分はそんなにおばさん臭いのかと言ってわざとむくれて見せた。

しかし最後には笑顔に戻り、こう付け加えたのだった。

「あたしは一人っ子で、近所に歳の近い子供もいなかったから、小さい頃は少し寂しい思いをしていたの。ヤマヤがあたしの兄弟代わりになってくれたら嬉しいな」

患者が意識を取り戻してから2ヶ月経った。経過は順調だった。少なくともルーミアや父親の目から見ればそうだった。

しかし、患者は不満だった。いまだに喉と口と目しか動かすことができず、おまけに声もカエル声のまま元に戻っていないことが患者には納得できないらしかった。

ルーミアはまず、声のほうは父の言いつけを守らず患者に声帯を酷使させた自分の責任だ、と謝罪し、きっと肉体が完治する頃には治るはずだ、と見通しを述べた。次に体が動かない理由を説明するため、エラーニア王国の民なら小学生でも知っているような、白魔道の基礎知識を教えてあげることにした。どうもこの患者の故郷ではあまり魔道学が発達していならしい、と考えたからである。

男性白魔道士の役割と女性白魔道士の役割には違いがあり、男性のほうの仕事は肉体の再生、女性のほうは魂の再生である。自分のかけた再生の術によって患者の魂は再生したが、肉体を完全に再生するには、父のような優秀な魔道士でも3ヶ月から半年を必要とする。それまでは『不動の術』をかけて肉体の活動を完全に凍結させなければならぬのだ、と。

患者は一応納得したが、すぐに別の不平を漏らした。3ヶ月も体を動かさなかったら筋肉が完全に衰えてしまい、歩けるようになるまで更に半年も1年もリハビリしなければならぬだろう、と。

ルーミアは更に説明した。不動の術は肉体を、健康だったときの状態のまま、時間軸を越えて保存する。物理的に拘束しているのは訳が違ふ。だから肉体が完治し、術を解きさえすれば、患者は怪我をする前と全く同じように活動することができる、と。

すると患者は、辛うじて動かすことのできるすべての部分を使って喜びを表現した。叫び声の一部は患者の地元の言葉だったためルーミアには何を言っているのかわからなかったが、とにかく、患者の笑顔を見ることができたことは彼女にとっても無上の喜びであった。

そこでルーミアは、いつものようにアウスグ語のレッスンを始めた。レッスンといっても患者はもうほとんどエラーニア王国の住民と同じように話せるようになっていた。数週間前からレッスン内容は、言葉そのものを教えると言うよりも、雑談を通してアウスグ語の言語習慣　この単語はイメージが悪いのでこういう場面では使わべきではないといったような　を身につけさせるものになっていた。

その中で、患者はこんなことを質問してきた。前から思っていたのだが、窓の外で男の子たちが話す声を漏れ聞くと、「わたし」を意味する単語が、ルーミアが使っているのともルーミアの父が使っているのとも違う。これはなぜなのか、と。

ルーミアは説明した。アウスグ語では「わたし」を表す言葉が何種類もあり、年齢、性別、身分によって、使い分ける必要があるのだ。いままで一つしか教えなかったのは、混乱を避けるためだ、と。

すると患者は言った。自分の故郷にも同じ言語習慣がある。「わたし」のことを男は『ボク』と言ったり『オレ』と言ったりするが、女は『ワタシ』か『アタシ』と言う。その他、語尾にも『〜デス』、『〜ダ』、『〜デアル』などがあり、状況によって使い分けることになっているのだ、と。

ルーミアは応えた。アウスグ語も同じだ。年齢や性別に応じて別の言い回しを使わなければならないことさえあるのだ、と。

患者は少し不安そうに尋ねた。ではいま自分の話しているアウスグ語は、自分の年齢や性別に合っているのか、と。

ルーミアは

「全然大丈夫。あたしがちゃんとあなたの年齢と性別に合った言葉使いを教えてあげたのだから」

と応えた。

「ただ一つ問題があるとすれば」彼女は付け加えた。「ヤマヤっていう名前は、あたしたちには少し発音しにくい。ねえ、『マヤ』って呼んでじゃだめ？」

患者は少し怪訝そうな顔をし、本当はヤマヤは苗字であって、ファーストネームではないのだ、とうち明けた。

ルーミアが、ではケンタと呼ぶべきかと尋ねると、患者は、自分はファーストネームで呼ばれるのが嫌いなので苗字の方がいい、「マヤ」は自分の故郷ではどちらかと言うと……の名前だが、ルーミアたちが呼びやすいなら別にそれで構わない、と答えた。

患者の発音が少し乱れたため聞き取れない部分があったが、構わないと言っているのだから問題ないだろう。ルーミアはそう判断した。

「じゃ、これからは『マヤ』って呼ぶわね」

ルーミアがそう言うと「マヤ」は嬉しそうに目だけの微笑みを返してきた。

それから1ヶ月後、遂に患者の不動の術を解く日がやってきた。

ルーミアは患者に調子はどうかと尋ねた。すると患者は調子はよい、ただ1点を除いて、と答えた。

その1点とは声のことだった。ルーミアが聞く限り、もはや力エール声ではなく、あるべき普通の声のように思えたが、本人は依然として違和感を訴えていた。

ルーミアは改めて、声帯を酷使させ完治を遅らせてしまったことをしまったことを詫びたが、患者は気にするな、と優しい言葉を返してくれた。

父の指示に従い、ルーミアが、患者の全身をぐるぐる巻きにしている包帯　実はこれは包帯ではなく白魔法の効果を高めるための魔力が込められた魔布だったのだが　を解いていった。患者はしきりにルーミアに素っ裸を見られるのを恥ずかしがった。ルーミアは、マヤは意外と恥ずかしがり屋さんなのね、と言いながら、手際よく、しかし丁寧に包帯　魔布を解いた。

続いて、ルーミアと父が声をそろえて呪文を唱え始めた。いよいよ不動の術の解除を始めるのである。患者は、高ぶる興奮を抑える

ためか、じつと目を閉じたまま呪文が終わるのを待った。

今まで青白い色だった患者の全身がピンク色を帯びてきた。やがて手足が小刻みに震え始める。肉体の活動が再開されつつあるのである。呪文を唱えながらルーミアはその様子を見守った。白魔道士の彼女にとって、それはもっとも喜ばしい、充実した瞬間だった。

呪文が終わった。

ルーミアはすぐさま患者のそばに歩み寄り、問題はないか尋ねた。

患者が問題ないと答えると、ルーミアの父は、ではゆっくり上半身を起こしてみてくれ、と言った。

患者は言われたとおり、ゆっくりと起きあがった。ルーミアは固唾をのんで患者の反応を待った。

ところが患者が次にとった行動は、ルーミアはもちろん、経験豊富なルーミアの父にさえ、全く理解できないものだったのである。

患者は、まず自分の胸に手をやり、怪訝そうな顔をして一言何か呟いた。次にその手を下へ滑らせて陰部に当てるや、突然わめきだした。

「マヤ、どうしたの！」

ルーミアは患者の肩を抱いてやることで精神を沈静化させようと試みた。しかし患者は鬼面のような恐ろしい形相でルーミアを睨み付け、アウスグ語で

「どうしてあたしが女になってるのーっ!？」

と叫んだのだった。

3 儀式

窓の外から子供たちの声が聞こえてくる。どうやら戦争ごっこをしているらしい。

「やあーっ。僕はエラーニア騎士団の聖騎士だ。かかってこい」

「なにをーっ。僕は天魔道士ゲーレンだぞ。おまえの剣なんか僕には通用しないぞ」

「わたしは王立竜騎兵団の装甲竜騎兵よ。わたしの乗る竜は剣も魔法も届かないくらい高いところを飛ぶことができるんだから」

「おい、グナン、おまえは何なんだよ。早く決めろよ」

「えっとね、えっとね、僕はね」

「早く早く」

「じゃあ、僕も竜騎兵にする」

「わはははは。おまえ何言ってるんだ。竜騎兵は女じゃないとなれないんだぞ」

「えーっ？ほんとーっ？」

「そうよ、竜を操ることができるのは女だけなのよ」

「知らなかったあ」

「恥ずかしい奴。そんなの赤ん坊でも知ってるぜ」

その様子を、薄手のガウンを肩に掛けた少女が、ベッドの上から呆然と眺めていた。彼女は、子供たちが「敵はあっちだ、行くぞー」と言って走り去って行くのを見届けると、ため息を1つついてから、ベッドの傍らに立つ白魔道士父娘にうつろな視線をよこした。

「ごめんなさい」ルーミアがその日その言葉を口にした回数は、すでに数十回に及んでいた。「男の竜騎兵がいるなんて知らなかったの」今にも泣き出しそうな悲痛な表情だった。

そこでベッドの上の少女はまたため息をついた。

「よく考えてみれば」ルーミアの父は眉間にしわを寄せ、言った。「ルーミアが君の魂を再生しようとしたとき、魂が示した反応は確かにいつもと異なっていた。炎で長時間焼かれたため魂の力が弱まっていたのだろうと思っていたが……。今にして思えばあれは、男の魂のかけらを無理矢理女の魂として再生しようとしたことによる抵抗反応だったようだ」

少女はおずおずと尋ねた。「あたしを男に戻す方法は……ないの？」

ルーミアの父は、これが上級白魔道士バーン・クフルツとして患者に答えてあげられる回答のすべてだ、と言わんばかりに、無言のまま首を横に振った。

しかし少女は引き下がらなかった。「もう一度あたしを魂のかけらだけの状態にして再生するとかできないの？」

仕方なく、ルーミアの父は口を開いた。「細胞がほんの少しでも残っている限り、肉体は再生前の性別に戻ろうとするし、肉体が100%失われて魂のかけらだけが残っているというあのような状態を意図的に作り出すのは不可能だ。仮にできたとしても、魂が壊れてしまう可能性もある。それ以前に、性別がわからなくなるほど小さくなってしまった魂のかけらを元通り再生できたこと自体、奇跡に近い」

ルーミアが付け加えた。「魂の性別を慎重に見極めてから再生すればよかったんだけど……時間がなかったし……竜騎兵は女だっという先入観があったから……」

すると少女は、拳を握りしめ肩をわなわなとふるわせた。一度沈静化していた怒りがまた活性化してきたらしい。ルーミアは、彼女の口から放たれるであろう怒号の矢を、的となって受け止める覚悟をした。

ところが少女は急にがっくりと肩を落とし

「もういいわ」

と言った。

「クフルツ先生やルーミアを恨んでみても始まらない。先生たちはこの世界の常識に従って行動しただけだし……」

うつむいていたルーミアは顔を上げた。「マヤ」

少女　マヤはほんの少しではあったが口元をほころばせた。「

それにあたしの命を救ってくれたことは確かだしね。命の恩人のことをこれ以上悪く言ったらちが当たっちゃうわ」

ルーミアの目から遂に涙がこぼれた。「マヤ、あなたって優しいのね、そんなふう言ってくれるなんて……。あたし……。あなたに何をしてあげたらいいのか……」

「取り敢えず今は……一人にしてくれない？」

「でも、マヤ」

「お願い」

「わかった」ルーミアの父が言った。「もしどこか調子の悪いところがあったらその呼び鈴を鳴らしてくれ。わたしはルーミアがすぐに駆けつける」

少女は無言のままうなずいた。

「行こう、ルーミア」父は、まだ名残惜しそうにしている娘の肩を抱き、病室の外へと促した。

病室の扉が閉ざされると、しばらく喧騒が支配していたクフルツ白魔道院の建物の中に、病院本来の静寂が訪れた。

「おめでとう、山矢君」

山矢健太の背後から聞き覚えのある声が聞こえた。振り返ってみると、そこには小麦色に日焼けした相良美玖の顔があった。

「優勝おめでとう」

美玖はにこやかに微笑みながら、再度祝辞を述べた。

山矢が辺りを見回してみると、そこはアクロバット飛行競技会会場の駐機場だった。

俺は優勝したのか？ 山矢はいぶかった そうだったっけ？それ以前に何か重要なことを忘れているような

そう思いつつも、彼は美玖に「ありがとう、美玖」と言葉を返した。いつもは日本語がなかなか口から出てくれず、「おう」などと返すのが精一杯なのに、その時はどういうわけかすんなりと言葉を発することができた。

美玖はその反応がとても嬉しかったようだ。「ねえ、山矢君」と言いながら彼の腕を取り、まるで別の誰かのように 誰だったか思い出せないが 唇を山矢の顔の10センチ手前まで近づけてきた。「演技が終わったらあたしに言いたかったことって、なあに？」

そうだ、俺には言わなければいけないことがあったんだ

山矢は勢いにまかせて、大胆にも美玖の肩を抱いた。そして以前から言おうと思っていたその一言を喉から絞り出そうとした。

ところが美玖は、彼の声が口から出るより前に、笑顔のまま「い

やよ」と言った。「あたしにはそんな趣味ないもの」

「そんな趣味？なんのことだ」

山矢が訊き返すと、美玖は山矢の腕をふりほどき、黙って彼の胸の辺りを指さした。山矢はゴミでもついているのかと思い、視線を下に落とした。

彼はなぜか服を着ていなかった。しかもその胸にはここにはこんもりとした2つの膨らみがあった。

「うわああああああっ」

夢から覚めたとき最初に目に入っただのは、この3ヶ月間、眠っているとき以外ほとんど見上げっぱなしだった、あの天井だった。

しばらくは起きあがろうとしなかった。目が覚めても体は起こさない（起こせない）ということに慣れてしまっていたからである。しかしすぐに、もう体は動くようになったことを思い出し、ゆっくりと上半身を起こした。そのとき胸が衣服にこすれる感覚が伝わってきたが、努めて無視した。

山矢健太 マヤが体を動かせるようになってから3日目の朝が訪れた。

あの日、衝撃的な事実を知ってしまったあと、彼、いや彼女は自

由になった体を動かそうともせず、ベッドの上に座ったまま日が暮れるまで窓の外を眺めていた。

夜、ルーミアが食事を運んできた。もちろん流動食などではなかった。魔法の力で肉体を健康だったときの状態のまま保存していたのだから、術を解きさえすればすぐに普通の食事ができるはずだった。本人にその意思さえあれば。

しかしマヤにその意志は全くなかった。彼女が少しでも手を付けることを期待してか、ルーミアは料理の入った食器をなかなか片づけに来なかった。しかしマヤは頑として手を付けようとはしなかった。数時間後、食器を下げに来たルーミアが病室を去るとき、彼女はいつものようにお休みを言ったが、マヤは応えなかった。

昨日もマヤは夕方までベッドの上でじっとしていた。朝食も昼食も食べなかった。

ところが夕方、ルーミアが様子を見に病室を訪れたとき、マヤの腹が大きな音を立てた。あまりにも大きな音だったため、ルーミアはびっくりしてマヤの顔を覗き込んできた。マヤはちよつと可笑しくなつて、思わず口元をほころばせた。ルーミアが「何か食べる？」と訊いてきたので、マヤは久々に「うん」と言葉を返した。

マヤはルーミアの出した料理を残さず食べた。食事をするのが4ヶ月ぶりだということにも、この世界の食べ物を食べるのが初めてだということにも、特別な感慨はわかなかった。

就寝直前、ルーミアが様子を見に来た。病室を出るときルーミアの言った「お休み」に対し、マヤはその日は「お休み」と応えてあげたのだった。

いま悪夢から目覚めたばかりしては、気分は悪くなかった。どうやら昨日摂った栄養が、マヤの全身にエネルギーをみなぎらせているようだった。これ以上じっとしていると、血管がはち切れてしまいそうなの、そんな気さえした。

もともと山矢健太は家でじっとしているようなタイプではなかった。過去2日間に自分がとった行動をいま振り返ってみると、身の毛がよだつ思いだった。たとえ脅されたとしても、もうベッドの上に座っているのはごめんだった。

そのとき彼女は、どうしてもクリアしなければならぬある問題の存在に気づいた。いや正確に言うと、その問題は昨日の就寝前から存在していた。それは栄養を摂ってしまったことによる当然の帰結であった。彼女はその問題を、衣服と胸の摩擦から生ずる問題と同様、敢えて思考の対象にしないよう努力していたのだった。しかし、ことここに至っては無視し続けることは不可能だった。

考えてみればその病室は、彼女がこの世界で知っている唯一の場所だった。意識を取り戻してからさきほど目が覚めるまでずっとベッドの上にいたのだから無理もない。しかしいま彼女は初めて、病室以外の場所を知ろうとしていた。その場所の位置は、3ヶ月間ベッドに縛り付けられていた間に聞いた足音や物音によって、大体の見当が付いていた。

案の定、その場所は、彼女の病室のすぐ横にあった。扉を開いてみると、幸いにしてもといた世界のものとさして変わりはなかった。

マヤは覚悟を決め、そこに腰掛けた。彼女は 当然のことだが生まれて初めてその感覚を味わった。それは尿が、長い尿道を

經由することなく、膀胱の近くにある尿口からすぐに排出されると
いう感覚だった。

昨晚から我慢していたその欲求を解消すると、今まで彼女の精神
に重くのしかかっていた何かが、ふっ、と消えてなくなったような
気がした。もう怖いものはなかった。

マヤは便座に座ったまま、不動の術を解かれた直後に一度見てし
まって以来、頑として視界に入れないようにしていた部分に目を向
けることにした。

まず、身につけている薄いガウンのような衣服の前をはだけて自
分の胸を見てみた。よくわからないが、それほど大きい方ではない
ように思えた。次に両手でその膨らみを軽く鷲掴みにしてみた。以
前より、その先端付近が敏感になっていることがわかった。

そこで一旦目を上げ、側に置いてある紙を右手に取った。もとい
た世界のものとは比べるとかなりごわごわしている。その次に、再
び視線を下へやり、今度は下腹のほうを覗き込んだ。胸のほうは、
言ってみればただ膨らんでいるだけで、男だったときに想像しよう
と思えばできなくはないくらいの変化にすぎなかった。しかし陰部
の方は違った。紙を当ててみたが、視覚と、自分の手のほうの触覚
と、その部分が紙に触れる触覚の3つを、一つの事実として脳の中
でうまく結びつけることができなかった。紙を捨てたあと、今度は
直接、右手を下腹部から陰部に当ててみた。5秒ほどすると、よう
やくその部分に起こった形状の変化を実感できるようになった。す
ると彼女の目から涙が溢れた。

涙が十分乾いてから、マヤはトイレを出た。そこで運悪く、と言
うべきか、ばったりとルーミアに出くわした。ルーミアはマヤにか

けるべき言葉がすぐには思い浮かばなかったらしく、一瞬口をぱくばくさせた。マヤはわざと嬉しそうな顔をして「トイレに行ってきたの」と言った。ルーミアは更に2、3回ぱくばくさせたあとで「そ、そう。じゃあ、腎臓や尿管や膀胱に異常はなさそうね。お父さんに報告しておくわ」と、あたかも医学的な問題にしか関心がないかのようなセリフを述べた。

朝食はルーミアの父とルーミアと3人で、白魔道診療院と自宅を兼ねるその建物の、いわばダイニングキッチンにあたる部屋で取った。食後にルーミアが案内してくれたところによると、その建物は実はそれほど大きなものではなく、一般の民家に毛が生えた程度のものであった。白魔道が発達しているため、大抵の病気や怪我は入院せずに直すことができ、入院施設はほとんど必要ない。そもそもこの診療院のあるアヴニ村は鄙びた寒村にすぎず、患者がそれほどいないのである。

それからしばらく、ルーミアが父と共に白魔道士の仕事をあれやこれやとこなしている間、マヤは建物の前に出て、そこから見える範囲の村の様子を観察した。途中、村の子供たちが彼女に気づいてそばに寄ってきた。ところがマヤが何か声をかけようとすると、子供たちは逃げてしまった。子供が見知らぬものに好奇心と恐れを同時に抱くのは、どこの世界でも同じだった。

そのうち、仕事を終えたルーミアがマヤと話をしにやって来た。

「ねえ、マヤ。この地方には不動の術を解かれた人が必ずやらなければならぬ儀式のようなものがあるの。マヤもやる？」

マヤがうなずくと、ルーミアは一旦自分の部屋に戻って、何かが入った鞆を持ってきた。それからマヤの手を引いて、彼女を村へと

連れ出した。

村の街路や広場を通るとき、数人の村人と出くわした。村人はみな、ルーミアが連れている東洋人の少女を一目見て一瞬怪訝そうな顔をしたが、すぐに笑顔に戻り、ルーミアにだけでなくその少女に對しても「こんにちは」と言った。愛想の良い人たちばかりだった。

マヤとルーミアは村を出、森に入った。森の中には足で踏み固められてできた道がたくさん枝分かれしていたが、ルーミアは全く迷うことなく道を選んでゆき、マヤをどんどん森の奥へと導いた。

不意にマヤの目の前の視界が開けた。

まぶしさに目を細めながら辺りの様子を見渡してみると、そこには、半分はマヤの予想の範囲内、もう半分は予想外という、奇妙な光景があった。すなわち、左手には、磨き上げられたガラスのように透き通った水をたたえる泉、右手には、どす黒く染まった地面と醜く焼けこげた数本の樹木が、異様なコントラストを呈していたのだった。

「ここはマヤの乗った竜が墜落した場所よ。マヤは覚えていないでしょうけど」ルーミアは、油が地面にしみこんでできた黒い土を指さし、言った。「ねえ、マヤの乗っていた竜は何て言う名前だったの？お墓に名前を刻んで上げたいの」

見ると、焼けこげた樹木の幹に、文字の彫られた小さな木の板が立てかけてあり、その前に花がたむけてある。

マヤは応えた。「あたしは竜に乗っていたわけじゃないの。あたしが乗っていたのは……機械なの。飛行機っていう……」

するとルーミアはとも信じられないといった顔をし、しばらく間をおいてから「そうだったの。鉄の板がたくさん燃え残っていたから、あたしはきつと装甲竜騎兵なんだと思った」と言った。

「でもよかった」ルーミアは墓碑の前に供えてあつた花束を拾い上げ、言葉を続けた。「ここで竜が死んだわけじゃなかったのね。ちよつと後悔していたの。マヤの命を助けるのに必死で竜のことを考えてあげられなかったって。同じ命なのに」

そして彼女は花束を半分に分け、片方をマヤに渡し、もう片方を自分の胸に抱きしめたのだった。

それからルーミアはマヤを泉のほうへ案内した。泉はかなりの広さがあり、その中央付近には巨大な岩石がいくつかそびえ立っている。マヤが最終的に連れてこられたのは岩石の陰になって周囲からは見えにくい場所だった。そこには3メートル四方の平らな岩盤が水面から顔を出していて、岸から簡素な橋で渡って行くことができた。

「ここで何をするの？」マヤは尋ねた。

「水浴びをするのよ。体を清めるために。ただそれだけ」ルーミアは応えた。

「あたしがするのよね？」

「もちろん」

「服を脱ぐの？」

「そうよ。恥ずかしい？」

「少し。でも……別にいいわ」

マヤはあまり躊躇することもなく、着ていた薄手のガウンのような服と、病室から履いてきたサンダルのような履き物を岩盤の上に脱ぎすてた。考えてみれば、下着を付けていなかった。彼女はいまルーミアの前で素っ裸でいることよりも、下着を付けていない状態で村の中を歩いてきたことを恥ずかしいと思った。

水面に足をつけてみると、水はやや冷たかったが、耐えられないほどではなさそうだった。そこでマヤは思い切って、ざぶんと全身を水の中に沈めてみた。

4ヶ月ぶりの入浴は、たとえお湯でなくても気持ちよかった。山矢健太だったとき、彼女は取り立てて風呂やシャワーが好きだったわけではなかった。しかしいま彼女は切実に、この水がもっと温かったらどんなにいいだろうと考えていた。

マヤはしばらく水浴びを楽しんだ。ルーミアはその様子を我がことのように満足げに見守っていたが、何を思ったか突然

「あたしも水浴びがしたくなっちゃった」

と言って服を脱ぎだした。

マヤは驚いて、ルーミアから目を逸らそうとした。しかしマヤは思いとどまった。理由はわからなかったが、そうしてはいけないうな気がしたからである。

ルーミアはマヤの面前で全く憶することなく白魔道師服を脱ぎ、下着を脱ぎ、履き物を脱ぎ、最後に、長い髪をとめてある髪飾りを取った。そして足の先で水の温度を確認した後、マヤと同じように一気に水の中へ踊り込んだ。

水中にしゃがんで全身に水を馴染なせるような動作をしたあと、ルーミアは水面へ顔を出した。長い髪が上半身全体に貼り付いてる彼女が貼り付いた髪を背中の中真ん中に束ねようとしたので、マヤは手伝ってあげた。

すると出し抜けに、ルーミアは

「さつきはごめん」

と謝った。

マヤは謝られるようなことをされた心当たりが全然なかったので、ちよつとびつくりして

「何のこと？」

と訊き返した。

ルーミアは「今朝トイレの前で会ったときのこと」と応えた。

マヤはその日の朝の出来事を思い起こしてみたが、思い当たる節は全くなかった。「何かあったかしら」

「あたし白魔道士失格ね」ルーミアは言った。「あたし逃げちゃっ

た。トイレの中できつとあなたは辛い思いをしたはず。それがわかっていたのに、あなたをもつと氣遣ってやるべきだったのに、恐くて、逃げちゃったの。ごめんね」

マヤはやつとルーミアが何の話をしているのかわかった。「あたし全然気にしてないし、そんなの謝るほどのことじゃないんじゃない？」

「そう言ってくれるのは嬉しいわ。でも患者のことを氣遣うのが白魔道士の仕事だから。それに」

「それに？」

「マヤは逃げなかった」

「え？」

「さっきあたしが服を脱ごうとしたとき、目を逸らさなかった」

そうだったのか　マヤは思った　もしあるとき目を逸らしていたら、自分はルーミアの裸体に特別な感情を抱いていることを認めたことになる。そうしたら、ルーミアはもう2度と自分を患者以上の存在として　姉？代わりとして　見ることはできなくなっていただろう。自分の選択は正しかったのだ。

「あたしね」マヤは打ち明けた「本当は異世界から来たの。墜落したあの飛行機っていう機械はこの世界のものじゃないのよ」

ルーミアは目を丸くした。「ほんと？」

「うん」

「信じられない」

「3ヶ月間ベッド上で言葉のレッスンを受けたとき、あたし何度も訊いたわよね、『他の世界地図はないの、他の世界はないの』って。でもルーミアもクフルツ先生も『ない』って答えた。だから、この世界の人たちがあたしの住んでいた世界のことを知らないのはわかってた。自由に行き来することが出来るわけじゃないんだってことはわかってたわ」

「でもどうしてそんなことに」

「その原因をこれから見つけなければいけないの。そしてできれば……元の世界に帰りたい」

ルーミアは、マヤの心中を思いやってか、悲痛な表情だった。「何か手がかりはあるの？」

「ううん」マヤは首を振った「あるとすれば紫色の石の付いたペンダントぐらい。ここへ飛ばされる直前に光ったあの石が何なのかわかれね」

「紫色の石？……あたしにはわからないわ」

「どのみち、あたしは長期戦を覚悟してるから。そのためにはまず、この世界でどうやって生きて行くか考えないと」

ルーミアはぱっと表情を輝かせた。「そっか。マヤは竜騎兵じゃなかったんだ。また戦場に戻っていくわけじゃないんだ」

マヤはいたずらっぽく応えた。「それどころか無職で無一文よ、こっちの世界では」

「住むところなら……うちに住めばいいじゃない。部屋も空いてるし」

「ありがとう、そう言ってくれて。もしだめだって言われていたら、今日から早速野宿しないといけないところだったわ。でもそれ以前にあたしの体を治してくれた治療代だって払わなきゃいけないですよ」

「治療代なんて別に」

「うっん、そういうわけにはいかないわ。どいう形になるかわからないけど、いつか必ず払うから」

「でも……」

その時不意に、マヤの背中に悪寒が走った。「くしょん」

「あ、ごめん。マヤの体、冷え切っちゃったわね」ルーミアは水から上がるようマヤを促した。

マヤに引き続いて、ルーミアは自らも岩盤の上上がり、すぐさま持参していた鞆から大きなタオルを2枚取り出した。そして、その一方をマヤの肩に掛け、もう一方を自分が羽織ってから、目を閉じてぶつぶつと呪文を唱えると、彼女の胸の前に青い炎が現れた。

魔法で作られたその炎は、見かけ以上に温かった。炎のそばに

立ってタオルで肌の表面に付いた水分を拭っているうちに、すぐに体が元の体温を取り戻した。

するとルーミアはとても嬉しそうな表情で「実は『儀式』には続きがあるの」と言った。

マヤが「続き？」と聞き返している間に、ルーミアは鞆の中から襟の付いた長袖シャツと長袖のズボンと下着のパンティとブラジャーを取り出した。「おろし立ての新しい服を着ることよ」

「この服、あたしのために？」

「うん。と言つても、別によそ行き的一张羅なんかじゃないわよ。新しければ普段着でも何でもいいの」

「ありがとう。着てみるわ」

マヤはまずパンティを手にとった。山矢健太だったときブリーフ派だったので、彼女はそれほど違いはないだろうと思い、あまり深く考えずにパンティに足を通し腰まで上げた。ところが、布が股間の部分に貼り付くようなその感触は、想像以上に違和感のあるものだった。

そう思い始めると、マヤは「女物の服を身につけること」を必要以上に意識しだした。しかも次に身につけなければいけないのは、衣類の中で最も男女差の激しい（というか男用の存在しない）ものだった。ルーミアが差し出すブラジャーを前に、マヤは2の足を踏んだ。

ルーミアは今度は「逃げ」なかった。「付けたくなかったら付け

なくてもいいわよ。付けるのならあたしが手伝うわ」

実際のところ、何かをためらっている人に決断を促す一番効果的な方法は、はつきりとものを言ってあげることである。ルーミアの言葉はマヤの背中を後押しするに十分であった。

「じゃあ、付ける」

ルーミアはマヤの後ろに回り、コツなど解説しながら、付けるのを手伝ってくれた。付け終わってみると、マヤは、布が膨らみを優しく包み込んで持ち上げてくれるその快さに舌を巻いた。ルーミアは「今日のために、寝たきりだったマヤの胸のサイズを測っておいたの」と、ブラがびったりフィットしている理由を説明した。そう言われれば、測られた記憶がある。何かの検査の一環だろうと思い、マヤは全く気になかったのである。

あとは長袖のシャツを着、長ズボンをはくだけだった。シャツのボタンのかけ方が右が前になっているのも、ズボンを引き上げるとき大きく張った尻が邪魔になったのも、先ほどのブラジャーの衝撃に比べれば取るに足りないことだった。

ルーミアは、マヤが服を着るのを手伝う合間に、ときばきと自分の服を着た。

「これで儀式終了」マヤのいでたちをしげしげと眺めながらルーミアは満足げに微笑んだ。「よく似合ってるわよ、マヤ」

マヤはいたずらっぽい表情で「16才の女の子に見える？」と尋ねた。

「どこから見ても立派な女の子よ」ルーミアもおどけてみせた。「外見も、それに言葉遣いもね」

するとマヤは怪訝そうな顔をした。「もしかして、今あたしが喋っているアウスグ語は女言葉なの？」

「もちろん」ルーミアはくすくす笑いながら答えた。「あたしが、10代の女の子が話すような言葉をあなたに教えてあげたんだもの」「そうなんだ……」マヤはちよつと言葉を詰まらせた。「寝たきりだったとき、ルーミアが教えてくれる言葉が、ルーミア自身の話す言葉と似ているな、とは思ってたんだけど、でもそれは、アウスグ語では10代の人の言葉使いに男女差がないからなんだろうって思った」

「じゃあ、男の子の言葉も教えてあげようか？」

「そのうちにね。でも、教えてもらったとしても、使うべきかどうかかわからない」

ルーミアはマヤの複雑な心中を察し、それ以上その話題に触れるのを避けた。

別の話題を探すために、ルーミアはぐるりと辺りを見回した。すると彼女は、恰好の「話題」を見つけた、とばかり、ある方向を指さした。

「見て、マヤ」

マヤはルーミアの指し示す方向に目をやった。水浴び場を取り囲

むようにしてそびえ立っている岩の隙間から、さきほど訪れた墜落現場が垣間見えた。しかし先ほどとは何か様子が違う。

ルーミアはマヤに「ねえ、マヤの住んでいた世界にも竜はいるの？」と尋ねた。

そう言われて初めて、マヤは黒ずんだ地面の上に何か巨大なものが鎮座しているのに気づいた。

「あれが竜……」

マヤは一瞬言葉を失った。以前、ベッドの上から空を見上げたとき、何度か空高く飛ぶ竜を見たことはあったが、その時は、暇つぶしに時々プレイするTVゲームや、小さい頃見たファンタジー映画に登場した竜と、外見的にはさして変わりないという印象を受けただけだった。しかし実際に目の前で見てみると、その巨大さは彼女を圧倒せずにはおかなかった。翼を広げればおそらく彼の複葉機の2倍にはなるだろう。むしろ、外見が見慣れたものであることが、巨大であることの異様さ、迫力を却って際立たせていた。

ルーミアは「きっと、このマキナスの森の奥に住む、竜の子供だと思う」と説明した。

「あれで子供なの？あんなに大きいのに」

「ううん、体の大きさはあれ以上成長しないわ。子供って言っても人間で言えばあたしたちぐらいの年齢だから」

「そっなんだ」

そのうち、竜は今までじつとさせていた体を右へ左へ揺さぶるように動かし始めた。2Dグラフィックでも3Dポリゴンでもない本物の竜が動くさまは、マヤの心に新たな感動を呼び起こした。

そのうち竜は首を下へ伸ばし、何を思ったか醜く黒ずんだ地面をぺろぺろと舐め始めた。

「そんなもの舐めちゃだめ！」マヤは叫んだ。「地面にしみこんでいるのは『ガソリン』なのよ！」

ルーミアはびっくりして「『ガソリン』って毒なの？」と聞き返した。

マヤは答えた。「そうよ。あんなもの舐めたら、死んじゃうかもしれない」

すると突然、ルーミアは何も言わずに走り出した。

マヤは「どうしたの」と言っただけを追いかけた。

ルーミアは足を止めることなく「やめさせなきゃ」と応えた。

彼女は泉のほとりをひた走り、竜からわずか10メートルしかはなれていない地点で足を止めた。

竜は彼女の存在に気づいていないのか、いまだ地面を舐めるのをやめようとはしなかった。

マヤはルーミアに追いつくと、彼女の背後から恐る恐る竜を見上げた。その威容には筆舌に尽くしがたいものがあった。

ルーミアは竜に向かって「地面を舐めちゃだめ。毒がしみこんでいるの」と叫んだ。

すると竜はゆっくり首をもたげ、不思議そうな顔をしてルーミアを見つめた。

恐ろしそうな姿をしている割に性格は案外おとなしいものなんだな　そう判断したマヤは、小さくため息をついて胸の高鳴りを鎮めようとした。しかし彼女の認識は誤りだった。

竜の表情は次第に陰しいものとなった。そしてその巨大なしっぽを持ち上げ、目の前のルーミアを威嚇するかのようにぶんぶん振り回し始めた。

ルーミアは一步も引き下がらず、逆に「食べ物を横取りされると思ってるみたい」と解説する余裕さえ見せた。

勇気があるのか単に竜に馴れているだけのかはともかくルーミアに任せておけば大丈夫だろう　マヤはそう考え、臆病にも彼女の背後に身を隠そうとした。

その時マヤは気づいた。ルーミアの肩が小刻みに震えている。しかも、背後から見える限りの彼女の頬は蒼白色になっている。彼女は竜を助きたい一心で精一杯の虚勢を張っていたのである。

もはや女の背後に隠れている場合ではなかった。仮にも　文字通り「仮にも」だが　自分は男なのである。保守的な考え方かもしれないが、ここは自分が前に出ていかねばならない。

マヤは、ルーミアを半ば押しのけるようにして、怒れる竜の面前へと躍り出た。「よく聞いて。あなたがいま舐めたものは『ガソリン』って言うって、この世界のものじゃないの。たぶんこの世界に存在してはいけないうものなの。お願い。触れないで。あなたはそれに触れちゃいけない!」

マヤの叫び声は、悠久の時を刻んできたマキナスの木々の間を響き渡った後、森の彼方へと消えていった。

暫時の静寂が訪れた。

次に聞こえてきたのは、竜が振り上げていた尻尾を地面に降ろす音だった。その表情に怒りの色は見られなかった。

「よかった」マヤは胸元に手をやり、今度こそ安堵のため息をついた。胸の膨らみがちよつと邪魔だった。

ルーミアはいつの間にか、マヤの背後でへたへたと地面に座り込んでいた。マヤは立ち上がろうとする彼女に手を貸してあげた。

そこへ突然、竜がいままでもたげていた首をマヤたちのほうへ伸ばしてきた。マヤとルーミアは、強力な頭突きが繰り出されたものと思い、可能な限りの防御姿勢をとった。

ところが竜は、頭部をマヤに接触させる直前で停止させ、口から舌を出してぺろぺろとマヤの頬を舐め始めたのだった。

「あたし、気に入られちゃったみたい」

マヤはそう言ってルーミアと顔を見合わせた。ルーミアはさも可

笑しそうにくすすと笑った。

4 ジュート

マヤとルーミアは、マヤにとってこの世界で二番目の友達となつたその竜に別れを告げ、村への帰途についた。

別れ際、マヤはルーミアのすすめに従つて、竜に「ピム（Pim）」という名前を付けてあげた。ピムはその名がよほど気に入ったらしく、マヤやルーミアが「ピム」という言葉を口にしただけで、嬉しそうに体を左右に揺さぶるのだった。ルーミアによると、それは竜が人間に示す反応の中でもっとも好意的なものだとのことだった。

太陽はすでに真南の空高くに昇りつめていた。昼食の時間はもう過ぎていく。きっとルーミアの父はお腹をすかせて自分たちの帰りを待っていることだろう、などと話ながら、二人は、永遠の静けさをたたえるマキナスの森を出、村に至る街道へと足を踏み入れた。

ところが、二人が村の入口近くまで来てみると、昼食後特有の怠惰に満ちていると思われたアヴ二村は、意外にも喧騒に支配されていた。

「何かあつたのかしら」

ルーミアはそう言つてマヤと顔を見合わせた。二人は様子をうかがいながら、みなもと喧騒の源と思しき村の広場の方向へと歩を進めた。

広場には50人ほどの村人たちが集まって人垣の輪を作っていた。ルーミアは、50人という人数は、アヴ二村の人口から子供を除いたほとんどすべてに相当すると説明した。祭でもないのに一体どうしたことだろう。

よく見ると、広場の一角には馬が三頭繋がれていた。それも農耕用の痩せ馬とは明らかに違う、装飾付きの馬具で着飾った立派な軍馬だった。

二人は更に、人々の話す声をはっきりと聞こえる地点まで近づいてみることにした。

「男の竜騎兵？」

「男が竜を操るなんてことできるのか？」

「操るどころか、竜は男がそばに近寄っただけで機嫌が悪くなるぞ」

どうやら村の男たちが、人垣の輪の中心に立つ人物に向かって口々に声を上げているらしかった。

「静まれ」輪の中からひととき大きな男声が響いた。「四ヶ月前の話だ。よく思い出して欲しい。不審な装甲竜を見かけなかったか、怪しい男と出くわさなかったか」

ルーミアはその声を聞いてマヤに「エラン語だわ。アウスグ語とは少しアクセントが違うでしょ」と囁いた。

輪の中の声は言葉を続けた。「あるいは、男の乗った装甲竜が墜落した可能性もある。皆の者、心当たりはないか」

「そう言えば」村人の誰かが言った。「四ヶ月前にマキナスの森に竜が墜落したよな」

「ああ、そうそう、そうだった」別の誰かが言った。「そのとき確か瀕死の竜騎兵が、ルーミアに命を助けられてクフルツ先生のところへ運び込まれたんだったよな」

輪の中の男は一層大きな声で尋ねた。「その者はいまどうしている」

尋ねられた村人は「もう退院したみたいだぜ。さっきルーミアと歩いているところを見かけたから」と答えた。

そのとき、人垣の一番外側にいた村人のうちの一人がマヤとルーミアの存在に気づいた。すると村人たちは、ドミノ倒しのドミノのように、次々とマヤたちのほうを振り向いた。

輪の中心にいた男は村人たちの様子から、ルーミアの傍らにいる東洋人が問題の人物だと察したようだった。彼は人垣をかき分け、つかつかとマヤのほうへ歩み寄った。

いままで人垣に隠れてマヤの目には見えなかったその男の姿があらわになった。彼は装飾の付いた白い衣装をさらりと着こなした背の高い男だった。

男は「わたしはエラーニア第4騎士団所属の白騎士バンク・ベエルである」と名乗り、うやうやしく一礼した。それが騎士の作法なのだろう。「初めてお目にかかる御婦人に対したいそう無礼な物言いであるとは存ずるが、拝見いたしたところ、貴殿はこのアウスゲント地方の者ではないように思われる。どのようなご身分のお方か」

マヤは言葉に詰まった。異世界から来たなどといっても信じてはもらえないだろうし、それ以前に、その騎士がマヤに対し向ける目

は、言葉の丁寧さとは裏腹に、お世辞にも好意的なものとは言えなかった。下手なことを言うとな今すぐにも連行されそうな、そんな雰囲気があったのである。

「ブンゴリア人です」 応えてくれたのはルーミアだった。「彼女はブンゴリア人です。東洋からはるばる見聞を広めるために旅をしてきて、不慮の事故で墜落したのです。竜騎兵なんかじゃありません」

騎士は怪訝そうな表情でルーミアに「貴殿はどなたか？」と尋ねた。

ルーミアは気丈にも騎士を睨み付け「彼女を助けた白魔道師のルーミアです」と答えた。

すると、人垣の陰から

「いま言ったことは本当かな、ルーミア」

という別の声が響いた。

ルーミアは「え？」と驚きの声を上げた。

人垣の向こうからゆっくりとした足取りで現れたのは、またも騎士装束をまとった若い男だった。ただし最初の騎士ほどは背が高くなく、衣装の着こなしもルーズだった。襟元のボタンも、わざとなのか不注意なのか、外れている。

「いま言ったことは本当かと尋ねたんだ」

その若い男が再びそう訊くと、ルーミアは手を口元に当てて呆然

と彼を見つめ

「ジュート……」

と呟いたのだった。

「久しぶりだな、ルーミア」男は、何が可笑しいのか、にやにやとにやけながら言った。「再会を喜びあいたいのには山々だが、いまはご覧の通り、任務中なんadena。取り敢えず質問に答えてくれないかな、ルーミア」

ルーミアは、男の言ったことが理解できなかったわけでもなからうに、いまだ呆然としている。

マヤは仕方なく、自分自身がその問に答えることにした。「ルーミアの言ったことは本当です。間違いありません」

男はにやにや顔をマヤに向け、意外そうに「ほう、おまえ、言葉はちゃんとしゃべれるんだな」と言いながら近づいてきた。「じゃあ、これは何だ」

彼は手にしていた平らな物体をマヤの前に放り投げた。片面に赤い塗料の塗られた鉄の板らしい。マヤにはそのが何なのかすぐわかった。どうやらそれは彼の愛機だった複葉機の機体の破片にちがいなかった。

「さっきこの村の鍛冶屋の仕事場から拝借してきた」男は言葉を続けた。「そこにはこれと同じような鉄の板が山ほど積んであった。これはどこから仕入れてきた鉄板なのかな、鍛冶屋の爺さん」

人垣の中にいままでブーツと突っ立っていたその老人は、いきなりその男に話を振られ、それこそ鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。「そ、それはじゃな……どこじゃったかいのう……そうじゃ、マキナスの森じゃ。この間竜が墜落した場所じゃ。火を消したあと、も鉄の板がたあくさん燃え残っておったので、村の若い者に手伝わってもらって、ワシンちに持ってきたのじゃ」

「ということは」男はにやけ顔を再びマヤに向けてきた。「あんたが乗っていた竜は装甲竜だったことになるな。東洋から旅をするのにどうしてわざわざ装甲竜に乗ってくる必要があるのかな？それとも東洋には竜にわざと重たい装甲をしょうわせていたぶって楽しむ風習でもあるのかな、お嬢さん」

マヤはその男のしゃべり方も態度も何もかも氣にくわなかった。まして「お嬢さん」などと呼ばれてしまったことは、彼女にとって屈辱以外の何ものでもなかった。しかし、悲しいことに、彼女には有効な反論が思いつかなかった。

そこでやつと正氣を取り戻したルーミアが彼女に助け船を出した。「ジュート、お願い。彼女はあたしの友達なの。怪しい人なんかじゃない」

ジュートと呼ばれたそのにやけ男は「ほう」と感情のこもらない相づちを打って見せた。

「装甲は……そう、こちらで戦いくさをしているらしいって聞いて、用心のために装備してきたのよ。だいたい、あなたたちが探しているのは男の竜騎兵じゃなかったの？彼女はれっきとした女の子なのよ」ルーミアは必死になって訴えかけた。

するとジュートはにやけ顔を一層にたと引きつらせ、あろう事がマヤの胸に手を伸ばし、その膨らみを驚掴みにしたのだった。

マヤは「ぎゃっ」と驚きの声を上げ、反射的に両手で胸を覆って体をくねらせた。そのとき口について出てきたのは

「Sexual harassment!」

という英語だった。日本語以外の言葉を話さなければ思うあまり、英語を叫んでしまったのである。

「ジュート、あなた!」ルーミアはすごい剣幕でジュートを睨み付けた。

村人たちの間からもどよめきが起こった。皆「ひどい」とか「やりすぎだ」といった非難の言葉を口にした。

しかし、ジュートは全く意に介した様子もなく、にやにや顔のまま「こいつが本当に女なのかどうか確かめただけさ」と言っただけのだった。

そこへ、ルーミアの父がつかつかと歩み寄ってきた。いままで人垣に加わらずに広場の隅のほうでやりとりを見守っていたらしい。

「ではわかってもらえたことだろう」彼は言った。「彼女は、マヤは間違いなく女性だ。わたしが保証する。このアヴニ村には男の竜騎兵など滞在してもいないし、かくまわれてもいない。そんなことをしてもわたしたちには何の利益もない」

「しかし」最初にマヤに話しかけてきた慇懃な騎士が言った。「我

々はもう四ヶ月も捜査を続けている。残念なことではあるが、ここにおられる御婦人は実に疑わしい。疑わしい者の存在を知りながら精査することなく王都エランに帰還したとあつては、我々は愚か者のそしりを免れぬ」

「よほど重要な任務らしいな」ルーミアの父は言った。

騎士は黙って懷から巻紙を取り出し、それを広げて父に見せた。

ルーミアの父はそれを読み上げた。「『アウスгент地方のどこかに降り立ったはずの男の竜騎兵を生け捕りにせよ。手段は問わぬ』か。それも国王陛下の御名御璽（署名と印）付きとは……」

マヤは「生け捕り」という言葉を聞いて愕然となった。それまでは心のどこかに、もしかしたら正直に異世界から来たことを話しても構わないのでは、という思いがあった。しかしそんな考えはたつたいま吹っ飛んだ。

「ハバリア帝国が絡んでいることなのか」ルーミアの父は更に質問した。「今度の戦（いくさ）と何か関係があるのか」

騎士は「答えられるわけなからう」と言っただけだった。

「そういうことさ」ジュートは依然にやけていた。「とにかく、俺たちはこの娘を『精査』しなければならないんだ。任務なんぞでな」

ルーミアはジュートの口調に引つかかるものがあつた。「ジュート、まさか『精査』って、マヤを辱（はづかし）めるようなことじゃないでしょうね」

ジュートはその日ルーミアたちの面前に現れて以来、最も下品なにやけ顔で「任務なんだな」と繰り返した。

マヤの耳に、村人の何人が「裸にでもされるんだろうか」などと囁きあっているのが聞こえた。マヤは、確かに裸にされるのは恥ずかしいがそれで生け捕りを逃れることができるならやむをえまい、と思った。

ところがルーミアの顔に目をやると、彼女の顔はいまや完熟トマトのような色になっていた。ルーミアの父も何か複雑な表情をしていた。どうやらこの白魔道師父娘は「精査」が意味する本当のところを知っているらしかった。

「そんなことしなくても」ルーミアは叫び声をあげた。「彼女の体を見ればわかるでしょう？ 誰か、そう、竜騎兵か女性の魔道師でも連れてきて確認すれば……」

ジュートは突き放すように言った。「最近はおカマ連中が受ける性転換手術も巧妙になってきているからな。それに東洋には『宦官』とか言つて、皇后に仕える男たちはアノ部分を切り取ってしまう習慣があるらしいしな」

ルーミアはほとんど泣き出しそうな表情で「マヤはそんなのじゃないわ」と叫んだ。

「いずれにせよこのご婦人の身柄は拘束させていただく」慇懃な騎士は言った。「我々としても辛いのだ。結婚前の御婦人にそのような辱めを受けさせるのは。しかし心配はご無用。無実と判明せる場合には、最高水準の白魔術によって彼女の体についた傷を完全に修復し、将来の御結婚に差し支えなきよう取りはからう所存である」

マヤは文字通り我が耳を疑った。もしかしたら自分がそのアウスグ語の意味を勘違いしているだけかもしれない。確認のために、彼女はルーミアのほうに顔を向け、おそろおそろ尋ねてみた。

「まさか……そういうことをやられちゃうてこと？」

ルーミアは無言のままうなずくのがやっとだった。

代わりにジュートがにやにやしながら説明してくれた。「俺もよくはわからないんだが、ソノときに女の体が見す反応を暗黒魔法で見れば、確実に判定できるんだとか。そうだったな、ゾイグ」

ジュートは広場の片隅に立つ木の根元に目をやった。よく見るとそこには、長いマントを身にまとい、フードを目深に下ろした、身長が120センチぐらいしかない人物が立っていた。手にした杖からすると、どうやら魔道師らしい。

その人物はジュートに視線を向けられると、何も言わずうなずいた。

「じよ、冗談じゃないわ！」マヤは叫びだした。「な、なんであたしがそんなことやられなきゃいけないの？そ、そんなことしなくたって、男か女かを見分ける方法ぐらい他にもあるでしょう？ほら、何だったっけ、そう、『染色体検査』とか！」

もちろん『染色体検査』などという日本語が相手に通じるはずもなかった。

村人たちも、これからマヤの身に起こることを理解したらしく、

ざわざわとざわめきだした。

ジュートは、いまにも飛びかかってきそうな勢いのマヤと、口々にマヤへの同情の言葉をこぼす村人たちに、少し恐れを感じたらしい。そこで彼はさきほどの魔道師に目で合図を送った。すると魔道師は短い呪文と同時に魔法の杖を繰り出した。

「きゃっ」

マヤはその声を最後に、じっと動かなくなってしまった。何かの魔法をかけられたのは明らかだった。

「マヤ！」

ルーミアはそう叫び、足下にうずくまるマヤを介抱しようとした。ところがその前に魔道師が念動力で彼女の体を、広場の一角に繋がれていた軍馬の背中に運び去った。

騎士とジュートと魔道師は、村人たちの放つ敵意に満ちた視線をものともせず、そそくさと馬の背に飛び乗った。ジュートはマヤの載せられている馬にまたがり、彼女の体を抱きかかえるように支えた。

ルーミアは、ジュートの馬のそばにまで近寄り、なおも「マヤ、マヤ」と叫び続けた。ジュートは「安心しろ、ひどいことはしないとルーミアをなだめた。

女性に乱暴をはたらくこと以上にひどいことがあるの？

ルーミアはそう言ってジュートにくっついてかかろうとしたが、彼女の父が彼女の肩を抱いて引き下がらせた。

騎士は馬上から「皆の者、お騒がせした。ご協力に感謝する」と言った後、魔道師の乗った馬を従えて村の出口へと去っていった。ジュートはルーミアに「じゃ、またな」と声をかけてから、先に行った2頭を追いかけた。

ルーミアや彼女の父や他のアヴニ村の村民たちにできることは、その後ろ姿を呆然と見守ることだけだった

ジュートは馬上で、これからマヤはアウスгент地方の中心都市ファクティムにあるファクティム城に連行されると告げた。

連行される途中、マヤは2日前に得たばかりの体の自由をまたも奪われてしまったことを嘆きながらも、繰り返し、冷静にならなければ、と自らに言い聞かせた。

考えてみれば、アクロバット飛行競技会でのあの「事故」以来、彼女はパニック続きだった。得体の知れない黒いもやに包まれたり、異世界に飛ばされたり、女なっってしまったことと比べれば、今回の一件は一番ましなほうだとさえ言えた。それらの経験が彼女に事態を冷静に見つめる余裕を与えていたのだった。

彼女は誓った。最後の瞬間まで絶対に諦めるものか、と。

一行がファクティムに入城する頃にはすっかり日も暮れて東の空から今日も満月が顔を覗かせていた。

同行していたあの背の低い魔道師は、マヤを念動力で動かすのが面倒だったのか、馬から降りる段になって、マヤの体を麻痺させている魔法を解き、自分で降りると目で合図してきた。マヤはその隙をついて、馬から飛び降りるや否や脱兎の如く城門目指して走り出した。しかし、魔道師の魔法によってすぐにまた体の自由を奪われ、あっさりと連れ戻されてしまった。

その後、マヤはすぐに魔法を解かれたが、もう逃げ出そうとはしなかった。この魔道師がそばにいる限り逃げ出すことはまず無理だと悟ったからである。

彼女は牢屋にでもぶち込まれるのかと思いきや、意外にも普通の個室に案内された。そもそもこの世界の城などというものに入るのが初めてなのだから詳しくわかるうはずもなかったが、調度品などの様子からして女性のための個室のように思われた。先ほど廊下でお城勤めの女官らしき女性数人とすれ違った。もしかしたらそういう人たちのための個室なのかもしれない。もちろん、部屋の一角にはベッドがしつらえてある。これから自分の身に起こるかもしれないことを考えると、マヤはベッドを正視する気になれなかった。

ほどなくジュートが夕食を運んできた。それも2人分。彼はそれらの料理をテーブルに置き、例のにやにや顔で「どちらか好きな方を選び」と言った。マヤが手近な方を選ぶと、ジュートは彼女の選ばなかった方から一皿につき一口ずつ食べて見せた。毒が入っているわけでも眠り薬が仕込んであるわけでもないことをマヤに示したかったのだろう。その上で、彼は

「お食事を一緒にしてもいいかい、お嬢さん？」

とマヤに訊いてきた。

マヤは「お嬢さん」と呼ばれるのが我慢ならなかったので、皮肉っぽい口調で

「せっかくのお誘いですが、今は一人で食べたい気分なのでお断りします。それとあたしにはマヤという名前があります。『お嬢さん』はやめてください」

と言った。

するとジュートは肩をすくめ

「じゃあ、またあとでな、マヤ」

と言ってから、自分の料理の入った盆を持って部屋を出ていった。

マヤは食事を取り始めた。先ほどジュートが毒味してくれたとはいえ、少し不安ではあった。しかし、いかんせんルーミアたちと朝食を取って以来、何も食べていないのである。いつでも逃げ出せるよう腹八分にとどめなければという思いとは裏腹に、口に匙を運ぶ手を制止することはできず、結局、すべての料理を平らげてしまった。

果たして、料理には毒も眠り薬も入っていなかった。食後特有の眠気はあったものの、マヤはそれから数時間、どうにかして「最悪の事態」を避ける手だてをあれこれ考え続けた。その中で彼女は相手の男　どんな男なのかわからないが　を色仕掛けでたぶらかすことも考えた。しかし下手をすると逆にその気にさせてしまう可能性もある、と思い至り、その案を諦めた。

何度か、部屋の扉を開けて外の廊下を見渡してみた。片隅には常にあの魔道師が立って睨みをきかせており、廊下を通っては到底逃げ出せそうにない。かといって、窓は小さく、おまけに鉄格子がはめてある。鉄格子はどちらかというと、よこしまな男たちがこの部屋にたたずむ女性を狙って闖入するのを防ぐためのものに思われたが、人一人出入りすることができそうにないのは確かだった。

冷静さを失わないよう心がけてきたマヤも、ここへ来て焦燥感に駆られ始めた。緊張のあまり、部屋にしつらえてあるトイレに2度も行くはめになった。今朝のようにその違和感に浸る余裕もなかった。

夜も更けた頃、部屋の扉が開いた。遂に相手の男がマヤのもとを訪れたのである。扉を背にして安楽椅子に腰掛けていた彼女は恐る、戸口に立つ男のほうへ目をやった。

「よう。マヤ」

なんと、その男はジュートだった。

「まあ、そういうことになっちまったみたいだから、宜しく頼むわ」
彼はいつものにやにや顔で、いつもの口調でそう言った。

マヤは驚くと同時に、心の中で苦笑いをした。相手の男が見るかに恐ろしげな風貌だったらどうしよう、などと考えていたさつきまでの自分と、ジュートならまだマシか、などと考えている今の自分が滑稽に思えたからである。

ジュートは小さなテーブルを挟んでマヤの向かい側に腰掛けた。マヤの見る限り、彼はまったく落ち着き払っていた。おそらくこういうことに馴れきっているのだろ。男だったときも含めてこういうことの経験が全くないマヤは、何か自分が小さくてか弱い存在のように感じられた。

マヤの緊張をすこしでもほぐしてあげようと考えたのか、ジュートはいつものにやけ顔を、可能な限り優しい笑顔に見せようと努力しながら

「ルーミアって、いい娘こだろ」

と話しかけてきた。

マヤは自分の体の緊張が少し薄らいだの覚えながら

「うん。そう思う」

と応えた。「ジュートは……彼女とはどういう知り合いなの？」

「初めてジュートと呼んでくれたな」ジュートは子供のように無邪気に喜んだ。「ルーミアは、去年まで3年間、王都エランの魔道学校に通っていた。俺はそこで彼女と知り合ったんだ」

「ジュートはエランの人よね？」

「ああ。最初にルーミアに会ったときは別にどうってことない田舎娘って感じだったんだけどな。知り合ってゆくうちに、何って言うか、輝きみたいなものが彼女には宿ってるって思えるようになってな」

「なんとなくわかる気がする」

「それがどういうわけか、ルーミアのほうも俺にそういう輝きみたいなものを見るようになってしまった」ジュートはそこで少し寂しげな表情になった。「でも俺には彼女の輝きはまぶしすぎたよ。受け入れるだけの余裕はなかった。だから彼女が故郷に帰ってしまったままで、俺は彼女をばぐらかし続けた。故郷に帰ってしまった俺のことなんか忘れてくれると思ったから。でも今日会った限りではそうでもなかったみたいだな」

マヤは、ジュートに興味が沸きつつある自分自身に驚きを感じていた。その興味が一体どういう種類のものなのか、彼女にはわからなかったし考える暇もなかった。しかしこれだけは言えた。自分はいま最悪の気分ではない、と。

ジュートは寂しさの余韻のようなものを引きずりながら「もうこの話はよそう」と言った。マヤは何も答えなかった。

その部屋には窓が一つしかない。それもごく小さな窓に過ぎない。おそらく真南に向いているのであろうその窓から、いまほんの一握りほどの月明かりが差し込んだ。

ジュートは椅子からゆっくり立ち上がり、マヤのもとへ歩み寄った。マヤはわざと目を逸らし、ジュートのほうを見ないようにした。しかし、ジュートがすぐそばまでやって来て彼女の肩に手をかけたとき、彼女はその目でしっかりとジュートの顔を見据えた。相変わらずにやけていたが、不快な表情には思えなかった。

そんな二人の様子を見守るのは静かに南天を通り過ぎようとする

月だけだった。

ふと。

マヤの耳に、ごく小さい、低いうなり声のような音が聞こえた。不思議に思って耳を澄ましてみると、その音は少しずつではあったが、大きくなりつつあった。

「何の音？」

マヤはジュートに訊いた。しかしジュートは何も答えず、代わりに月明かりの漏れる窓のほうを見上げた。

やがてその音は、うなり声と言うよりは耳をつんざく叫声のような大きさとなった。それに伴い、その発生源もいまマヤたちのいる場所のすぐ上の辺りだと知覚できるようになった。

「何？何なの」

マヤがジュートに尋ねる声も半ばかき消さってしまった。

次の瞬間、窓から漏れる月明かりが何かに遮られた。その直後、どしんという巨大な音と共に、地響きが伝わってきた。

マヤはバランスを失ってジュートのほうに倒れ込んでしまった。ジュートは彼女を受け止めながら、なおも窓の外へ視線を向けていた。

するといきなり轟音と共に、窓のある側の壁が崩れ落ちた。ジュートはマヤを胸の中に抱いて、飛び散る壁の破片から彼女を守ろう

とした。

マヤがそつと目を開けてみると、さっきまで壁だったところに壁はなく、代わりに何にか大きな物体が、壁がなくなつてできた穴をふさぐように鎮座していた。

彼女は目を凝らしてみた。それは竜の頭だった。それも彼女には見覚えのある竜だった。

「ピム……？」

竜はマヤのその声に反応して、嬉しそうな表情をした。

マヤは驚きのあまり一瞬、言葉を失った。

しかも彼女を驚かしたのはそれだけではなかった。

「マヤ！」

ピムの頭の向こうから聞こえてきたその声はルーミアの声だった。

そこでピムは一旦頭を引っ込めた。竜の頭によって開けられた穴から建物の外を見てみるとピムの背中でルーミアが手を振っているのがわかった。

「なんてこつた」ジュートはマヤを胸に抱いたまま嘆いた。「これはえらい騒ぎになるぞ」

マヤはやつと、いま自分が何をなさねばならないか思い出した。「お願い、ジュート。あたしを逃がして。あたしは男……の竜騎兵

なんかじゃない。誓ってもいい」

ジュートはいつものにやにや顔で「俺は最初からおまえに乱暴するつもりなんてなかったさ」と応えた。

「え？」

「俺はそこまで人で無しじゃない。ただバンクっていう俺たちの隊長がくそまじめで融通が利かねえやつだからだから、一応、形だけでも調べたことにしなけりやならなかったんだ」

「でも調べるのはあの魔道師なんじゃ……」

「ゾイグはああ見えて博打好きでな。俺に50万ベクも借金があるもんだから頭が上がらないのさ」

「そうだったの」

「それに俺は、おまえがヤグソフの異呪で異世界から召還された男だ、なんて思っちゃいない」

「ヤグ……何？」

「しまった。よけいなことしゃべっちゃまった。まあ、とにかく、おまえが女だってことはアヴニ村でのあの『検査』で十分わかっただよ」

マヤは彼の言う『検査』が、彼が自分の胸を触ってきたことを意味しているのだと気づき

「バカ」

と言ってふくれて見せた。

そこへ、ピムが再び頭をマヤたちのほうへ伸ばしてきた。

「マヤ、早く乗って」

壁の向こうから聞こえてくるルーミアの声もマヤを促した。

するとジュートはマヤをひょいと抱き上げた。いわゆる「お姫様だっこ」というやつである。マヤは恥ずかしかったので抵抗しようとしたが、ジュートは有無を言わず彼女をピムの頭に乗つけてしまった。

「騒ぎがここまで大きくなっちまった以上、今はこの竜で逃げた方がいい。この城にも3人ほど竜騎兵が駐屯しているから追っかけられることになるかもしれないが、大丈夫、俺とゾイグがおまえは女だったと隊長に報告すれば、追撃は中止されるだろう」

「わかったわ」

「マヤにはまたいずれ会うこともあるかな」ジュートはウィンクして見せた。「ルーミアに宜しく。それと……今日続き、おまえさえよければ俺はいつでもいいぜ」

「バカ」マヤはまたふくれっ面をした。

ピムは首をひねって自分の背中近くに頭を持っていった。マヤが頭の上から背中に飛び降り、ルーミアに抱きとめられると、ピムは

翼を大きく広げ、夜空へと舞い上がった。

ルーミアはピムの首の根もと付近にまたがり、マヤも自分の後ろにまたがるように言った。そこには突起のようなものがいくつか付いていて体がある程度固定することができるのだという。マヤは言われたとおりにした後、最後にもう一度、城の壁に開いた穴に目をやった。しかしそこにジュートの姿を確認することはできなかった。

ファクティム城が小さなミニチュアのように見える高さまでピムが達したとき、ルーミアは「遅くなってごめん」と謝った。「マキナスの森の奥でピムを見つけるのに手間取っちゃった。日が沈んでからやっと会えたんだけど、それからここまで飛んでくるのにもあたし、竜の操縦なんてやったことなかったから、上手くないからで」

マヤは心の底から「ありがとう」と言った。「あたしのためにそこまでしてくれるなんて。あたし、ルーミアには一生かかっても返し尽くせないほどの恩を受けちゃったわね」

ルーミアは首を振り「あたしは自分にやれることをやっただけ。やってあげたいと思ったことをやっただけよ」と応えた。

「でも、よくわかったわね、あたしのいる場所が」

「それはピムのお陰よ。竜には、ある程度の範囲内なら遠く離れた人の位置を感知できる能力があるの。もっとも相手が気に入った人でないと、そこへ向かってはくれないでしょうけど」

「そうなんだ」

マヤはそこで、ジュートがさつき言ったことを思い出し、今やマツチ箱ほどの大きさになってしまったファクティム城の方を振り返った。案の定、ファクティム城から3匹の竜が舞い上がるのが見えた。

ルーミアもすぐにそれに気づき、ピムに「もっと速く飛んで」と声をかけた。しかしピムにはその声を通じないのか、いっこうに速度を上げようとしなかった。

追っ手の3匹はいとも簡単にピムに追いつき、いとも簡単に包囲してしまった。そのうちの1匹の背中から投降を促す竜騎兵の声が聞こえる。もちろん女の声である。

ルーミアは何度も「ピム、ピム」と呼びかけたが、ピムの反応は鈍かった。

その間にも追っ手たちの包囲の輪は狭まりつつあった。竜騎兵の一人が弓を構えこちらを狙っている。

業を煮やしたマヤはルーミアの真似をして

「ピム、お願い。もっと速く飛んで」

と声を張り上げた。

するとどうだろう。

今までミニバイクほどだったピムの飛行速度が突如、軽飛行機なみの速度に上昇したのである。マヤとルーミアは首もとの突起にかまって振り落とされないようにするのに必死だった。

追っ手の竜は、当然の如くはるか後方に置いてきぼりにされた。

加速による衝撃が収まった後、マヤはルーミアと顔を見合わせた。もしかしたらピムはマヤの言うことならよく聞くのかもしれない。あるいは、マヤには竜を操る天賦の才があるのか。

彼女たちが驚いている間に、追っ手の竜が速度を上げ、すぐにまた追いついてきた。竜騎兵は竜を操るプロなのだからそれぐらい造作もないことなのだろう。

マヤはルーミアに「代わって」と言っただけでまたがる場所を彼女と交代した。竜の「操縦席」から前方の夜空を見渡すと、久々に彼女のパイロット魂が呼び起こされた。「とまれ」「右へ曲がれ」「左へ曲がれ」「上昇しろ」などという基本的な命令を2、3度試しただけで、彼女はすぐにそのタイミングとコツを掴んだ。

その後はピムの独壇場だった。

ピムはまず、小さな宙返りをして追っ手の一匹の背後を取った。ピムがその翼に噛みついた途端、その竜は悲鳴を上げ、ファクティム城方向に撤退していった。

次にピムは、残りの2匹が挟み撃ちを敢行すべく迫ってくるところを見計らって、突然、高度を下げた。竜騎兵たちがピムを見失っている隙に、マヤはピムに、片方の竜の腹へ尻尾のむちをお見舞いするよう命じた。腹に一撃を食らった竜は苦痛に耐えきれず、操縦する竜騎兵の制止を無視してその場から逃げ出してしまった。

一人残された竜騎兵は形勢不利と見たのか単に怖じ気づいたのか、

戦わずして竜の頭をファクティム方向へ向けてしまった。

「やったわ!」

マヤの喜びようは、言葉こそ女言葉だったが、彼女の取ったガッツポーズには、少年と言うよりむしろやんちゃ坊主のような無邪気さがあった。

5 娘として姉として

その長い一日はマヤ 山矢健太にとって生涯忘れ得ぬ一日となった。

追っ手の竜を撃退した後、彼女はルーミアを送り届けるため取り敢えずアヴニ村へ向かうことにした。マヤの操縦するピムがアヴニ村に到達するにはわずか30分ほどしかかからなかった。時速百キロを越える速度で一直線に飛んできたのだから当然と言えば当然である。逆の見方をすると、ルーミアがファクティムまで飛んでくる際、いかに遅い速度で、いかに右往左往したのかがわかる。

アヴニ村では、深夜にもかかわらずルーミアの父と数名の村の男たちが彼女たちの無事の帰還を歓迎した。父の口振りから、ルーミアが彼の反対を押し切ってマヤを助けに来たのは明らかだった。マヤは今一度ルーミアに礼を言い、アヴニ村の村民に迷惑をかけたことを謝罪した後、ピムとともにマキナスの森の奥へ飛び去ろうとした。お尋ね者の自分が村に滞在しては村の人々に更に迷惑をかけることになると思ったからである。

しかしルーミアの父を始めその場にいた他の村民たちはみな、マヤが身を隠す必要はないと主張した。そもそも今回の一件については、マヤを男の竜騎兵などと疑い、あまつさえ非道い方法でそれを確かめようとしたジュートたち調査隊が一方的に悪いのだ、と。

マヤはそれを聞いて、ますます自責の念に駆られた。調査隊の疑念は全くの外れというわけではないのである。彼女は村民たちに身を隠すことの妥当性を説明するため、もと男だったという事実を打ち明けようとした。

そのときルーミアの父が言った。マヤに一体何の罪があるのか、と。彼はマヤが元は男だったことを知っている。その言葉には、たとえマヤが男だったことが事実だとしても「生け捕り」にされるようないわれはないのだ、という意味が込められているようだった。

マヤはそれ以上反論しなかった。元は男だったことも村民たちには言わないことにした。ルーミアの父が、言うべきではないと目で訴えてきたからである。

彼女はピムに森の奥へ帰るよう命じ、村民たちに出迎えてくれたことへの礼を述べた後、ルーミアと父と共にクフルツ白魔道診療院へ帰った。ルーミアはマヤの表情に疲れの色を見て取ったのだろう、すぐさまマヤを、ひと月も前から彼女のために用意しておいたという部屋へ案内した。マヤが部屋を見渡してみると、ピンク地に水玉模様のカーテンが窓にかけられ、それと同じ柄のベッドカバーがベッドを覆い、リボン付きのかわいらしいワンピースが壁に掛かっているのが目に付いた。ルーミアは2日前までマヤを真正正銘の女だと思っていたのだから無理からぬことではあった。

マヤはルーミアにお休みを言ってから、念のためトイレに行くことにした。眠気によって感覚が鈍っているだけなのか、早くも神経が肉体に適応しつつあるのかはわからなかったが、今朝のような違和感はあまり感じられなかった。

彼女は部屋に戻り、ベッドに倒れ込むや否や眠りに落ちた。こうしてその長い一日は終わりを告げたのだった。

それからの半月は「マヤ」にとってもっとも幸福な時間だったかもしれない。

彼女はごく普通の村人として生活した。居候させてもらうのと引き替えに、診療院の家事一切を引き受けることにしたのである。ルーミアも父も白魔道士としての仕事があるため、急病人が出たりするとどうしても家事がおざなりになる。そういう意味で、マヤの存在は彼らにとってありがたいものだった。マヤのほうも、自分が必要とされていると思うと肩身の狭い思いをせずにすんだ。

マヤは、料理は全くやったことがなかったので、ルーミアや近所のおばさんたちに教えてもらいながら少しずつ覚えてゆくしかなかったが、掃除や洗濯は、こちらの世界のやり方に戸惑いながらも、元来綺麗好きだったこともあってすぐにマスターすることができた。一度、川で洗濯をしている時に村の女たちに「これならいつでも嫁に行ける」と太鼓判を押されてしまい、返答に困ったこともあった。

暇なときには、マキナスの森に出かけてゆき、ピムとの親交を深めた。ルーミアも手が空いているときには同行した。その背中に乗って空を飛ぶこともあったが、あまりあちこち飛び回るとファクテイム城の兵を刺激する恐れがあったため、マキナスの森付近から出ることはなかった。

とはいえ、空を飛ぶのは気持ちよかった。生活習慣はおるか肉体まで別のものに变化してしまったマヤにとって、ピムを操縦している間だけが、元の自分をわずかでも取り戻せる瞬間だった。彼女は山矢健太だったときアクロバット飛行競技会で優勝を期待されたほどの飛行テクニックを持っていた。飛行機という無機物から竜と

いう有機的なものへと飛行手段を乗り換えた今、彼女のテクニクはその飛行ぶりに、よりダイレクトに現れた。ピムは彼女と一体となった。言葉で命令されなくても、首の根元にまたがる彼女の体重のかけ具合から彼女の意図を察知することさえできるようになった。それはもやは飛行する竜というより、優雅に空中を舞い踊るバレリーナさながらであった。

あるとき、マヤはルーミアに言った。自分はこの飛行テクニクを生かして竜騎兵になってしまおうか、そうしてお金を稼げばルーミアたちに治療代を返すことができるし、住むところも確保できて治療院に居候せずにすむ、と。

しかしルーミアは言下に反対した。マヤを戦場になど行かせたくはないし、またいまマヤがうちで家事をしてくれていることがある意味で治療費の返済になっている、と。

「それに、あたしはマヤを居候だなんて思っていないから」

彼女は最後にそう付け加えたのだった。

ファクティム城であるような事件を起こした以上、当然、アヴニ村に対し何らかの反応があることが予想された。早ければ事件後一両日以内にファクティムから使いが来てもよさそうなものだったが、意外にも一番最初の反応は一週間後のことだった。

クフルツ治療院の扉を叩いたのは、ファクティム城に駐在する騎士隊の指揮官と称する男だった。彼は二つの用件を述べた。一つ目は、マヤにあらぬ疑いをかけ、無礼きわまりない扱いをした先日の調査隊の件であった。

彼は何度も何度もマヤに謝罪したうえで「我々も調査隊のやり方に疑問を持っていたものの、彼らは国王陛下の勅書を持っていたため抗うことはできなかったのだ。本来であれば、調査隊の隊長をここへ連れてきて直接謝らせるべきなのだが、彼らは調査を続けるためにもう次の地区へ向かってしまった」と述べた。

クフルツ先生とマヤと共にその話を聞いていたルーミアは、指揮官の言葉の最後の部分にがっかりした様子だった。もしかしたらまたジュートに会えるのでは、と期待していたのかもしれない。

指揮官は次にマヤの体のことを気遣った。マヤは乱暴されたのだと彼は信じているのだろう。マヤがわざと不機嫌そうな顔をして「大丈夫です」と答えると、指揮官はほっと胸をなで下ろした後、二件目の用件を切り出した。

「君、竜騎兵にならないか？」

その一言はマヤたちを驚かせるのに十分だった。

指揮官は先日、マヤが追っ手を振り切ったときの状況を竜騎兵たちから聞かされて彼女の飛行技術に惚れ込み、ぜひスカウトしたくなっただと理由を述べた。

マヤはその話に関心を抱き、待遇などについて指揮官に説明を求めようとした。ところがルーミアが

「だめよ、マヤ！」

と言ってまたも頑強に反対した。彼女はよほど戦いくさが嫌いらしい。

結局、その話はルーミアの反対によってお流れとなった。

その夜、クフルツ先生がマヤに持ちかけたのは、嬉しい話だった。自分の養女にならないか、というのである。少なくともこの世界では、マヤは誰一人身寄りがいないことになる。身分を問われたときいちいち東洋から来た云々と言いつけるよりも、白魔道士バーン・クフルツの娘だと答える方が手っ取り早いだろう、と。

今度はルーミアも反対しなかったのは言うまでもない。それどころかマヤと同じく、いやマヤ以上に大喜びした。彼女が前からほしいと思っていた姉が本当にできるといふのだから。

マヤが承諾すると、クフルツ先生は「では名主のところに届けを出しておこう」と言った後で、これからは自分のことを父と呼ぶようにマヤに命じた。そのうえで

「おまえはわたしの子供なのだから、この家にいて当然なのだ。二度と自分は居候だ、などと言わぬように」

と言い足した。マヤが常日頃、この家に置いてもらっていることを申し訳ないと言っていることに対する、彼なりの配慮だった。

マヤは本当に嬉しかった。どうやったらこの恩返しができるだろうか、もう一生かかっても無理かもしれない、と思った。いまだできることは、クフルツ先生に対してはその子供として、ルーミアに対しては兄弟？として、普通に振る舞ってあげることだけだ、とも思えた。

それからの一週間はまた平穏無事に過ぎ去った。

クフルツ先生は村人に、マヤは自分の娘になったと紹介した。マヤもクフルツ先生のことを「お父さん」と呼ぶようにした。村人たちもマヤが東洋人であることなど全く意に介することなく、ごく自然にクフルツ家の娘として扱った。

ルーミアもマヤを「お姉ちゃん」と呼んでよいかと訊いてきた。しかしマヤは、これに関してはいささか抵抗がなくもなかった。実際のところ、彼女はそれまで毎日ズボンをはいて過ごしていたし、トイレも馴れてしまえばそれほど気にはならなかった。着替えたり入浴したりするときを除けば、自分が女なんだと意識させられることは、それほどなかったのである。

ルーミアはマヤの怪訝そうな顔を見て、いつものように「嫌ならやめるけど」とはつきりと断った。ルーミアのマヤに対する態度はあの「儀式」の日以来一貫している。ルーミアはマヤをありのまま受け入れていた。マヤを男としても女としても扱わなかった。どちらかとして扱わなければならないときは明快な選択肢を与えた。

マヤはちよつと迷った末、ルーミアに自分を「お姉ちゃん」と呼ぶことを許可した。クフルツ先生や村人たちが自分を「クフルツ家の娘」「ルーミアの姉妹」として受け入れてくれたのに、自分だけ裏切るわけにはいかないと思ったからである。

そのときのルーミアの喜びようは、まさに、ほしい玩具をやつと与えてもらえた子供のようなあどけなさで一杯だった。マヤはルーミアの笑顔を見てみると、彼女は本当の妹で、自分は本当の姉兄ではなく、のような気がしてきた。

しかし　マヤはある夜、部屋で一人呟いたのだった。
俺はいま男なんだろうか、女なんだろうか

彼女は突然、立ち上がり、壁に掛かっているワンピースを手を取った。ルーミアは言っていた。このワンピースは本来、「儀式」のときマヤに着せるつもりだったのだが、マヤが実は男だったことを知り、その心情を察してこれの代わりにズボンをはかせたのだ、とこの半月の間、マヤはやはり着る気にはなれず、壁に掛けたまま放置してあったのである。

初めてスカートをはくのは、さすがに恥ずかしかった。自分がこんなものをはいていいのだろうか、という後ろめたい気持ちもあった。しかし着終わって、部屋の壁に付いている大きな鏡に全身を映してみると、そこには故郷の街でもよく見かけたような、ごくごく普通の日本人の少女の姿があった。あまりにも違和感がなかったのだ、後ろめたさなど感じた自分が滑稽にさえ思えた。

彼女はワンピースを着たまま、ベッドに仰向けになった。もしいつか元の世界へ帰る方法が見つかり、無事に帰ることに成功したとして、そのとき俺はどうしたらいいだろう。父や母は自分が山矢健太だと言えば信じてくれるかもしれないかもしれないし、信じてくれないかもしれない。信じてくれた場合は、病院で「男性性転換」してもらい、ある程度もとの生活を取り戻すことができるかもしれない。信じてくれなかった場合、俺は戸籍のない不法入国者のような存在となり、一生、日陰者として暮らすことになる。それも女のまま。もちろん再び飛行機の操縦桿を握るなどということはできないだろう

彼女はそこで寝返りを打った。窓からは今日も満月が顔を覗かせている。もっとも、ウサギの餅つきに見えるという表面の模様は完全に姿を隠していた。その状態をこの世界の人々は「新月」と呼んでいるのだった。あるいはこの世界で男に戻る方法を見つける

という手もある。コンピュータネットワークに覆い尽くされている元の世界とは違い、この世界では地球の裏側がどうなっているのかさえよく知られていない。この世界の隅々まで探せば男に戻る魔法が何かを発見できるかもしれない。しかしそれは雲を掴むような話だ

彼女はベッドから起き上がり、もう一度鏡の前に立って最初の質問を繰り返した。俺はいま男なんだろうか、女なんだろうか

目を閉じて、通っていた高校の風景を思い起こしてみると、そこには日に焼けた相良美玖の顔があった。彼女に対する想いは今も変わっていない。俺はまだ完全に女になってしまったわけじゃない

次に目を開けて鏡の中の少女を見つめながら、半月前、一緒に水浴びをしたときのルーミアを思い出してみた。透き通るような白い肌、スレンダーなボディに豊満なバスト。いま考えてもうつとりする。でも……でも、本来の俺ならうつとりするだけじゃないはずなんだ

マヤは慌てたようにワンピースを脱ぎ始めた。自分の精神的変化がこれから行き着くであろう結末を想像すると、恐ろしくなってきたからである。クフルツ先生は言っていた。俺は白魔法で再生されたとき、魂も肉体も女となった、と。肉体には当然、脳も含まれている。俺はいつの日か、脳に宿る女の本能に命じられるまま、男を求めるようになるのだろうか

彼女は恐る恐る、女になってから今までに出会った若い男たちを頭に思い描いてみた。幸いにして、と言うべきか、アヴ二村にはそういう男はあまりいなかった。いたとしても家が離れていてあまり

会ったことがなかったため、具体的なイメージが沸かなかった。はつきりとイメージできる若い男といえば……

ジュート……

半月前、ジュートに抱かれることを強制されそうになったとき、彼女は確かに、彼を受け入れてもいいような気がした。しかしそれは避ける方法が他になかったからそうなってもやむをえないと思ったのであって、積極的に望んだわけではない。

「でも、もし次に会ったとき彼に求められたら、あたしは……」

そこから先を考える勇氣は、彼女にはなかった。

ふとそのとき。

半月の間、記憶の彼方に忘れられていたその一言、もしかしたら彼女の運命を動かすことになるかもしれないその一言が彼女の頭をよぎったのである。

『それに俺は、おまえがヤグソフの異呪^{いじゆ}で異世界から召還された男だ、なんて思っちゃいない』

それはファクティム城からの去り際、ジュートの口から漏れ出た言葉だった。

マヤはすぐさま居間へ向かった。今や彼女の養父となったクルツ先生はこの時間、居間に佇んでことが多い。行ってみると、案の定、彼はそこにいた。疲れているのか、やや表情が硬かったが、話を聞いてくれる余裕がないほどではないように思えたので、マヤ

は用件を切り出すことにした。

「ねえ、お父さん、『ヤグソフの異呪』って何？」

養父バーン・クフルツは「ヤグソフとは、ハバリア帝国を陰で操っていると言われる怪僧の名前であり、異呪とは怪僧ヤグソフの使う、得体の知れぬ魔法のことだ」と応えた。

つまり話を総合するとこういうことになる。1・怪僧ヤグソフとやらは異呪を用いて何らかの理由で男を異世界から召還したらしい。2・国王陛下の勅命を帯びたジュートの口からその言葉を聞かされたということ、エラーニア王国の中枢部もそのことを察知しているらしい。そして、3・マヤはその異呪とやらで召還された可能性が高い。

養父は言った。「ということは、ハバリア帝国に行けば、マヤが異世界から飛ばされた原因を突き止めることができるかもしれない。しかしいまこのエラーニアとハバリアは戦争の真っ最中だ。そうではなくても閉鎖的といわれるハバリアに、マヤが侵入できる見込みは少ない」

マヤは訊き返した。「じゃあ、エラーニアのほうは？エラーニアの中枢に近づく方がまだ簡単なんじゃないの」

養父は「いずれにせよ容易なことではない」と応えたきり黙ってしまった。

マヤはもつと情報を引き出したかったがそれ以上は無理だと判断し、諦めた。と言うより、養父がやはり元気がないように見えたため、そちらのほうに心配になった。

「お父さん、何かあったの？あたし、お父さんの娘なのよ。心配事があるなら遠慮なく相談してよ」

マヤにそう言われて、養父は少しためらった後、一枚の書類を取り出してマヤに見せた。マヤは最近ようやく読めるようになったエラン文字を一つ一つ目で追っていた。

「召集……令状？」

養父は説明した。「アヴニ村を含めた近隣3か村のうちから誰か一人、戦場に赴^{おもむ}かなければならないことになっている。もうすぐ、騎士として出征していた隣村の男が帰ってくるようだ。代わりにこのアヴニ村からわたしが野戦医務要員として戦場に行かなければならない。これは順番で決まっていることなのだ」

「でもそうしたら誰がこの診療院を守るの？誰がアヴニ村の人たちの病気や怪我を治すの？」

「わたしもそれが心配だ。この近くの村には他に診療院はないからね。だが、決まりは決まりだ。従わなくてはならない」

「他の人と代わってもらわなければならないの？」

「誰が好きこのんで戦場に赴くだろう？それに、これはクフルツ家に割り当てられた義務なんだ。他家の者に代わってもらうことはできない」

いつの間にか、傍らにルーミアが立っていた。マヤたちの声を聞きつけて話に加わりに来たらしい。

「お父さん、戦場に赴くってどういうこと？」

開口一番ルーミアはそう言った。口振りからすると彼女も召集令状の話を知らなかったようである。

父はルーミアに、今し方マヤにしたのと同じ話をした。すると、戦嫌いくさいのルーミアは泣き出さんばかりの表情で父の出征に異を唱えた。父は、ルーミアがいくら反対したところで決まりなのだからどうしようもないと言って彼女をなだめた。それからしばらくの間、父娘は虚しく悲しい堂々巡りの議論を続けた。

しかしマヤは胸に期するものがあつた。それは現在、彼女が抱えている諸問題をいつべんに解決する可能性をはらんだ妙薬 あるいは劇薬 のようなものだった。たとえ今の平穏な生活に終止符が打たれることになるとしても、彼女は敢えてそれを飲み干す必要があつた。

「儀式」からちょうど半月後のその日、マヤは午前中からどこかへ出かけてしまった。ルーミアは「お姉ちゃん」が家事をさぼってまで出かけてしまったことを少し不審に思いながらも、白魔道師としての日常の仕事を淡々とこなしていった。

しかし昼食時「お姉ちゃん」がルーミアと父に打ち明けた話は、不審どころか、まさに青天の霹靂だった。

「あたし、さつきファクティム城に行つて竜騎兵隊への入隊手続きをしてきた」

ルーミアは驚くと同時に、とてつもなく腹を立てた。「お姉ちゃん、どうして！？あたしがあれだけ反対したのに！」

マヤは妹のその反応を折り込み済みだったので、動揺することもなく話を続けた。「よく聞いて、ルーミア。あたしは入隊に同意する代わりに一つの条件を出したの。それはあたしが入隊することでクフルツ家に割り当てられた出征義務を果たしたことにしてほしい、チャラにしてほしいっていうことなの」

今度は彼女の養父が驚きの声を上げた。「なんてことを！前にも言っただろう、おまえはわたしの娘なんだ。わたしは父として、おまえを危険な戦場へ行かせるわけにはいかんだ」

しかしマヤは引き下がらなかった。「あたしがもといた世界に帰るには少しでもヤグソフに近づかなければいけない。ここでじっとしていても始まらないわ。それにクフルツ先生……お父さんは優秀な白魔道師で、この村の人たちに必要とされてる。お父さんこそ戦場になんか行っちゃいけない」

父は表情に苦渋の色をにじませながら、しかし有効な反論を思いつくわけでもなく黙り込んでしまった。一方、ルーミアは完全にへそを曲げてしまい、ふくれっ面のままそっぽを向いた。

しばらく沈黙が続いた。

それは重苦しい沈黙だった。しかし、マヤにとっては自分が前進するために乗り越えなければならぬ障害の一つなのである。彼女

は敢然と胸を張り、前を見据えて自分の決意が固いことを示した。
ところが。

沈黙を破ったのは意外にも、マヤでもルーミアでも父でもなく、
空から聞こえてくる低いうなり声のような音だった。

「竜の飛ぶ音……？」

マヤはそう呟いた。彼女を始めルーミアも父もだんだん大きくなりつつあるその音に、ただならぬ気配を感じていた。アヴ二村の近辺では、たまに野生の竜が飛び回ることもあるし、荷物を運ぶ運送竜が悪天候を避けてこの上空を飛ぶこともあるが、いずれにせよ単独かせいぜい2匹編隊に過ぎない。しかし、今聞こえてくる音は……

「これは……少なくとも5匹以上の編隊だわ！」

叫ぶや否や、マヤは居間から玄関を経て家の外へ飛び出し、空を見上げた。推測通り、5匹の竜が悠々と旋回している姿が目に入った。

彼女はすぐさまマキナスの森へと走った。理由はわからなかったが、あの5匹の竜は良い目的でここに来たわけではないような気がしたからである。

泉のほとりに辿り着いたとき、彼女の目に予想外の光景が飛び込んできた。森のずっと奥を住処としているピムが、彼女が来るのが最初からわかっていたかのように、人里に近いこんなところまで出てきていたのである。もしかしたらピムもあの5匹の竜に何か良からぬものを感じ取っていたのかもしれない。

マヤは驚く間も惜しんで素早くピムの背に飛び乗り、「上昇っ！」と命じた。たちまちマキナスの森は眼下に広がる箱庭となる。もつとも彼女がいま目を向けなければならぬのは下の景色ではなく上空である。

上空を漂っていた竜たちは、ピムが上昇してきたのに気づき、そのうち3匹がピムを取り囲むように体を寄せてきた。見ると、竜たちはいずれも胴体と翼の一部、それと頭部全体を鉄の板で覆っている。いままで何度か話には聞いていた装甲竜に違いなかった。

その背にまたがる女たちはみな黒っぽい衣装を身につけていた。しかしマヤの前方に立ちはだかった竜だけは、薄緑色の派手な衣装に身を包んだ竜騎兵に操られていた。雰囲気からして彼女がこの編隊の隊長らしい。

彼女は鷹のような鋭い目つきでマヤを睨み付け

「おまえは何者だ？」

と声を張り上げた。その発音には少し訛りがあったが、声のトーンから判断する限り、マヤとそれほど歳の変わらない少女ではないかと思われた。

マヤは憶することなく「人に名前を尋ねるときはまず自分から名乗りなさい！」と言い返した。

「これは失礼」少女は不敵な笑みを浮かべながら応えた。「我はヤグソフ四姉妹の末妹、ニーナ。あるお方をお迎えするために、ハバリア帝国の帝都ドウムホルクからわざわざこんな田舎にまで出向い

てきた。エラーニアのへなちょこ防空網を突破してな」

「ヤグソフ……ですって!？」

「見たところおまえは東洋人のようだが、あいにく我らが探しているのはおまえのような女ではなく、男の東洋人だ。おまえになど用はない。引っ込め」

「このアヴニ村には男の東洋人なんていないわ!帰って!」

「ほう、我らにたてつくというのか。しかし我らは、男の東洋人がこの近辺に降り立ったという確かな情報を握っている。隠し立てしても無駄なことだ」

「知らないものは知らない!」

「そうか。では誰かが本当の話をしてくれるまで忍耐強く待つとしよう。それまでに何軒の家が燃えることになるのかな」

ニーナと名乗ったその少女が竜騎兵の一人に目配せすると、その竜騎兵は高度を下げ、火矢の付いた弓をアヴニ村の民家に向けて構えた。脅しではなく、今にも本当に火矢を放ってしまいそうに見えた。

マヤは「ピム、下降!」と叫んだ。するとピムは、火矢を構える竜騎兵めがけて弾丸のごとく一直線に下降してゆき、マヤの「体当たり!」の声と共に相手の装甲竜の横っ腹、装甲の薄い部分に自らの体をぶつけた。予想外のダメージを受けた装甲竜は制御不能となり、苦しそうにうめきながら高空へ逃亡してしまった。

ルーミアは家の前で父と共に、ピムが5匹もの装甲竜相手に互角の空中戦を演ずるさまを眺めた。他の村人たちは、先ほど火矢で家を狙われたことから上空の竜騎兵が招かれざる客であることを悟り、森への避難に大わらわだった。しかしルーミアと父だけは逃げようとしなかった。マヤが負ける気がしなかったからである。

それから30分後のアヴ二村上空の光景は、ルーミアたちの予想した通りのものだった。4匹の装甲竜はすでに撤退したか戦闘不能に陥っており、ニーナ隊長を乗せた一匹も、その場に踏みとどまっていたものの、翼から血を流していた。

「おのれ」ニーナは悔しさに顔を引きつらせた。「おまえごときにしてやられるとは、何たる不覚。だが覚えておれ、今度会ったときは今日のようにはゆかぬぞ」

彼女はその言葉をマヤに言い捨てると、ハバリア語と思われる単語を叫んで竜に向きを変えさせ、北の方向へ去っていった。

3日後、竜騎兵隊への入隊のためにマヤがアヴ二村を去る日が来た。

村人全員が彼女を見送るために広場に集まってきた。中には涙を流して別れを惜しむ者もいた。もちろん養父バーン・クフルツの姿もその中にあった。彼は3日前の空中戦の後、すぐにマヤの決心に理解を示したのだった。

しかしルーミアの姿はなかった。彼女はあれ以来ずっと口を聞いてくれない。この世界で一番理解し合えると思っていた義妹とこんな形で別れることになるのは、マヤにとって身を切られるほどつらいことだった。

別れ際、養父は「この世界では、この村がおまえの故郷だ。クフルツ診療院がおまえの帰るべき家なのだ。帰りたくなったらいつでも帰ってこい」という言葉をマヤにたむけた。

マヤは今一度村人たちにほうを振り返って別れを告げた後、アヴ二村を後にした。

ファクティムにはピムも同行することになっている。竜騎兵の乗る竜は通常、竜騎兵隊側で用意してくれるのだが、竜を飼い慣らしている者は自分の竜に乗ってきてても構わないのである。マヤは出発前にあらかじめピムをマキナスの森の泉のあたりに待機させておいた。

ところが、彼女が泉のほとりにまで来てみると、そこにはピムの他に二人に人物が待ちかまえていた。

「お姉ちゃん」

そのうちの一人はルーミアだった。彼女は嬉しそうに微笑みながら

「見て、これはあたしからのプレゼント」

と言ってピムの頭を指さした。

ピムはその頭に赤い帽子のようなものをかぶっていた。よく見る

と、それは帽子ではなく、頭部を覆う鉄の装甲だったのである。

そこで、ルーミアの傍らにいたもう一人の人物も口を開いた。「
いやあ、大変じゃったわい」

マヤはその人物が誰なのかようやく思い出した。彼は確か、鍛冶屋をやっているお爺さんだったはず。

彼はマイペースで話し続けた。「ルーミアが3日前いきなりウチを訪ねてきたんじゃ。竜の墜落現場から集めたあの鉄板を加工して竜の装甲を作ってくれ、なんて言われたときはどうしようかと思っ
たわい」

ルーミアが彼の言葉を補足した。「残念だわ。やっぱり3日では短すぎた。お爺さんにだいぶ無理してもらったんだけど、それでも頭の部分しか完成しなかった」

「ルーミア……」

マヤは感激のあまり言葉に詰まった。あの装甲は彼女が山矢健太だったとき乗っていた複葉機の破片でできている。彼女がいつまでも愛機と一緒にいられるようにとの、ルーミアの心配りだったのである。

「ありがとう、ルーミア。あの装甲をあなただと思っていつまでも大切にするわ」

彼女はそう言って「妹」の手を取り、別れを惜しんだ。

しかしルーミアは「姉」のその言葉を聞いて、おかしいことを言

いだしたのだった。

「装甲だけ？あたしは大切にしてくれないの？」

マヤは意味がよくわからなかったので、怪訝そうな表情でルーミアの顔を見返した。するとルーミアはいたずらっぽい笑みを浮かべ、そそくさとピムの背中に乗り込んでしまった。

なおも納得できないマヤはピムのそばまで歩み寄り、そのいたずらな妹に

「どういうこと？」

と尋ねた。

ルーミアは答えた。「3日前、お姉ちゃんはお父さんに言っただよね、『お父さんは優秀な白魔道師で、この村の人たちに必要とされてる』って。あたし考えたの。あたしは誰に必要とされているんだろうって。あたしは女性白魔道師だから魂を再生するほかは、せいぜい怪我の応急処置ぐらいしかできない。魂の再生って言うても本来の寿命が延ばせるわけじゃない。不慮の事故や病気で死にかかっている人の魂を呼び戻すことができるだけ。アヴニ村では不慮の事故なんて滅多に起こらないし、起こったとしても女性白魔道師はあたしの他にもいる。だからあたしはあたしを必要としてくれる人がたくさんいる場所　戦場へお姉ちゃんと一緒に行く決心をしたの。出征する騎士や竜騎兵には従者が一人ついていってもよいことになってるから」

「でも……ルーミアは戦が嫌いだったんじゃないの？」

「あたしは白魔道師としての仕事に誇りと責任を持っているつもり。自分の好き嫌いを優先させようとしたのは間違いだったわ」

「お父さん……クフルツ先生はこのことを知ってるの？」

「さっき言った。反対してたけど、お父さんはあたしのことがわかってくれてると思う」

「そう……」

マヤはもう一度妹の目を見つめた。彼女の決心は固そうだ。それに自分自身も反対を押し切った手前、ルーミアに強く言うのは気が引けた。

「じゃ、一緒に行こ」

彼女はそう言ってピムの背中に飛び乗り、首の根元にまたがった。ルーミアもその後ろに腰を下ろし、しっかりと姉の体につかまって飛び立つ際の衝撃に備えた。

マヤは鍛冶屋のお爺さんに「ありがとう、お爺さん。さようなら」と声をかけてから、ピムに上昇を命じた。

ピムは翼を大きく広げ、ゆっくりと、しかし力強く大空へと舞い上がった。その日の空は雲一つない快晴だった。

6 ファクティム

妹ルーミアと共にファクティムにやってきたマヤ・クフルツが、一人前の竜騎兵なるまでには、いくつかの「試練」を乗り越える必要があった。

実際のところ、マヤは山矢健太だったとき一介の高校生でしかなかったわけだし、また、竜騎兵への入隊も、竜の操縦テクニックが生かせそうだという安易な動機と、何となくヤグソフとやりに近づけそうだという漠然とした目的があったからに過ぎない。しかし言うまでもなく、彼女はこれから軍隊に入隊しようとしているのである。アクロバット飛行競技選手だったころは、飛行テクニックを磨きさえすればコーチや周りの人間が「ちやほや」してくれた、という面がないではなかった。そのうえ、彼女はそれまでアルバイトすらやったことがなかった。やや大袈裟な言い方かもしれないが、彼女の前には竜騎兵以前に、軍隊以前に、「世間」という壁が立ちただかったのだった。それが彼女にとっての第一の試練だった。

上空からファクティム城を見下ろすと、城壁の内側にただっ広い空き地のような場所があった。マヤはそれがいわば「竜のためのヘリポート」なのだろうと判断し、ピムをそこへ降下させた（後で聞いたことだが、そのような場所のことをこの世界では単に飛行場と言うらしい）。すぐさま背の低い、恐ろしく無愛想な中年男がやってきて、竜を待機させておくスペース 駐竜場 を指さし、ピムを移動するよう命じた。マヤは言われた通りにした後、これから自分はどこへゆけばよいのかとその男に尋ねた。ところが男はあからさまに面倒臭そうな顔をして城の建物の入口を顎で指し示しただけだった。マヤとルーミアは小声で礼を述べてから、不安をうち消し合うようにぴたりとお互いの肩を寄せて入口のほうへ歩いてい

った。

入口の前に立つ兵士には入口横の詰め所へ行くよう言われ、詰め所では文官と思しき男に入隊書類の提出を求められた。書類を提出した後、今度は椅子以外何もない個室に案内され、しばらく待つよう言われた。一時間近く経ってからやっと、これまた愛想のない中年の女官が現れた。彼女は自分の仕事の忙しさについてぶつぶつと不平をこぼしながら、二人を城のずっと奥のほうにある部屋へ連れてきた。部屋は二段ベッドが一つ置かれただけの粗末な二人部屋だった。女官は「この部屋があんたたちの部屋だ」と言って、しかも面のまま足早に去っていた。

マヤは不安で一杯の胸をおさえながらルーミアと顔を見合わせた。するとルーミアはちよつと苦笑いをして肩をすくめて見せた。「世間」ってこんなものよ。マヤは妹のその仕草がそんな意味合いを帯びているような気がした。ルーミアはすでに白魔道師として働いているのだから、たとえ年下でも、社会人としてはマヤより先輩ということになる。マヤはようやく、自分はクラブ活動のためにここに来たわけではないのだということを思い知った。

第二の試練　それを試練と呼ぶべきかどうかは別として　はそのあとすぐに訪れた。先ほどの女官が一抱えほどの大きさの箱を持って戻ってきて、「これからすぐに入隊式がある。この箱の中に制服が一着入っているからそれに着替えて中庭へ向かえ」と言ったのである。

マヤは息つく暇さえない慌ただしさを嘆きながらも、受け取った箱を開き、中に入っている服を広げてみた。

「これが制服……」

彼女はしばし絶句した。それは確かに、軍人が公式の場で着るような制服だった。かつてアメリカに住んでいたとき、ニユースや、軍隊を舞台にした映画の中で何度も見たことがある。問題なのはその制服のうち、上半身に着るブレザーの腰の部分がくびれていることと、下半身に穿くものは二股に分かれていない　つまりズボンではない　ということだった。そう、それはれっきとした女物の制服だったのである。当然と言えば当然なのだが。

とはいえ、いつまでも絶句しているわけにはいかなかった。何事も初めが肝心、入隊式に遅刻するなどもつてのほかである。女官が「サイズは大丈夫そうだね」と言って部屋を出て行った後、マヤは意を決してその制服を身につけ始めた。

ルーミアの手助けもあつて、予想外に手際よく身につけることができたことはできたのだが、いかんせんマヤはスカートを穿き慣れていない。ましてやそれは、以前一度だけ着てみたワンピースと違い、丈が膝上までしかないタイトスカートなのである。そのうえ靴までパンプスとくれば、マヤにしてみれば、わざと自分を歩きにくくさせて面白がっているのではないか、などと思ってみたくもなる。

幸いにして、靴のヒールはそれほど高くなかった。マヤはルーミアに支えられながら部屋を出、足取りを確かめるように一歩一歩、廊下を踏みしめた。タイトスカートに邪魔をされて今までのように大股には歩けなかったものの、歩いているうちに、一歩を小さく取り足を素早く動かして歩くというコツを、すぐにつかむことができた。実際、それまでのマヤは、肉体や言葉遣いの女っぽさとは対照的に、仕草や振舞いはお世辞にも女性的とは言えなかった。しかしいまタイトスカートとパンプスをはいて小股に歩くマヤは、ルーミアが見る限り、ごく普通の、女性らしい女性だった。ちなみにルー

ミアには制服は与えられなかった。彼女はマヤの従者としてファクティムに來たに過ぎないのだから、正規の兵士と異なる扱いを受けるのはやむをえないことだった。

二人は廊下で人と出会うたびに道案内を乞いつつ、二十分もの時間を費やして、やつとの思いで中庭に辿り着いた。そこに待ち受けていた第三の試練は、マヤも今までに何度か経験したことのある、比較的ありふれた試練　すなわち人間関係　だった。

意外にも、中庭には数名の人間がたたずんでいるだけだった。「入隊式」と聞いて学校の入学式のような規模を想像していたマヤは、拍子抜けすると同時に、心の中にわだかまっていた不安感が少し薄らぐのを覚えた。

中庭の中央に突っ立っていた三名はマヤと同じ制服を着た女性だった。一人は背が高くて肌の浅黒い女、一人は色白でほっそりした女、もう一人はやや背の低い女だった。マヤは彼女たちに見覚えがあった。なぜなら彼女たちは、半月前、マヤがファクティム城から脱出した際にピムを追いかけてきた竜騎兵たちだったからである。一時的にせよ敵だった者たちを同僚としなければならぬとは皮肉なものだが、マヤは意を決して彼女たちのほうへ歩み寄り、できるだけ愛想の良い笑顔で話しかけようとした。

しかし、マヤが近づいてくるのに気づいた途端、竜騎兵たちのうちの一人、背の高い女がいきなり

「整列せよーっ！」

と叫んだのだった。ハスキーだがとてもよく通る声だった。

すると、色白の女と背の低い女がマヤのほうを向いて横一列に並び、直立不動の姿勢をとった。一方、いま叫んだ背の高い女はマヤに背を向け、並んだ二名の前に立ってこれまた直立のまま微動だにしなくなった。

突然のことだったので、マヤは驚きのあまり足を止めてしまった。マヤに背を向けている女は、目が後ろについているかのように、振り向くことなくマヤの様子を察知し

「見習い竜騎兵マヤ・クフルツ。直ちに整列せよ」

と言った。今度は静かな口調だった。

マヤは不安で不安で仕方なかったが、取り敢えず言われたとおり、すでに並んでいる二名の横に立って「気をつけ」をした。

「入隊式」はまず隊長　状況から判断して背の高い女が隊長であることは間違いなさそうだった　に対する敬礼が始まった。次に隊長が、本日付けで新たな隊員が着任する旨を、たった二人、マヤを含めても三人しかいない隊員たちに報告した。続いて隊長は新入隊員マヤに自己紹介を命じてきた。マヤはぎこちなく簡単な自己紹介をしたが、隊員たちはみな、とても無愛想だった。

マヤは不安の極致に達していた。もしかしたら東洋人の自分はまだ歓迎されていないのだろうかと思った。それともこの間、ピムに撃墜されたことを恨んでいるのだろうか。中庭の隅で入隊式の様子を見守っているルーミアのほうに目をやると、彼女も心配そうにこちらを見つめている。マヤは、安易に軍隊への入隊を決めてしまったことを、すでに後悔し始めていた。

隊長は最後に「以上で入隊式を終わる」と言った。マヤはその場に居づらかったので、とにかくルーミアのもとへ向かうことにした。彼女なら自分のこの不安を少しでも和らげてくれるだろうと思ったからである。

ところが。

マヤが足を一步踏み出そうとした途端、三人の竜騎兵たちは声を上げて笑い出した。マヤは自分が何かとんでもない間違いを犯したような気がして、不安げな表情で彼女たちの顔色をうかがった。

するとだしぬけに、隊長が馴れ馴れしくマヤの肩を抱きしめ

「いやあ、すまんすまん」

と言ったのだった。

「新入隊員をこうやって『歓迎』するのがこのファクティム竜騎兵隊のしきたりなんだよ」

「びつくりした？」背の低い竜騎兵が言葉を続けた。「あたしも二年前に入隊したときは不安で不安で泣きそうになったわ」

「心配しなくても大丈夫ですわよ」色白でほっそりした竜騎兵が言い足した。「わたくしたち歳は離れておりますけど、いつも友達みたいに和気あいあいとやっておりますから」

再び隊長が言った。「軍隊って言っても、竜を自由に操れる能力を持った女なんてそうたくさんはいないから、それなりに戦果さえ挙げていれば、軍のお偉いさんたちも、あたしたちに規律だとか秩

序だとかそんなものを求めたりはしないのさ。気楽なもんだぜ」

マヤはそこでようやく笑顔を取り戻すことができた。

隊長はマヤの笑顔を確認すると

「あたしはラウラ・アガリカ。ラウラって呼べよ。『隊長』なんて堅っ苦しい呼び方で呼びやがったら承知しねえからな」

と自己紹介し、ガハガハ笑いながらマヤの体をぎゅうぎゅう抱きしめた。彼女はたぶんマヤより十才は年上だろう。姉御肌という言葉がぴったりの女性だった。

次に背の低い女が「あたしはサーラ・フィングステンよ」と、あどけない笑顔で言った。よく見ると彼女は、マヤよりも二つほど年下と思しき、幼い顔立ちをした少女だった。

続いて色白の女が「わたくしはオクタヴィ・アドレアーヌと申します」と言つて、こちらは上品で清楚な微笑みをたたえた。口調がおっとりしていたため彼女が何歳ぐらいなのかわかりづらかったが、おそらく二十才前後だろうと思われた。

「さて」隊長は大きな手でマヤの背中をどんと叩き、言った。「こんなしゃっちょこばった制服なんかとつと脱いじまって、早いとこ飛行服に着替えようぜ。着替え終わったらすぐに飛行訓練だ。この間、あたしたちプロの竜騎兵を撃墜したあの飛行テクニク、さっそく見せてくれよ」

それから一週間、マヤは毎日、竜騎兵としての訓練に明け暮れた。

彼女の飛行技術が他の隊員と比べてもずば抜けているのは確かだったが、彼女の乗る竜が軍隊の一部として機能するには、やはり習得しなければならぬことがいくつもあった。城から上がる狼煙のろしの意味、同僚の竜騎兵が竜の体を使って送る合図の意味、編隊の基本的な陣形、所属不明の竜が飛行している場合どう扱うか、などなど。またラウラ隊長は、マヤに弓や剣術の訓練も課した。竜騎兵は竜を武器として使うだけでなく、自分自身が武器を持って戦わなければならないときもあるのだという。お陰でマヤは朝起きてから夜寝るまでほとんど休む間もなかった。

もつとも、それは彼女も覚悟の上だったので、辛くて耐えられな
いと思うようなことはなかった。むしろ彼女を悩ませたのは、竜で
飛行する時に必ず着用することになっている飛行服だった。なぜな
ら飛行服は、いわゆる全身レオタードのように、布が体にぴったり
張り付くデザインだったからである。最初のうち、男性兵士たちが
すれ違いざまに彼女の体のラインをなめまわすように見つめるた
びに、彼女はそれこそ顔から火が出そうなほど恥ずかしい思いをした
のだった。とは言え、空中で余分な布が風の抵抗を受けないとい
う意味では、確かに飛行するのに最も適したデザインではあった。

一方、ルーミアはあまりやることがなかった。実戦に出ない限り、
彼女の白魔法が威力を発揮することはないのだから無理からぬこと
ではあった。彼女は仕方なく、マヤの身の回りの世話をしたりして
過ごした。たまには魔法で他の竜騎兵や城に勤務する者たちの軽い
怪我や病気を治療してあげたりすることもあった。

マヤはどの隊員ともうまくつきあっていたが、一番仲良くなれたのは、サーラという名の背の低い竜騎兵だった。彼女に親しみを覚えたのは、やはり彼女がまだ十四才ということで、歳が比較的近かったからであろう。彼女は毎夜、マヤにとって唯一の自由時間と言える就寝直前の時刻に、マヤの部屋におしゃべりをしに来た。そうしているうちに、サーラはマヤだけではなくルーミアとも仲が良くなった。ルーミアも彼女を妹のように可愛がった。

サーラはおしゃべりが大好きな娘だった。本当にいろいろな話をしてくれた。いまエラーニア王国はハバリア帝国竜騎兵隊に制空権を奪われており窮地に立たされている、といった軍事情勢から、自分は今すぐ二年間の出征義務を終え故郷に帰ることができる、故郷で自分を待っている彼氏と再会できるのが楽しみだ、といったプライベートなことまで、ざつくばらんに話した。

「ねえ、マヤ、ルーミア。あなたたちにも彼氏はいらっしゃいますか？彼氏とはどこまで進んでいるの？あたしの彼なんか、出征前、キスしかしてくれなかったのよ」

マヤとルーミアはびっくりして異口同音に「それって二年前の話でしょ？」と訊き返した。

「ええ、そうよ。十二才の時の話」

それを聞いて、マヤは相良美玖との関係を、ルーミアはジュートの関係を思い起こし、自分がいかに奥手だったかを反省するはめになった。

マヤにとっての次なる試練は「予兆」と「本番」という二つの部分から成り立っていた。その「予兆」が訪れたのは、入隊してから

一週間後の朝のことだった。

いつものようにマヤが訓練のために「飛行場」に顔を出すと、そこには背の高いラウラ隊長と背の低いサーラの姿はあったが、もう一人、色白でほっそりしたオクタヴィという隊員が来ていなかった。

折り目正しく几帳面な性格の彼女が単に寝坊して遅刻するとは思えなかったので、マヤはサーラに

「オクタヴィはどうしたの？」

と尋ねた。

するとサーラは珍しくぶっきらぼうに

「たぶん女の子の日」

と答えた。

そのアウスグ語の意味が全く分からなかったマヤは、しばらく考えた後、サーラにその意味を訊き返そうとした。ところが、その日たまたまマヤと一緒に飛行場に来ていたルーミアが、慌ててマヤとサーラの間に割り込んだ。マヤはますます訳がわからなくなってしまうたが、ちょうどそのときラウラ隊長の「訓練を始めるぞ」という声がしたため、ルーミアにもサーラにも説明を求めることはできなかった。

ルーミアのその行動の意味が理解できたのは、その日の夜だった。おしゃべりに来ていたサーラがマヤたちの部屋を去った後、ベッドに潜り込もうとしたマヤをルーミアが、話があると言って呼び止め

たのである。

「お姉ちゃん、最近、体の調子がどこおかしい、なんてことはない？ 特にお腹のあたりとか……」

マヤはそう言われてやっと、かつて学校の保健の授業で習った、女性特有の現象のことを思い出した。

ルーミアは、マヤは生理についての漠然とした知識を持っているようだ と判断し、敢えてやや医学的な側面から説明してあげることにした。

「月経周期は普通、二十八日から三十五日ぐらい、そして周期の長い短いに関係なく、次回月経開始予定日の約二週前に排卵があるの。つまり月経周期が長い人は月経開始日から次の排卵までの期間が長く、短い人はその逆ってことになるわけね。もちろん女の体は機械じゃないから、周期が長くなったり短くなったりすることもあるわ。」

それと、何か重要なことが予定されている日と月経日が重ならないように魔法である程度遅らせることはできる。もっともあまりやりすぎると体に良くないけど。」

でね、お姉ちゃんは不動の術を解かれてからそろそろ一ヶ月経つでしょ？ 男の魂から女の体を再生したお姉ちゃんのような場合どうなるのかよくわからないけど……いろいろと精神的なストレスもあったから多少遅れても不思議はないと思う」

マヤはその話を聞いてやるせない気持ちになった。とはいえ、それは女である以上避けることのできない運命なのである。ルーミアだってサーラだってオクタヴィだって、おそらくラウラ隊長だって

みんな経験していることなのである。マヤは覚悟を決め、すでに何回も経験しているであろう妹に、実際にそれが起こった場合どうすればよいのか尋ねた。するとルーミアは生理用ナプキンの使い方を懇切丁寧に教えてくれた。もちろんこの世界では吸水性ポリマーなどという化学物質の合成方法は発見されていない。ナプキンは当然、布製であり、それを煮沸消毒^{しゃぶつ}して何度も使うのだという。

その次の試練は、先ほどの試練の「本番」と渾然一体となって現れた。マヤがファクティムに着任してからちょうど二週間後に訪れたその試練は、彼女の人生の中で最も重苦しい記憶の一つとして残ることになる、重大な試練だった。

それまでの間、マヤたちファクティム竜騎兵隊は相変わらず訓練の毎日だった。そもそもこの竜騎兵隊は前線から遠く離れたところに駐留する、いわば予備部隊に過ぎない。いくらエラーニアの防空網が弱体化して穴だらけだと言っても、こんな南の地方にまで敵の竜騎兵が飛んでくることはさすがに困難だし、またそんな危険を冒すメリットも通常はなかったのである。

「もつとも」ラウラ隊長は言った。「またヤグソフ四姉妹のニーナがこの間のように防空網を突破してくる可能性はあるな」

彼女をはじめ竜騎兵隊の面々は、先日、ニーナたちがアヴニ村上空に來襲した際、自分たちが駆けつける前に、当時民間人だったマヤが撃退してしまったことも、ニーナたちの目的が男の竜騎兵を見つけることだったということも、マヤからの報告を受けて知ってい

た。しかしラウラ隊長にも他の竜騎兵隊員にも、マヤが一番知りた
いと思っていること　　二ーナたちが男の竜騎兵を見つけてどうす
るつもりなのか　　はわからないらしかった。

「試練」が訪れることになるその日の朝、ラウラ隊長は訓練の開
始時刻に飛行服姿ではなく、ゆったりとしたズボンをはいて飛行場
に現れた。マヤはもうその理由を誰かに尋ねたりはしなかった。全
身レオタードのようなあの飛行服の下にナプキンを付けるのは無理
がある。仮にできたとしても、激しく体を動かさなければならぬ
飛行訓練に参加するのは困難だろう。

案の定、隊長はその日の訓練では竜に乗らず、地上から指示を与
えるだけだった。

空中で、サーラは自分の竜を、マヤの操るピムに寄せ

「なんか訓練に身が入らないわね」

と言って苦笑した。

隊長みずからが陣頭で指揮を執ると執らないのでは、士気に
差が生じるのもやむをえない、とマヤは思った。

「ラウラあつてのファクティム竜騎兵隊だもんね」

マヤがそう応えると、オクタヴィも竜を近づけてきて冗談交じりに

「これが実戦でなく訓練でよかったですわね。もしいま敵が攻めて
きたりしたら、なんて思うとぞっとしますわ」

と言った。

ところが、オクタヴィのその悲観的な推測は見事に現実のものになってしまったのである。

「所属不明の竜の編隊を発見！」

物見の塔の頂上で上空を監視していた兵の叫び声と共に、ファクティム城に臨戦態勢がしかれ、ただちに竜騎兵隊にスクランブル指令が下された。

このような非常事態においては、たとえ生理中であってもラウラ隊長が指揮を執らねばならないのだが、そのとき彼女はたまたま飛行場にいなかった。自室のトイレかどこかでナプキンを換えているのかもしれない。そこで竜騎兵隊の指揮は一時的に年長のオクタヴィの手に委ねられることになった。

「いきますわよ」

彼女のかけ声を合図に、ファクティム竜騎兵隊は、所属不明の竜の編隊が発見されたという東の方向へと飛び立った。

ファクティム東方の上空を漂っていたのは、七匹からなる編隊だった。マヤはすぐ、それらの竜が、先日アヴニ村上空で接触した竜と同じ装甲を身にまとっていることに気づいた。操縦する竜騎兵たちもそのときと同じ飛行服を着ている。しかも編隊の指揮官と思しき人物もまた、先日と同様、薄緑色の派手な飛行服に身を包んでいた。ヤグソフ四姉妹の末妹、少女竜騎兵二ーナに間違いなかった。

前回と違っていたのは、マヤが近づいてくるのを察知しても、相

手の竜騎兵たちはわざわざ包囲して身分を確かめたりはしなかった、という点である。つまり、いきなり攻撃態勢をとったのだった。今回、マヤの乗るピムはエラーニア王国軍の紋章を首に付けている。しかも同じ紋章を付けた竜を二匹従えている。相手から見ればマヤたちが敵国エラーニアの正規軍であることは一目瞭然だったのである。

空中戦が始まった。とはいえ相手は精鋭装甲竜騎兵、こちらは実戦の機会の少ない予備部隊、数的にも半分以下で、おまけに隊長不在。これでは最初から勝負にならなかった。

臨時指揮官オクタヴィはすぐさま撤退を指示した。こちらは装甲を付けていないぶん身軽なので逃げ切れると踏んだのである。しかし相手の竜たちは重い装甲を背負っているとは思えない速度でマヤたちの編隊に追いつき、一番後方を飛んでいたサーラの乗る竜にいつせいに襲いかかったのだった。

「サーラ！」

マヤは叫び声をあげながら、直ちにピムの体を、サーラの竜に取り付こうとしている敵の竜にぶつけた。ダメージこそ与えられなかったが、サーラを危機から救うのには十分だった。

「ありがとう、マヤ」

サーラは竜の背中でそう叫び、小さく手を振った。

その後もピムは健闘した。敵の放った矢が一本、体に突き刺さったのにもかかわらず、マヤの制御を失わなかったばかりか、敵の竜三匹にダメージを与え、うち二匹を戦闘不能に陥らせた。マヤの活

躍に勇気づけられて、サーラとオクタヴィも反撃に転じ、マヤがダメージを与えた一匹を戦闘不能にまで至らしめるといふ戦果を挙げた。

いまファクティム城からラウラ隊長の竜が遅ればせながら飛び立つのが見えた。これで四対四の互角となる。マヤたちは逃亡をやめて竜の向きを変えた。

相手の装甲竜たちはそれでもひるむことなくマヤたちの前に立ちはだった。ニーナに至ってはマヤに話しかけるほどの余裕を見せた。

「おまえは、この間アヴ二村上空で我らと戦った女だな。竜騎兵隊に入っていたとはな」

マヤは彼女を睨み付け

「あなたたち、また男の竜騎兵を捜しているのね。男の竜騎兵を見つけて一体どうするつもりなの!？」

と声を張り上げた。

ニーナは応えた。「敵であるおまえにそんなことを喋ってしまうほど我はお人好しではない。が、今日のところはひきあげることしよう。戦力を失いすぎた。もっとも……」彼女はそこで不敵な笑みを浮かべ、部下の竜騎兵たちに目配せをした。「手ぶらで帰るわけにも行かないので、一つだけ戦果を挙げさせていただく」

その言葉が終わるか終わらないうちに、敵の装甲竜たちはいっせいに散開した。

「しまった！」

マヤがそう思ったときにはもう遅かった。一旦散開した四匹の装甲竜たちはあつという間にサーラの乗った竜を上下左右から取り囲み、同時に攻撃を加えたのだった。

「きゃーっ！」

サーラの口から金属を切り裂いたような声があがった。

その次の瞬間の光景は、マヤの目にはスローモーションのように映った。敵の竜のふるった尻尾がサーラを直撃する。彼女は気を失い、空中に投げ出される。そしてダメージを受けた彼女の竜もろとも、彼女の体は重力に任せて落下を始める

「サーラ！」

マヤは叫び声をあげたがその声はサーラに届かなかった。

すぐさまピムに、落下するサーラの体を追いかけるよう命じた。とはいえピムにはジェットエンジンがついているわけではない。自由落下以上の速度が出るはずないのである。マヤの視界の中でサーラの体はどんどん小さくなってゆき、やがてファクティム城近くの森の中へと消えた。

そのときには、すでにニーナたちは北の空へ飛び去っており、またラウラ隊長の乗った竜もマヤたちのいた空域に到達していたが、マヤはそんなことには目もくれず、ピムにファクティム城へ帰還するよう命じた。そしてピムから飛び降りるや否や、自室にたたずむ

ルーミアのもとを訪れ、乱暴にその手を引いてファクティムの城門を出、森へ向かい、サーラの落下地点まで彼女を連れてきた。マヤに命じられるまま、ルーミアは冷たくなったサーラの体の前で再生の術の呪文を唱えた。だが彼女の魂はすでにこの世になかった。

マヤはその場であつくりと膝をついた。悲しいのになぜか涙は出なかった。

その日の昼以降、マヤは自室に閉じこもった。サーラの死にショックを受けたのはもちろんだが、それに追い打ちをかけるように、彼女にとって初めての生理が始まったからである。夜、ルーミアは再生の術で魔力を使いすぎたためいつもより早くベッドに入ってしまった。マヤは同僚を失った心の痛みと生理による下腹部の痛み、その両方に、たった一人で耐えなければならなかった。

マヤが竜騎兵として一人前になるために乗り越えなければならなかった最後の試練、それは先ほどの試練と密接な関連があった。いや、マヤ自身が関連づけた、と言ってもよいかもしれない。

ファクティムに来てから一ヶ月が経っていた。マヤはその日、正式に「竜騎兵」としての辞令を受けた。それまでの「見習い竜騎兵」という身分から昇進したのである。もちろん通常は一ヶ月で正規隊員になるなどということはできない。彼女の飛行技術が桁外れだったことに加え、慢性的な竜騎兵不足を補うための戦時特例措置による、例外的な昇進であつた。

エラン文字で書かれた辞令交付書を見つめているうちに、マヤは心がちくちくと痛むのを感じ始めた。本来なら自分が正規の竜騎兵に昇進するのに入れ替えに、サーラが出征義務を解かれ、故郷に帰ることができたのである。その心の痛みは悲しみによる痛みであったが、同時に、同僚を救えなかったことに対する自責の痛みでもあり、同僚を死に追いやった敵に対する、張り裂けそうな憎悪の痛みでもあった。

日々の生活は、相変わらず飛行訓練の繰り返しだった。暇を持て余したルーミアは、二日間だけだったが、アヴ二村に帰省した。ファクティムからアヴ二村までは馬なら六時間、歩いても十二時間ほどの距離ではない。彼女がマヤへの土産話を持って嬉しそうにファクティムに帰って来たのを見ると、マヤも養父が恋しくなった。アヴ二村へはピムにのってゆけばわずか三十分しかからない。竜騎兵としての仕事に慣れたらそのうち休みを取って自分も一度帰省しよう、などと考え始めた。

そんなある日、またも所属不明の竜の編隊が、ファクティム城を中心とするアウスгент地方上空に姿を見せた、という報告が入った。

当然の如く、ファクティム竜騎兵隊にスクランブル命令が下った。今回はラウラ隊長もオクタヴィ隊員もいつでも出撃できる体勢にあった。

「出撃！」

隊長の号令一下、三匹の竜は大空へと舞い上がった。

頬をなでる風が冷たかった。季節は初秋から中秋へと向かおうと

している。マヤはこちらの世界に来て初めて、季節の移り変わりを意識した。エラーニア王国は緯度の高い地域に位置し、しかもこのアウスゲント地方が高原になっているため、夏の間、さほど暑くなかったのである。もちろん、女になってしまったり竜騎兵隊に入隊したりと、矢継ぎ早にいろいろな事件が起こったため季節など感じている暇がなかった、というのが一番大きな理由ではあった。

やがて、前方の空に、握り飯の上にふった黒ゴマのようなものが見えてきた。その数は前回と同じ、七つ。

ラウラはそこでマヤとオクタヴィに一旦、竜の速度を落とすよう命じた。もし相手がこの前と同様、ニーナ率いる精鋭装甲竜騎兵だったとしたら、数的にも質的にもこちらが劣っていることになる。隊長としてしかるべき判断だった。

マヤたちはしばらくの間、相手の出方をうかがった。しかし相手はこちらに向かってくることも、逆に遠ざかるうとすることもなく、マヤたちから見て左から右方向へ、ゆっくりとしたペースで飛行を続けている。目的地に向かっていているというよりは、そこを飛行すること自体が目的のように見える。例えば何かを探しているときのよう……。

マヤは思った。あれがもしニーナたちだったとして、その目的が「男の竜騎兵」を探すことだったとして、彼女たちは上空からどうやって一人の人間を見つけるつもりなのだろう。上空からでも特定の人物が見つけたせる何か特別な方法が彼女たちにはあるのだろうか。

そのとき突然、マヤの視界の中で「黒ゴマ」の動きが慌ただしくなった。

「来るぞ！」

ファクティム竜騎兵隊の中で一番視力のよいラウラが、真っ先に敵の動きの意味を察知し、そう叫んだ。

先程まで黒ゴマほどの大きさだったものがあつという間に碁石ほどになった。大きくなるにつれ、マヤの目にもその一つ一つが、細部にいたるまで認識できるようになった。翼と胴体の一部、それと頭部全体を覆う装甲の形状は、やはり彼女にとって見覚えのあるものだった。そして横一列に並んだ七匹編隊の真ん中に位置する竜の背には、ひときわ目立つ薄緑色の衣装を身にまとった竜騎兵の姿があつた。

「ニーナ……」

マヤは歯ぎしりをしながらそう呟いた。たちまち彼女の全身が憎悪ではちきれそうになる。

オクタヴィはマヤの様子にいち早く気づき

「マヤ、冷静にならなくてはいけませんわよ！」

と声を張り上げた。

マヤは何とか自制心を保とうとした。しかし、敵編隊の中央でニーナがにたにたとにやけているのが目に入った途端、彼女の憎悪は遂に爆発してしまったのだった。

「マヤ、よせ！」

ラウラの制止する声は、もう彼女の耳には届かなかった。

ピムは立て続けに三匹の敵を蹴散らした。これには敵だけではなく、味方であるラウラとオクタヴィさえも、驚愕せざるを得なかった。いや、驚愕というより恐怖と言ったほうがよいかもしれない。

勢いづいたマヤは更に、ラウラとオクタヴィと共に、残りの四匹の敵のうち三匹に手傷を負わせた。それでも精鋭装甲竜騎兵たちは、苦痛を訴えもがく竜を巧みに操って、自ら楯となるべく、ニーナ隊長の乗る竜の周りにびったり貼り付いた。しかしもはや大勢は決していた。

ラウラ隊長の放った矢が敵の二匹の竜の腹に一本ずつ命中した。腹にダメージを喰らった二匹は撤退し、ついに隊長を守る「楯」は一枚となった。

ラウラはマヤとオクタヴィに、残る二匹の敵竜をがちり包囲させた後、ニーナともう一人の敵竜騎兵に捕虜になるよう勧告した。さすがのニーナも悔しさを表情ににじませた。

と、その途端。

いきなりもう一人の敵竜騎兵が、手負いの竜の背中からピムの背中へと跳び移ってきた。

敵兵がこのような行動に出ることなど予想だにしていなかったマヤは、完全に不意を突かれた。敵兵はハバリア語で何か叫びながら、世にも恐ろしい形相でマヤの体に掴み掛かってきた。マヤは恐怖にかられ、それこそ無我夢中で敵の腕を降りほどこうとした。

マヤが体を激しく揺さぶった拍子に、彼女を組み止めていた敵兵の腕がすぽと外れた。敵兵はバランスを失ってピムの背中から転がり落ちた。

「あっ」

マヤはそのとき初めて気づいた。敵の竜騎兵が、サーラとそれほど歳の違わない、あどけない少女だということに。

敵兵の体は風にあおられたのか、一瞬ふわっと浮き上がったように見えたが、次の瞬間には自由落下を開始した。数秒後、その体が地面に激しくたたきつけられるのが、上空からでもはっきりと見てとれた。

気が付くと、辺りにはラウラ隊長とオクタヴィの乗った竜と主を失った竜の姿しか見当たらなかった。ニーナはマヤが格闘している間にピムが制御不能になったのを見計らって包囲の輪を抜け、飛び去ったのだった。

今、一陣の秋風が、さっきまで戦闘空域だった空を吹き抜け、激戦で火照ったマヤの体を撫でた。冷たかった。しかしマヤは、その秋風よりももっと冷たい、もっと空虚な何かが、自分の心の中にあるのを感じた。

7 ギール

「あ、雪」

ルーミアは窓の外を見つめながら、マヤにとも、独り言ともなくそう言った。

マヤは、部屋に設えられた粗末なベッドに腰かけたまま、今まで往復させていた腕の動きを止め、ルーミアの言葉に誘われるように目を上げて、窓際に立つルーミアの肩越しにガラスの向こうの灰色の空を見上げ

「ほんと。どおりで寒いと思ってたわ」

と応えた。

今は陽はさしていないが、晴れた日に太陽が南へ昇った時の高さから推測して、エラーニア王国が故郷の街に比べるといくぶん高緯度にあることは確かだった。しかし、マヤが体感する限り、寒さはそれほど厳しくなかった。ほんの一瞬、この世界のこの地球が全体的に温暖なのだろうか、それともエラーニア地域だけが特別に暖かいのだろうか、という疑問が頭に浮かんだものの、彼女の関心はすぐに、科学の未発達なこの世界の住人は誰も答えられないようなそんな疑問から離れ、自分のひざの上に横たわって鈍い光を放っている一振りの小剣のほうに戻った。

十秒ほどのあいだ途絶えていた乾いた音色が、また一定のリズムを刻み始めた。ルーミアが横目でちらつとマヤのほうを伺うと、案の定、マヤは砥石を小剣に擦り付ける作業を再開していた。

ファクティム竜騎兵隊が最前線の町、ギールへの配置転換を命ぜられてから、まもなく二ヶ月が過ぎようとしていた。

ファクティム城駐留軍の公式的なコメントによると、配置転換は、ファクティム上空において敵精鋭竜騎兵を二度も撃退したことが軍上層部に評価された結果だということだったが、ルーミアはそれとは別の噂話も耳にしていた。曰く「後方に予備部隊を置いておけるだけの余裕が、エラーニア軍にはもうないのだ」と。そして、得てしてそのような噂話のほうに信ぴょう性が高いということも彼女は心得ていた。

この二ヶ月の間に、ルーミアがもう何度白魔法を使ったか知れない。もちろん名目上、彼女はマヤの従者という身分なので、マヤ以外の兵士の命を助ける義務はない。しかしそこは責任感の強い彼女のこと、死にかけている兵士を放っておくはずはなかった。そもそも従者などという制度は、古き良き騎士時代の名残りでしかなく、事実上、徴兵制が敷かれているに等しい現状ではそれほど意味はない。それ以前に、軍からもらえるなけなしの給料でわざわざ従者の食い扶持^{ぶち}の面倒まで見てやるうなど考える物好きは、上級将校はともかく、一般兵の中にはそう多くはいない。そのうえ彼女は、制服を着ていないことを除けば正規の軍属白魔導士と全く同じように振舞った。そのため、ギール城の兵士のほとんどは彼女が実は従者に過ぎないのだという事実を知らずにさえた。

ルーミアがこの前線の町の現実に戸惑いを見せたのは、着任早々、両腕と両脚が剣で切られたのではなく明かにもぎ取られた兵士がギール城に運ばれてきたのを見かけたその一瞬だけだった。次の瞬間にはもう、どこか遠足気分の抜けていなかったファクティム城での日々^{日々}に別れを告げ、白魔導士としての職務を全うする覚悟ができて

いた。

実際、彼女に命を救われて、その後戦闘に復帰できるまでになった兵士も数多くいた。生来、献身的な気質の持ち主である彼女のよくな人間にとつて、そんな兵士たちの「ありがとう」の言葉こそが何にも代えがたい報酬だった。ファクティム城で暇を持て余し、マヤの従者になったことを少し後悔していたあの頃の自分が、ひどく怠惰な、愚かしい人間のように思えた。

とは言え、辛いことも多かった。一般の患者と違い、兵士は命が助かるとまた戦場へ命をすり減らしに行ってしまうのである。「今日から戦列に復帰なんだ。ありがとう」と言って出撃した兵士が、その日の夕方、魂を完全に失った冷たい遺体となって帰って来た、などということもあった。

それに、白魔力の使い過ぎからくる恒常的な疲労にも苛まれた。さいな

精神的にも緊張状態が続き、たいした怪我でもないのに我れ先に応急処置を求めてくる若い男性兵士に対し、何度か大声を張り上げそうにもなった。それでも彼女が笑顔を保つことができたのは、彼女の精神力と、職務への責任感のなせる技としか言いようがなかった。

しかしそんな彼女にも克服しきれない問題が一つだけあった。自分自身のことなら我慢すればよい。全くの他人ことなら無視するか、適当にあしらえばよい。厄介なのはそのどちらにも属さない問題である。

ルーミアはそこで、もう一度マヤのほうを振り返った。ギール城の片隅にあるこの薄暗くカビ臭い小部屋で、マヤの瞳と、彼女が研ぐ小剣の刃だけが異様な光を放っていた。

二ヶ月前、マヤがファクティム城上空でヤグソフ四姉妹の末妹、二ーナの二度めの襲撃を撃退してルーミアの元に帰還した時、開口一番放った言葉は「敵兵を殺した」だった。さすがにそれからしばらく、マヤは少し元気がなかったが、二、三日後にはもう本来の彼女 同僚の竜騎兵だったサーラが死ぬより前の彼女 に戻ったように見えた。少なくともそのように振舞っていた。ルーミアはとりあえず安心すると同時に、姉が自分一人の力で困難を乗り越えられる強さを持っていることを心密かに賞賛していた。

その後のギールへの配置転換により、マヤは度重なる出撃、自分は白魔法治療に追われることが多くなり、じつくり自分たちのことを話す余裕がなくなった。マヤたちファクティム竜騎兵隊に数日に一度の割りで夜間のスクランブル・ローテーション 敵竜騎兵の襲来に備え待機する当番 が回ってくる一方、城が夜襲を受けた時などは逆にルーミアが夜通し白魔法治療の仕事をこなすこともあったので、生活のペースもすれ違いがちだった。

ところが最近、そんな毎日の中でふとマヤのほうに目をやると、彼女はいつも、今やっているように剣の刃を磨いたり、弓の手入れをしたりしているのだった。もちろん彼女が竜騎兵である以上、敵襲もなく待機当番でもない今のような空き時間に念入りに武具の手入れを行うのは当然のことである。ルーミアが心配したのはむしろ、マヤが武器を見つめる瞳が、ほの暗い光を宿していることだった。

本当は辛いんじゃないの？本当は恐いんじゃないの？ ルーミアはそう尋ねようとしたが、思いとどまった。姉はああ見えて繊細なところがある。自分が心配していることを打ち明ければ、却って心配させることになりかねない。だからこそ、四ヶ月前、自分の魔法のせいで彼女が女になってしまったことが判明した時にも、

謝罪した以外、敢えて彼女を気づかう言葉をかけなかったのである。

そうする代わりに、ルーミアは姉にもっと別の質問をすることを思いついた。

「ねえ、お姉ちゃん、今日は十二月七日よね？」

マヤは、妹がちょっといたずらっぽい笑みを浮かべながら顔を覗き込むようにしてそう話しかけてきたのをちらっと見やり

「そうね」

と応えただけで、すぐに視線を手もとの小剣に戻してしまった。それでもルーミアは笑顔を崩すことなく、更に

「じゃあ、ちょうど一週間後の十二月十四日が何の日だか知ってる？」

と尋ねてきた。

「なんだっけ」

「あたしの十六回目の誕生日」

マヤはやっと、砥石を往復させていた手を止め

「ああ、そうだったわね」

と応えた。「確かずっと前、言葉のレッスンの中で一度、そんな話をしたわよね」

「うん、お姉ちゃんが十六歳になったばかりだって言うから、じゃああたしのより半年年上ねっていう話になったのよね。それであたしはマヤがお姉ちゃんになってくれたら嬉しいなって思ったの」

「あたしはお兄さんのつもりだったんだけどな」

マヤはそう言って、ちょっと口元をほころばせた。ルーミアは、姉の笑顔を見るのはずいぶん久しぶりのような気がした。

「お姉ちゃんの誕生日は六月の何日なの？」

「あたしの誕生日は日付けの上では十二月四日よ」

「え？どういうこと？」

「こちらの世界と、あたしが元いた世界では、どうも日付けが半年ずれてるみたいなの。だから向こうでは、今は多分六月。あたしの誕生日の十二月四日は半年前ということになるわ」

「へえ、そうなの」

その時不意に、マヤの脳裏にアクロバット飛行競技会の時の記憶がよみがえった。美玖の笑顔、弁当箱の入った巾着袋、赤い複葉機、青い秋空、そしてあの得体の知れないどす黒いもや。墜落してルーミアたちに助けられ、目を覚ましたのは一ヶ月後。更にそれから三ヶ月たって体の自由を得た時にはもう夏だったことから、日付けが半年ずれているのだろつという推論を導き出していたのである。それにしても、あの競技会の日がなんと昔に感じられることが。

二年生になった美玖は今、どうしているのだろうか、ちゃんと部活には出ているだろうかなど思いを巡らせた衝動をぐつとこらえ、マヤはルーミアとの会話を続けることにした。

「ルーミアが十六才になるってことは、あたしはもうルーミアのお姉ちゃんじゃなくなってしまうってことよね」

「だめ」ルーミアはわざとだっ子のように首を振った。「誕生日が半年しか違わなくてももお姉ちゃんはお姉ちゃん」

「もう、ルーミアったら。どうしてもあたしをお姉ちゃんにしたいのね」マヤは笑いながら、大げさに肩をすくめてみせた。「年上の女の人なら、同じ隊のラウラ隊長もいるし、オクタヴィだって、ほらこの間、ファクティム城で二十歳の誕生日を迎えたでしょ」

そう、このギールへ配置転換になる前、まだサーラが生きていた頃、ファクティム城でささやかながらオクタヴィの誕生パーティーが開かれたのである。マヤは「こちらの世界にもケーキを作ったり、プレゼントを渡したりしてお祝いする習慣があるのね」などと驚きつつも、とても楽しそうにしていたのだった。

ルーミアは

「お姉ちゃんはちゃんとあたしのお父さんの養女になったんだから名実共にあたしのお姉ちゃんでしょ。それに、もしそうでなかったとしても、やっぱりあたしのお姉ちゃんはマヤじゃないとだめ」

と応えながら、のどかだったファクティム城での日々と、誕生パーティーなど望むべくもないこのギールでの生活とのギャップを、改めて実感した。そして半年後、姉が次に誕生日を迎える時には、

誕生パーティーを開いてあげられるような状況下に自分たちがいられればいいなと思った。

しかし、目の前の現実には過酷だった。

マヤが次に「ねえ、ルーミア……」と言いかけた瞬間、城内にけたたましい鐘の音とともに

「敵襲！敵襲！」

という怒鳴り声が響いたのである。

マヤはもうほとんど反射運動のように、鐘が鳴り始めた次の瞬間には立ち上がって、壁にかけてある防寒着を手にとり、その次の瞬間には袖に腕を通し終え、部屋の扉を開いていた。そして、小剣を素早く、しかし丁寧に腰の鞘に納めた後、ルーミアに一瞥^{いちへつ}もくれることなく廊下を走り去った。

ルーミアはそれを見届けてから、今までこの部屋を支配していた暖かい雰囲気が消えゆくのを惜しみつつ、てきぱきと身支度をし、自らの持ち場である医務室へ向かうため、部屋をあとにした。

ラウラ隊長の号令の下^{もと}、マヤがギール城の駐竜場から、雪のちらつく灰色の空へとピムを上昇させた後、辺りを見回してみると、ギール北側の平原とその上空はただならぬ気配に満ち溢れていた。ギールに着任して間もない頃、敵の大軍が押し寄せてきて城壁の一部

が破壊されるほどの苦戦を強いられたことがあったが、今、目の前にいる敵の数は、どう見てもその時の倍近いと思われたからである。

数だけではなかった。ひときわ視力のよいラウラ隊長が、腕信号旗を使わない手旗信号のようなもので伝えてきたところによれば、敵の主力部隊はハバリア皇帝直属である近衛師団このえの団旗を掲げており、さらにその先鋒隊はヤグソフ四姉妹の一人、モーラに率いられた精鋭アマゾネス（女怪力兵）の一隊らしいというのである。敵がギールを本気で陥おとし入れるつもりなのは明らかだった。

ギールを守るエラーニア側の兵は誰もが戦慄を禁じ得なかった。

しかしだからと言って、敵がこちらの戦慄がおさまるのをじっと待っていてくれるはずはなかった。敵竜騎兵隊がギール側の警戒空域に突入してきたのを合図に、激戦の火蓋が切って落とされた。

戦いの焦点は、制空権にあった。いくら敵が大軍といえど、何百年もの間、敵国の兵や蛮族の攻撃を跳ね返してきたこの堅牢なギール城は、包囲されてもそう簡単に攻めとられることはない。だがもし制空権を奪われれば、水や食料などの補給物資を空から供給することができなくなってしまうのである。

当然、敵はかなりの数の竜騎兵を投入してきた。マヤたちはそれこそ死に物狂いで応戦したが、それにも限界があった。同じ隊のオクタヴィをはじめ、多くの竜騎兵が手傷を負って戦列からの離脱を余儀なくされた。気が付けば、ともに戦えるのはマヤと、ラウラと、ギールに配属されているただ一つの装甲竜騎兵隊、エメンツ装甲竜騎兵隊だけになっていた。

ありがたいことに、エメンツ隊が獅子奮迅の活躍をして敵の主力

装甲竜騎兵隊に大ダメージを与えてくれ、またエラーニア王宮にある軍上層部が、王都エランの守りが手薄になることを承知で、最精鋭装甲竜騎兵の一隊を一時的にギール戦線に回すという大英断を下してくれたため、寸でのところで制空権を奪われずにすんだ。

制空権の奪取に失敗した敵軍は、力押しによる迅速なギール城攻略を一旦諦め、長期的な攻城戦へ移行すべしと判断したらしい。昼夜を問わずほとんどひっきりなしに続いた敵の総攻撃は、五日後、ようやく停止した。

その夜、マヤとルーミアに割り当てられているギール城の一室をオクタヴィが訪ねていた。

「そうなのですが、ルーミアはもうお休みになってしまわれたのですか。わたくしの怪我を治してくれたお礼を言おうと思ったのですが」

オクタヴィがいつもどおり丁寧すぎる口調でそう言うと、マヤはベッドの上ですやすやと小さな寝息を立てているルーミアの寝顔を眺めながら

「白魔力の使い過ぎで、疲れがたまっているみたい。この娘、仕事のことになると頑張り過ぎちゃうところがあるから」

と応えた。

「確かにそうですね。敵の攻撃がいつまた再開されるかわかりませんけど、それまではできるだけゆっくり休ませて差し上げましょう」

「そうもいかないの。明日、デイン砦に白魔法治療をしに行くように言われたんだって。死にかけている人がたくさんいるからって」

「まあ、大変ですわね。でも、もちろん誰かに竜でつれて行ってもらうんでしょう？城は包囲されているのですから……」

「だからあたしがつれて行くことにしたの。さっきラウラ隊長の許可を取ったわ」

「それはご苦労様。では、マヤも早めにお休みにならないといけませんわね。わたくし、これでおいとまさせていただきますわ」

オクタヴィはそう言い残し、戦下のこの城塞の雰囲気全く似つかわしくない優雅な身のこなしで、バレリーナのような細身の体をするりと部屋の出口へ滑り込ませようとした。が、そこで

「あ、そうそう、すっかり忘れるところでしたわ」

と言って、また部屋の中に戻って来た。

「これ。マヤに頼まれていた例のもですわ」

彼女は、飛行服の腰にぶら下げたあるポシェットから、手のひらに包むことができるくらいのおおきさのものを取り出し、マヤに手渡した。

するとマヤは、さも嬉しそうに「間にあつたのね。よかった」と応えた。「ありがとう、オクタヴィ」

「どういたしまして」

「本当に助かったわ。あたしこういうことを相談できる人がルーミアしかなくて、でも今度ばかりはルーミアに相談することができなかったから」

「喜んでいただけるかしら」

「オクタヴィの見立てだもの、きっと大丈夫よ」

「そうなることを祈っておりますわ。……では、失礼させていただきます。おやすみなさい」

「おやすみ」

翌朝、マヤとルーミアはまだ暗いうちに　といっても、緯度の高いこの地域で十二月に日が昇るのは午前九時頃だが　ピムの背中に乗り込み、城を取り囲んでいる敵の警戒網を縫うようにして、一旦、比較的安全な南東の空域に出た。そこで進路を北東に向け、哨戒飛行中の敵竜騎兵に見つからないよう、山の稜線に身を隠しながらデイン砦を目指すのである。

ルーミアは体をマヤの背中に密着させ、自分の口をマヤの耳のす

ぐそばにもって来て

「どれぐらいかかる？」

と訊いてきた。風を切る音がうるさくて声が聞こえにくいだろう
と思ったからである。

マヤは顔をほんの少しルーミアのほうへ向けて応えた。「本当なら
ギール城からデイン砦までは三十分もかからないわ。でもこんな
ふう迂回しながら、それも、上昇気流に乗れないこんな低空を飛
ぶとなると、一時間半ぐらいはかかったらうんじゃないかな」

「そう」

「寒くない？」

「風が少し冷たい」

「じゃ、少し速度を落とすわ」

「ううん、それじゃ、着くのが遅くなる」

「大丈夫。その代わり少し近回りするから」

マヤはピムの速度をやや落としてから、山沿いを離れて森の上空
を横切るルートをとることにした。

ところが、この判断が結果的に思わぬ災難を引き起こすこととな
ってしまった。

デイン砦の物見櫓が遠くに見え始めるところまでたどり着いた時、眼下に絨毯のように広がる森の樹木の間から、突然、握り拳ほどの大きさの火の玉のようなものが飛んできて、ピムの翼を直撃したのである。

ピムは叫び声を上げ、激しく体を揺さぶった。

「ピム！」

マヤは必死になってピムをなだめ、なんとかしてコントロールを取り戻そうとしたが、ピムはどんどん降下してゆき、遂に森の中へ墜落した。

幸いにも、ピムが完全に我を失うことはなく、最小限のコントロールを受け入れてくれたため、マヤはピムに安全な着陸態勢をとらせることができた。おかげでマヤもルーミアも、かすり傷一つ負わずにすんだ。

しかしピムの怪我のほうは深刻だった。火の玉が直撃した部分の皮膚は直径三十センチほどの大きさにわたって完全にはがれ落ち、むき出しになった内皮から絶えまなく鮮血が吹き出しているのだった。

ルーミアは白魔法治療を試みた。止血には成功したものの、はがれ落ちた皮膚を完全に再生することはできなかった。女性白魔導士である彼女は、魂の再生は得意でも、肉体の欠損部位を再生する能力は持ちあわせていないのである。

マヤは一応、ピムに翼を動かすよう試みてみた。予想どおり、ピムは苦しそうにそうに喘ぎ声を上げ、すぐに動かすのをやめてしま

った。

彼女は「無理をさせてごめん」と謝りながら、赤い装甲に覆われたピムの頭部を撫でた。そしてやるせない表情で天を仰ぎ、

「もう、最悪」

とぼやいた。

「なんなの、あの火の玉みたいなの？ 敵があんな武器を持ってるなんて聞いてないわよ」

ルーミアも、彼女にしては珍しく不快感をあらわにして

「あれは敵じゃなくて、サハラカン 竜落としても呼ばれているモンスターが撃った火の玉よ。そんな危ないモンスターがいるなら、出発前に一言忠告してくればよかったのに」

と、彼女にデイン砦に行くよう要請してきたギール城駐留軍のお偉さんを暗に批判した。

とは言え、いつまでもこのような場所で悪態をついているわけにはいかなかった。まずはこれからの行動計画を練り直さなければならぬ。

最初、ルーミアは

「デイン砦であたしの到着を待っている人たちのことが心配なの。ここから砦まで歩いても三時間ぐらいだから、あたし一人でデイン砦に行くわ。マヤはピムがモンスターに襲われたりしないようにそ

ばにいてあげて。あたしは皆で白魔法治療をした後で、ピム傷を治す薬を手に入れるか、それができなければ男性白魔導士をつれて戻ってくる」

と主張したが、マヤはこんな危険な森でルーミアに一人歩きをさせるわけにはいかないと反対した。

そこでルーミアは、この森の中でピムの傷につけるペペという薬草を探すこと提案した。ペペは森の中にわりとよく生えている植物なので、手負いのピムをひとりぼっちにしないように付近を探せばすぐに見つかるだろうというのである。

二人はその提案をすぐに実行に移した。

しかし、ルーミアの予想に反し、ペペはなかなか見つからなかった。マキナスの森より北にあるこの森では、気候が少し違うのかもしれない。

仕方なく、二人は搜索範囲を広げることにした。

そうしているうちにマヤは、高さ三メートルくらいの崖の上に出た。ペペは日陰に生えていることが多いというルーミアの話を思い出し、マヤは崖の下を覗き込んでみた。

すると。

崖の下には、二人の人間が立っていた。

一人は薄緑色の派手な色の衣装を身に付けた、マヤと同じ歳ぐらいの少女。

もう一人は、これまた派手な黄色い衣装を身にまとった大柄な人物だった。身長は百九十センチ、体重も百キロぐらいあるのではないか。

そのそばでは、彼らが乗ってきたと思しき馬が二匹、足下の草を食^はんでいた。同じ向きではなく、睨み合うように立っていることから、その馬の主たちは別の方向からやってきてここで落ち合ったのではないかと思われた。

彼らは何やら熱心に話をしている。マヤは耳を澄ましてその会話を聞き取るうとしてみたが、どうも、彼らの話している言葉は彼女の知らない言葉のようだった。

いつの間にか、ルーミアもマヤの傍らで同じように崖の下をじつと覗き込んでいた。別の場所で薬草を探しているうちにマヤの様子に気付き、何かあると思ってこちらに来ていたらしい。

崖下の二人をよく見ると、マヤは薄緑色の服を着た少女に覚えがあった。あれは確か、ヤグソフ四姉妹の末妹、ニーナではないか。

マヤの胸は一瞬、サーラを殺された怒りで張り裂けそうになった。しかし、マヤは深呼吸をして気持ちを落ち着け、自分の感情をコントロールした。二か月前、敵兵と組み合って結果的に敵兵を転落死させてしまっ^て以来、マヤはもう二度と、怒りで我を忘れて敵と戦うようなことはするまいと心に誓ったのだった。

そのうち、ニーナと思しき少女は、ふところから何かを取り出し、黄色い服をまとった人物に手渡した。そして、更に二言三言、言葉を交わしてから、馬にまたがり、風のように去っていった。

残された黄色い服の人物は、それを見届けた後、いま手渡されたものを目の前にぶら下げてしげしげと眺めた。それは銀色の鎖の環に紫色の宝石が付いたペンダントだったのである。

「あれは！」

そう、あのペンダント、あれは、マヤがこちらの世界に引き込まれる直前、マヤの手の中で光輝いた、あの不思議なペンダントとそっくりではないか！

「あのペンダントだ！」

マヤは思わず小さな声で叫んでしまった。

ところが、マヤがあくまで小声で上げたつもりの叫び声は、しっかり眼下の人物の耳に届いていたのだった。

その人物はマヤたちのほうを振り返り、マヤたちには分らない言葉で一言、何か言った。それがマヤたちに通じていないとわかると、今度はマヤたちに分かる言葉で

「誰だ！」

と言った。

その人物がさきほどまで横を向いていたためわからなかったのが、いまマヤたちの方へ向けられたその胸には、防寒着の上からでもわかるほどの大きな二つの膨らみが付いていた。どうやらその人物は女らしい。

彼女は、崖の上のマヤがエラーニア王国軍の飛行服を着ていることにすぐに気付いた。すると、馬の腹に結わえ付けられていた長い槍を手に取り、無言のまま、その切っ先をマヤの方目掛けてくり出した。

マヤは機敏に身を翻してその切っ先をかわすことができた。しかし隣にいたルーミアの方は、よけようとした拍子に崖下へ転落してしまった。

「きゃっ！」

崖の高さが三メートルほどだったため、ルーミアはそれほどダメージを受けなかった。とは言え、崖を背にした今のルーミアは、槍を手にした大女にとっては格好の槍の的だった。ルーミアは文字どおり窮地に立たされた。

「ルーミア！」

躊躇している暇はなさそうだった。マヤは防寒着を脱ぎ捨てて、いわゆる全身レオタードに似た、飛行服のみの姿となり、腰の革ベルトにぶら下がっている小剣を抜いた。そしてその刃を大女に向けて、崖下へ勢い良く飛び込んだ。

しかし大女は、マヤが渾身の力を込めてくり出した剣をいとも簡単によけてしまった。

崖下に降り立ったマヤはそれでも必死になって剣をくり出し続けた。ルーミアを守りたい一心だった。だが大女は、その大きな体のどこにそんな敏捷性が備わっているのか不思議なぐらい、やすやす

とマヤの剣をかわした。

マヤが剣を振り回し疲れた頃を見計らって、大女はマヤの胸目掛けて槍の一撃を放った。マヤはぎりぎりよけるのが精いっぱいだった。マヤの飛行服は胸の辺りで切り裂かれ、そこから血が滲み出した。彼女は万事休したと思った。

ところが大女は何を思ったのか、突然、槍を捨て、マヤの方へ歩み寄った。マヤが剣で抵抗しようとするとその腕を鷲掴みにして動きを止め、手から剣を取り上げた。そしていきなり、彼女の飛行服の胸の部分の布を、乱暴に破って取り去ったのだった。

マヤの胸の二つの膨らみは、鮮血に染まって真っ赤になっていた。

「な、何するの！」

マヤは四か月前、ジュートの相手をさせられそうになった時以来の貞操の危機を感じた。

彼女が自分の勘違いに気付いたのは、大女がポケットから小瓶を取り出し、その中のペースト状のものをマヤの胸の傷口に塗ってくれた時だった。

大女は

「これは俺の姉貴が作ってくれた薬だ。よく効くぞ。姉貴は故郷では結構有名な魔道士なんだぜ」

と、訛りのあるエラン語で話した。数力月前、ニーナがマヤと話したときにもこれと同じ訛りがあった。おそらくこれがハバリア訛

りなのだろう。

マヤはどう応えてよいかわからずただ黙って薬を塗られるままにしていた。

薬を塗り終えた大女はマヤに

「名前は？」

と尋ねてきた。マヤはそのとき大女の顔を間近で見て初めて、その大女が、実はマヤたちよりも二つか三つ年上にすぎない、若い女性だということを知った。

マヤが名乗ると、大女は微笑んで

「マヤか。それは東洋ではよくある名前なのかな」

と言った。マヤは何も答えなかったが大女は気にも止めず

「俺の名はモーラだ」と言葉を続けた。「おまえ、東洋から来た傭兵^{傭兵}だろ。おまえみたいな小娘が何もこんなところまで戦^{いくさ}なんかやりにこなかったって、ほかに稼ぎ口ぐらいあるだろうが」

それでも黙り続けるマヤを半ば無視して、モーラと名乗ったその大女は独り言のように

「おまえがあのお白魔道士を守ろうと必死になって戦った、その頑張り^{張り}に免じて見逃してやるよ」

と言い、少し離れたところに立っているルーミアを、あごで指し

示した。

それまで恐怖で足がすくんで動けなかったルーミアは、その時、やっと我に帰り、崖の上から落ちてきたマヤの防寒着を拾って、マヤのところに駆け寄った。そして、防寒着を彼女の肩にかけてやった。

と、その時。

ルーミアの顔が蒼白になった。

マヤとモーラは、こわばって動かなくなってしまったルーミアの視線の先を、目で追いかけた。五十メートルほど離れたところに立っている高さ十メートルほどの二本の木の幹の間に、二階建ての建物ぐらいの大きさの巨大なこんにやくのようなものが挟まっているのが見えた。

三人とも、しばし言葉を失った。

よく見ると、その物体は挟まって止まっているわけではなく、木々の幹に引っかかりながらも、その柔軟性のある体を幹のあいだの幅に適応させつつ、こちらへ向かって少しずつ前進してきているのだった。

「サハラカンだ！」

モーラがやつと声を絞り出した。

その物体　サハラカン　はそこで一旦停止した。マヤとルーミアは次に何が起こるのか全く予想できず、口を半ば開いたまま、

ただただ呆然とその物体を見つめていた。やがてその物体の上部が濃いピンク色を帯び始め、次にその中心部が深紅から赤褐色へと変化していった。

一方、モーラの方は次に何が起こるか予測がついたらしい。いきなりその大きな手で二人の頭を抑え、

「伏せろ！」

と叫んだ。

二人は訳が分からないまま言われた通り地面に突っ伏した。その次の瞬間、サハラカンの赤褐色に染まった部分から、野球のボールほどの大きさの火の玉が撃ち出されたのだった。

幸い、火の玉はマヤたちのいる地点から二十メートル以上離れた地面に命中した。

サハラカンは命中確率を上げる必要を感じたのだろう、再びその柔軟な体をぶよぶよと動かしてマヤたちのいる方へ前進を始めた。

マヤは素早く立ち上がり、傍らでうつぶせになっているルーミアが立ち上がろうとするのに手を貸した。そしてその手を引っ張って、モーラとともに近くの大きな木の幹の陰に逃げ込んだ。幹の陰から様子を伺うと、サハラカンはまだ三十メートル以上離れたところうごめいていた。どうやら動きはかなり緩慢のようだ。

「きつとピムにとどめを刺しにきたのよ」ルーミアが言った。「サハラカン」は火の玉で竜を撃ち落として、動けなくなったところをあの体で包み込んで溶かして食べちゃうて。書物で読んだことがある」

「どうすればいい?」マヤが言った。「あのモンスターには何か弱点とかはないの?」

応えたのはルーミアではなくモーラだった。「上の方に目が二つついていてその間に脳がある。そこにダメージを与えればいい」

マヤは、その言葉の真意を測るために、モーラの目を見た。そこに偽りの光がないとわかると

「目のあいだね。わかったわ」

と応え、走り出した。そして、先ほど小剣を落とした地点で剣を拾い上げてから、一旦、手近な木の幹に隠れ、腰のベルトに付いている鞘に剣を納めた。

するとモーラは、どういふつもりか、いきなり木の陰から飛び出して、サハラカンの前に立ちふさがり

「俺が囹になってあいつの注意を引く。マヤは木の上からやつ弱点を狙え」

と叫んだ。

マヤは一瞬、無関係のモーラに協力してもらう筋合いはないと断ろうと思ったが、やはりどうしても囹役は必要だと考え直し、何も言わず彼女の指示に従うことにした。

ルーミアは木の陰から固唾をのんでその様子を見守った。

マヤは、モンスターの視界に入らないよう注意しながら、立ち並ぶ樹木伝いにモンスターの方へ二十メートルほど近付き、様子を伺った。サハラカンはどうやら、前に立ちふさがるモーラに攻撃の矛先を向けることにしたらしく、前進を停止して、その巨体の上部をピンク色に染め、今まさに火の玉を打ち出そうとしていた。

数秒後、火の玉がモーラ目掛けて飛んでいった。

モーラは先ほどマヤと戦った時に見せた敏捷性を、今度も如何なく発揮し、鮮やかな身のこなしで火の玉をかわした。

それを見て安堵したマヤは、更に樹木二本分、サハラカンの方へ近付いた。

数メートルほどしか離れていない場所からモンスターを見上げてみると、改めてその巨大さに圧倒された。モーラの言っていた目の在り処を見極めようとしたが、五メートルにも及ぶと思われるその体の上部の様子は、下からでは伺い知ることができなかった。

彼女はモーラに指示されていたとおり、木の幹をよじり始めた。都会で生まれ育った彼女は木登りなどやったことがなかったが、幸い、その木の幹には多数の突起がついていたため、そんな彼女でもどうにか登ってゆくことができそうだった。

ところがその時、サハラカンの動きに変化が現れた。サハラカンは次の火の玉の準備をするために体の上部をピンク色を染め始めていたのだが、射出口となるはず赤褐色の部分は、モーラの方ではなくマヤの方を向いていたのである。

すでに木の中腹まで登り終えていたマヤは、下に降りることもで

きず、木の幹にへばりついたまま可能な限りの防御姿勢をとった。

火の玉が撃ち出された。火の玉はマヤがつかまっている幹をかすめ、背後にある木に直撃した。振り返ってみると、その木は根の部分を残して跡形もなく消え去っていた。彼女は背筋が凍り付くのを感じた。

モーラは少し離れたところで大声を上げ、モンスターの気を引こうとした。サハラカンの注意は再びモーラの方へ逸れた。

その間を利用して、マヤは木登りを再開した。やがて建物の三階ぐらいの高さまでたどり着いた時、ちょうどそこに太い枝がせり出しているのが見つかったので、彼女はそこに立って見下ろしてみることにした。

モンスターの体の上部に赤いひし形が二つ、モーラのいる方向を睨んでいた。どうやらあれが目らしい。

マヤは腰の鞘から小剣を抜いた。モンスターの弱点である目の間の部分は、マヤの立っているところから二メートル以上離れていた。腕を伸ばして刺し貫くには距離があり過ぎる。

そのうちサハラカンはずいぶん火の玉を打ち出す準備を始めた。体の上部がピンク色に染まる。しかもそのひし形の目は、モーラのほうからマヤのほうへと、見据える方向を再び変えつつあった。一刻の猶予も許されなかった。

マヤは、先ほど崖の上からモーラに対してやったのと同じように、モンスターめがけて身を投げ出した。

「やーーーーっ！」

今度こそ、彼女は小剣の刃を突き立てることに成功した。目の間の部分を刺されたモンスターは激しく体を揺さぶり、マヤを振り落とそうとした。そのためマヤは手を剣から離してしまい、雪山のようなモンスターの巨体の上を、ごろごろと転がり落ちた。

柔軟性のあるサハラカンの体がクッションのような役割を果たしたため、マヤは地面に激しく叩き付けられることはなかった。

サハラカンはいばらくの間、ぶよぶよと体を揺さぶり続けたが、やがて力尽き、その場にどっさりと崩れ落ちた。

マヤのもとに、モーラとルーミアが駆け寄ってきた。

モーラとルーミアは異口同音に「やったな」「やったわね」と言った。

マヤは「ええ」とだけ応え、とびきりの笑顔を二人に返した。

するとモーラは、またポケットから、今度は何やら紐のようなものを取り出し、それをマヤの首にかけた。それは先ほどモーラが二ーナから受け取ったあのペンダントだった。

「そのペンダントはシカの腹の中から見つけたものだ。俺の妹を何か月間もあちこち飛び回らせた厄介物だ。もう魔力も消えているから俺たちには不要だが、珍しいものなので金にはなる^{かね}。お前はそれを売って東洋へ帰れ」

彼女はそう言って、マヤの肩をポンとたたいた。そして先ほどマ

ヤと戦った場所まで歩いてゆき、地面に捨ててあつた長槍を拾つて馬の腹に結わえ付けてから、派手な黄色い衣装をひるがえして馬にまたがった。

マヤはモーラに聞こえるよう大声で

「ありがとう」

と言った。

馬上のモーラはマヤたちの方を振り返つて微笑んだ後、前を向き直り、馬の尻に鞭を当てた。彼女を乗せた馬は一目散にその場を走り去った。

その後、マヤたちは無事に薬草ペペを見つけることができた。ペペをすり潰してピムの傷口につけると、その鎮痛効果により、ピムは翼を動かすことができるようになった。

デイン砦に着いた頃には日没時間の午後三時をだいぶ過ぎていたため、辺りは真っ暗だった。

ルーミアはすぐさま、死にかけている患者を死の淵から救う白魔法治療を開始したが、治療を必要としている患者はかなりの数にのぼっていたので、全ての治療を終えたのは、夜中の十二時半だった。

ルーミアはくたくたになつた体を休めるために、彼女とマヤのた

めに割り当てられた寝室へと向かった。昼間、モーラやモンスターと戦ったマヤもきつと疲れて寝ているだろう思い、寝室の扉はそつと開いた。

ところが意外なことに、部屋の中ではマヤがまだ起きて彼女を待っていた。

マヤは腰のポシェットから何かを取り出し、ルーミアの手のひらにのせた。それは貝殻の形をかたどった、小さなイヤリングだった。

「お誕生日おめでとう」マヤは満面の笑みを浮かべ、言った。「本当は朝、起きてから渡そうかとも考えたんだけど、待ちきれなくていま渡そうって思って、待ってたの」

しかしルーミアは不思議そうに

「でも、こんなイヤリング、いったいどうやって……？ここ二か月、ずっとあの最前線の町、ギールに駐留していたのに」

と尋ねた。

「オクタヴィのお父さんがファクティムで銀細工師をしているって知ってるでしょ？あたしたちがギールに配置転換になってしまったから、オクタヴィのお父さん、届けるのに苦労したみたい。注文したのは、もう三か月近く前かな、ファクティムにいた頃にやったオクタヴィのお誕生日パーティー。あの後すぐよ」

「そんなに前？」

「そう。ルーミアには誕生日当日まで内緒にして、驚かせるつもり

だったの。だから先週、ルーミアが誕生日の話をした時も、あたしとぼけてルーミアの誕生日なんか覚えてなかったふりをしたのよ。本当は、言葉のレスンの中で教えてもらったあの時から、一日たりとも忘れたことはなかったわ」

「もう！意地悪！」ルーミアはそう言いながら、マヤに抱きついてきた。「でもありがとう、お姉ちゃん」

ギール攻城戦は二か月に及んだ。

ハバリア軍は第一次攻撃の後も、制空権を奪わんと、次々とギール戦線で竜騎兵戦を仕掛けてきた。しかしそのたびごとに、彼らの前にエメンツ装甲竜騎兵隊とファクティム竜騎兵隊が立ちはだかり、鬼神のような戦いぶりではババリア竜騎兵を蹴散らした。そのため、制空権を得てギールを孤立させ奪取するというハバリア側の目論見はもろくも崩れ去った。

その中でもファクティム竜騎兵隊所属のマヤ・クフルツ竜騎兵の活躍は目覚ましいものがあつた。それまで飛行技術は優れているものの、竜騎兵としてはあまり評価の高くなかつた彼女が、ある日を境に、重しがとれたかのように軽快な動きを見せるようになったのだった。その「ある日」がルーミアの誕生日であつたことは、無論、誰の知る由もない。

結局、ハバリア軍は、ヤグソフ四姉妹の一人、モーラの率いるアマゾネス隊がまたも城壁に大ダメージを与えた以外、得るものもなく、二月初頭、包囲を解いて撤退した。

開戦以来、連戦連勝を続けていたハバリア軍が勝利を逃したのは、この戦いが初めてであった。

8 王都

マヤは、日本にいたころ国語の授業で習った「胡蝶の夢」の話を思い出していた。蝶になつて飛ぶ夢を見ていた男が目を覚ましたとき、ふと、人間の姿をした今の自分は、本当は蝶の見ている夢に過ぎないのではないかと考えるという、有名な中国の古典である。

アメリカで育つたため日本語の知識が不足し、結果、国語の授業がどうしても好きになれなかった彼女が、そんな古くさい逸話のことを考えたのは、その話に出てくる男が何となく今の自分に似ているような気がしたからである。すなわち 自分はもともマヤ・クフルツという女の子であり、異世界で男として暮らしていた時の記憶は、クフルツ診療院で目覚める前に見た夢にすぎないのではないか

女としての生活を始めて半年が過ぎていた。今では自分の肉体に違和感を感じることもなくなり、また他人から女として扱われることにもすっかり慣れていた。言葉に関しても、最初はルーミアから教わったのが女言葉だとは知らずに使っていたが、今でははつきりと意識して女っぽく話していた。それに、今さら男言葉を覚える気にもなれなかった。仕草や振る舞いはといえば、こちらの方はまだまだ男っぽかったものの、この軍隊生活の中では、それが周りの人々の目に奇異と映ることはなく、むしろ女性兵士としての頼もしさ、凛々しさを醸し出していた。しかも彼女の話す言葉がルーミア仕込みのやや少女っぽいアウスグ語であつたため、仕草や振る舞いとのギャップが、却って彼女の神秘的な魅力を高める役割を果たしていた。お陰で何度か男性兵士から言い寄られたこともあつたが、そのたびに彼女は「故郷に好きな人がいるから」と、その申し出を断つたのだつた。故郷の街に、かつて告白しようとした相良美玖という

人がいるのは事実なので、嘘は言っていない。

実際、彼女は今でも美玖が好きだった。客観的に見ればまるで同性愛のようだが、もちろんそうではない。なぜなら、故郷の街のことを思い出す時、夢に見る時、彼女はまだ山矢健太だったからである。そして山矢健太はアクロバット飛行競技会の日、美玖との別れ際にした約束　「演技が終わったらお前に言いたいことがある」というあの約束をまだ果たしていないのである。

だから、俺は元の世界に帰らなければならない　彼女は思っていた　これほどまでにこちらの世界での女としての生活に馴染んでいても、帰らなければならないのだ。そう、たとえ男に戻れなかったとしても。たとえルーミアやピムと永遠に別れることになるとしても！　しかし、それは彼女にとってあまりに辛い別れである　果たして俺にそれができるのか？いや、やらなければならない。俺はこの世界では異分子だ。ピムと出会った時だって、ピムはあやうくガソリンを舐めるところだった。やはり向こうの世界のものはこの世界にあつてはならない。いてはならない。「胡蝶の夢」の話でいうと、現実の自分は山矢健太でなくてはならず、マヤ・クフルツは、山矢健太の夢の中に出てきた女の子でなければならないのだ

竜騎兵隊入隊当初は漠然としたものでしかなかったそんな願いが、ここへ来て少しずつ目に見える形となって現れ始めた。いま彼女の手の中には、デイン砦近くの森でモーラという大女からもらったペンダントがある。このペンダントが、こちらの世界に引き込まれる直前に手の中で光ったあのペンダントと同一のものだという確証はない。しかしモーラが去り際、このペンダントは珍しいものだと言っていたことからすると、その確率が高い。仮にそうでなかったとしても重要な手がかりであることには変わりない。

またモーラは、このペンダントのせいで妹が何か月間もあちこち飛び回るはめになったとも言っていた。いろいろな話を総合した結果、あの大女がヤグソフ四姉妹のモーラであることは間違いないと思われたが、だとすると、その妹ニーナが数カ月前、アヴニ村周辺やファクティム近郊をうろついていたことと何か関係があるのだろうか？

モーラは確か、このペンダントはシカの腹の中から見つかったとも言っていた。このペンダントが例のペンダントと同一だと仮定した場合、これは本来、山矢健太が持っているべきものということになる。マヤ自身、クフルツ診療院を退院した後、これが重要な手がかりであることを認識し、一応、墜落現場やその周囲を探してみたが、どこにも見つからなかった。そのため、飛行機とともに燃えて灰になってしまったか、墜落の際、どこか遠くに落としてしまったのだろうと判断し、搜索を断念していたのである。だがもしも後者の推測が正しいとすれば、森のどこかに落ちたペンダントをシカが誤って飲み込んでしまうことは十分考えられる。そしてもしもこのペンダントに、いわば発信器のような機能があったとしたら、ニーナはこのペンダントを頼りに山矢健太を見つけたそうとして、結果的に、森の中を移動する習性を持つシカの一群を追いかけていたとも推測できる。

もちろんマヤはこのペンダントを手に入れてすぐ、ルーミアや、ギール城に駐在する物知り魔道士たちに調べてもらった。彼らが異口同音に「このペンダントに付いている宝石は見たことないものなのでよくわからないが、少なくとも現在、この宝石から魔法の気配は感じられない」と言ったことから、とりあえず今この瞬間にこのペンダントの「発信器機能」によって誰かが彼女の居場所を監視しているなどということはなさそうだった。それ以前に、このペンダ

ントを受け取った時の状況からして、モーラがそのような目的でマヤにこれを渡したとも思えなかった。

いずれにせよ、これらはマヤの推測に過ぎない。このペンダントは彼女がこちらの世界に引き込まれたこととは何の関係もないのかもしれないし、関係があつたとしても、このペンダントからその原因を探り出してゆくことは不可能なのかもしれない。それにもともと、彼女はこのペンダントを見つけることを切望していたわけではない。彼女が竜騎兵隊に入った第一の目的は、彼女がこちらの世界へ引き込まれた原因を作ったハバリア帝国や、その事実を把握していると思われるエラーニア王宮へ少しでも近付くことにある。

もしこの世に神がいるとすれば、マヤを異世界へ放り出した向この世界の神は、彼女にあまり優しくなかったといえるかもしれない。しかしこちらの世界の神は決して彼女を見放さなかった。ギール攻城戦の後、軍上層部は、ファクティム竜騎兵隊に対し、エラーニア王宮のある王都エランへの配置転換を通達してきたのである。

「舞踏会？」

マヤはいかにも怪訝そうな顔をしてラウラにそう訊き返した。

ファクティム竜騎兵隊の面々とともに、王都エランのはずれにある竜騎兵基地に到着した彼女が兵舎に手荷物を置いた途端、隊長のラウラが「エランでの最初の任務」を与えようと言ってきたのだった。

「舞踏会って、みんなが集まってダンスを踊るあの舞踏会？」

ラウラは笑いながら答えた。「そうだ。ついさっき軍上層部のほうから命令があった。『ファクティム竜騎兵隊は今夜の舞踏会に参加のこと』ってな」

マヤは戸惑った。「そんな、いきなり言われても……。だいたいエランって、エラーニア王国の王都だけど、今は最前線のすぐそばにあって、いつ敵の攻撃を受けてもおかしくないんじゃないの？ 舞踏会を開く余裕なんてあるの？」

「確かに、戦の始まったおとしには、ハバリア軍は怒濤の進撃でエランのすぐ近くまで迫った。しかしそれ以降は、ハバリア側の戦力が不足してきたことと、こちらの防衛体制が整い始めたことから、ここの戦線はずっと膠着している。避難していた住民が戻ってきて普通の生活を始めてるぐらいだからな。つまり、同じ最前線でもギールとは状況が全く違っただけだ。ギール攻城戦に勝利した今、お偉いさんたちが舞踏会を開くのは、逆に余裕のあるところを敵に見せつけてやりたいっていうことなんだろう」

「でもあたし、ダンスなんか踊れないし、それに、そんな公の場でどう振舞ったらいいのか……」

「ああ、大丈夫だ。あたしもオクタヴィも舞踏会は始めてなんだから。ルーミアだって、そうだろう？」

マヤとともに話を聞いていたルーミアは、ラウラにそう訊かれ、こくりとうなずいた。

ラウラはそれを見届けた後、言葉を続けた。「舞踏会に出る王族

やら貴族やら軍のお偉いさんだつて、あたしたちのダンスが見たくて呼び出すわけじゃない。彼らが見たいのは、ギール戦線で装甲も付けてなくせに装甲竜騎兵隊と互角に渡り合ったファクティム竜騎兵隊の隊員が、どんな面^{つら}してるのかつてことさ。とにかく、さつきも言ったように、これはれっきとした任務だからな。エラーニア王宮への出撃だと思えば、向こうが攻撃してこないぶん気も楽だろ？」

「え？エラーニア王宮？」マヤは隊長の言葉の最後の部分に敏感に反応した。「舞踏会は王宮で開かれるの？」

「ああ、そうだよ」

今まで乗り気でなかったマヤは、態度を一変させた。「そ、そう？王宮で開かれるの？王宮なんて普通なら絶対に入れないところよね。何となく興味が湧いてきたわ」

ラウラはマヤの変化を別に気に止めることなく続けた。「それは結構。では今すぐ支度を調べてくれ。まだ三時過ぎだけど、いろいろ準備があるから、すぐにここを発たないと間に合わないんだ」

「わかったわ」

マヤはそう言つと、手早く飛行服を脱ぎ、制服に着替えた。

戦い続きだったギールでは寝る時以外ずっと飛行服姿だったので、制服を着るのはファクティム離任式典以来四か月ぶりである。当然、履き慣れないパンプスが彼女の歩行をぎこちないものにしたが、例によってルーミアが杖代わりとなつてくれた。マヤはルーミアの魔道マントにつかまりながらなんとか兵舎を出、ラウラとオクタヴィ

とともに、王宮側が用意してくれたという馬車に慌ただしく乗り込んだ。

馬車は一路、王都エランの中心部を目指して大通りを走り始めた。窓から外の景色を眺めてみると、整然と整備されたその町並みは、たとえ自動車や四階建て以上の建物が見当たらなくても、マヤに故郷の都会の街角を思い出させずにはおかなかった。

このままこの街角を通り抜けて王宮へ直行するのだろうかというマヤの予想に反し、馬車が止まったのは、意外にも一軒の店の前だった。他の三人が当然のような顔をしてそそくさと馬車を降りてしまったので、マヤも慌ててそのあとについて車外へ出た。彼女の目の前には、エラン文字で「貸し衣装屋」と書かれた看板と、華やかなドレスに彩られたショーウィンドーがあった。

更に驚いたのは、今まで「頼もしい同僚の兵士」だと思っていたラウラとオクタヴィが、店に入るや否や、故郷の街でもよく見かけたような普通の女の子に豹変してしまったことだ。次々とドレスを手にとって色や柄がどのと言って元のところに掛け直し、こつちもかわいいと言ってはまた別のドレスを手取るのである。ルーミアまでもがマヤのことをほったらかしにしてドレスの物色に没頭している。彼女は今まで、マヤに対する気遣いを忘れたことは一度もなかったのに……。

半年間、女として生活してきたといっても、そのほとんどを戦場で過ごしたマヤには、彼女たちのそういった行動はやや理解しがたいものに感じられた。マヤは心密かに「やっぱり俺は今でも男なんだな」と日本語で独り言ちた。

ところが、である。マヤの存在をようやく思い出したルーミアが

ドレスを一着持つてマヤのところにやって来た。そしてそのドレスをマヤの前で広げ、彼女の体に合わせるようにして「お姉ちゃん、これ、どう？」と言った。胸の部分が大きく開いたそのピンクのドレスには小さなフリルがたくさんついていて、とても愛らしかった。もし自分がこれを着たらどうなるのだろう　そう思った瞬間、マヤの心の奥底から、今まで経験したことのない感情が溢れ出してきたのである。

マヤの口から無意識のうちに「あ……、このドレス、いい」という言葉が漏れた。

それから三十分ほどの間、貸し衣装屋の店内では、女たちの上げる楽しそうな声が絶えることはなかった。もちろんその中にはマヤの声も含まれていた。彼女たちはいつまでもドレス選びに興じていたかったが、ラウラが「そろそろ決めないと舞踏会に遅れるな」と言い始めたためやむを得ず三十分で打ち切ったのだった。

結局、マヤは白地にところどころ深紅をあしらったドレスを選んだ。胸の部分が大きく開いている。ルーミアによると、胸がそれほど大きくないマヤのような女の子の場合、着ている服の胸の部分が大きく開いていた方が見栄えがいいのだという。当のルーミアの選んだドレスはといえば、ピンクを基調にしたもので、彼女のやや大きめの胸を、フリルをちりばめた布で覆うことによってさり気なく強調している。オクタヴィのドレスは薄緑色のわりとシンプルなものだったが、不思議なことに、彼女の細身の体にはよく似合っていた。一方、ラウラは落ち着いたベージュ色のドレスを選んでいった。二十八歳という年齢にふさわしいシックなデザインだった。背の高い彼女には大人っぽいドレスがひときわよく似合うのだ。

マヤは胸の高鳴りを抑えることができなかった。ドレスにコーデ

イネットした真つ赤な靴が制服のパンプスに比べヒールの高いものだったので、着替える前よりも更に歩きにくくなってしまったが、ドレス姿の淑女は、誰もがスカートの裾を持ち上げてゆっくりと歩くものである。マヤだけが歩くのが遅くて置いてけぼりにされる心配はもうなかった。彼女たちの乗ってきた馬車の御者も、軍服姿の彼女たちには見向きもなかったというのに、ドレス姿で店の前に出てきた「淑女たち」には、打って変わって優しい態度を取った。彼女たちが馬車に乗り込もうとする際、一人一人にうやうやしく手を差し伸べてくれたのである。

マヤの興奮は、次に彼女たちが向かった先の美容院でその度を極めた。ギール駐留の間にぼさぼさに痛んだ髪は、きれいに切りそろえられた上につややかにトリートメントされ、汗と泥がしみついていた顔も、きれいに洗われた上に化粧が施された。夢見心地とはまさにこのことだった。鏡の中で変わってゆく自分を見つめながら、マヤは心密かに「やっぱり今のあたしは女の子のかな」とアウスグ語で独り言ちた。

興奮冷めやらぬマヤたち一行を乗せた馬車は、遂にエラーニア王宮前に到着した。白亜の壁をまとった王宮は、日も沈んですっかり暗くなつた王都の空に多数のかがり火で照らし出され、その偉容を誇示していた。

潇洒な制服を着た若い男性の従僕が、彼女たちを王宮の中へと導いた。入り口から大広間へと続く長い廊下を、普段の五分の一ぐらいの速度でしずしずと歩いてゆく間、マヤの胸は、先ほどから続いている興奮に加え、この廊下の先に待ち受けているものに対する期待感で一杯になった。

果たして、大広間への扉が開かれた時に彼女の目に飛び込んでき

た光景は、彼女の期待を裏切らなかつた。天井には豪華なシャンデリアが三つ吊るされていて、そのガラスの装飾には無数の光の粒がきらきらと輝いていた。そして、広間にたたずむたくさんの紳士淑女たちが、それら光を、その身にまとう宝石や貴金属で反射し、更に、鏡のように磨きあげられた大理石の床が、それらの光と、紳士淑女たちの姿と、天井のシャンデリアを映し出していた。

今朝まで戦場の町にいたマヤたちにとって、そこはまさに別世界だった。あまりの美しさ、きらびやかさに声も出なかつた。

マヤたちの目が光のまばゆさに慣れ始めた頃、大広間の一番奥、楽団が陣取っている一角に、妙に愛想の良い小男が現れ、その体の大きさからは想像できないほどの大声を張り上げた。

「紳士淑女の皆様、今宵は、当エラーニア王宮における舞踏会にお集まり頂き、誠にありがとうございます。ご存じの通り、この王都エランはいまだ、門前から敵軍の掲げる軍旗が望める状況下にあります。しかし、我らが王国軍は、先日のギール戦で見せた武勇を必ずやこのエランで、ひいては王国全土で鳴り響かせ、野蛮なる敵の将兵どもを残らず蹴散らさんものと信じております……」

その小男の口上は、マヤの耳には少し気取った言葉のように聞こえた。それは、その男の話し方自体のせいでもあったが、それ以上に、エランの人たちが話すエラン語のアクセントが、マヤたちアウスグ語を話す者たちには気取った口調に聞こえる性質を持っているからだつた。

小男が「さあ皆様、今宵は楽しみましょう。そして、記念すべき偉大なる勝利を祝いましょう」と口上を終え、楽団の指揮者に目配せすると、楽団は華やかなワルツを奏で始めた。それを合図に、

フロアにたたずんでいた紳士淑女たちは、一部が男女ペアになって踊り始め、他の者たちは邪魔にならないよう壁際へ退散した。

マヤは他の三人とともに大広間の隅へ移動した後、しばらくの間、踊り手たちの華麗なステップに見とれた。そこには何か言葉に尽くせない、調和のとれた美しさがあった。指で弾けばすぐにも壊れてしまいそうな、そんな繊細な美しさにも見えた。マヤはこの調和を壊したくなかった。ダンスなどやっとなことない自分は、間違ってもこの踊りの輪の中に参加できそうにないと思った。

そのうち、軍服姿の中年男性が彼女たちの方へ歩み寄ってきた。背はそれほど高くないものの、歳の割には脂肪の少ない、精悍な体つきの男だった。彼はラウラに微笑みかけると、友人とでも会話するように親しげに話し始めた。

言葉がいくつか交わされた後、ラウラはマヤたちのほうを向き、「この方が、今度あたしたちの上官になったアイリゲン大佐だ」と言った。

マヤは慌てて、背筋を正して敬礼しようとしたが、敬礼は軍服を着ている時だけの表敬動作であって平服を着ている時にはやってはならないということを思い出し、オクタヴィやルーミアに習って、スカートを両手で持ち上げ、ひざを少し折る仕草をした。

アイリゲン大佐は言った。「ファクティム竜騎兵隊のギールでの活躍は本当に素晴らしかった。エランへの配置転換を上層部に頼んだのは実はこの私なんだ。ラウラの率いこの優秀な部隊を、ぜひ私の指揮下に入れて使わせてほしい、とね。今後の活躍にも期待しているよ」

マヤは、オクタヴィとともにその言葉に会釈で応えながら、彼の言葉にはアウスグ語訛りがある、きつとルーミアたちと同じアウスゲント地方の人なんだろうと考えた。

大佐はそこでマヤに目を止め、ほんの少しではあったが怪訝そうな顔をした。「君がマヤ・クフルツか。ラウラから聞いている。ファクティム竜騎兵隊の中でも飛び抜けて優秀だそうだが」

マヤは一応、型通りの謙遜をした。「それほどでも」

「とにかく頑張ってくれたまえ。これからまた大変な戦いが続くかもしれないが」

大佐はそう言っ、最後に再びラウラに微笑みかけてから、その場を後にした。

やがて、一曲目のワルツが終わった。人々は踊り手たちに惜しめない拍手を送った。拍手が鳴り終わると、男たちは、楽団が次の曲の準備をしている間を利用して、新たなパートナーとなる女性を探し始めた。

ところが、新たなペアが配置につき、楽団が今まさに次の曲を奏で始めようとした時、先ほどの小男が再び現れ、楽団の指揮者に演奏をやめさせたのだった。

小男は人々に向かってまた大声を張り上げた。「皆様にお知らせしたいことがあります。先のギール攻城戦を勝利に導く原動力となった、勇猛なる竜騎兵のお三方が、今宵、この舞踏会に、来ておられます」

彼は芝居がかった大げさな仕草で、広間の片隅に突っ立っているマヤたちの方を指し示した。すると、広間にたたずんでいるすべての人々の目が一斉にマヤたちへ向けられた。

あまりに唐突なことだったので、マヤは面食らった。

人々は、次第に賞賛の言葉を口に始めた。マヤたちの近くに立っていた者は直接、ねぎらいと激励の言葉をかけてきた。引き続き小男が「ファクティム竜騎兵隊のお三方、どうか広間の中央へ」と促してきたので、マヤは、ラウラとオクタヴィとともにフロアの真ん中付近へゆつくりと歩み出た。人々は暖かい拍手で彼女たちを迎えてくれたが、マヤはそれでもどきまぎするばかりだった。

しかも、マヤの驚きはそれだけでは終わらなかった。小男が更に「皆様、エラーニアの誇りである彼女たちに、より一層の拍手を。」特に、我らが王国のエース竜騎兵、マヤ・クフルツには最大級の拍手を！」と言って、また大げさな身ぶりで彼女を指し示したのである。

マヤはようやく声を絞り出した。「あ、あたしがエース竜騎兵？
嘘……」

ラウラは娘を思う母のような笑顔をマヤに向け、言った。「撃墜した竜の数ぐらい数えとけて言っただろ。おまえの撃墜数は、ファクティムから通算六十四匹だ。あたしがちゃんと数えて上層部に申告しておいた。おまえは間違えなくエース竜騎兵だよ。おめでとう」

オクタヴィも拍手をしながら「おめでとうございます、マヤ」と言った。

今や大広間では拍手と賛辞が大きな渦となつて、マヤたちを飲み込んでいた。マヤはもうどうしてよいかわからず、ラウラとオクタヴィがスカートを両手でつまみ上げてひざを少し折る例の仕草で拍手に応えるのを、ただただ真似るしかできなかった。

しばらくして彼女たちが広間の片隅へ戻ってきた後も、人々は彼女たちへの賞賛の言葉を口に続けた。中には賞賛というよりはむしろ、下心みえみえでラウラやオクタヴィに言い寄ってくる男性もいた。マヤはそれでも半ば呆然としていたが、ルーミアに「おめでとう、お姉ちゃん」と声をかけられて、やっと我に帰り、人々の賞賛の言葉にまともに受け答えできるようになった。

その後、ワルツが何曲か奏でられるうちに、ラウラとオクタヴィはパートナーを見つけ踊りの輪に参加するようになった。ダンスなんかやったことがないと言っていたくせに、二人とも結構、上手だった。相手の男のリードが良いのかもしれない。よく見ると、ラウラのパートナーはアイリゲン大佐だった。先ほどもそうだったが、二人がお互いを見つめ合う時の目は、単なる上官部下ではなくもつと親しい人間同士が見つめ合う時の目のように見えた。マヤは、もしかしたら二人は大人の関係なのかもしれないと思った。ひよつとしたら大佐は、ラウラをそばに置いておきたいためにファクティム竜騎兵隊をエランへ呼んだのかもしれないとも思った。

その次のワルツが始まった時には、ラウラたちに加えて、遂にルーミアにまでダンスへの誘いが舞い込んだ。ルーミアは、マヤに対する気遣いからその誘いを断ろうとした。しかし、マヤが「ルーミアのダンスがぜひ見てみたいから」と言つて誘いを受けることを勧めたため、ルーミアはしぶしぶ承知して、相手の男とフロアの中央へ出て行つた。

ルーミアがたどたどしくも懸命にステップを踏んでいるさまを見つめているうちに、マヤは何となく疎外感を感じ始めた。よく考えてみると、先ほど人々が自分を賞賛してくれた時も、表面上は愛想の良い笑顔だったが、どこことなく、奇異なものに対する恐れや好奇が混ざった表情だったような気がする。単にエース竜騎兵の自分に畏怖を感じたからなのか。それともやはり、自分が東洋人だからなのか。ファクティムやギールでも、そのような目で見られたことはなくはなかったが、ここではそれがより顕著に感じられた。王都という土地柄のせいなのかもしれない。

次にワルツが終わった時、例の小男がまた現れ「国王陛下、王妃陛下のお出まし」と言った。広間の一番奥の壁に付いているバルコニーに、人影が二つ現れると、人々は拍手と「国王陛下万歳、王妃陛下万歳」というかけ声でそれを迎えた。マヤはこれほど国民に慕われている国王夫妻がどのような人物なのか知りたくて目を凝らしたが、彼女の立っている場所からはバルコニーの中をはっきり見通すことはできなかった。

遠い　マヤは思った　エラーニア王宮の中枢部はあまりにも遠い。今まで漠然と「王宮に近付けば、自分がこの世界に飛ばされた理由と、元の世界へ帰る方法がわかるかもしれない」と考えてきた自分は、あさはかだった。東洋人の自分が簡単に近付くことができない場所だということは、ちょっと考えればわかったろうに

華やかなドレスときらびやかな大広間がマヤにかけた陶醉という名の魔法は、解けつつあった。国王夫妻臨席の下、^{もと}楽団が次のワルツの準備を始めると、ラウラもオクタヴィも、それにルーミアさえも、新たなパートナーとともにフロアの中央へ出てしまった。

マヤは、自分はやはり「調和」していないと感じた。これ以上ここにいる意味も目的もない、もう帰りたいと思った。いま抜け出したところで誰も文句は言わないだろうし、仮に咎められても気分が悪いとも言えよいのだ。彼女は、未だまばゆい光を放つシャンドリアに背を向けて、出口の方へ足を一步踏み出した。

すると。

彼女の前に誰かが立ちふさがった。うつむいていた彼女の目にはその下半身しか見えなかった。それが軍服のズボンらしいとわかると、彼女は顔を上げ、道をあげてくださいと言おうとした。

そのとき彼女の目に映ったのは、見覚えのある顔だった。

「お嬢さん、僕と一緒に踊っていただけますか？」

「ジュート……？」

ジュートは以前と変わらないにやけた笑みをこぼしながら、マヤに手を差し伸べていた。

それから四日後、マヤはエラーニア王国最大の魔道研究機関、王立エラン魔道学校を訪れていた。

この学校で教鞭を執る最上級女性白魔道師ホトは、二年前までルーミアがここに通っていた時の恩師である。ルーミアがマヤに、も

しエランへ行くことがあつたらホト師のもとを訪れようと提案したのは、数力月前、ギール城でマヤが例のペンダントをルーミアに見せた時だった。二人はエランに配置転換になった時、いの一番にここを訪れるつもりだったのだが、舞踏会という任務を与えられてしまったため、実際に訪問の機会を得たのはその翌日だった。ホト師は、間もなく重要な実験を始めるところだが、それまではいささかの暇がある、ほかならぬルーミアと、その姉の頼みとあらば、このペンダントについてできる限り手を尽くして調べてみよう、と言ってくれた。ただし、実験が始まったら、ルーミアは軍務に差し支えない範囲で実験の手伝いをしに来るように、という条件付きだった。

マヤが期待に胸を膨らませながら三日ぶりに「ホト研究室」を訪れると、ホト師はマヤを来客用のソファに座らせ、自分自身は身長百三十センチほどしかないその体を別のソファに預けた。

「残念ながら、なんにもわからなかった」師は、九十歳という年齢を感じさせないハキハキした口調で言った。「図書館でも調べたが、どの書物にもこの宝石に関する記述は見つからなかった。魔宝石が専門の魔道士たちにも聞いてみたが、こんな宝石は見たこともないと言っておった」

マヤはがつくりと肩を落とした。「そうですか。ホト先生や専門家の先生がたにも……」

ホト師は、鎖の環に紫色の宝石のついた例のペンダントをマヤに差出した。「この王立エラン魔道学校にはこの世界のありとあらゆる魔道学的知識が貯えられておる。ここで調べてわからないものは、他のどこに行ってもまずわかるまい」

マヤはペンダントを受け取って手のひらに乗せ、独り言のように

言った。「また振り出しか」

「本当なら、そのような珍しい宝石は研究のためにぜひこのエラン魔道学校に譲っていただきたいと言っべきところじゃが、それはマヤにとつてとても大切なものなのじゃろ？」

「ええ」

ホト師は、そのしわくちやの顔に暖かい笑みを浮かべた。「では、無理は言わぬ。私は、どんなものにもあるべき場所が与えられていると思っておる。マヤがその宝石をどこで手に入れたのかは知らぬが、それがいまマヤの手の中にあるということは、そこがその宝石のあるべき場所なのじゃ」

「すみません。無理言って調べてもらつたうえに、こちらからは何もお返しとなるようなことができなくて」

「お返しなど必要ない。私はルーミアを本当の孫娘のように可愛がつてきた。マヤがルーミアのお姉ちゃんになったのなら、私にとつても孫のようなものじゃ。孫の頼みに見返りを求める祖母などおらぬ」

「そう言えば」マヤは研究室の中をぐるりと見回し、言った。「ルーミアはどこにいるんですか。今日から実験が始まるからって、朝早く基地を出ていったのですが」

「ルーミアはさっき倉庫に薬草を取りに行った。もうそろそろ……」

ちょうどその時、研究室の扉が開いた。

ホト師は「おお、『噂をすれば影』じゃ」と言った。

ルーミアは研究室に足を踏み入れるや否や、姉の存在に気付いた。そして胸の前に抱えていた薬草の箱を机の上に置いてから、マヤのもとへ歩み寄り

「残念だったわね」

と言った。口振りからすると、ホト師からすでにペンダントの調査結果を知らされていたようだ。

マヤは悲しげな表情でうなずいた。

ホト師はソファから立ち上がった、というより、飛び下りて床に着地した。「では、マヤ、私はこれから実験の準備を始めさせてもらうよ。魔道学のことでもたまた何かわからないことがあったら、遠慮なく訪ねておいで」

マヤも席を立ち「ありがとうございました」と言った。

ところがルーミアは、立ち上がったマヤのいでたちを見て目を丸くした。マヤは何と、腿の大部分があらわになった超ミニスカートをはいていたのである。「お姉ちゃん、どうしたの？その格好？」

マヤはちょっと照れながら「変かしら？」と言った。

「うっん、とてもよく似合ってる。似合ってるけど……」

「同じ基地の竜騎兵隊の女の子に訊いたり、ファッション雑誌で研究したの。今のエランではどんなのが流行ってるのかって。でね、

ミニスカートが流行ってるらしいってわかったから、ここに来る前にこれを買って着てきたってわけ」

「そう言えば、三日前にエランの中心街　カスリン通りとかスレダー公園の方に案内してあげた時も、お姉ちゃん、お店で服とかアクセサリーとか熱心に見てたわよね。あ、確かその時リップステイクを買わなかった？」

「つけてるわよ、ほら」マヤはルーミアの方に顔を突き出して見せた。リップステイクとつても、結構、濃いピンク色だ。「『郷に入っては郷に従え』だもん。しばらくはエランに駐留するわけだから、ファッションもエラン風じゃないとね。それに、聞いた？ファクティム竜騎兵隊が装甲竜騎兵隊に改編されるっていう話」

「今朝、基地でオクタヴィに偶然会って、そのとき聞いたわ。竜の装甲を新しく作るのに二週間ほどかかるので、その間はよほどのことがない限り出撃は無しだって」

「だからあたしも、空き時間が増えてエランの街に出ることも多くなるんじゃないかって思ったから、ますますエランのファッションを勉強しとかなきゃってね」

「あたしとしてはお姉ちゃんがきれいになってくれるなら、それはそれで嬉しいんだけど……、でも……」

マヤは冗談めかして高飛車に「なによ、何か不満？」と言った。

ルーミアも冗談で返すことにした。「いいえ、何の不満もございませんことよ、お・ね・え・さ・ま」

「ならば結構です。聞き分けの良い妹でよかったですわ」

「わたくしも、理解ある姉が持てて幸せですわ。……そうそう、流行といえば、お姉様、いまエランでは、リップスティックの色はピンクよりも緑色ですわよ」

「え？ほんと？」

「嘘に決まってるじゃない」

「こら、ルーミア」

その時、今まで横で面白がって聞いていたホト師が「ルーミア、そろそろ始めたいんじゃないか」と言った。

ルーミアはマヤに微笑んで「じゃあ、あたし、今から実験にかか
るから」と言った。

マヤも微笑み返し、「じゃあね」と言った。そして傍らに置いてあったジャケットを羽織り、ホト師に会釈をした後、短いスカートの裾が万が一にも捲れ上がっていないかどうか確認しつつ、研究室を出た。

マヤはその後、乗り合い馬車でエラン中心部へと向かった。

窓の外を流れる夕暮れ時の街角を眺めながら、マヤは先ほどのルーミアとの会話を思い出していた。ルーミアはあの時、しきりにマヤがおしゃれすることが納得いかない素振りを見せていたが、マヤにはその理由がわかっていた。女言葉でしゃべったり女として扱われることに慣れていたとは言え、マヤが仕草まで女っぽくしようと

したり、女しかやらないようなことを敢えてやろうとしたことは今まで一度もなかった。それは、彼女が男に戻る希望を捨てていない証だった。そんな彼女が自らの意志でミニスカートなど穿いた^はとなると、その希望を捨ててしまったのではないかとルーミアが心配するのは無理からぬことだった。

乗り合い馬車は、終点のカスリン通りに到着した。カスリン通りは比較的若者向けの店が立ち並ぶ一角で、その中心には竜の銅像が立っており、いつも待ち合わせの人でごった返している、そんな場所だった。

マヤが竜の銅像の前に着いた時、近くの時計塔の時計がちょうど夕方六時を告げた。周囲を見回すと、若い女性の多くはミニスカート姿だった。マヤは事前に行ったファッション・リサーチが正しかったことを安堵しつつ、今一度、自らのジャケットやスカートにしないかチェックした。

彼女が今日、このような格好をしたのは、先ほどルーミアに述べた理由もあったし、先日の舞踏会でドレスを着たことで着飾ることに「味をしめた」という理由もなくはなかった。しかし、一番の理由^は他にあった。

そのとき彼女は、四日前の舞踏会のことを考えていた。

お嬢さん、僕と一緒に踊っていただけますか？

ジュート……？

ほら、音楽が始まった。さあ、こちらへどうぞ

ちよつと、ジュート、そんなに強引に手を引つ張らないで

おや、これは失礼

もう、ジュートったら

僕が元来、強引なたちだということはご存じでしょう、お嬢さん

お嬢さんって呼ぶのはやめて

ははは、君が僕にそのセリフを言ったのは二度目ですね、マヤ・クフルツ嬢

その妙に丁寧な口調もやめて

ちえつ、せつかくこの俺様が舞踏会の雰囲気に合わせて、^{イト}騎士みたいなしゃべりかたで話してやっただつてのに

ジュートが自分のことを『僕』なんて言うのは気持ち悪い。それに『ナイトみたいな』じゃなくて、あなたはナイトそのものでしょうが

やつと笑ってくれたな、マヤ。さあ、踊ろう

あたし、ダンスなんかやったことない

大丈夫だ。俺の動きに合わせてステップを踏めばそれでいい

ジュートと一緒に踊ったあの数分間にマヤの胸に去来した想いが一体どういう種類のものだったのか、マヤ自身にもよくわからないひとりぼっちだった自分に手を差し伸べてくれた彼の優しさが単に嬉しかっただけのような気もするし、下手なダンスを彼に見らることに恥ずかしくてドキドキしていただけのような気もする。わかっているのは、あの時、自分はこちらの世界に飛ばされて以来、もっとも幸せな気分だったということ、それと、彼がたった一曲一緒に踊っただけで大広間を去ってしまった時、ものすごく寂しい気分だったということである。そして、あの時の想いがどういうものだったかを確かめるには、別れぎわ彼が口にした言葉　四日後の夕方六時、カスリン通りの竜の像の前で会おうという、あの誘惑の言葉に乗ってみるしかないということである。

そうこうしているうちに、時計塔の時計の針が六時二十分を回ってしまった。マヤは携帯電話がないことをもどかしく感じた。しかし冷静に考えてみれば、この世界には携帯電話どころか、普通の電話どころか、腕時計すらないのである。当然、時間の感覚も元いた世界とは違い、ルーズなのだろう。彼女はそう思い直し、辺りの景色でも眺めながら気長にジュートを待とうと思った。

ふとマヤは、三メートルほど離れたところに立っている女性に目を止めた。髪はショートカット。服装は、今のエランの流行に背を向けるかのようにパンツルック、上半身には水色の薄手のジャケツトを羽織っている。身長は、エラーニアの人間にしては低め、百六十センチ弱と言ったところか。体つきは、ジャケットの上から判別できる限り、どちらかという筋肉が多めで脂肪分の少ないスポーツウーマン体型に見えたが、だからといってたくましくて男と見間違えるほどではなく、むしろ適度な筋肉がプロポーションを引き締めている。ただ、もう日が沈んでいたために、街灯の明かりだけではその顔つきまでは見て取ることはできなかった。

その女性は、先ほどからしきりに時計塔の方を伺っている。マヤと同様、誰かと待ち合わせをしているのは明らかだった。マヤはその女性のことを横目で観察しているうちに、何となくその女性が気になり始めた。なぜならその女性の体つきが、相良美玖を連想させたからである。

更に三十分が経った。竜の像前広場ではひっきりなしに人がやってきては待ち合わせの相手と去ってゆく。中には十五分待たされたことに対し不満を述べながら広場を後にする者もいる。どうやらエランの人々は決して時間にルーズではないらしい。なのに、マヤと美玖似のあの女性だけは相変わらず時計塔とにらめっこである。マヤはその女性に、美玖似ということに加え待たされている者同士ということからも、妙に親近感を覚え、心の中で、お互い頑張りましょうと激励した。

するとその女性も、マヤが自分と同様一時間近く待ちぼうけていることに気づき、親近感のようなものを感じたらしい。微笑みながらマヤのほうへ歩み寄ってきたのだった。

近付くにつれその女性の顔立ちがはつきりと見えるようになった。マヤは驚いた。その女性は、体つきだけではなく顔つきまでもが美玖に似ていたのである。いや、正確にいうと、美玖の四、五年後の顔に似ていた。つまり年齢はマヤより四、五歳上のように見えたのである。

しかも、マヤを驚かせたのはそれだけではなくだった。すぐそばまでやってきたその女性が苦笑いしをして

「お互い、待ちぼうけね」

と言った時、マヤはその女性の胸に、紫色の宝石をはめ込んだペンダントがぶら下がっているのを発見したのである。

マヤは思わず「そのペンダント！」と叫んでしまった。

女性はきょとした表情で「え？」と訊き返した？

マヤはその女性の表情に、驚きとともに困惑が混じっていることを見て取り、「あ、ごめんなさい、いきなり変なこと言っちゃって」と謝った。

女性は「いえ、別に気にしてないわ」と言っただけの愛想の良い表情に戻った。「それで、このペンダントがどうかしたの？」

マヤはしどろもどろに「あ、いえ、きれいだなと思って」と応えたが、直後に、そんな応答をしてしまったことを後悔した。きれいだと思っただけで叫び声を上げるなどどう考えてみても不自然だ。

しかし女性は「そう？ありがとうございます」と言っただけだった。

マヤは考え直し、正直に事実　　といつても事実のすべてではないが　　を話すことにした。「いえ、本当のことを言うと、そのペンダントに興味があるんです。あたし、竜騎兵なんですけど、任務中に偶然、そのペンダントにそっくりなのを手に入れたんです。でね、変わった宝石が付いているなって思ったから、知り合いのついでエラン魔道学校の先生に会って、その宝石について調べてもらっただけですよ。そしたら、魔道学校にも知っている人が一人もいないぐらい、すごく珍しい宝石だと言われたんです」

「へえ、この宝石、そんなに珍しいものなんだ」

「あの、あなたはどこで手に入れたんですか」

「どこだっけ？誰かからもらったんだっけ？ええと……確か……」

マヤは、その女性の口から次の言葉が出てくるのを、今か今かと待った。

と、その時。

背後から

「よう、待たせたな、マヤ」

という聞き覚えのある声がした。

振り返ると、そこにはジュートのにやけ顔があった。

「あ、ジュート……」

マヤは一瞬、言葉に詰まった。胸の中に彼に対するいろいろな感情が込み上げてきて言葉にならなかったのである。

ジュートのほうは相変わらずの口調だった。「ほう、ミニスカートををはいて来たのか。こりゃ脱がせやすくていいかもな」

マヤはむくれて見せた。「遅れた言い訳ぐらいしたら？」

ジュートに悪びれる様子はなかった。「遅れたって言うてもたっ

た一時間じゃないか。マヤは知らないかもしれないけど、ここエラ
ンでは一時間ぐらいいは遅刻のうちに入らないんだぜ」

マヤは信用できなかったので、例のペンダントをした女性に尋ね
た。「って言ってるけど、本当？」

女性は首を振った。「ここに住むようになって三年以上経つけど、
そんな話聞いたことない」

ジュートはとぼけた。「さて、マヤにも納得してもらえたような
ので……」

マヤはすかさず「納得してない。全然してない」とツツコミを入
れた。

そこでペンダントの女性が「じゃあ、あたしはこれで」と言っ
て立ち去ろうとした。

「待ってください」マヤは引き止めた。「あたし、ペンダントのこ
とがどうしても知りたいんです。もし差し支えなければ、ペンダ
ントの話を聞かせてくれませんか。……いえ、今すぐじゃなくて、後
日」

「別に構わないけど」

「じゃあ、いつがいいですか？あたし、しばらく仕事が忙しくない
ので、夕方以降ならいつでも空いています」

「じゃあ、さっそく明日、夕方の六時にここで待ってるわ」

「わかりました」

「じゃあね」

女性はそう言って、またマヤから三メートル離れたところに戻っていった。

するとジュートは「今のは誰？」と訊いてきた。

マヤは応えた。「うん、ちょっとした知り合い」

「彼女、少し訛ってたな。どこの訛りだろ？ギーラントのほうかな？それともハバリアに近いエールデラントかな？」

「彼女のことが気になるの？」

ジュートはマヤの言葉にほんの少し嫉妬が含まれていることを感じ取り、意地悪を言った。「そりゃあ、大人の女性だからなあ。誰かさんと違って」

マヤはまた膨れっ面をした。「どうせあたしはガキですよーだ」

ジュートはそれでも「全然大丈夫。俺、守備範囲広いから」と言っただけだ。「じゃあ、そろそろ、飯でも食いに行くか」

「うん」

二人は竜の銅像前広場をあとにした。

ジュートと肩を並べて歩きながら、マヤは思った。先ほど、あの

女性がペンダントをどこで手に入れたかを思い出しかけているちょうどその時にジュートがやってきた。あの場面で自分は、ジュートを待たせておいてその場ですぐに女性から話を聞き出すこともできたはず。なのにそうしなかった。無意識のうちに、元の世界へ帰る手がかりを得ることよりも、ジュートと早く二人きりになることを優先してしまったのだ。今まで一番大切なことは元の世界へ帰ることだと思っていたのに。舞踏会で彼と一緒に踊った時に胸の中に溢れた想いが何だったのか、これではつきりした……

その夜のデートは、マヤにとって舞踏会以上に楽しいひとときだった。

翌日、マヤは約束どおり夕方六時に竜の像前でペンダントの女性と落ち合うことができたが、その時ちよつとした出来事があった。

マヤが六時ちよつどに待ち合わせ場所に着いた時、例の女性は竜の像前でうずくまるようにしてしゃがんでいたのである。マヤは、女性が気分でも悪くなつて立ってられないのかと思い、彼女の横に自分もしゃがんで介抱してあげようとした。見ると、女性は確かに痛々しそうな顔をしていた。しかしそれは自分の体の痛みに対してではなかった。彼女の目の前の地面には白い子犬がちょこんと座っており、その前脚にぱっくり開いた傷口から血を流していたのだ。

マヤがやって来たことに気付いた女性は、マヤに、この子犬は野良犬のようだ、怪我の手当をしてあげたいが、自分の家はここから

歩いて数分のところなので、マヤにも一緒に来て欲しい、話は家でしよう、と言ってきた。マヤが承諾すると、女性は子犬を抱き上げ、竜の像前広場から四方へ伸びる街路のうちの一本へとマヤを導いた。

女性の家は三階建ての古ぼけた小さな共同住宅の中にあつた。マヤの元いた世界で言えばワンルームマンションのような感じだろうか。女性は家の鍵を開け、マヤに中に入るよう言った。入ってみたところ、部屋は八畳ぐらいの広さで、家具やカーテンの色が水色に統一されていた。水色が好きなのだろう。彼女は、まずマヤに手近な椅子に座るよう勧め、次に暖炉に火をおこしてそこにやかんを掛けた。そして棚から布切れを取り出し、子犬の脚に巻いた。子犬は、脚に布が結わえ付けられる間、痛そうに小さな悲鳴を上げたが、結わえ終わつた時には嬉しそうに尻尾を振って応えてくれた。

女性は濡れ手ぬぐいで手を拭つた後、暖炉のやかんから二つの力ツプに湯を注いでマヤの前のテーブルに置き、その一つをマヤに勧めた。それから、マヤの向かい側の椅子に自らも腰掛け、話を始めた。

「まずは自己紹介。あたしはナターシャ・リュコー」

「マヤ・クフルツです」

「このペンダントは」ナターシャと名乗つた女性は胸元のペンダントを首に掛けたまま手のひらに乗せ、言った。「姉からもらったものなの。あたしがこのエランで働くために故郷を出ることになった時、プレゼントしてくれたのよ」

「お姉さんからですか……。あの、お姉さんがそれをどこから手に入れたかわかりませんか」

「うーん、そんな話はしてなかったな。……いや、聞いたような気もするけど、もう三年も前の話だから。うちの姉はね、魔道士なの。昔からいろいろなところへ旅をして珍しいものを手に入れては、故郷に持って帰って来てたわ。あたしもたくさん物のもらってそのたびにいろいろな話を聞いたから、その一つ一つまでは、ちょっと思い出せない」

「お姉さんは今どちらに？」

「相変わらず旅をしてるわ。今はずっと遠い国にいる」

「そうですか……。あ、見せてもらってもかまいませんか」

ナターシャは、首からペンダントを外しマヤに手渡した。マヤはハンドバックから自分のペンダントを取り出し、手のひらの中に二つを並べて見比べた。どちらの宝石も怪しげな光を放っている。専門家でないマヤにはつきりしたことはわからなかったが、こうやって見る限り、二つの宝石は全く同じものように思えた。

ナターシャは言った。「エラン魔道学校で調べてもなんにもわからなかったって言うてたわよね？不思議よねえ。そんなことってあるのかしら。なんか、あたしまで興味が湧いて来ちゃった。……ねえ、クフルツさん、あたしもこのペンダントのことを調べるお手伝いをしちゃだめ？」

「手伝ってくれるんですか？」マヤはナターシャから借りたペンダントを返し、言った。「それは嬉しいですけど、何か当てがあるんですか？魔道学校の先生たちにお手上げだって言われたぐらいなのに」

「当てて言うほどじゃないけど、魔道学校って、結局は魔道学の権威みたいな人たちの集まりでしょ？このエランには正式な魔道学の知識から外れた、そう、『裏の魔道学』っていうのかな、そういうのに精通した人がたくさん住んでるわ。たとえばミエンテ小路っていうところにはそういう人たちがやっているまじない小屋が立ち並んでるの。そんなところで聞いてみるっていう手もあるんじゃない？」

「『裏の魔道学』か……」マヤは思った。確かにそういう場所は、『表の魔道学』の王道を歩いて来たルーミアには考えの及ばないところかもしれない。「そうですね。それはいい手かもしれませんね」

「でしょ？じゃあ、一緒に行こうよ。あたしが案内してあげる」

「いいんですか」

「ええ。さっきも言ったけど、あたし自身も興味が湧いて来たの。それに、面白そうじゃない。ミステリー小説みたいで」

「助かります。あたし、エランには不案内だし、ここには知り合いもあまりいないし」

「じゃあ、今から、って言いたいところだけど、ワンちゃんを放っておく訳にはいかないから、今日はちょっとだめね。明日、朝一番に白魔導師に診せにゆくけど、それまではずっと一緒にいてあげたいもの」

「それにあたしのほうも、あんまり夜遅くなるわけにはいかないんです。一応、軍人ですから、門限があります」

「そつか。本当は、まじない小屋のようなところは夜中が一番、営業が盛んなんだけど、そういう事情なら仕方がないわね。じゃあ、いつ行こうか？」

「あたしの仕事が暇なのはあと二週間ぐらいなので、できるだけ早いほうがいいんです。リユコーさんとワンちゃんの都合がつかなら、明日の夕方にも」

「ナターシャって呼んでいいわよ。あたし、明日は仕事が夜遅くまで入ってるの。あさつての土曜日は？」

「じゃあ、あたしもマヤって呼んでください。あの、あさつてはちよつと」マヤは顔を少し赤らめた。「あたしのほうが都合が悪いんです」

「ナターシャはいたずらっぽく」もしかして昨日の彼氏と？」と尋ねた。

「え？」マヤは一瞬、絶句した。彼氏という響きは彼女にとってあまりにも刺激的だったのである。「ええ……まあ……そうなんですけど……」

「あ、気を悪くした？ごめんなさい、いきなり立ち入ったことを訊いてしまって」

「いえ……、ちょっと照れくさかっただけです」

「じゃあ、その次の日、日曜日ね」

「ええ」

「お昼の一時に、竜の銅像前で」

「わかりました」マヤは椅子から立ち上がった。「では、今日はこれで失礼します」

「それじゃ」

ナターシャがそう言っただけで立ち、マヤを玄関まで送っていった。とした時、先ほどの子犬が駆け寄って来て彼女の足にぶつかった。

彼女は子犬を抱き上げ「だめじゃない。あなたは怪我人なんだから、おとなしくしてなきゃ」と言った。

マヤはナターシャの腕に抱かれています子犬を撫でてあげながら言った。「明日、白魔導師に診せた後、この子どうします？ここ、アパートだから、本当は動物を持ち込んだらだめなんですよ？」

ナターシャは「とりあえず怪我が完治するまではここに置いてあげるつもりよ。もちろんこのアパートはペット禁止だけど、怪我が治るまでの間だけなら、きつとばれやしないわ」と言って微笑んだ。

マヤは思った。ナターシャは笑顔の時間が一番美玖に似ていると。

それから十日間、マヤはナターシャとともにたびたびまじない小

屋や市井の魔道研究家のもとを訪れたが、ペンダントに付いているの宝石のことを知っているという者は一人もいなかった。

十日後の昼下がり、マヤは駐留している竜騎兵基地の兵舎でラウとオクタヴィに呼ばれた。竜の装甲が完成し、装着が終わったらしいので、竜のための駐機場　駐竜場に様子を見に行こうというのである。

ファクティム隊のために割当てられている駐竜スペースに着いた時、濃く明るい赤色、いわゆる緋色の色彩がマヤの目に飛び込んできた。ピムをはじめとするファクティム隊の竜たちが、体に緋色をまとっていたのだった。

ラウラは

「知っているとは思うが、装甲竜騎兵隊は、同じ隊の竜の位置を確認しやすいように装甲に隊固有の色を塗ることになっている。ファクティム装甲竜騎兵隊のシンボルカラーは、隊長権限で緋色に決めさせてもらったよ。マヤの乗るピムは以前から頭部にだけ緋色の装甲を付けてただろ？それに合わせたんだよ。エース竜騎兵、マヤ・クフルツ殿に敬意を表してね」

と言ってマヤにウインクしてみせた。

マヤはピムのすぐそばまで歩み寄り、改めてその勇姿を見上げた。装甲は、ピムの頭部と胴体の大半と翼の一部を覆い、その表面に塗られたばかりの赤い塗料の光沢によっててらてらと輝いてた。ただどういうわけか、頭部の装甲だけは、光沢がないばかりか、塗料がところどころはげ落ち、表面に小さな傷がたくさん付いていた。よく見てみるとそれは、アヴニ村を経つときルーミアが鍛冶屋のお爺

さんに頼んで作ってもらったあの装甲のまま、新しいものと交換されていなかったのである。

そのうち、ルーミアも駐竜場に姿を見せた。おそらく彼女も装甲完成の話をどこからか聞き付けて、様子を見に来たのだろう。

マヤは歩み寄ってくるルーミアに尋ねた。「もしかして、頭の装甲を新しいものに交換しないように手配してくれたのは、ルーミア？」

ルーミアはマヤのすぐ隣に立ち、ピムを仰ぎ見ながら答えた。「うん。だって、あれはお姉ちゃんの大切な『ひこうき』の一部ですよ。それに、あたしにとってもアヴニ村の思い出の一部だもん」

「そつか。そうよね」マヤはルーミアの肩を抱いた。「ありがとう、ルーミア」

ルーミアは微笑みでそれに応えてから、言った。「ねえ、お姉ちゃん、こここのところ毎日、ペンダントの調査に出かけてるわよね。調査は進んでるの？」

「全然」

「そうなの……。あーあ、あたしもホト先生のお手伝いするのを断って、お姉ちゃんと一緒にペンダント調査のほうに加わろうかな」

「それじゃホト先生が困るでしょうに」

「それはそうだけど……。でも、魔道学の実験よりもお姉ちゃんが元の世界へ帰る手がかりを見つけることのほうが重要だと思う。調

査に加わる人の数は一人でも多いに超したことはないでしょう？それに……」

「それに？」

「なんか、調査に出かける時のお姉ちゃん、いつもとっても楽しそうだから」

「そ、そう？」

「ねえ、一緒に調べてくれてる女の人って、どんな人なの？」

「故郷から出て来てエランで一人暮らししてる二十歳の人。喫茶店の店員をやってるって言ってたかな」

ルーミアは「へえ」と相づちを打ったが、その表情はなぜか怪訝そうだった。

マヤは言葉を続けた。「彼女は……ナターシャはいい人よ。この間、怪我をした子犬を拾ってきてね、住んでるのがペット禁止のアパートだから傷を治す間だけ面倒を見てあげるとか言ってたのに、結局そのまま飼っちゃったの。ほら、動物好きの人に悪い人はいないって……こつちの世界では言わなかったかな」

「ふーん……」

「それにナターシャはね、あたしが向こつの世界にいた時、告白しようと思ってた女の子に似ているのよ。顔とか体つきとか、それに性格もどことなく。それで親しみが湧いたっていうか」

するとルーミアは、怪訝そうなというより、何か恐ろしいものを見るような目でマヤを見つめた。

マヤはその時、妹のその表情の意味をようやく理解し、苦笑いをした。「あ、もしかして変な意味に誤解したでしょ？」

「え？」

「あのね、ルーミア、あたしは確かに元は男の子だったから女の子を好きになったことはあるし、そのとき好きになった娘は今でも好きよ。でも女の子になってから出会った娘は、同性としてしか見れないわ」

「そ、そんなふうに思ったわけじゃないけど……」

「別にいいのよ。ルーミアがそう思うのは無理もないことだから」

ルーミアはたとえ一瞬にせよ妙な考えにとらわれてしまったことを恥じ、正直に「ごめん」と謝った。

マヤも妹に余計な心配をさせてしまったことを反省しつつ、「じやあ、ルーミアにもそのうちナターシャを紹介してあげる。きっとルーミアも気に入ってくれると思う。三人で一緒にペンダントの手がかりを探しましょ」と言った。

ルーミアはやっと納得の表情になった。「うん」

「ただし！ホト先生の実験の手伝いが終わったら、ね」

「はい」

マヤは今一度、ルーミアの肩を抱いた。

ルーミアもマヤの腕にすがりついた。「そっか。お姉ちゃん、向こうの世界に好きな人がいたんだ」

「向こうの世界の話はほとんどしてあげたことがないものね」

「そうね……」

「これからもつと話すようにするね」

「うん。でも話せる範囲でかまわないから」

「ルーミア、本当は聞きたかったんでしょ？でも、あたしが異世界から飛ばされてくるときに味わった恐怖とか女になってしまったショックをあたしに思い出させないために、聞かないようにしてくれてたのよね。ルーミアはいつも優しいから。けどあれからもう一年近く経っているもの。あたしもこっちの世界でいろいろな経験をして、もうほとんど吹っ切れたわ」

マヤはそう言って、晴れやかな笑顔を見せた。

「そう。それはよかった」ルーミアは姉のそんな表情を見てると嬉しくなった。何があったのかは知らないが、姉は本当に吹っ切れたのだろう。「そういえば、あたしもお姉ちゃんにのそばにずっといながら、プライベートなことはあまり話さなかったわよね。じゃあ、あたしも意を決して、誰にも言ったことのない秘密をお姉ちゃんに打ち明けるね」

マヤは好奇心に満ちた瞳を妹に向け「え？何？何？」と言った。

ルーミアは少し恥ずかしそうに「あたしの好きな人のこと」と言
った。

「好きな……人？」

その瞬間、マヤの脳裏に、ある言葉がよぎった。

それがどういうわけか、ルーミアのほうも俺にそういう輝き
みたいなものを見るようになった。ちまっとな

それは去年の夏、ファクティム城に拉致されてジュートの相手を
させられそうになった時、彼の口から聞かされた言葉だった。

ルーミアは続けた。「あたしが好きなのは」

マヤは心の中で言わないでと叫んだ。

しかしルーミアは無情にもその言葉を発してしまった。「ジュー
トって人」

マヤの顔色がみるみる青ざめた。まるで街を歩いているときにい
きなり通り魔に脇腹を刺されたかのように。

ルーミアは更に言葉を続けた。「お姉ちゃんがうちの診療所を退
院した日、お姉ちゃんをファクティム城にさらって行った三人組の
一人よ。覚えてる……わよね？お姉ちゃんにひどいことしようとし
た人だから」

マヤは心がちくちく痛むのを感じた。

先日の舞踏会の折、ジュートはマヤと一曲踊っただけで大広間を去ってしまった。だからルーミアは、彼が舞踏会に来ていたことを知らない。ましてや彼がマヤと一緒に踊ったことなど知る由もない。また、先ほどルーミアは、ペンダント調査に出かけるときのマヤが楽しそうに見えると言った。それは、マヤがペンダント調査と称して出かけたうちの何回かは、実はジュートとのデートだったからである。そんなことなど、ルーミアは露ほども知らないのである。

もちろんマヤは、ルーミアがジュートのことを好きだという事実を、今までずっと忘れていたわけではない。現にこの十日間、マヤの意識の表層に何度も現れそうになった。だがそのたびに、彼女はその事実を記憶の奥底へ沈めることで問題を先送りにしてしまったのである。

ルーミアはマヤの様子がおかしいことに気付いた。「ご、ごめん。嫌なことを思い出させちゃった？ やっぱり言うべきじゃなかったわ」

マヤの心は更に痛んだ。ルーミアはきつと、さらわれた時のことをマヤが思い出さないですむようにとの気遣いから、ジュートの話をいっさい口にしないようにしてきたのだ。実際は嫌な思いどころか、あの時すでに、彼への恋心とは言わないまでも、好意のようなものが芽生え始めていたというのに。

しかし、マヤの口からはその場しのぎの言葉しか出てこなかった。「ううん、大丈夫よ。ジュートはあのと看結局、あたしにひどいことは何一つしなかったから……」

「そう？」

「うん。それに彼、結構いい人だったと思うし……」

「よかった、そう言ってもらえて。あのね、この間、知り合いから聞いたんだけど、彼、いまエランにいるんだって。ほら、アウスゲント地方で男の竜騎兵を探す任務に就いてたでしょ？ たぶん、あれが打ち切りになったんだと思う」

「へえ……」

「いまごろどうしてるんだろ」ルーミアはとても寂しそうに言った。「今は戦時下でしょ。軍人がどこでどうしてるっていう情報は、場合によっては機密事項になるから、軍のほうに問い合わせても絶対に教えてくれないわ。だから、噂で聞くか、本人にばったり会える偶然を期待するしかないの」

マヤはその時、もはやルーミアにすべてを打ち明ける以外ないと思った。

「ルーミア……」

ところが、マヤの喉はまるで十ヶ月前にクフルツ診療院で目覚めた時のようにこわばり、どうしても真実の言葉を発することができなかった。それは無論、不動の術のせいではなかった。喉をこわばらせたのは、妹の憧れている人を横取りしてしまった罪悪感と、それを今まで隠してきたことに対する後ろめたさだった。

ルーミアは「ペンダント調査のときにもしジュートに会ったらよろしくね」と言った。

マヤは「わかったわ……」と応えるのが精いっぱいだった。

見るとルーミアは、さっき一瞬見せた寂しげな表情を、早くも笑顔に作り替えていた。

彼女のその作り笑顔は、マヤの心に痛かった。マヤはこれ以上妹と一緒にいるのが辛かった。いまずぐその場を逃げ出したいと思った。

その時。

マヤに意外な「救いの手」が差し伸べられた。

カンカンカンカン……

それは竜騎兵基地に鳴り響くけたたましい鐘の音だった。

「敵襲？」

マヤとルーミア、それに少し離れたところで自分の竜の世話をしていたラウラとオクタヴィたちも、その表情に緊張感をみなぎらせた。つい半月前まで駐留していたギールでは、このような警報が鳴るのは日常茶飯事だった。しかし、エランに配置転換となつてから今まで、このような警報は一度も聞いたことがなかったのである。

それまで静かだった駐竜場の動きがにわかに慌ただしくなった。ファクティム隊の隣に駐竜スペースを割り当てられていたエラン第二竜騎兵隊は、おそらくスクランブル・ローテーションに当たっていたのだらう、警報が鳴り始めて二分と経たないうちに、三匹の竜がそれぞれ竜騎兵を背に寄せ、次々と基地を飛び立った。更にそ

れから十五分ほどの間に、休暇中の一隊を除いて、すべての隊がいつでも飛び立てる態勢を整えた。

もしそこで警戒態勢が解除されていたなら、警報の原因は、敵の偵察竜がエラーニア側の警戒空域にたまたま迷い込んだだけということとで片付けられていただろうが、事態はその逆の方向へと進み始めた。指揮のために駐竜場に現れたアイリゲン大佐が、指令塔から伝声管で送られてくる指示の下、^{もと}一隊、また一隊と発進を命じていたのである。

臨戦態勢にあった最後の隊が遂に飛び立った後、大佐はマヤたちファクティム隊のところにやって来て、言った。「ヤグソフ四姉妹のモーラ率いるアマゾネス隊が単独で戦線を突破して来た。いま友軍の騎士隊と魔道士隊が竜騎兵隊とともに応戦中だが、敵はエラーニア王宮へ迫る勢いだ。王宮から、この基地の竜騎兵隊を全部投入してでも阻止せよとの指示があった。君たちの竜は装甲を付けたばかりだ。本当なら少なくとも二、三日、馴らし飛行が必要なことは重々承知している。が、これは非常事態だ。悪いが、今すぐに出撃の準備を始めてほしい」

マヤたちはすぐさま兵舎に戻って飛行服に着替え、武具を装備した。彼女たちが駐竜場に戻って来て竜の背中に飛び乗るや否や、アイリゲン大佐は待っていましたとばかり直ちに出撃を命じた。

ラウラの「ファクティム装甲竜騎兵隊、出撃せよ」とのかけ声が駐竜場に響き渡ると、緋色の装甲をまとった三匹の竜は、アイリゲン大佐たち地上スタッフとルーミアを残して一斉に王都の空へと飛び立った。

前線の状況は、五キロ離れた基地上空からでも一目瞭然だった。

エラン市街北部に広がる麦畑は現在、両軍が睨み合う最前線となっているため耕作が行われておらず、単なる平原となっている。うっすらと雪の積もったその平原を、装束や甲冑を黄色に統一したアマゾネス隊が一つの黄色い塊となって、行く手を塞ぐエラーニア軍の騎士たちを蹴散らしながら猛進しているのが見える。その様子は、さながら鋭利な黄色いナイフが白布を切り裂くさまに似ていた。

王宮方面への飛行を続けている最中、マヤはふと眼下に広がるエラン中心街、特にその中のカスリン通りに目を止めた。自分はいく数日前にも、あそこでジユートと会い、楽しいひとときを過ごした。その時も心の奥底に、もしルーミアにばったり出くわしたらどうしようという思いがないではなかった。しかし、ジユートの笑顔を見ているうちにそんな懸念は消し飛んでしまった。いや、自分で消し去ったのだ。そうやって問題を先送りにして目先の快楽へと逃げ込んでいくうちに、先ほどのような事態が起こってしまった。これくらいいたいどうすればいいのだろう。ルーミアにどう接したらいいのだろう。もしジユートの口から自分との関係をルーミアにばらされたら、ルーミアに何と言ってあげたらいいのだろう……

それに、今日はピムの動きがどうも重いように感じられる。装甲のせい？ いや、今までにもこの装甲よりずっと重い荷物を運んだことがあるが、操縦テクニクで難なくカバーできた。もしかするとこれは、ピムの動きではなく、自分の心の重さに原因があるのではないか。相手はあのモーラだというのに、このような精神状態でうまく戦うことはできるのだろうか……

やがて、ファクティム装甲竜騎兵隊はエラーニア王宮上空に到着した。モーラ隊の勢いはさすがに当初と比べると鈍くなっていたが、すでにエラン市街北側に侵入を開始しており、このまま大通りを進撃して王宮の北門に到達するのは時間の問題のように思えた。王宮

で働いている人たちのてんやわんやしている様子が上空からでもはっきりと見て取れた。

ラウラはマヤとオクタヴィに對地攻撃を命じた。まずは油の入った革袋に火をつけ、上空から敵兵目掛けて落下させるのである。この攻撃は命中率も悪く、当たったとしてもそれほどダメージがないことから、攻撃と言うよりは、敵の足留めという意味合いが強い。それに、このような敵味方入り交じっての乱戦では味方に被害を与えてしまうことも考慮する必要があった。油袋が底をつく、次は弓矢による攻撃である。当然、ある程度高度を下げねばならず、そのために相手からも矢で狙われる可能性が出てくる。投擲用の槍を投げ付けられる場合もある。弓矢が得意なマヤにとっては、これも足留めに毛が生えた程度でしかなかったが、得意なオクタヴィにとっては、ここが彼女の見せ場だった。彼女の放つ矢は次々とアマゾネスたちに命中した。ところが、身長が百八十センチから二メートル近くある彼女たちがまとう黄色い甲冑は、常人なら重くて動けなくなるほど分厚い鉄板でできていた。そのため、オクタヴィの繰り出した矢はことごとく跳ね返され、アマゾネスたちの進撃速度を下げることはならなかった。ラウラは早々に弓矢戦をあきらめ、近接戦闘への移行を指示した。剣、槍、および竜の爪、牙による地上すれすれの高度からの攻撃である。マヤは小剣を、ラウラは普通の長剣を腰の鞘から抜き、オクタヴィは槍を構えた。

ラウラの号令一下、三匹の竜は一糸乱れぬ見事なコンビネーションでアマゾネス隊の隊列の先頭に突入し、そのうちの数人にダメージを与えることに成功した。弓矢や投擲槍による敵の反撃は、装備したばかりの装甲が弾いてくれた。敵の足並みがわずかではあったが乱れ始めた。

そのときマヤは、敵の黄色い隊列の中にモーラの姿を発見した。

敵の指揮官を狙うのは戦の定石である。数カ月前、デイン砦近郊の森で彼女に助けてもらった恩があるものの、この場面ではそうも言ってもらえない。いまモーラをガードしているアマゾネスたちは、地上の敵に気を取られている。一方、ラウラとオクタヴィの乗る緋色の竜は、先ほどの突入の影響でピムから少し離れた位置にある。陣形を組み直している暇はない。単独でもいまずくに攻撃をかけないと！

マヤの様子に気づいたラウラとオクタヴィが身ぶりでマヤに自重するよう求めたが、無駄だった。マヤは、数カ月前、崖の上からやったのと同じように小剣を構え、モーラ目掛けてピムを突入させた。

果たして、モーラはマヤの小剣を寸でのところでかわしてしまった。そればかりか、ピムが自分のすぐそばを通り過ぎた時、振り向きざまに愛用の長槍を投げ付けてきたのである。普通なら、装甲に覆われているピムの体を槍で刺し貫くことは容易ではない。しかしモーラは、マヤより二、三歳年上に過ぎないのに一隊の隊長を任されるほどの女戦士である。そんな彼女にとって、槍を装甲の隙間に命中させるのはさほど難しいことではなかった。

ピムの受けたダメージは甚大だった。マヤのコントロールを全く受け付けてくれなくなったのである。ピムは大通りの路面に激しく墜落し、その拍子にマヤはピムの背中から振り落とされた。彼女にとって幸いだったのは、ピムが低空から墜落したため、墜落の衝撃はあまり強くなく、結果、彼女自身は軽い打撲程度の怪我ですんだことである。

マヤは痛みをこらえながら状況を確認した。アマゾネス隊の黄色い隊列から数十メートルほど離れた地点に墜落したらしい。隊列の中から、モーラが敵味方の兵をかき分けるようにしてマヤに近付い

てくるのが見える。マヤは小剣を手に取ってよろよろと立ち上がった。すると、モーラはマヤとの間に数メートルの距離を置いて立ち止まり

「おまえはマヤだな。東洋に帰らなかったのか」

と言った。

マヤは「あたしにはこの世界に帰る場所なんてない」と叫んだ。

「そうか」モーラは腰から短剣を抜いた。「では仕方がない。俺がおまえを、すべての人の魂が帰るべき場所、黄泉よみの国へ送ってやる」

モーラの瞳は獲物を狙うハゲタカのように鋭い光を放った。以前、森の中でマヤと立ち会った時の余裕に満ちた瞳とは全く異なっていた。マヤに本気でかかってくるつもりなのは明らかだった。マヤは剣を構え、持てるすべての力をその手に込めた。

モーラは短剣を繰り出した。その剣筋はあまりに速く、マヤの目にとらえることはできなかった。絶体絶命だった。

と、その瞬間。

建物の影から何か白いものが飛び出してきたマヤの目の前に立ちふさがり、モーラの剣を受け止めた。マヤが啞然としている間に、その白いものは更に二度、三度とモーラの繰り出す剣を受け止めた。よく見ると、その白いものは騎士装束を着た男の背中だったのである。

「よう、マヤ」

男は振り返らずにそう言った。しかし、その声はマヤの聞き慣れた声だった。

「ジュート……」

ジュートはその後、自らの長剣で三回、四回とモーラの短剣を受けた。

やがてモーラは剣を引き、数歩引き下がった。

ジュートはモーラに向かって「おい、まさかこれっぽっちの戦力でエランが陥^おとせるなんて、本気で思ってる訳じゃないだろう」と言った。

モーラは応える代わりに剣を構え直し、無言のまま再びジュートに襲いかかった。

ジュートはまたもモーラの剣を受けとめたばかりか、モーラに話しかける余裕すら見せた。「こんなところでやけくそ攻撃なんか仕掛けてる暇は、おまえたちにはないんじゃないのか。この間のギール戦でハバリア軍が戦力を使い果たしちまったってことは、こっちもお見通しなんだぜ」

マヤはジュートの強さを初めて知った。今まで彼のことをにやけ顔のお調子者とは思わなかった。彼が騎士としてどの程度の者なのかなどとは考えたこともなかった。軍隊に入ってからこれまで数ヶ月間、剣を扱う練習をずっとやってきたマヤにも、少しは剣を見る目がある。ジュートが相当な剣の使い手だということは疑いよう

がなかった。

モーラは最後に渾身の力を込めて短剣を繰り出した。それがまたもジュートに受け止められると、彼女は諦めたようにゆっくりと後ずさった。彼女の瞳はもう鋭い光を放ってはいなかった。

マヤは今一度、辺りを見回してみた。アマゾネス隊は王宮北門の少し手前でエラーニア軍の騎士たちに進撃を阻まれ、先ほどまで一枚岩だった隊列もバラバラになりかけていた。

モーラはマヤたちに、満足と自嘲の入り交じった微笑みを投げかけてから、隊列のほうへ戻っていった。彼女がハバリア語で何か叫ぶと、アマゾネス隊は進路を反転させ、北の方向へ撤退を始めた。

ジュートはそれを見届けた後、マヤの肩を抱き

「ちょっと遅くなっちゃったが、まあ、お姫さまを守る英雄ってのは土壇場に現れるって相場は決まってるからな。どうだ？ なかなかっこ良かったろ？」

と、相変わらずの軽口をたたいた。

ところがマヤは、ジュートと目を合わそうとしなかったばかりか、彼の手を振りほどいてしまった。

ジュートは怪訝そうな表情で「どうしたんだ、マヤ？」と尋ねた。

マヤは「ごめん。ジュートの手が傷に触れて痛かったの」と嘘を言った。

ジュートは珍しく「そ、そうか。そりゃ悪かった」と謝った。

するとマヤは

「ずっと言い忘れてたけど、ルーミアと一緒にエランに来てるの。お願い、彼女に会ってあげて」

と言い残し、墜落の衝撃で動けなくなっているピムのほうへ歩き去った。

ジュートはマヤを追いかけることができなかった。彼女の背中がついてこないでと訴えているように見えたからである。

その夜遅く、マヤはカスリン通りにほど近いナターシャの部屋を訪ねていた。

「そう、そんなことがあったの？」ナターシャは、赤ん坊のように胸にすがりついてくるマヤの頭を撫でながら言った。「辛かったのね、妹の好きな人を横取りしてしまったことが。それをずっと隠していたことが」

マヤは言った。「あたし、ルーミアのいる部屋には帰りたくない……」

「じゃあ、今晚はここに泊まってゆきなさい」ナターシャは、優しく、妖しく微笑んだ。「マヤが打ち明けてくれたお返しに、あたし

もマヤに秘密を打ち明けるわ。ハバリアでは人が名乗る時、名字が先で名前があと、しかも女の人は、名字の最後に a を付けることになっているの。そしてあたしがこのあいだ名乗ったリュコー(Liukow)という名字は、ハバリア人の名字、リュコフ(Liukov)をエラン語ふうに読んだものなの。あたしの本当の名前はリュコワ(Liukova)・ナターシャよ」

9 シュラース

モーラ隊によるエラン王宮急襲の二日後、マヤは駐留する竜騎兵基地の兵舎に割り当てられた自室で、昼間だというのにベッドに仰向けになり、ただぼーっと天井を見つめていた。

彼女がクフルツ診療院で不動の術を解かれてからもうかなりの月日が経つ。なのにこうやって仰向けになると、今でも自分の体が動かないのではないかという錯覚に陥るおちいことがある。

入院中の三ヶ月間、彼女は体を動かせないことが苦痛で仕方がなかった。ましてやそれは、術を解いてもらえる日が来るのを待つ以外、自分の力では全くどうすることもできない苦痛である。彼女にしてみれば、自分はひょっとしてこの世に存在する最高の苦痛を味わっているのではないかとさえ思えたのだった。

ただ、いま思い返してみると、あの時自分は、実はそれほど不幸ではなかったような気もする。待つことしかできないのは確かに苦痛だったが、体の自由を取り戻せたら自分がこの世界に飛ばされた原因と元の世界へ帰る方法を一刻も早く見つけてやろうという希望に溢れていた。何も思い悩むことなど無かった。

それに傍らにはいつもルーミアがいた。山矢健太はもともと人見知りする性格だった。もちろん友達は何人もいたし、その中に親友と呼べる者もいた。だがルーミアのように、自分の心の内をすべてさらけ出してもよいと思えるような人間は、山矢の周りにはほとんどいなかった。特に日本に帰ってきてからは皆無と言ってよかった。だから、山矢??マヤは、ルーミアと一緒にいられることそれ自体に対してだけでなく、彼女とそういう絆が築けたことに対しても、

喜びを感じていたのである。

しかし、そういう絆が今となつては重荷だった。心が通じ合っている以上、ルーミアに隠しごとなどではいけない。今度ジュートの話を持ち出されたら、また自分は平常心を失うだろう。そうなればきっと、自分が単にジュートにさらわれたことを気に病んでいるのではなく、もつと別の理由で動揺していることに、ルーミアは気づくに違いない。

それ以前に、ルーミアがジュートとどこかでばったり出会うかもしれない。あるいはジュートのほうからルーミアに会いに来るかもしれない。モーラとの戦いの直後、マヤ自身がジュートにそのように勧めたのだから、そうなる可能性は高い。もし自分とジュートの関係がルーミアにばれたら???何度となくその問いを自分に問いかけた。だが、どうしても的確な答えを見つけれなかった。

マヤが二日前、ナターシャの部屋に転がり込むなどという大胆な行為に及んだのは、一人では解決できないこの問題について人生の先輩であるナターシャに助言を仰ぐためだったに他ならない。

ナターシャにハバリア人であることを打ち明けられたときは、さすがに少し驚いた。だが、ナターシャはすぐに

「エランには、あたしみたいにハバリア帝国が嫌で逃げ出してきた人がたくさん住んでいるのよ」

と説明してマヤを安心させた。エラーニアは排他的な国ではない。マヤのような東洋人が軍隊にいさせてもらえることから、それは明らかである。ならば、王都に他国の民が居住していても不思議はなからう。それに、何ヶ月か前、デイン砦近くの森の中でサハラカ

ンと戦った時にモーラがマヤたちにくれたことを考えれば、ハバリア人が悪い人たちだとも思えなかった。

その夜、マヤは一つのベッドにナターシャと一緒に横になり、ナターシャに話を聞いてもらった。するとナターシャは

「妹さんに打ち明ける必要なんかないわ。マヤは考えすぎよ」

と言った。いくら姉妹だからといって、いや姉妹だからこそ、お互いの恋愛のことにまで口を差し挟むべきではないのだ、マヤのように好きな相手がたまた妹と同じだった場合でも違いはない、自分にも姉がいるからよくわかる、というのがその理由だった。マヤは、ナターシャの考えはちょっとドライすぎる気がしたもの、一理あるとは思った。

翌朝、マヤはナターシャに相談に乗ってくれた礼を言い、ナターシャの部屋をあとにした。ルーミアにジュートのことを打ち明けるべきなのか、このまま放置するのか、それとも他に取るべき道があるのか、結論が出たわけではなかったが、悩みを聞いてもらえたので少しは気が晴れた。もっとも、このような大胆な行為に及んだ以上、彼女はその代価を支払う必要があった。

マヤは天井を見つめるのをやめ、うららかな春の陽が差し込む窓に背を向けるように寝返りを打って、ため息まじりに

「三日間の自室謹慎、か」

とつぶやいた。

ナターシャの部屋から竜騎兵基地の自室に帰ってみると、意外な

ことに、ルーミアは不在で、しかも彼女の代わりに、隊長のラウラが部屋の中央に仁王立ちしていた。ラウラは、ルーミアは無断外泊をしたマヤが心配でいても立ってもいられず、捜しに出かけてしまったと説明した後、マヤを詰問し始めたのだった。

結局、マヤは、無断外泊に加え、王宮前でのアマゾネス隊との戦いの際にラウラの制止を無視して単独でモーラに突進したという「命令造反」の咎^{とが}により、一晩牢に監禁され、今日、審問室で審問にかけられた。幸いにして、無断外泊のほうは、今まで負け知らずだったマヤが初めて撃墜されたショックで精神的混乱をきたしたことが原因とされて酌量の余地を認められ、また命令造反のほうも、あの乱戦の中ではやむを得ない面があったと認められたため、きわめて軽い処分ですんだ。

命令造反については、マヤ自身、反省することしきりだった。彼女は今まで、竜騎兵戦で勝つにしても負けるにしても、それはすべて自分一人のことで、他人はあまり関係がない思っていた。確かに、ラウラとオクタヴィは頼もしい同僚であり、これまで何度もお互いに助け合ってきた。だが助け合うということは、余力のある者が他者の足りない部分を補っているにすぎず、つまるところ、三人がそれぞれ一の力を持っているとすれば、それをすべて足しても三にしかないと考えていたのである。マヤが今回撃墜されたことから得た教訓は、一掛ける三が常に三になるわけではなく四にも五にもなり得るし、逆に四とか五だったものから一引いただけで二にあるいはそれ以下になってしまう場合もあるのだということである。

隊長という立場上、上官や審問官の前では厳しいことを言ってきたが、二人きりになると笑顔で励ましてくれたラウラ。監禁中も審問中も終始優しい言葉を掛けてくれたオクタヴィ。マヤは二人の同僚のことを想い、もう二度と彼女たちに迷惑を掛けるまいと誓った。

また、重傷を負ったピムをほったらかしにして外泊したことも後悔し始めていた。もちろんモーラとの戦いの後、救護班の竜たちが大きな網を使ってピムをちゃんと竜騎兵基地に運んでくれた。基地にさえ帰すことができればそこには竜のための十分な医療設備が整っているのです、何ら心配の必要はない。だがピムは、アヴ二村から今まで苦楽をともにしてきたいわば親友である。親友が傷の痛みに苦しんでいるときに自分だけ苦しさから逃げ出すなど、裏切り以外の何ものでもないと彼女は思ったのである。

そこでマヤの頭の中に、再び妹の顔が浮かんできた。

昨日、マヤを捜しに行っていたルーミアは、基地に戻ってきてマヤが牢に入れられていることを知るやいなや、すぐさまマヤの元に飛んできた。そして今日、審問が終わるまで、ホト先生の実験の手伝いをほっぽり出してマヤのそばにずっと付き添ってくれたのだった。その間も、マヤは何度か、ジュートのことを打ち明けようかと思った。だが牢には牢番があり、とてもそのような込み入った話ができる雰囲気にはならなかった。

また審問のとき、審問官はルーミアに、マヤが妹と同室では謹慎したことにならないのでマヤの謹慎期間中、ルーミアはラウラの部屋で寝起きするようにと言った。ルーミアは姉の処分が決まって安堵すると、昨日さぼった実験の手伝いに再び参加すべく、先ほど魔道学校へ出かけて行ったが、審問官にそう言われているので、今日の夕方、基地に帰ってきててもマヤの部屋には戻ってこない。つまりマヤは、謹慎期間があける三日後まで、一日に数度許されている短い面会時間にだけルーミアと顔を合わせればよいことになる。だからこの謹慎期間は、マヤが妹との問題に正面から向き合うためのまとたないチャンスだった。少なくとも、そうなるはずだった。

三日後、ルーミアは朝一番にラウラの部屋から、まだ起きたばかりのママのところへやってきた。このときばかりはママも、問題を抱えていることを半ば忘れて、自由の身になったことを妹と喜び合った。ルーミアに引き続き、ラウラとオクタヴィも祝辞を述べに来た。その後、彼女たち四人は連れだって兵舎の食堂へとおもむき、朝食に付いてきたミルクで乾杯をすることとなった。

その席でルーミアは

「今日から明日にかけてホト先生の実験が最終段階を迎えるの。それでね、先生から今夜は魔道学校に泊まるように言われちゃった。せっかくお姉ちゃんと同じ部屋に戻って来られることになったのに、明日までお預けなんて、残念」

と言った。

するとラウラは、ママとルーミアを見比べ、あきれたように言った。「おまえら、ホントに仲がいいよなあ。あたしにも兄貴がいるけど、おまえらぐらいの歳の時は、喧嘩ばかりしてたぜ」

オクタヴィも同感だった。「それもあなたたち、本当の姉妹ではいらっしやらないのでしょうか？ 親しい友人同士でもずっと一緒にいれば喧嘩ぐらいはいたしますのに、わたくし、あなたたちが喧嘩したところを見たことございませんわ」

マヤは応えた。「喧嘩なら一度したことある。あたしが竜騎兵隊への入隊を勝手に決めちゃったときにね」

ルーミアはちょっと申し訳なさそうに言った。「あれはあたしが悪いの。お姉ちゃんのお気持ちを理解してあげられなかった。今思うと、あたしってなんて意固地だったんだろうって気がする。でも、あんなのはもういや。もう二度と喧嘩したくない」

ラウラは「まあ、あたしとしても、マヤの謹慎があげたと思った。今度は姉妹喧嘩が原因でルーミアがあたしの部屋に転がり込む、なんてのは御免こうむりたいからね。せっかくギール城のあのカビ臭くて狭く苦しい部屋をおさらばできたんだ。次はどの戦線に回されるのかわからないけど、せめてここにいられる間は部屋を一人で伸び伸びと使いたいじゃないか」と言って笑った。

オクタヴィが応えた。「あら。正直に、殿方をこっそり部屋に招くことができて困るとおっしゃればよいのに」

これにはマヤもルーミアも笑うしかなかった。真顔で、しかもあの口調でこんな冗談をさらりと言ってしまふオクタヴィの性格は、彼女たちにとって謎以外の何ものでもなかった。

ラウラは胸を張って言った。「あたしはこれでも栄光あるファクティム装甲竜騎兵隊の隊長だぞ。そのあたしが男子禁制のこの兵舎に男を招くわけがない。……というか、そんな男がいたら紹介してくれ」

一同はまた大笑いした。

マヤは、アイリゲン大佐という人がいるんじゃないのと言ってや

ろうかと思ったが、ラウラを本気で怒らせそうな気がしたので、それは諦め、代わりに、ちよつと悪戯っぽく「でもあたしの謹慎があげてせいせいしているのは、ラウラだけじゃないわよ。ルーミアの方もさつき、ラウラの部屋で寝泊まりするのはもうこりこりだって言ってた。ラウラのいびきがうるさくて眠れないって」と言った。

ラウラはルーミアを睨みつけ「何？おい、本当か、ルーミア？」とすごんで見せた。

ルーミアは必死の形相で「あたし、そんなこと言っていない！もう、お姉ちゃん、嘘ばかり！」と訴えた。

マヤはウィンクをして「この間、あたしに『エランでは緑のリックステイックがはやってる』なんて嘘を教えてくれたお返しよ」と言った。

オクタヴィは笑いながら「まあ、いよいよ姉妹喧嘩の始まりですわ」と言った。

その時、マヤは思った？？今、自分と妹の関係は良好だ。妹によいなことを打ち明けてこの関係を壊さなければいけない理由が、いったいどこにある？妹も先ほど、もう二度と喧嘩したくないと言っていたではないか。ナターシャの言う通り、自分は少し考え過ぎだ。妹には何も言わず放置しておいたほうがよいのかもしれない。もしジュートのことがばれたとしても、案外、『ジュートとつきあい始めたの。いま話そうとしていたところなのよ』とでも言えば納得してもらえるのでは？？

やがて、朝食パーティーはお開きとなり、ルーミアは先ほど言っていた実験の最終段階の手伝いのために魔道学校へと出かけ、残り

の竜騎兵三人は駐竜場へと向かった。竜を装甲に慣れさせるための訓練飛行を行うことが目的だった。

もつともピムは、先日の傷をまだ治療中である。マヤが基地に駐在する竜専門の男性白魔道士に訊いたところ、ピムの傷はもうほとんど回復しているが、明日までは大事をとって飛行を差し控えた方がよいとのことだったので、マヤはその日、訓練そのものには参加せず、ラウラたちの訓練の様子を見学したり、地上に降りてきた彼女たちとフォーメーションの確認をしたりして訓練時間を過ごした。

夕方、マヤは訓練を終え、ピムの世話などの雑務を一通り片づけてから、カスリン通りへと向かうべく五日ぶりに基地を出た。五日前にファクティム隊の竜たちが装甲を装備し終えるまで、マヤたちは昼間は剣や弓矢の訓練を課せられていたが、夕方以降はある程度の自由行動が許されていた。マヤはその時間を利用してペンダントの調査をしていたのである。装甲の装備が終わった今、マヤたちは本来の任務に復帰し、たとえスクランブル当番に当たっていないなくても、敵の襲来に備えて基地で待機していなければならず、自由行動などできなくなる。しかし相棒のピムが治療中のマヤは、待機していても出撃しようがないことから、ピムが完治するまでの今日と明日に限り夕方以降の外出許可を取ることができたのだった。

カスリン通りで乗合馬車を降りた彼女は、ナターシャの部屋のある建物へ足を向けた。と言っても、今日がナターシャの仕事が遅く終わる曜日だということを、マヤは以前、彼女から聞かされていた。ナターシャの部屋の扉をたたいてみたが、案の定、彼女は不在だった。そこでマヤはあらかじめ用意しておいた紙片を部屋の扉に挟んでおくことにした。紙は、この世界では一般庶民にとってそれほど安い品物ではない。だが竜騎兵基地の事務所には、上層部に提出する書類を作成するのに使う便せんが山積みになっている。マヤは先

ほど謹慎処分終了報告書を提出した際、そのうちの一枚をくすねてこう書き付けておいたのだった。「ナターシャ、この間はいきなり押しかけてごめんなさい。そして一晩泊めてくれてありがとう。私は明後日から本来の任務に復帰します。ですから一緒にペンダントを調査することはもうできません。明日はまだ会えますので、明日の夕方にまた来ます」

マヤはその後、まじない小屋の立ち並ぶミエンテ小路でもう一度ペンダントのことを聞いて回った。カスリン通りなどの繁華街では日没の時刻に街灯がともされ、夜遅くまでその油が絶やされることはないが、広場を離れ路地へ一歩足を踏み入れると、周囲を照らすのは月明かりだけとなる。もちろん、夜空に毎日満月が昇るこの世界では、曇らない限り真っ暗になるということはない。しかし、南側の高い建物に月光を遮られるこのミエンテ小路は例外だった。マヤはさすがに身の危険を感じ、懐の小剣から手を離すことができなかった。これまででは、ミエンテ小路に詳しいナターシャが一緒だったからそれほど怖くはなかった。だが本来、ここはこんな時間に女が一人でうろつくような場所ではない。マヤが仮に自分のことを女だと思っていなかったとしても、他人はそうは見えてくれない。せめて彼女が小剣を人並以上に使えるというのならよかったのだが、彼女の剣の技量はシロウトに毛が生えた程度でしかなかった。実のところ、いくら竜の操縦がうまくても、地上に降りてしまえばかわい少女にすぎないのである。マヤは今、改めてそう思い知らされた。

結局、その日もペンダントのことを知っているという者は見つからなかった。彼女は苦勞が報われなかったことを心密かに嘆きつつ、竜騎兵基地方面へ向かう最終乗合馬車へ飛び乗った。彼女の頭の中には、はたしてこのペンダントを頼りに元の世界へ帰る手がかりを探すことは可能なのだろうかという疑念が生じ始めていた。

基地に帰り着いたのは門限ぎりぎりの午後十時だった。彼女はルーミアに自分の苦労話を聞いてもらえば少しは気が晴れるだろうと考えながら、基地の門をくぐり、竜騎兵用の兵舎へと歩を進めた。ところが、マヤとルーミアに割り当ている部屋を外から見ると、窓の中にランプの光は見あたらなかった。マヤはルーミアが今晚、魔道学校に泊まると言っていたことをようやく思い出し、一層もやもやした気分になった。

兵舎の扉を開くと、自室へ続く廊下は、わずかな月明かりが差し込んでいるのを除けばほとんど真っ暗だった。電気などないこの世界では夜、建物の中が真っ暗なのは、当たり前のことである。これまでもペンダント調査から帰ってきたときはいつもこうだった。なのに、今日に限ってはなぜかその暗闇に多少の不気味さを感じられた。先ほどミエンテ小路で怖い思いをした余韻を引きずっているせいなのか、あるいは、自室でルーミアが迎えてくれないことからくる心細さのせいなのかもしれない。マヤはそう考えながら廊下を通り、自室の扉の前までやってきた。

するとマヤの耳に、自室の中で物音がするのが聞こえたような気がした。一瞬、彼女の心臓が高鳴った。しかし冷静になってみれば、ここは軍事基地のど真ん中である。敵が攻めてこない限り、ここほど安全なところは他にないと言ってよい。今のはきつと空耳か何かだったのだろうと思い直した彼女は、別に警戒することなく、思いつきり扉を開いた。

その時、マヤの目に信じられない光景が映った。窓から差し込む月明かりが、部屋の中央に一人の男の影を浮かび上がらせていたのである。

驚きのあまり、マヤの口からは声が出てこなかった。

男は、マヤが体をこわばらせた一瞬を見計らって、すかさず手で彼女の口を塞いだ。マヤが抵抗しようとすると、男は彼女の体を後ろから抱きかかえるようにして彼女の動きを封じた。

マヤはそれでも手足をじたばたさせ、男の拘束を逃れようと努力した。男は、自らの腕力に限界を感じたのか、背後から声を掛けることで彼女の動きを止めようとした。

「おい、静かにしろ！」

マヤはその声を聞いて「おや？」と思った。なぜならそれは聞き覚えのある声、というより、ここ数日間ずっと、心の奥底で聞いたと願っていた声だったからである。

「ジュート？」

振り返った彼女の目の前には、案の定、ジュートのにやけ顔があった。

「よう、マヤ」ジュートはマヤを抱きかかえたまま言った。「久しぶり、ってほどでもないか。モーラとの戦いの時以来だもんな」

マヤは、自分の心臓がさきほどの恐怖と驚きせいでまだまだどきどきしているのを感じながら言った。「ちょっと、ジュート、こんなところでいたい何やってるの？」

「何って、おまえが帰ってくるのを待ってたんじゃないか」

「そういうことじゃなくて、ここは竜騎兵用の兵舎なのよ。男の人

は入っちゃいけないことになっているのに」

「まあ、そう堅いことは言いっこなしだ」

「基地にこっそり忍び込むだなんて、見つかったら大変なことになるわ」

「見つかりはしないさ。第一、俺は今夜、この竜騎兵基地にちゃんとした軍の仕事で滞在しているんだ。『こっそり』じゃない。もし見つかったら、小便しに行っただいいが自分の部屋への帰り道がわからなくなっでここに迷い込んだとも言えはいい」

マヤは笑いながら「そんな言い訳、通用するはずないじゃない」と応えた。彼女の胸の鼓動は、驚きによるものから、もっと情熱的なものへと変化しつつあった。

ジュートは彼女のそんな感情の変化を感じ取ったのか、あまり見せたことのない優しい笑顔で「そう言えば、モーラとの戦いの時、傷が痛むって言ってただろ。怪我の具合は、どうなんだ？」と訊いてきた。

マヤは「うん、大丈夫」とだけ答えたが、心の中は、彼のそういう気遣いに対する嬉しさでいっぱいだった。

ジュートは「そうか。そりゃよかった」と言った。

マヤはその時ようやく、自分がジュートの胸に抱かれていることに気づき、照れくさくなって、ジュートの腕を引きはがすようにして一歩後ずさった。

ジュートは名残を惜しみつつも、再び強引にマヤを抱きしめたりはせず、ただ黙ってマヤのはにかむ様子を眺めていた。

彼の瞳を正視していると心が溶け出してしまいそうな気がしたマヤは、窓の方へ目をそらした。

ジュートはマヤのそんな反応を見て更に話題を変える必要があると思っただけ。彼女と同じく窓の外に目をやりながら「ところでルーミアは一緒じゃなかったのか」と尋ねた。

たちまちマヤの表情が曇った。「ルーミアは……今日は魔道学校に泊まってる。恩師の先生がやってる実験を夜通し手伝ったって」

「なんだ。タイミングが悪かったな。マヤがこの間、ルーミアに会いに来てくれて言ったから、この部屋まで来てやったんだぜ」

「うん……」

ジュートは、マヤの冴えない表情を見て、その意味するところを察したようだ。「ひょっとしてマヤ、ルーミアが俺のことを好きだからって、彼女に遠慮してるのか？」

マヤは、ジュートに他人の感情を読みとる敏感さがあることを意外に感じつつも「別にそう言う訳じゃ……」と無理に否定して見せた。

「気に病むほどのことじゃないだろ。ルーミアはルーミア、マヤはマヤなんだから」

「でもこの間、ルーミアにジュートのことが好きだって打ち明けら

れたの。なのにあたし、『ジュートはいい人だったと思う』としか
応えられなかった。本当のことが言えなかったのよ」

「じゃあ、俺が言ってる。ルーミアは、俺にとってはいい友人で
しかないってな」

「だけど、ルーミアの気持ちを考えたら、そんなこと……」

ジュートは突然、マヤの肩をひつつかみ、乱暴に彼女の体を揺す
った。「じゃあ、俺の気持ちはどうなるんだ？マヤが好きだってい
うこの俺の気持ちは？それとも、なにか？俺がルーミアに会って、
ルーミアに好きだって言われたら、俺は『はい、そうですか』とで
も応えればいいってのか？」

マヤは「ジュート、痛い」と言って彼の手をふりほどこうとした。

「すまん」ジュートは本当に申し訳なさそうに謝り、マヤの肩から
手を離れた。「考えてみたら、そうなってしまった原因の一端は俺
にもある。三年前、俺がルーミアの気持ちに気づいた時点で、もっ
とはつきりと拒むべきだったんだ」

「ジュート……」

「それじゃ、マヤ、一緒にルーミアに打ち明けよう。ルーミアは聞
き分けの悪い娘じゃない。マヤも知ってるだろう？正直に話せば、
きつとわかってくれるさ」

マヤは気持ちが一瞬と楽になった。「うん……。わかった」

ジュートはマヤを再び抱き寄せた。マヤは初めて自分の意志でジ

ユートの胸に体を預けた。ジュートがマヤの頬に手を添えると、マヤの唇は自然とジュートのほうへ引き寄せられていった。

ところが、その時。

なんと、廊下の方から声が聞こえてきたのである。

「お姉ちゃん、まだ寝てないでしょ？忘れ物を取りに来たの」

マヤは慌ててジュートの腕の中から抜け出そうとした。だが彼女がそうするよりも一瞬早く、部屋の扉が開かれてしまった。

マヤとジュートは、おそろおそろ扉口の方へ目をやった。そこにはルーミアが立っていた。窓から差し込む月明かりに照らし出された彼女の顔色は、まるで蠟人形のように蒼白だった。

三人はしばし見つめ合った。

十秒ほど後、ルーミアはその場を走り去った。兵舎の廊下には、更にその後、数十秒間にわたって、ルーミアの足音がこだまし続けた。

翌日、日が沈んですっかり暗くなったミエンテ小路を、マヤとナターシャが肩を並べて歩いていた。

「そう。そんなことがあったの。それは大変なことになったわね」

ナターシャはマヤから昨夜の顛末を聞かされ、率直に同情の意を示した。「それで、そのあとどうしたの？」

マヤは表情に苦渋の色をにじませ、言った。「ルーミアを追いかけようとしたわ。でも彼……ジュートに『今度、無断で基地を出たことがばれたら謹慎ではすまなくなるぞ』って言われて、追いかけるのをやめたの。ううん、本当は追いかけるのが怖かったただけなのかもしれない」

「妹さんは、今、どうしてるの？」

「ジュートがね、あたしの代わりにルーミアを追いかけてくれたの。と言っても、ルーミアを引き留めるためじゃなくて、彼女が無我夢中で走っているうちに万が一にも危険な場所へ迷い込んだりしないか、見届けるためにね。もう夜も遅かったから。でもルーミアは、基地の前で待たせてあった馬車に乗り込んで、そのまま真っすぐ魔道学校に向かった。そして、無事にホト先生の実験室のある建物に入ってしまった。彼、軍の仕事の関係で、そうやって尾行したりするのは慣れてるんだって。それで、今日の夕方にもう一度、魔道学校へルーミアの様子をこっそり見に行ったら、実験の手伝いの仕事をちゃんとこなしてたって、さっきナターシャに会う前に竜の銅像前で報告してくれたわ」

「マヤはこれからどうするつもり？」

「ルーミアは今夜、帰ってくるわ。その時にはちゃんと話し合いたいと思う」

「そう。……ねえ、あたしのこと恨んでる？この間、マヤの相談に乗ってあげたとき、あたし、『ほっといいても大丈夫』なんて無責任

なことを言っちゃったでしょ？今回のことは、マヤがあたしの助言の通りに行動したために起こったわけだから」

「恨むなんて、とんでもない。ナターシャはナターシャなりに、よかれと思って助言してくれただけだし。それに、どんなことを助言されたにせよ、実際に行動したのはあたし自身だもの。結局はあたし自身の責任」

「よかった、そう言ってもらえて。無責任なのはもう嫌だから余計なことは言わないけど、とにかく妹さんとの話し合いがうまく行くよう祈ってる」

「ルーミアにはありのまますべてを話すわ。それで、もし許してくれなかったとしても」マヤはうつむいていた顔を上げ、言った。「それは仕方のないことだと思ってる。種をまいたのはあたし自身だから、あたしは罰を受けなきゃならない」

ナターシャは優しい笑顔でマヤを包み込み、言った。「マヤの考え方は、きつと正しいわ。いくら大切な妹でも、してあげられることとあげられないことがある。マヤにできるのは事実を打ち明けて誠心誠意謝ることだけ。それを妹さんがどう受け止めるかは、つまるところ、本人次第なのだから。……って、結局、また偉そうなことを言っちゃった」

マヤは、ナターシャに自分の言葉を肯定してもらえたことが嬉しかった。最初は、美玖に似ていることから彼女に親近感を覚えた。彼女にハバリア人であることを打ち明けられた後は、故郷を遠く離れてエランで暮らす者同士という共感も加わった。ルーミアと今のようない関係になってしまった以上、マヤにとってナターシャは心の置けない唯一の存在だった。

しかし、残念なことに、マヤは明日から通常の軍務に復帰せねばならない。

ナターシャの方もマヤと同じ気持ちだったようだ。「話は変わるけど、寂しくなるわね、しばらく会えないなんて」

「そうね」

「きっとビュアラも寂しがるわ」

「ああ、このあいだのワンちゃんね。あたしもすごく寂しい。ナターシャに会えないのも、ビュアラに会えないのも」

「ねえ、マヤ、これを機会に軍隊を辞めて、エランで暮らすなんてのはどう？」

ナターシャに意外なことを言われて、マヤはちょっとびっくりしたが、ナターシャがいたずらっぽい表情をしていたので、冗談だと判断した。「そうね。悪くはないわね。でも……」

「竜騎兵やってる今の生活が充実してる？」

「そういつわけでもないんだけど」

「でも愛着はあるんでしょう？東洋から出て来て、志願して竜騎兵をやってるぐらいなんだから」

「ううん、あたしは志願兵じゃない。入隊したのはクフルツ家に割り当てられた出征義務を果たすためよ」

「ああ、そうか。エラーニア人の白魔道士の養女になったって言うてたっけ。大変ね。出征義務期間はあとどれぐらいなの？」

「実を言つとね、義務期間はもう終わったの。『大きな戦果を上げた者は、出征期間をその戦果に応じて短縮される』っていう特例が設けられていてね。あたし、半年で六十匹も撃墜しちゃったから、出征義務からはもう解放されたわ」

「そう。それはよかったわね。だけど……それでもマヤはまだ竜騎兵を続けてる。なぜ？正義感から？……あ、あたしはハバリア人だけど、故郷を捨ててここエラーニアに来たような人間だから、ハバリア帝国のことを悪く言われても別に気にしないわよ。前にも言っただでしょ。あたしだけじゃない、エラーニアに住んでいるハバリア人はみんなハバリア帝国を良く思っていないわ」

「正義感とか、そういう理由でもないの」

ナターシャは、今度は少し真面目な顔をして「それじゃあ、どうしてまだ竜騎兵を続けるの？」と訊いてきた。

「それは……」

マヤは一瞬、返答をためらった。彼女が軍に入った理由は当初、二つあった。クフルツ家に割り当てられている出征義務を果たすためという一つの理由は、い言ったようにすでに効力を失っている。もう一つの理由、すなわち、エラーニア王宮かハバリア帝国に近づき、元の世界へ帰る方法を見つけ出すという、こちらの理由こそが、真の、そして現時点での唯一の理由である。しかし、先日の舞踏会の折、エラーニア王宮に近づくのは容易なことではないと

はつきりと思い知らされた。となれば、このまま軍隊に居続け、軍務としてハバリアに侵入する機会が訪れるよう期待するしかないということになる。気の長い話だが、閉鎖国家であるハバリア帝国領内に、それ以外の方法で入り込むことができる可能性は、今のところ皆無だった。ナターシャも、戦が始まってからはハバリア人である自分さえ故郷へ帰ることを禁じられるほど閉鎖政策が厳しくなってしまうたと嘆いているぐらいなのだ。しかも、もしこのまま戦が終わる、そのあとにハバリアが閉鎖政策をやめなければ、永久にハバリアに入れなくなってしまうかもしれない。

もっと簡単な方法もないわけではない。単に、ハバリア軍に寝返ってしまえばよいのである。だがこの場合、彼女の養父、クフルツ先生と義妹、ルーミアは、裏切り者の家族としてエラーニア軍に捕らえられ、牢獄にでも放り込まれるのは間違いない。命を救ってくれた恩を仇で返すようなまねが出来るほど、マヤは冷酷ではない。

もっとも、そういう込み入った事情までナターシャに話すつもりは、マヤにはなかった。いくらナターシャが自分に親しみを感じてくれていても、異世界に帰るなどという話はあまりにも荒唐無稽で、信じてくれないだろうと思ったからである。そこでマヤは

「あたし、ハバリアに行きたいの。そうしなければいけない理由が、あたしにはあるの」

とだけ答えておいた。

「そうなの」ナターシャは、マヤが言葉を不自然に濁したことを特に気に留めるでもなく、話を続けた。「知ってる？あたしの故郷、ハバリアはね、二十年前までエラーニア王国の領土だったのよ」

「へえ。ハバリアにはエラン語を話せる人が多いって聞いたけど、そのせいなのね」

「そう。でも二十年前、ハバリア候グロウツがヤグソフっていう怪僧を側近に加えてから、事情が一変したわ。グロウツはヤグソフの進言に従って軍隊を動かし、エラーニア王宮にハバリア皇帝としての地位を認めさせたの。更に、それからハバリア地方をすべて自らの版図に加えるまでに、三年とかからなかったわ。その後もハバリア皇帝は、いろいろ理由をつけてゆつくりと、しかし確実に、エラーニア領内のハバリア人居住地域を自国領に加えていった。そして一昨年、遂に王都エランの北側に広がる最後のハバリア人居住地域、エールデラントを武力で制圧した。でもエールデラントには、多数のエラン人がハバリア人と入り交じるように居住していた。エラーニア王宮も、ここここに至っては黙っていられなかった」

「それで、今度の戦いくさが起きた」

「そうよ。あのね、マヤ。こういう言い方をしたらマヤは気を悪くするかもしれないけど、マヤは東洋人で、この戦いくさとは直接関係がないでしょ？ 極端な話、もしマヤが東洋からやってきたときハバリア領内で墜落していたら、今頃ハバリアの竜騎兵になっていたかもしれないじゃない？ さっきあたしがマヤに竜騎兵をやっている理由を訊いたのは、そんなマヤがどうして命の危険を冒してまでエラーニア軍のために働くのか疑問に思ったからなの。もしかしたら、誰かにだまされてやらされてるのかな、なんて」

マヤはナターシャの言葉の真意を測りかねたが、とりあえず「氣遣ってくれるのは有り難いけど、そんなんじゃないわ。さっきも言ったけど、あたしにはエラーニア軍にいないければならないちゃんとした理由があるの」と答えた。

「そうね。ちょっと変なこと訊いちゃったわね」ナターシャは自嘲気味に微笑んでから、「あ、あのまじない小屋よ。あそこのまじない師、魔石に詳しいんだって。行ってみましょ」と話題を変えた。

ミエンテ小路での調査最終日となったその日、マヤたちは例のペンドントにはめられた紫色の宝石を見たことがあるという者にやつと巡り会うことができた。ただ、そのハバリア人のまじない師から聞かされたのは、彼がハバリアにいたころ、マヤたちのペンドントとよく似たものを誰かが首に掛けているのを見たような気がするという、曖昧模糊とした事実だけだった。確かに、何の収穫も得られないよりはましである。しかし、その程度のことが明らかになっただけでは、少しも事態を進展させることにはならない。ハバリアが関わっていることは、言われなくてもわかっていからである。

マヤは半月ほどミエンテ小路に通い詰めた苦勞が実らなかったことを残念がりながらも、案内してくれたナターシャには礼を述べた。ナターシャは自分はこれからも調査を続けてみると言い残し、別れを惜しみつつ、マヤの前から去った。

カスリン通りでこれまで通り最終乗合馬車に乗り込んだマヤは、これから竜騎兵基地で待ち受けているであろう困難を思い、陰鬱な気分になった。もつとも彼女の心は、さきほどナターシャに話したとおり、すでに覚悟が決まっている。ルーミアがマヤのところにいるのが嫌で、たとえばそのまま魔道学校に泊まり続けるとか、アヴ二村の実家に帰ってしまうようなことになっただとしても、引き留め

することはできないだろう。マヤが心配したのはむしろ、ルーミアがヤケを起こして怪しげな男のあとについていたりしないかということだった。

基地に帰り着いたマヤは、まっしぐらに自室へと向かった。ところが彼女の部屋の前にはラウラが立ちはだかっていたのだった。

マヤが「話はあとにして」と言っただけで自室の扉を開こうとすると、ラウラはマヤの動きを遮って「まず話を聞け」と言った。ラウラの表情がとても真剣だったので、マヤはとりあえず隊長の話に耳を傾けてみることにした。

ラウラは言った。

「用件は二つ。一つ目は、先ほどアイリゲン大佐から聞かされたことなんだが、エラーニア王国軍は、ハバリア軍の占領下にあるエーデルラントを奪回すべく、近々作戦行動を開始する予定であり、フアクティム装甲竜騎兵隊はその準備行動の一環として、数日中にエラン近郊のマグンへ移動することになった。マヤも、その心づもりをしておいてほしい。そして二つ目は」

そこで彼女は、真剣な顔をやめ、ちょっとやるせない表情をした。

「今日からあたしは従者をつけることにしたので、マヤに紹介しておきたい。……おい、出てこい」

すると、マヤの部屋の隣にあるラウラの部屋の扉が開き、中から白魔道士服を着た少女が姿を現した。

ラウラはため息を一つついてから、少女の肩に手を置き、言った。

「これが今日からあたしの従者になった白魔道士、ルーミア・クフルツだ」

マヤはびっくりしてしまい、文字通り開いた口がふさがらなかった。

ルーミアは無表情のまま、感情のこもらない冷たい口調で「よろしく願います、マヤ・クフルツ竜騎兵」と言った。

それから十日後、エラーニア王国軍とハバリア帝国軍が対峙する全戦線において、エラーニア竜騎兵隊による一斉攻撃が行われた。目的は、ハバリア側の竜騎兵基地を空襲し可能な限り破壊すること、および、その際迎撃に出てくるハバリア竜騎兵隊に打撃を与えることであった。

エラン近郊の小さな町、マグンに進出していたマヤたちファクティム装甲竜騎兵隊は、この作戦に際し、エールデラント南東方面空襲隊の護衛という任務を与えられた。この「護衛」という言葉は、わかりやすく言うと「盾代わり」のことである。しかもマヤたちの担当した地区は、敵が最精鋭の竜騎兵を優先的に配置している場所の一つだった。ファクティム隊はギール戦以降、エラーニア軍の中でも精鋭部隊の一つに数えられるまでになっていたのだから、このような大役を与えられたのは当然のことである。とは言えこれは、マヤたちが上層部から掛けられる期待に応えなければならぬ初めての任務だった。ギール戦のように、攻撃してくる敵からただ城を

守っていればよかったのとはわけが違った。つまりマヤたちは、敵と戦うのと同時に、責任の重さから来るプレッシャーとも戦わなければならなかったのである。

戦況は、当初こそ一進一退だったが、次第に物量で勝るエラーニア軍が優勢となっていた。マヤたちも、出撃を繰り返すたびに敵の迎撃が少なくなるのを実感した。モーラとエラーニア王宮前で戦ったとき、ジュートはハバリア軍がギール戦で戦力を使い果たしたと言っていたが、今、マヤの目の前でそれが事実だということが証明されつつあった。それでもマヤは、そのとき撃墜された反省から、この戦いでは常にラウラとオクタヴィとの連携を意識し、決して油断することも増長することもなく、着実に護衛の任をこなしていた。お陰でマヤの撃墜スコアは、遂に八十匹を超えるまでになった。

戦果の芳しさとは裏腹に、マヤの心は晴れなかった。理由は、もちろんルーミアとのことだった。マヤは最初、ルーミアは記憶喪失にでもなってしまったかと思った。しかし、ラウラがルーミアを従者だと言って「紹介」してくれたとき、マヤが名乗る前にルーミアの方からマヤの名を呼んだことから、マヤのことがわからないわけではなさそうだった。現にラウラやオクタヴィには、今までと全く同じように接していた。ではなぜマヤと話すときだけ無表情で、冷たい口調の敬語を使い、しかも「マヤ・クフルツ竜騎兵」と階級で呼ばうとするのか。単にマヤへの痛烈な皮肉のようにも解釈できたが、マヤはそうでないような気がした。ルーミアはもともそんな陰湿なことをする娘ではない。とすれば、先日「お姉ちゃんとはもう二度と喧嘩ない」と誓っていたことから推測するに、どうやらルーミアは、今のマヤを「お姉ちゃん」ではないと見なすことによつてその誓いを破らないようにし、そうすることで精神のバランスを取っているのではないか。

もちろんマヤは、今までに何度もルーミアを呼び止め、ジュートとのことを謝罪しようとした。だがそのたびにルーミアは、忙しいと言って足早に立ち去った。それでもマヤがルーミアを追いかけ、背後から無理やりにもこの次第を説明すると、ルーミアは表情一つ変えず、「へえ。マヤ・クフルツ竜騎兵も大変ですね。どなたのことをおっしゃっているのか存じませんが」などと応える始末だった。

こうなってしまうては、マヤとしてはほとぼりが冷めるのを待つ以外、どうすることもできなかった。幸いにして、と言うべきか、今は作戦中であり、妹とどう接するかなどということを考える余裕もなかったし、またそんなことを考えることが許される状況でもなかった。

エラーニア竜騎兵隊による一斉攻撃は三日間続いた。その結果、半数のハバリア竜騎兵基地に壊滅的な打撃を与え、敵竜騎兵戦力も三割程度を行動不能に陥らせたと見積もられた。一方、エラーニア側の竜騎兵戦力は一割程度が損害をこうむったにすぎなかった。エラーニア王国軍は、開戦時のハバリア軍の奇襲によって奪われた制空権を一年五ヶ月ぶりに奪回することに成功したのである。

しかしこの一斉攻撃は、実のところ、エラーニア軍による次なる反攻作戦の序章でしかなかった。軍上層部は二日後、エールデラントの南東、南方、南西の三つの方面に待機させてあった地上軍にエールデラントの中心都市シュラスへ向けての進軍を命じた。

制空権を奪われたハバリア軍は、あまりにももろかった。中にはエラーニアの大軍を見ただけで戦わずして白旗を掲げる部隊すらいた。ハバリア軍が撤退した町や村にエラーニア軍が進軍すると、エラン人だけでなくハバリア人の住民までもが歓声を上げて彼らを迎

えた。ハバリア軍は残存兵力をとりまとめ、シュラースへと撤退するのが精一杯だった。

進軍開始のわずか半月後、エールデラントに残ったハバリア軍はシュラースに包囲された。彼らの頼みの綱は、ハバリア領内から竜騎兵によって運ばれる補給物資だけだった。だが、制空権を奪われている現状では、それも日に日に少なくなっていくた。

マヤたちファクティム竜騎兵隊はシュラース近くの村にまで進出し、そこからシュラース守備部隊を攻撃したり、彼らに補給物資を投下しようとする敵竜騎兵を追い払う任務に就いた。もっとも、ハバリア軍上層部がシュラースを奪回する気はないらしく、シュラース戦線に回されてくる敵は、歳を取ってやせ衰えた竜に乗った未熟な少女竜騎兵ばかりだった。そのためマヤの撃墜スコアは更に上昇したが、そのような竜騎兵を撃ち落としてスコアを稼いでも、マヤは喜ぶ気になれなかった。

ところが、マヤは一度だけ、哨戒飛行中にとてつもない強敵と遭遇した。相手は装甲をつけていない普通の竜に乗っていた。だがその竜は、この戦線に回されてくる他の敵の竜とは明らかに異なっていた。体が一回りも二回りも大きいのに、動きがとても敏捷だったのである。ピムをはるかにしのぐ運動能力を持つ、年若い竜であることは間違いなかった。竜だけではなかった。それを操る竜騎兵の飛行テクニクも並はずれていた。マヤと互角かひよっとするとそれ以上とも思えた。マヤはあっさりと後ろを取られた。敵の竜は牙をむき、ピムをはじめとするすべての飛行竜の弱点である翼の付け根に、今まさに噛みつきこうとしていた。マヤは初めて空中戦で撃墜されるかに見えた。

彼女の窮地を救ってくれたのは、ラウラとオクタヴィだった。少

し離れた別々の空域を哨戒していた彼女たちはマヤが苦戦しているのを見つけると、すぐさま駆けつけてくれたのだった。ファクティム竜騎兵隊がフォーメーションを組んだ今、たとえマヤ&ピム以上の能力を持つ敵であっても一匹ならば怖くはなかった。たちまち形勢は逆転した。不利と見た敵竜騎兵は、ハバリア語で何か叫んで竜に頭を北へ向けさせ、戦闘中の敏捷さそのままに、信じられない速度で戦闘空域を離脱した。マヤたちに追撃のいとまなど与えてはくれなかった。

この強敵との戦いの折、マヤは不思議に思ったことが二つあった。一つ目は、相手の竜騎兵が恐ろしく無表情だったこと。その無表情さたるや、今のルーミアがマヤに接するときの冷たい表情が、愛想のよい笑顔に思えてしまうほどだった。エラーニア王国竜騎兵隊の中でも精鋭のうちに数えられるファクティム隊の三匹の装甲竜と対峙すれば、普通、冷静ではいられないだろう。なのにその敵竜騎兵は、表情に焦りの色を見せなかったばかりか、眉毛一つ動かさなかった。彼女は非常に肝の据わった竜騎兵だったのだと言われればそうかもしれない。だがマヤの目には、その女が状況を冷静に分析しているようにさえ見えなかった。言ってみれば、マネキン人形が竜に乗っているかのような、そんな印象を受けたのである。

二つ目、これはマヤの思い違いかとも思われたが、マヤはその敵竜騎兵の顔を以前、どこかで見たような気がした。それも一年以上前、つまりこの世界に飛ばされる前に目にしたような覚えがあったのだ。もしその記憶が正しければ、マヤ以外にこの世界に飛ばされた者がいるということになる。となれば、その者を追求することであるいは元の世界へ帰る方法がわかるかもしれない。マヤは、ここで、どういう状況で、その顔を見たのか、そしてそれが誰なのかを思い出そうと記憶の糸をたぐってみた。しかし結局、思い出すことはできなかった。

エラーニア王国軍がエールデラントに進軍を開始して二十日後、シュラーズは陥^おちた。作戦開始前に軍上層部が定めた二ヶ月以内という攻略目標期日を、大幅に下回っての大勝利だった。

シュラーズが陥落すると、マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊はすぐさまシュラーズ市内への進駐を命じられた。エールデラントがハバリア軍の支配から解放されたと言っても、いまだシュラーズ周辺でゲリラ化したハバリア軍残存兵との小競り合いが断続的に続いている現状では、エラーニアの竜騎兵の大部分は、ゲリラによる襲撃を避けるために、なおシュラーズのはるか南方に留め置かれざるをえない。最精鋭のエラン第一装甲竜騎兵隊に至っては、やっと王都エランの北隣の町に進出したばかりにすぎないのである。その中でファクティム隊が先陣を切ってシュラーズ進駐を命じられたということは、エラーニア軍上層部がファクティム隊を優秀な部隊としてよほど信頼しているのか、さもなければ逆に、秀でているのをよいことに厄介ごとを押しつけているのかどちらかなのだろう。

マヤたちは当初、シュラーズ城の駐竜場に進駐しようと考えた。ところがそこは、先日行われたエラーニア竜騎兵隊による一斉攻撃の折、徹底的に破壊されており、駐留するには修復工事が必要だった。そこで仕方なく、彼女たちはシュラーズ上空を飛び回り、駐留が可能なスペースを探した。竜を三匹駐留させるには、かなりの面積を必要とする。特にシュラーズのような街中でそのようなスペースを確保するのは、容易なことではなかった。結局、シュラーズはずれにある農場に程よいスペースを見つけ、農場主との交渉の末、

ようやく仮の駐竜場として使用することを認めてもらうことができたのだった。

日没後、ラウラはマヤに仮眠を取るよう命じた。シュラースに複数の竜騎兵隊が進出してくれば、寝ずに夜間の敵襲に備える当番を隊ごとに交代で務めることができるようになるのだが、今はまだ一隊しか進駐していないため、隊の中でそのような当番を務めるローテーションを組む必要があったのである。

マヤは仮の兵舎として使わせてもらうことになった農場の納屋で、干し草の山をシートで覆って作ったベッドに横になり、目を閉じた。しかし日没して間もない時間に眠れと言われても、そう簡単に眠ることなどではししない。そこで彼女は仮眠を諦め、納屋の周囲をぶらぶらと歩き始めた。

すると。

彼女の目の前に、意外な人物が現れたのだった。

「お久しぶり、マヤ」

その人物は水色のジャケットを着、髪をショートカットにした若い女性だった。

「ナターシャ!?」マヤは驚きを隠さなかった。「どうしたの?どうしてナターシャがこんなところにいるの?」

ナターシャは満面の笑みをたたえ、言った。「さつき赤い竜が空を飛び回ってたのを見かけたのよ。ほら、この間、マヤ、話してくれたじゃない、マヤたちの隊の竜は装甲を赤い色に塗ってるって。」

だからきつとマヤたちだつて思つて、追いかけてきたの」

「そういうことじゃなくて、どうしてシュラースになんか来たの、つて。ここはまだ危ないのに」

「そう言えばマヤには言つてなかったかな？あたしね、三年前にエランに移り住む前はこのシュラースに住んでいたのよ。たった一年間だったけど、それでもそのときお世話になった人が何人かいたから、安否を確かめたくて、それで、五日前にここがもうすぐ解放されるつていう話を聞いて、ビュアラを近所の人に預けてエランから出てきたの」

「そうだったの。それは大変だったわね。あ、こんなところで立ち話も何だから」

マヤはそう言つて、ナターシャを納屋の中へと案内した。

ナターシャはマヤに勧められるまま、太い丸太を輪切りにして作った椅子の上に腰掛けた。見ると、納屋の中央には火が焚かれ、その上に小さなやかんが掛けられていた。マヤは井戸から汲んでおいた水で手をすぐようナターシャに勧めてから、自分も手をすすいだ。次に、片隅に置いてあつた自分の背囊からカップを二つ取り出し、やかんの湯でいったんすすいで湯を捨てた後、改めて湯を注ぎ、ナターシャの座っている隣の丸太椅子の上に置いた。

マヤは言つた。「それで、こちらの知り合いの人たちは、無事だったの？」

ナターシャは答えた。「ええ、おかげさまで」

「それはよかったわね。でもびつくりしたわ、ナターシャがこんなところまで訪ねて来てくれるなんて。それに、ここひと月ほど、ずっと戦ってばかりだったから、こんなふうになんか誰かとくつろいで話すなんてほとんどできなかったの。だから、すっごく嬉しい」

「彼氏とも全然会ってないの？」

「ええ。作戦が始まってからは一度も」

「寂しいわね」

「まあね。でも今は戦時下だもの。軍人の彼とエランで何度も会うことができたのが不思議なぐらいよ」

「じゃあ、妹さんは？」

「シユラースに来てるわよ。今は隊長のラウラとオクタヴィと一緒に小川の向こうの牧場で竜の世話をしてる」

「あれ？あれだけ仲がいいって言ってた妹さんが、ここに一緒にいないってことは、もしかして……？」

マヤは苦笑いしながら応えた。「ええ、まだ仲直りできてないわ。って言うか、向こうがとりつく島を与えてくれない」

ナターシャはマヤに同情した。「ひと月も経っているのに許してくれないなんて、それって、ちょっとひどくない？」

「そうかもね。でも、いつか許してくれるかもしれないし、もうずっとこのままなのかもしれない。ルーミアね、あたしのことを他人

扱いするのよ。おかしいでしょ？まあ、面と向かって嫌みを言われるよりはましよね」

「かわいそうに」

「なんか、もうどうでもよくなってきた。ルーミアのことも、ジュートのことも、竜騎兵の仕事も。あーあ、この間、ナターシャに言われたみたいに、軍を辞めてエランにでも住もうかな」

「軍にいないならない理由があるんじゃないの？」

「うん、それも最近、ちょっとね……。ねえ、ナターシャ、エランって住みやすい？あたし、生まれたのも育ったのも大きな街だったから、本当言っと、アヴニ村ってあまり住みやすいとは思えなかったの」

「どうかな。あたしは、ドウムホルクで生まれ育って、このシユラースに一年、エランに三年住んだけど、どの街もそれなりにいいところはあったから」

「そう言えば、ナターシャってハバリアの首都のドウムホルク出身だったのよね」

「マヤはなんていう街の出身なの？」

「あたしは……」

マヤは言葉に詰まった。彼女はこの世界では東洋のブンゴリアという国から来たことになっている。彼女がクフルツ診療院を退院した日、彼女をファクティム城へさらうべくアヴニ村にやってきた

ジュートたち一行に、ルーミアが口から出任せでそう応えてしまったからである。マヤは、自分の出身地を人から尋ねられてもよどみなく答えられるよう、あらかじめ地図でブンゴリアの首都の名前を調べておいたのだが、このようにいきなり尋ねられると、やはりなかなか口について出てくるものではなかった。だからといって黙っているわけにもいかなかったと思った彼女は、ブンゴリアの地名などナターシャはどうせ知らないだろうと判断し、とっさに元いた世界の故郷の都会の名前を答えた。

「へえ」案の定、ナターシャは何の疑問も持たなかったようだ。「いかにも東洋的な響きね」

マヤは怪しまれなかったことに安堵しつつ、「そうかな」とあいまいな返事をしておいた。

するとナターシャは、不意にマヤの顔をまじまじと見つめ、言った。「ねえ、マヤ、故郷ではすぐもてたんじゃない？」

マヤは首を振った。「まさか」

「だって、マヤってかわいいもの。よく言われたでしょ？」

「ううん。言われたことない」

「じゃあ、あたしが言ってあげる。マヤはかわいい。とっても」

マヤはどう答えてよいかわからなかった。

今、納屋で焚かれている火の中で、まきがパチツとはじける音がした。

ゆらゆらと揺れる炎を見つめているうちに、マヤは何となく不思議な気分になった。以前ルーミアにも話したとおり、マヤは女性の肉体を得て以降、女性を異性として見ることができなくなっている。いま考えてみれば、その兆候は、クフルツ診療院に入院していたころから現れ始めていた。ルーミアはマヤ？山矢の入院中、皮膚の再生具合を確かめるために彼（女）の体をなで回したり、彼（女）の顔の再生具合を見極めるために自分の顔をすぐそばまで近づけてきたりしたことが何度もあった。山矢はそのとき、確かにちよつと恥ずかしいとは感じた。しかし、十六歳の少年がルーミアのような女の子にそのようなことをされたら普通どのような感情を抱くかを考えれば、山矢の精神的女性化はその時点でかなり進んでいたことがわかる。その後、マヤとなった彼が、ルーミアとともに裸で水浴びをしたときには、もうすでに、自分が女性の裸を見ているのに特別な感情を抱いていないことにすら気づいていなかった。そして今、ジュートを彼氏と呼ばれて少しも違和感を覚えないほど、マヤは自分を女性だと自覚するようになっていた。それは、単に精神を女性の肉体に移し替えられたわけでも脳を移植されたわけでもなく、魂自体を女性として再生されてしまったことによる、当然の帰結であった。だから彼女はこの時、ナターシャに対して異性に抱くような衝動を感じていたわけではない。だが、そういうものとは異なる種類の、最も深い想いが胸に溢れていたのは確かだった。

ナターシャは、どうやらマヤのそういう想いを肌で感じ取ったらしい。マヤの座っている隣の丸太椅子に座り直し、その体をマヤの体へびったりと寄せてきたのだった。

「ハバリアではね」ナターシャは言った。「仲のよい女の子同士がデープ・キスをしたり抱き合ったりすることは、全然変なことじゃないのよ」

マヤはちよつと驚いて、身をこわばらせた。ナターシャは大人っぽい、妖しい微笑みをたたえ、マヤの瞳をのぞき込んできた。そうしているうちにマヤの体のこわばりは、まるで熱したチョコレートのように柔らかくほぐれていった。

ナターシャはマヤの体をその腕で包み込んだ。マヤが体をナターシャの胸に預けると、ナターシャは自分の唇をマヤの唇の上にそつと重ねた。それはマヤにとってファーストキスだった。

何秒か何十秒か後、ナターシャの唇は、甘酸っぱい余韻を残してマヤの唇から離れた。それからしばらくの間、二人はじつと、相手の瞳に自分の姿が映るのを見つめ合った。やがてナターシャは着ている服の胸の部分をはだけ、マヤの手を取って自分の胸のふくらみに触れさせた。マヤはその時、ほんの一瞬だけ、魂の奥底に宿る男性の感情に支配された。

するとナターシャは突然、自分の体をマヤから引き離れた。マヤは何か間違ったことをしてかしたのかと思い、おそろおそろナターシャの表情を伺った。しかしナターシャは、先ほどと変わらない大人の微笑みのまま

「マヤって、なんか男の子みたい。時々そう思うことがあるわ」と言った。

マヤは内心、どきつとした。だがナターシャの笑顔を見る限り、彼女がそのセリフを本気で言ったとは思えなかったのだ。

「軍隊になんかいるからなのかな」

とだけ応えておいた。

ナターシャは、はだけていた服を直し、カップに注いであった湯を一口飲んでから、言った。「ごめん。さっき『ハバリアでは女の子同士が抱き合ってもかまわない』なんて言ったけど、あれは嘘。マヤがあんまりかわいかったから、ちよつとからかってみたくなただけなの」

マヤは今になって、自分たちがいかに恥ずかしいことをやろうとしていたかに気づき、顔から火が出そうになった。「もう。ナターシャったら」

ナターシャは、今度は子供のようにならずらっぽく微笑み、言葉を続けた。「ねえ、マヤ。ずっと前、あたしは、エラン語のナターシャ・リュコーと、ハバリア語のリュコワ・ナターシャっていう二つの名前を持っているって話したわよね」

恥ずかしさによる動揺を鎮めるためにカップの湯を一口飲み込んだマヤは、ナターシャのその話題転換の方向性がよくわからなかったものの、そういう話があったことは思い出し、とりあえず「ええ」と相づちを打った。

「本当のことを言うとね、あたしにはもう一つ名前があるの」

「もう一つ?」

「そうよ。それは四年前、結婚してこのシュラースに住むようになるまで名乗っていた名前なの。いわゆる旧姓ってやつね」

「ナターシャ、結婚してたの？」

「ええ。あたしは四年前、家出同然でドウムホルクを出た。そして放浪の末にこの町に流れ着き、ハバリア系住民の彼と出会ったの。あたしはすぐに彼に夢中になり、ほどなく結婚した。彼と一緒に暮らした一年間は、今思い返してみても本当に楽しかった。あたしの人生で最も幸せな時間だった」

「あの、じゃあ、旦那さんは、今は……？」

ナターシャはゆっくりと丸太椅子から立ち上がり、マヤに背を向け、言った。「死んだわ。狂信的な反ハバリア主義者のエラン系住民に殺されてね。もちろんあたしも一緒に殺されるはずだった。でもあたしはその時たまたま不在だった」

「そんなことがあったなんて……」

「その後、あたしはエランに移り住んだ。エランのような大きな街にいた方が、自分がハバリア人だとばれずにすむと思ったから。だけどね、マヤ、あたしはエラン人を恨んでいるわけじゃないのよ。もちろん夫を殺した犯人には憎しみを抱いたわ。でも逃亡していたその犯人は、おとしハバリア軍がエールデラントに侵攻してきた時、真っ先にハバリア軍にとらえられて、留置所に連行される間になぶり殺しにされたって聞いた。だから今は誰も憎くないし、誰も恨んでいない」

「ごめん、ナターシャ。その話、あまりにもショッキングすぎて、あたし、ナターシャにかける言葉が見つけれない」

「別にいいのよ。同情のセリフは聞き飽きたから。でもその事件を

境に、あたしは変わったわ。それまでは、エラン人とハバリア人の対立なんてあたしには全く関係のないことだと思ってた。この戦^{いくさ}が始まる少し前に姉や妹たちが連絡を取ってきてあたしにある仕事を命じたとき、その仕事を何のためらいもなく引き受けたのも、その変化のせい」

「妹？ナターシャにお姉さんがいるって話は聞いたことがあるけど、妹さんもいたの？それにお姉さんたちの命じた仕事って？」

ナターシャはマヤの方を振り返り、言った。「あたしの下の妹の名前はニーナ。上の妹の名前はモーラ。そしてあたしがそのとき引き受けた仕事は、スパイよ」

マヤは愕然となった。

「ヤグソフ……四姉妹……なのね」

彼女の口からはそれ以上の言葉が出てこなかった。また敢えて口にする必要もなかった。訊き返さなくてもすべて明らかだったからである。

「お願い、マヤ」ナターシャはいきなりマヤの手を取り、言った。

「あたしと一緒にハバリアに来て。あなたならハバリアでもきつとエース竜騎兵になれるわ。だってあなたはそのため^{ため}にこの世界に呼ばれたのだから」

「やっぱりあなたたちだったの、あたしをこの世界に呼び込んだのは」マヤは苦渋の表情を浮かべ、言った。「ナターシャ、あなたはずっとあたしをだましてたのね」

「確かにあなたに近づいた目的は、あなたの正体が異世界から飛ばされてきた男の子じゃないかって疑ったからよ。ニーナと二人でこっそりマキナスの森の墜落現場を訪れたあたしは、ひよっとしたら燃え尽きかけた男の子の魂が女の子の魂として再生されたんじゃないかって考えた。だけどニーナはそんなことあり得ないって言っってはなからあなたをマークしなかった。本当に東洋から来た女の子だと思ってた。あたしも最初、確信が持てなかった。そこであのペンドントを首にかけて、カスリン通りの竜の広場前で待ち合わせをしているあなたの前に現れた。あなたが異世界から来た男の子ならペンドントを見て何か反応するだろうと思ったから。あなたは確かに反応したわ。でも、それは、あたしが予想した反応とは違った。話がややこしくなったのは、モーラが偶然、あなたにあのペンドントを渡していたせいよ。お陰で、あなたが本当に東洋人の女の子で、モーラからもらったペンドントがただ珍しかったから興味を持っただけっていう可能性がずっと捨てきれなかった。そう、さっきあなたの口から異世界の日本にある街の名前を聞かされるまでね。前に言っただしょう。姉はよく私に『旅』の話をしてくれたって。旅っていうのは異世界への旅のことよ。姉の話の中には、日本の地名がいくつも出てきたわ」

「あたし、あなたのことを本当の友達だっと思ってたのに……」

「あたしだっけそうよ。きっかけはどうあれ、今はあなたがあたしにとっが一番の友達だっけことは事実だもの。だからこそこうしてお願いしてるんじゃない。マヤ、ハバリアへ来て。戦うのが嫌なら別に竜騎兵をやらなくなっけいい、エラーニア軍を辞めてハバリアへ来てくれるだけでもかまわないの。ハバリアにさえ来てくれればあなたを元の世界へ帰してあげられるんだから！」

「え？」その言葉はマヤにとって青天の霹靂のごときものであった。

「本当？本当に元の世界へ帰れるの？」

「もちろん」ナターシャはマヤの手を更に強く握りしめた。「呼び込んだのはあたしたちなんだから、逆に向こうへ飛ばすことも当然出来るわ」

「帰れる……、元の世界へ……」

マヤは虚空を見つめ、今までこの世界で自分がしてきた苦労を想い、向こうの世界で自分を待っている人たちの顔を思い浮かべた？父、母、友人たち、アクロバット飛行のコーチや仲間たち、そして相良美玖。

ナターシャはマヤの肩を抱いて椅子から立ち上がらせ、言った。

「ね、一緒にハバリアへ行こ」

マヤはナターシャの瞳を見つめた。

ナターシャの顔に、美玖さながらの笑みがこぼれた。「ね？」

ところが。

「いや」

マヤは首を横に振った。

予想外の答えに驚いたナターシャは声を荒げて「どうして！」と叫んだ。

マヤは言った。「あたし、やっぱりあなたたちが信用できない」

「どうして！？どうしてなの！？どうしてそんなことを言うの？」

「あたしがこの世界に飛ばされてしまったのも、女になってしまったのも、竜騎兵なんて仕事をしなければいけなくなってしまったのも、元はと言えばみんなあなたたちのせいなのよ。考えてみて。医者に殴られて大怪我をさせられた上にタダで入院させてやるって言われたら、どんな気持ちになるか」

「あたしのことを友達だと思ってるんじゃないの？今そう言うたじゃない。それなのに信用できないの？」

「ナターシャのことは全く信用していないわけじゃないわ。だけど、ハバリアに行けば、あたしを迎えてくれるのは自分たちの都合であたしを異世界に飛ばすような身勝手な人たちなのよ。そんな人たちを信用するなんて、できるわけない」

「でも、でも、マヤはさつき、妹さんのことも彼氏のこと竜騎兵の仕事もどうでもよくなっただって言ったわよね。ハバリアに来れば、異世界に帰れば、そんな嫌なこともう忘れられるのよ」

「確かにさつきはそう思った。でもあたし、やっぱりルーミアが大事。ジュートが大事。一緒に戦ってくれる仲間のことが大事」

「じゃあ、どうしてもあたしと一緒に来てくれないの？」

「行けない」

「どうしても？」

「どうしても」

ナターシャは、マヤの肩を抱いていた手を離し、半歩あらずさつた。「そう……残念ね……」

そのとき急に、マヤの視界が、ピントのはずれたカメラのようにぼやけ始めた。

「え？」

彼女はその場に立っていられないほどひどいめまいを覚え、へたへたとしりもちをついた。

ナターシャはそんなマヤを見ても、表情一つ変えず、また助け起こそうともしなかった。「手荒なことはしたくなかった。でももうこうするしか他に方法がなかったの」

マヤは叫び声を上げようとしたが、彼女の喉はもう思い通りの声を発することができなかった。

友人という仮面を脱ぎ捨て、今や一人の女スパイとなったナターシャは、冷たく言い放った。「さっきマヤがお湯を飲んだカップの中に、こっそり薬を混ぜておいたわ。あなたがあたしとのキスに夢中になっている間にね。ハバリアへ来ると言ってくれば、効果を打ち消す薬を渡すつもりだったんだけど」

その間にも、マヤの意識はどんどん遠のいていった。

「マヤ、あなたと友達でいられたこのひと月半、本当に楽しかった。ありがとう。そして、さようなら」

数秒後、マヤの意識は真っ白なもやの中に完全に埋没した。その直前、彼女の目に愛するジュートの幻が見えたような気がした。

マヤは夢を見ていた。長い長い真っ白なトンネルをただひたすら歩いてゆく夢だった。

しばらく行くとトンネルの出口が見えた。彼女は走り出した。出口の向こうで誰かが自分の名前を呼んでいるような気がしたからである。

出口から勢いよく飛び出したと思った瞬間、彼女は目が覚めた。

彼女の目の前には、ルーミアの微笑む顔があった。

マヤは不思議な気分だった。体がだるくて頭もぼーっとしているのに、なぜか過去の記憶だけははっきりしていた。

彼女は、自分は今、天国にいるのだと思った。記憶によると、ルーミアとは喧嘩中だったはず。妹が自分に笑顔を見せてくれるはずはない。ここはきっと、慈悲深い神様が死後の自分に与えてくれた理想の世界なのだ。

しかし、やがて頭の中にかかっていた霞が晴れ始めたとき、マヤは自分がまだ地上にいるのだということを知覚できるようになった。

すると目の前のルーミアは「お姉ちゃん、気がついたのね」と声をかけてきた。

マヤはまだうまく動かせない喉と舌を最大限駆使して声を絞り出した。「ルーミア……」

「本当によかった。ちゃんと魂を呼び戻すことができて」

「ここはどこ？それに、あたしはいったいどうしたの？」

「ここはシュラースのはずれにある農場の納屋の中よ。そしてお姉ちゃんは気を失ってたのよ」

体にほんの少しだが力があるようになったので、マヤは首だけを起こしてみた。どうやら彼女は、干し草のベッドの上に寝かされていてるらしかった。更に辺りを見回してみたところ、納屋の中には、すぐ傍らに付き添っているルーミアの他に、少し離れてラウラとオクタヴィが立っていた。

ラウラが言った。「大丈夫そうだな」

オクタヴィも声をかけた。「よかったですわね、マヤ」

「ラウラ、オクタヴィも……。でも……。あたし……。いったいどうして気絶なんか……。そう言えば……。そう、ナターシャ！ナターシャは？」

ルーミアが答えた。「あの女スパイのことね。彼女なら逃げたわ」

マヤは言った。「そうよ、あたしはナターシャに変な薬を飲まさ

れて、そしたら意識が遠くなって……」

ラウラが言った。「本当に危ないところだったんだぜ。あたしにはよくわからないんだけど、おまえの飲まされた薬ってのが、なんでも体を生かしたまま魂だけあの世へ飛ばしちまう薬らしくてな」

オクタヴィが付け加えた。「ルーミアが白魔法でああなたの魂を呼び戻してくださったの。本当に必死でいらっしやいましたわ。それに、呼び戻すことに成功した途端、大声でお泣きになって、それからしばらく泣きやみませんでしたのよ」

マヤは改めてルーミアの顔を見た。確かに妹の目には泣きはらした跡がある。「ルーミア、ルーミアがあたしを助けてくれたの？」

ルーミアは答えた。「肉体を生かしたまま魂だけ消し去るなんて常識では考えられないことよ。あの女スパイがそんな薬を飲ませていったいどうするつもりだったのかわからなかったし、そんな薬のせいで遠くに行ってしまった魂を呼び戻せる自信もなかった。でもとにかくやってみた。無我夢中だったわ」

「ありがとっ、ルーミア。あたし、またルーミアに命を助けられたのね」

「ううん、お姉ちゃんを本当に危機から救ったのはあたしじゃない。ジュートがここに踏み込むのがあとほんの少し遅かったら、お姉ちゃんはあるの女にどこかへ連れ去られていたんだから」

「ジュート？彼が来てたの？」

「ええ。彼、ここ何ヶ月かずっとスパイ狩りの任務に就いてるんだ

つて。それであのナターシャって女スパイがマヤと関わりがあることを知ってマヤが心配になって、本来の任務をほっぽり出してナターシャをエランから追いかけて来たんだって言うてた」

「ジュート……。あたしのために、そこまで……」

マヤの心の中は甘く切ない想いで一杯になった。彼に会いたい。彼の声が聞きたい。少し前までは男に対してそういう感情を抱くことにまだ違和感があったのに、今ではそのような感情が彼女の精神の主要な部分を占めるまでになっていた。もはや、心の中にジュートへの想いが存在しない自分を想像することができなかったし、またそのような想像をするのが怖いとさえ思えた。

しかし、彼女には、この想いを確かなものとするためにやらなければならぬことがあった。「ねえ、ルーミア、お願い。あたしの話をもう一度ちゃんと聞いて」

ルーミアはすべてを悟りきったかのように静かに「何？」と訊き返した。

「あたしルーミアに謝りたいの。ジュートに対するルーミアの気持ちを知っていながら、彼を横取りしてしまったことを。そしてそれを隠していたことを」

ルーミアは首を振った。「そのことはもういいの、お姉ちゃん。もういいのよ。あたし、白魔導士として、治療した患者さんから感謝してもらえぐらいには仕事をこなせるようになったつもりだった。けどやっぱり、十六歳の女の子でしかなかった。人間的には未熟だった。だから、怒りとかねたみとかそういう感情に捕らわれてしまって、お姉ちゃんやジュートの気持ちを考えてあげることが

できなかった。お姉ちゃんのジュートに対する思い、ジュートのお姉ちゃんに対する想いをわかってあげることができなかったの。

でもさっきわかった。彼のあんな表情、初めて見たわ。竜の世話をしていたあたしのところに駆け寄ってきて『マヤが死にそうなんだ。どうにかしてくれ』って言ったときのあの必死の表情。彼は本当は、誰かのために何かをしてあげるなんてことはしない人。そんな彼がお姉ちゃんのためになら自分をかなぐり捨ててもいいって思っただのよ」

「ルーミア……」

「彼だけじゃないわ。いまお姉ちゃんが彼のことを考えてたときの表情、とつても切ない表情だった。あたし考えたの。あたしは今までこんなに彼のことを想ったことがあつたかなって。そしたら、気づいた。あたしの彼への想いは、単なる憧れ。恋じゃなかったって」

マヤは妹の手を握りしめ「ごめん、ルーミア」と言った。

ルーミアは微笑みながら姉の手を強く握り返した。

姉妹はそれからしばらくの間、無言のまま見つめ合った。

やがて彼女たちは握り合っていた手を名残惜しそうに離れた。だが、かたわらで見守っていたラウラとオクタヴィの目には、マヤとルーミアがいまだ姉妹の絆という手でつながり合っているのが見えるような気がした。

そのときラウラは、ふと納屋の外に何かの気配を感じ取った。にもかかわらず、彼女は他の三人に警戒を促すどころか、むしろ嬉し

そつに「さて、そろそろあたしたちは退散する時間だな」とつぶやいた。

マヤは「え？」と訊き返した。

オクタヴィはすぐにラウラの言葉の意味を察し、「ルーミアも一緒に退散いたしましょう」と言った。

ルーミアは一瞬、不思議そうな顔をしたが、オクタヴィがウィンクするのを見て納得の表情になった。「そうね。あたしもそろそろ退散するわ」

ラウラたちの言動の意味がひとり呑み込めないマヤは、上半身を起こし「ちよつと、どうして？まだここにいてくれてもいいのに。って言うか、誰か一人ぐらいここにいてよ」と懇願した。

しかし、ラウラたち三人は、マヤを無視して、そそくさと納屋を出て行こうとした。

納屋を出る間際、ラウラは「にやけ顔の嫌な奴だと思ったが、姉妹の和解シーンをぶち壊さないように外で待っててやるぐらいの神経は持ち合わせてるんだな」と言った。

三人が出て行った後、入れ替わりにジュートが納屋に入ってきた。いつも通りのにやけた笑顔だった。

10 ザエフ

シュラーズ陥落は、事実上、エラーニアが二年ぶりにエールデラント地方をその統制下に置いたことを意味した。それはすなわち、王国の領土がこの戦^{いくさ}の始まる前の状態に復したということでもあった。

だが、エラーニア王宮の指導者たちは、それで王国が「元の姿」に戻ったとは考えなかったらしい。領土回復を祝う行事の準備を始めていた王都の民たちに対し、王宮は次のような布告を発し、祝賀行事の中止を命じたのだった。

「我々はまだ全エラーニア領を回復してはいない。祝賀行事は、『ハバリア皇帝』を名乗るならず者をドウムホルクから追い出した後に行われるべきである」

二週間後、マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊の一行は、エールデラントの北はずれ、現時点でのハバリア領との境界線近くにあるナクストルプという小村にまで進出していた。

彼女たちはシュラーズ陥落後も、毎日のようにエールデラント残存ハバリア兵の掃討作戦にかり出され、ほとんど休む暇もなかった。体力には自信があるはずの隊長、ラウラでさえ「軍の上層部の連中はあたしたちのことを疲れ知らずの超人だとも思っているのか」とぼやき始めていたし、オクタヴィも、そのスレンダーな体つきか

ら想像されるほど脆弱ではなかったものの、やはり表情に疲労の色をにじませていた。そんなとき、上層部の命令書を携えた伝令役の兵士が、シュラースの農場に駐留している彼女たちのもとを訪れた。元来、樂觀主義者のラウラは「きつと休暇命令だ」と言つて、期待に手を震わせながら命令書を紐解いた。だが数秒後、隊長は命令書を放り投げて天を仰いだ。マヤがそれを拾い上げて見てみると、そこには

「ナクスドルプに進出し、そこで次の命令があるまで臨戦態勢で待機せよ」

と書かれていたのだった。

命令書を受け取ったのは昨夜、ナクスドルプへ移動してきたのは今朝早くである。更に村の人たちへの挨拶回り、付近の地形の把握、偵察など、進駐後にまず行わなければならない仕事を一通り片付け終わったのは、夕方近くだった。ラウラは隊員たちの疲労を考へて、次の任務を命じられるまでしばらくの間、一名のみが警戒当番、あとの二名は休息というローテーションを組むことにした。そして、自分が一番に警戒当番に立つからオクタヴィとマヤはテントを張って休むようにと命じた。

オクタヴィとマヤとルーミアは五、六人が入れる大きさのテントを一つ、張った。オクタヴィはその作業をやり終えたと、すぐに寝袋に潜り込み、ほどなく小さな寝息を立て始めた。マヤもかなり疲れがたまっていたので、それほど眠くはなかったけれども、寝袋に入って体を休めることにした。

ところが、十分ほどしてマヤが二階から転げ落ちる夢を見て目を覚ましたとき、彼女の隣では隊長が仰向けになって大いびきをかい

ていた。どうやら疲労と眠気に耐えきれず警戒当番をさぼったらしい。

ルーミアはちょうどその時、ラウラの大きな体を毛布で覆おうとしていた。姉が目を覚ましたことに気づいたルーミアは、苦笑いをしながら

「『この付近に敵が潜んでいる可能性は少ないし、何かあったとしても村人たちはみな協力的なので知らせてくれる。だから大丈夫だろう』って言つて、寝ちゃったの。このまま寝かせておくわ。敵襲を警戒することぐらいならあたしにだって出来るし、あたしは戦闘員じゃないからお姉ちゃんたちほどは疲れてないしね。だから、お姉ちゃんも安心して寝てて」

と言った。

マヤが再び目を覚ましたのは、夜もだいぶ更けた頃だった。テントの中を見回すと、隊長は先ほどと同様、仰向けになっていびきをかいていたが、ルーミアとオクタヴィの姿は見当たらなかった。マヤは寝袋からはい出し、テントの外に出てみた。テントのすぐ前に大きな木が一本立っている。オクタヴィはその幹にもたれかかって空を見上げていた。彼女はさすがに警戒当番をさぼったりはしなかったようだ。

マヤは「お疲れさま。警戒当番を交代するわ」と声をかけた。

オクタヴィは眠そうな目をマヤに向け、「ご苦労さま。それではよろしく願いいたします」と、いつも通りのばか丁寧な口調で応えてから、マヤの横を通ってテントへ向かおうとした。が、そこで何を思ったか急に振り返り、マヤの顔をまじまじと見つめ始めた。

マヤは怪訝そうな顔をして「な、何？」と言った。

「あら、ごめんなさい」オクタヴィは自分の取った行為の突飛さを自らあざけるかのように微笑み、答えた。「わたくし、寝ぼけているのかもしれませんが。今、マヤが『お疲れさま』って言うてくれたとき、マヤの顔がわたくしの知り合いの顔に見えたの」

「ふーん。それって、その知り合いの人があたしに似てるってこと？」

「全然。だってその子は、歳はマヤと同じぐらいですけど、男の子ですもの」

マヤはちよつと拍子抜けしたように「なんだ。男の子か」と応えた。

オクタヴィは更に自嘲的な口調で言葉を続けた。「マヤの顔を見て男の子を連想したなんて、失礼な話ですわよね」

「別に気にしてないわ」

「でも、言い訳ではございませんけど、その子、性格的にはどことなくマヤと似たところがございましたのよ。その男の子はね、フアクティムにあるわたくしの実家の近所に住んでいる幼なじみですの。と言っても、それほど仲が良かったわけではございませんのよ。小さい頃は確かにお姉さん気取りで世話を焼いてあげたりしたこともしございましたけど、わたくしが女学校に入学する頃には、顔を合わせてもほとんど口もきかなくなっていましたわ。それが二年前、わたくしが軍に招集されることが決まったとき、その子はわたくしの

ところにやってきて、いきなり告白してくださいましたの」

「オクタヴィも隅に置けないわね。で、どう応えたの？」

「お断りしました」

「タイプじゃなかった？」

「嫌いではございませんでした。いえ、どちらかと言えば好ましい
と思っていたかも知れません」

「じゃあ、どうして？」

「わたくしが軍に招集されている二年間、ずっと待っていてください
なんて申し上げる勇氣は、わたくしにはございませんでした。でも、
もしかしたら、いえ、たぶん、彼はわたくしが本心からお断りした
のではないことに、気づいていたのではないかと思えます」

「オクタヴィの出征義務期間って、確かあとひと月ほどで終わるん
でしょ？その子、きつとファクティムでオクタヴィの帰りを首を長
くして待ってるんじゃない？」

「まさか。あのくらいの歳の男の子にとって、二年という時間は短
くはございません。それにわたくし、出征義務期間を終えても軍を
辞めるつもりはございませんから、彼がどう思っているにせよ、会
えるのはまだ先の話ですわ」

「え？故郷へ帰らないの？」

「ええ。もう少し、ラウラとマヤとルーミアと一緒に仕事がしたい

なっと思って」

マヤは「そう」とだけ応えたが、心の中では、一緒に仕事をした
いと言ってもらえたことを嬉しいとも感じていたし、少し誇らしい
とも思っていた。

オクタヴィは口に手を当て、あくびを噛み殺しながら「では、わ
たくしは休息に入らせていただきます」と言った。マヤが改めて「
お疲れさま」と声をかけると、オクタヴィはくりと背と向けテン
トのほうへと歩いていった。

マヤはさつきオクタヴィがやっていたように、木の幹に背中を預
けて夜空を見上げてみることにした。

今日、空に浮かんでいる月は「三日月」だった。マヤを見下ろす
のは、餅をついている愛嬌たっぷりのウサギではなく、無愛想なの
っぺらぼうである。かつて山矢健太が NASA の宇宙船の写し
た月の裏側の写真を目にしたとき、彼はそののっぺりした表面に、
言い知れぬ不気味さを感じたのだった。だが、一年前にこちらの世
界に飛ばされて以来、何度となくあののっぺらぼうを見上げている
うちに、そこには着飾った華麗さとは違った、シンプルな優美さが
あることに気づき始めた。今ではむしろ、出しゃばりなウサギが呪
わしいとさえ思えるようになった。

やがて、マヤの脳裏に、この一年間に彼女の身の周りで起こった
いろいろな出来事が浮かんできた？？思い返せば、最初はショッキ
ングだと思っていたことも、今となってはいい思い出でしかない。
異世界に飛ばされたことも、女になってしまったことも、竜の操縦
をやるはめになったことも。そして軍に入り、数々の戦いをくぐり
抜け、エース竜騎兵と呼ばれ、拳げ句、最前線のこんな鄙びた村に

放り出されたというのに、あたしは少しも違和感を覚えていない。あまりにも色々な経験をしすぎて、精神的ショックを感じにくい体質になってしまったのだろうか？いや、たぶん違う。山矢健太という男の子はどちらかというと繊細な精神の持ち主だった。それはマヤになってからも変わっていない。あたしが回復不能なほどの精神的パニックに陥ることなくここまでやって来れたのは、きっと……

そのとき不意に、マヤの背後で彼女を呼ぶ声がした。

「お姉ちゃん」

マヤは振り返ろうとしたが、背後には木の幹があったため、一歩横にステップを踏んでから幹の向こう側を見通した。声の主、ルーミアは、マヤの立っているところへ、テントとは別の方向から歩み寄ってこようとしていた。マヤは心の中で、先ほどの独り言の続きを言った？？あたしがここまでやって来れたのは、きっとルーミアがそばにいてくれたから？？

ルーミアはマヤのすぐそばで立ち止まり

「ビュアラを引き取ってくれる人、見つかったわ」

と言った。

マヤは意外そうに

「あ、探しに行ってくれてたんだ。ありがとう」

と応えた。

ルーミアはどういたしましてと言う代わりに、マヤが先ほどまでもたれていた木の幹にもたれかかった。

マヤは「でも、よく憶えてたわね。きのう、ちょっとそんな話をしただけなのに」と言いながら、ルーミアと肩を並べるように、再び幹にもたれた。

「忘れないわよ。あたし、お姉ちゃんの言ったことは絶対に忘れないもの」

「絶対に？」

「うん」

「百パーセント？」

「うん」

「ほんとに？」

「約百パーセント。正確には九十六パーセントぐらい」

「何それ」

二人は顔を見合わせ、くすくすと笑った。くだらないセリフを真剣にやりとりしている自分たちが滑稽に思えたからである。

「そういえば、さつきね」マヤは言葉を続けた。「オクタヴィに、男の子に見間違えられちゃった」

ルーミアはいかにも不満そうに、大げさに声を荒げて「えーっ、ひどい。お姉ちゃんのどこが男の子に見えるって言うの?」と言った。

ところがマヤは、それには応えず、ちょっと寂しそうな顔をして、自分自身の言葉を続けた。「あたし、二週間前にも同じようなことを言われたわ」

「えっ」ルーミアは、姉の口調と表情から、会話の流れが先ほどの冗談とは違う方向へ進み始めたことを悟った。「二週間前っていうことは、もしかして……ナターシャ?」

マヤは静かに「ええ」と応えた。

「そう」ルーミアは言葉を選ぶためにちよつと間を置いてから言った。「気の毒に、って言うてあげるべきかな?」

「相手がどんな人であっても、そう、たとえあたしの魂を抜いて体だけハバリアに連れてゆこうなんて、とんでもないことをやろうとした女スパイでも、死ぬのはやっぱり気の毒なことだと思う」

「きのうのユルグでの掃討戦のときに、ハバリアの敗残兵たちと一緒に死んだって言うてたわよね」

「ええ。でも、きのうはルーミアにそれ以上、詳しい話はしてあげられなかったわね。あたしたちがユルグから帰還したあと、すぐにここ、ナクスドルプへの移動を命じられてしまって、すごく慌ただしかったから」

「そうね」

「ねえ、いま話してもいい？きのうの話」

「ええ」

マヤは話し始めた。

一昨日、マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊の三名は、ユルグという小さな町に籠るハバリア敗残兵の掃討作戦を援護する任務に就くよう、上官であるアイリゲン大佐から命令を受けた。その際、大佐から知らされた情報によると、ユルグはエールデラントにおけるハバリア軍の最後の組織的抵抗拠点であり、この敵さえ片付けてしまえば今後、エールデラント内では単発的なテロ行為があったとしても組織立った敵による軍事攻撃はなくなるだろうとのことだった。

マヤたちは、この二週間ほどの間に参加した掃討戦がどれも困難な戦いだったことから、この最後の抵抗は今まで以上の激戦になるだろうと覚悟して出撃した。ところが、ユルグに着いてみると、敵の大半はすでに投降しており、ほんの三十人ほどがユルグ郊外の富豪の屋敷に立てこもっているにすぎないことを知らされた。

現地の司令官は説明した。「こちらの魔道士兵力で屋敷の屋根に穴をあけて、きみたち竜騎兵に上空から油を注いで火を放ってもらえば、頑丈な石造りのあの屋敷の中に潜んでいる敵でもイチコロだ。だが、もうほとんど抵抗力を持たないあのような敵をなぶり殺すところを町の住民に見られたら、今後の統治政策に影響が出る。その

あたりのことは軍の上のほうからきつく言われてるんだよ。それに司令官はそこで、少し離れたところで心配そうに屋敷を見つめている小太りの中年男をあごで指し示した。体中を華美な貴金属でごてごてと飾り立てた、見るからに成金そうな男である。「この町の『実力者どの』が屋敷を壊されのは絶対に嫌だとダダをこねて……もとい、おっしゃっててもいるのですね。まあ、敵の連中はもう何日もろくに食い物にありついていないはずだから、こっぴどく遠巻きに包囲して降伏勧告を続けていれば、空腹に耐えかねて白旗を揚げるか、さもなければあと数日で飢え死にするだろう」

ラウラは司令官の説明と現在の情勢を自分なりに分析し、この場に竜騎兵戦力は不必要との判断を示した。その上で、アイリゲン大佐にシュラスへの帰還を許可してほしい、ついでに休暇も欲しいと具申する手紙をしたため、伝令兵に届けさせた。と言っても、伝令兵が手紙をシュラスの司令部にいる大佐に届け、大佐がそれを読んでしかるべき決定を下し、別の伝令がその内容をマヤたちに伝えてくれるには、どう考えても半日以上の時を要する。軍の命令でここに派遣された以上、マヤたちは勝手に帰還するわけにもいかなないので、とりあえず、適当な場所で野営してアイリゲン大佐からの連絡を待つことにした。

事態が急変したのは、翌朝の日の出前だった。投降したと思われるいたハバリア兵たちが、収容施設で一斉に蜂起し、それに呼応して、町に潜んでいたハバリア兵がハバリアに協力的な住民とともにエラーニア軍将校の宿泊施設を襲撃し始めたのである。

マヤが異変に気がついたときにはすでに町は大混乱だった。一部のハバリア兵がエラーニア兵の軍服を奪ってエラーニア兵になりすまし、エラーニア将校に近づいて殺害するという手口をとったことが混乱に拍車をかけた。エラーニア兵たちは疑心暗鬼にかられ、自

分の身を自分で守ること以外、何も出来なくなった。

特にエラーニア兵たちを震撼させたのは、ハバリア兵がユルグじゅつの白魔道士を、エラーニア軍属か否かを問わず、一人残らず殺害してしまったことである。こちらの世界の兵士がマヤのもといった世界の兵士より勇敢に戦えるのは、腕の一本や二本を失っても男性白魔道士が再生してくれる、命を失っても女性白魔道士が魂を呼び戻してくれるという安心感があるからである。であるがゆえに、一旦、白魔道士のサポートを受けられないという事実を知らされると、却って深刻なパニックに陥ってしまうのだった。

今やエラーニア随一の精鋭部隊と見なされつつあったファクティム装甲竜騎兵隊にも、この混乱を回避することは出来なかった。というより、むしろもろに巻き込まれたと言ったほうがよい。マヤたちが野営テントのすぐそばに駐竜してあったピムたちのもとへ向かうと、そこにはすでに敵の魔の手が伸びていた。敵は竜騎兵を、将校や白魔道士と並んで優先的に排除しなければならぬ兵力と見なしていたのである。不幸中の幸いだったのは、敵がマヤたち竜騎兵を直接狙わず、ピムたち竜のほうを狙ってきたことである。おそらく暗殺術に長けた敵の兵はみな、将校や白魔道士殺害のほうに回されていたからであろう。見ると、ピムのそばに水色の服を着た女が一人、立っており、ピムの頭を優しくなでながら、ピムの口に怪しげな液体の入った瓶を押し込もうとしていた。毒なのか、眠り薬なのか、それともピムの精神をおかしくさせる薬なのかはわからなかったが、いずれにせよ、マヤの目にはピムがその液体をおいしそうだと思っているようには見えなかった。

マヤは

「ピム、逃げて」

と叫んだ。

するとピムは口から瓶を吐き出し、瓶を押し込もうとしていた女を振り払うように首をもたげ、翼を広げて羽ばたき始めた。女は風圧でその場に昏倒したが、ピムはそれを無視して上空へ舞い上がった。

ラウラとオクタヴィもその時、同じように自分の竜に上昇を命じた。彼女たちの竜もそれぞれ別の作業員にピムと同じ仕打ちを受けそうになっていたのである。竜が飛び立つとき風圧で昏倒したそれらの作業員は、マヤたちが武器を構えてにじり寄ってくるのを見ると、慌てて起き上がり、脱兎のごとくその場を走り去った。あとにはピムに液体を与えようとしていた女だけが横たわっていた。

ラウラとオクタヴィはそのまま作業員を追撃した。だが、マヤは横たわっている女が気になり、小剣を構えたまま更に二、三步にじり寄った。それでも女は動く気配を見せなかったので、マヤは剣を下ろし、しかし気は緩めずにゆっくり歩み寄り、女の顔を覗き込んだ。

「ナターシャ！」

マヤは思わず叫び声をあげた。

眠ったように目を閉じていたナターシャは、マヤの声に呼び起こされ、静かに目を開いた。

「マヤ……」

マヤは地面に膝をつき、ナターシャの体を抱き起こした。

「ナターシャだったなんて」

ナターシャは弱々しい声で「やっぱりさっきのはマヤの相棒のピムだったのね。きつとそうだと思った。マヤのにおいがしたような気がしたから」と言った。

マヤはナターシャの声があまりにも弱々しいことを不思議に思った。翼の風圧で倒れただけでこんなになっってしまうはずないからである。マヤは、他にどこか悪いところがあるのかとナターシャの体を見回してみた。ナターシャの着ている水色のジャケットの右の脇腹あたりが徐々に赤く染まり始めているのが、すぐに見つかった。

「ひどい怪我をしているじゃない」

「ここへ来る間にエラーニア兵と戦闘になって、そのとき刺された」

「白魔道士を呼んでくる」

「無駄よ。この町にいた白魔道士はみんな死んだわ」

「なぜ？どうしてハバリア軍はそんな惨いことをしたの？第一、白魔道士がいなくなったら、こうやって味方が傷ついたときに誰も治せないじゃない。自殺行為だわ」

「その通りよ。この作戦の目的は一人でも多くのエラーニア人をあの世に道連れにすることだから」

「そんなバカなことって」

その時、ナターシャは「うつ」と苦しそうにつめき声を上げた。

「ナターシャ、しっかりして」

「マヤ……あなた、優しいのね。あなたにあんなひどいことをしたあたしを……気遣ってくれるなんて……」

「しゃべらないで。この町に白魔道士がいないなら、シュラースからルーミアを連れてくるから」

「もう……間に合わない……わ。でも……よかった。最後に……マヤに会えて。会える気が……してた。きのう……赤い装甲を付けた……竜騎兵が……この町に……舞い降りてくるのを……見つけたから……志願したの。竜に……毒を飲ませる……役目を。マヤに……会いたかったから。大好きな……マヤに……」

「ナターシャ……」

「この間……シュラースで……マヤに……『一緒にハバリアに来て……』って……頼んだ時……マヤは……拒否したけど……それは……正解だったのよ。マヤを……もといいた世界に……帰すつもりなんか……最初から……なかった。みんな……嘘だったの。でも……信じて。あたし……本当に……マヤのこと……好きだった。マヤの……魂を……抜いてしまったあとで……すごく……後悔した。自殺しようか……と……思った。だから……マヤが助けられて……魂を取り戻せた……て……あとで知らされて……すごく……すごく……嬉しかったの」

「ナターシャ、わかったから、もうしゃべらないで」

「マヤが……異世界から来た……男の子だって……ことは……誰にも……話して……ないから……安心……して。」

罪滅ぼしの……つもりじゃないけど……これだけは……言っておきたくて。よく……聞いて。ドウムホルク……宮殿の……尖塔の……最上階に……異世界への……門を……開く……装置が……あるの。それを……使えば……元の……世界に……」

ナターシャの体は断末魔の痙攣を始めた。

「ナターシャ！」

「ビュアラのことを……お願い……」

その言葉を最後に、ナターシャは息を引き取った。

マヤはナターシャの体をそつと地面に置き、胸の前で手を組ませてあげた。そして自らも胸の前で手を合わせ、この悲しき運命の持ち主の冥福を祈った。

目を上げると、少し離れたところで子犬が一匹、気持ち良さそうにうたた寝をしていた。ナターシャがかつてエランで怪我の手当をしてあげてそのまま飼っていたあの子犬、ビュアラだった。こんな戦場のど真ん中にナターシャが連れてきたのだろうか。それとも、勝手についてきたのだろうか。主人の死にも町の混乱にも全く動じることなく悠々と眠り続けるあの肝っ玉の太さを考えれば、どちらもあり得ることだ。ナターシャは以前、マヤが一番の友達だと言っていた。それがもし本当だったとすれば、ナターシャはマヤと別れなければならなかった寂しさを、ビュアラを片時も離さないことで

紛らわそうとしていたのかもしれない。

町の混乱は昼前には沈静化に向かった。暗殺を逃れたエラーニア将校たちが指揮系統の立て直しを図ったからである。秩序を取り戻すと、エラーニア軍は正規軍としての強さをいかなく発揮し始めた。逆にハバリア敗残兵たちは、みるみる烏合の衆の弱さを露呈し始めた。マヤたちフアクティム装甲竜騎兵隊も、ハバリア兵へ対地攻撃を加えたり、孤立してしまったエラーニア兵に上官の命令を伝えて指揮系統を確立したり、近隣の町から白魔道士を空輸する役目になったりと大活躍だった。

昼過ぎに戦闘は終わった。エラーニア側もハバリア側もかなりの数の戦死者を出していた。特にハバリア軍はほぼ全員が死亡していた。『一人でも多くのエラーニア人をあの世に道連れにする』というハバリア側のもくろみは、まんまと成功したことになる。白魔法が普及し始めて以降に限っていえば、これほどの戦死者を出した戦いは、歴史的にもあまり例がないのだという。

マヤはビュアラを連れて、ラウラとオクタヴィとともにルーミアの待つシュラーズの農場への帰途についた。彼女たちが無事帰還したのは夕方、そしてほどなくナクスドルプへの移動を命じられたのだった。

「『異世界への門』か」

マヤの話を聞き終わったルーミアは、半ば独り言のようにつぶや

いた。

「本当のことなのかしら」

マヤは応えた。「本当だと思う」

「だとすれば……、だとすればお姉ちゃんはとうするつもり？」

「そこを目指すわ。ドウムホルク宮殿の尖塔の最上階にあるそこを。元の世界へ帰るために」

「簡単なことじゃないわよ」

「エラーニア王宮の指導部が、ドウムホルクを奪い返すまで戦はやめないうて言うてるみたい。ひよっとしたら軍務としてそこへ行く機会を与えられるかもしれない」

ルーミアはちょっと表情を曇らせ、「それなら……そういう可能性もあるかもしれないわね」と言った。

マヤは何も応えなかった

彼女たちは今、一本の木の幹に肩を並べてもたれかかっていた。と言っても、その幹は直径が八十センチほどしかないため、体を同じ方向に向けてもたれることはできない。つまり、マヤは幹の南面にもたれて南の空を、ルーミアは南東の面にもたれて南東の空を見上げていた。

次に口を開いたのはルーミアだった。沈黙があまりにも長いので、何となく不安になってきたからである。彼女はもたれていた体を起

こし、姉の顔を覗き込んで「お姉ちゃん？」と声をかけた。

マヤは空を見つめたまま、ぼろぼろと涙をこぼしていた。

ルーミアは驚きのあまり声を出すことが出来なかった。

マヤは視線を夜空に固定したまま、言った。「ねえ、ルーミア。泣くのは、おかしいことかな？」

「え？」

「あたしの魂を抜いて死んだも同然の状態にした人のために涙を流すのは、おかしいことなのかな」

「お姉ちゃん……」

「ねえ、あたし間違ってる？彼女を、ナターシャを憎まなきゃだめ？」

「……………」

「あたし、ナターシャのことが憎めないの。あんなにひどいことをされたのに、憎めないの。彼女のことが好きだった。本当に大好きだったから」

ルーミアは無言のままマヤの肩を抱きしめた。

するとマヤは、我慢しきれずルーミアの胸にすがりついた。「あたし、男の子だったときは泣いたことなんて一度もなかった。サーラが死んだときだって、涙なんか一粒も流さなかった。なのに、な

のに、今はどうしても涙が止まらないの。悲しくて悲しくて仕方がないの。どうすることも出来ないの」

ルーミアは、包み込むように言った。「どうもしなくてもいいのよ、お姉ちゃん。お姉ちゃんの間違っていい。これでいいの、このままで。このまま、泣けるだけ泣いたらいいわ」

「ルーミア」

それからしばらくの間、マヤはルーミアの胸の中で、肩を震わせて泣いた。ルーミアは、姉の中から溢れ出る悲しみの感情をすくい取るかのように、優しく姉の頭を撫で続けた。

月は、そんな姉妹の様子を、無表情のままじっと見守っていた。

やがてマヤが顔を上げた時、その目に涙の跡はあったが、もはや瞼から涙が溢れ出してはいなかった。表情も、晴れ晴れにはほど遠かったが、どこことなく安らぎを帯びたものになっていた。

マヤはルーミアの目を見つめた。ルーミアは小さなうなずきでそれに応えた。さほど意味のあるうなずきではない。だが、マヤはなぜか、それですべてを許されたような気がした。

と、その時。

彼女たちのすぐそばで

「あー」

という、か細く頼り無げな男の声がした。

マヤとルーミアは口から心臓が飛び出しそうなほどびっくりして、その声の出所とおぼしき方向に目をやった。そこに立っていたのは、エラーニアの軍服を着た、青白い顔の若い男だった。

「お取り込み中のところ申し訳ありませんが、こちら、ファクティム装甲竜騎兵隊の野营地ですよね？」

マヤとルーミアがそうだと答えると、男はびしつと姿勢を正して敬礼し

「アイリゲン大佐からの命令書をお持ちしました」

と言った。

マヤはその伝令役の兵士をその場に待たせておいて、ラウラたちが寝ているテントに戻り、声をかけた。目を覚ましたラウラとオクタヴィは、マヤから起こされた理由を告げられ、だるそうに体を起こして寝袋からはい出した。テントから出てきたラウラに、兵士はいま一度敬礼し、命令書を手渡した。ラウラは受け取った命令書を開いて眠そうな目でその文字を追った。やがて命令書を持つ彼女の手はわなわなと震え始めた。

「あたしたちを殺す気か！」

ラウラは目の前の兵士をそう言って怒鳴りつけた。

兵士は泣きそうな顔をして「自分にそう言われましても困るのですが」と言った。

マヤは半ば呆然としているラウラの手から命令書を取り上げて、十分に月明かりを受けるように大きく広げ、ルーミアとオクタヴィとともに読んだ。そこには

「エラーニア王国軍は明日五月十六日、日の出とともにハバリア地方への進軍を開始する。ファクティム装甲竜騎兵隊はその際、ザエフ街道を北進する主力部隊の右側面の制空を確保するよう努められたい。以上」

と書かれていた。

オクタヴィは「あら。昨日、エールデラントの掃討が終わったばかりですのに。慌ただしいですね」とつぶやいた。言葉遣いはいつもの通りばかり丁寧であったが、口調には、彼女にしては珍しく若干の刺々しさがあった。

ラウラは「まったく。アイリゲン大佐は何を考えてるんだ。こっちの体のことも少しは気遣ってんだよ。か弱い乙女なんだぜ」とぼやいた。と思つたら、急に恥ずかしそうに後ろ頭をかき始めた。いま自分がいかに恥ずかしいセリフを言ったかに、言ってしまったてから気づいたのである。

一方、マヤは他の二人の竜騎兵とは違ったことを考えていた。エラーニア王国軍が進む先にはドウムホルクが、そしてその宮殿の尖塔にはきつと異世界への門を開く装置があるはずである。彼女は自分の思いに共感してもらいたくて、妹に希望に満ちた力強い視線を送った。ルーミアはちよつと複雑そうな表情をしていたが、マヤの視線に気づき、同意を示す視線を送り返してきた。

すると、伝令役の若い兵士がまた

「あー」

と、消え入りそうな小さな声で話しかけてきた。

ラウラは今にも兵士の胸ぐらをつかみそうな勢いで「なんだ。まだなんか文句があるのか？」とまくしたてた。

兵士は半ベそをかきながら「い、いえ。こちらの隊長殿にアイリゲン大佐からの伝言をお伝えしようと思ひまして」と言った。

「伝言？あたしに？」

「は、はい。お伝えします。『今度の作戦が一区切りついたらファクティム隊に必ず休暇を与えてやってほしいと上層部に掛け合った。もう少しがんばってくれ。愛するラウラへ』とのことであります。一軍人が部下のために兵力の運用方法に関して上層部に口を出したことがばれたら問題なので、文書にはせず、自分に口頭で伝えさせると仰せでした」

その途端、ラウラは破顔して両腕で兵士をがばっと抱きしめた。そして

「そうだよ、そうだよ。その知らせが聞きたかったんだよ。おまえはなんていいやつだ。あたしはおまえを愛してやりたいよ」

と言って、胸に兵士の顔をぎゅっぎゅっ押し付けた。

兵士はラウラの胸の中で照れくさそうに苦笑いしていた。

ハバリアへの侵攻作戦が始まった。もつとも、公式的な呼称はあくまでも「ハバリア地方奪回作戦」である。そこには、二十年前のハバリア独立という歴史的事実を、今更ながらなかったことにしようとするエラーニア王宮の意図が現れていた。

エールデラント奪回を完了したばかりのこの時機にエラーニア軍が時を置かずハバリアへの侵攻を開始したのは、自軍の攻撃準備が十分に整うのを待つことよりも、防衛体制が整う前の敵を少数の精鋭部隊で叩くことのメリットを重視した結果だった。その意味では、軍上層部が精鋭部隊の一つであるファクティム隊をこの作戦に投入したのは当然の選択であった。それに加え、あとひと月ほどするとハバリア地方に雨期が到来し軍事行動が困難になることも、上層部が作戦開始を急いだ理由の一つだった。

ファクティム隊は命令の通り、ザエフ街道を北へ進軍する主力部隊の右側面を警戒する任務に就いた。ハバリア側の抵抗は弱かった。敵の本国に侵攻しつつあるのが信じられないほどだった。特に竜騎兵力は質の低下が目についた。エラーニア軍の侵攻を迎え撃つ準備がまだできていなかったのは誰の目にも明らかだった。エラーニア軍上層部の取った作戦の妥当性が証明されたわけである。

それにしても、ギール戦の頃まであればど潤沢だった敵の竜騎兵力はいったいどこに行ってしまったのだろう。ギール戦の折に戦力を使い果たしたといっても、それからもう三ヶ月以上、経っている。兵力を再建するには十分な時間があつたように思える。マヤはある日の任務を終えて帰還したあと、隊長にそのあたりの疑問をぶつけ

てみた。

ラウラは答えた。「竜つてのはもとも南の暖かい地方に棲んでいる生き物なんだ。北の地方にも竜がいないわけじゃないが、成長も遅いし体もあまり丈夫じゃないから戦闘には向かない。だから、この戦が始まった当初は、エラーニアよりも北にあるハバリア帝国がどうやってあれだけの数の竜騎兵力を簡単にそろえることができたのかみんな不思議に思ったものさ。『ヤグソフの異呪』って話が出始めたのはその頃だよ。怪僧ヤグソフは、子竜を短期間のうちに丈夫で敏捷な竜に成長させる術が使えるって噂だ」

「じゃあ、最近、竜騎兵力が不足し始めたのは……？」

「ヤグソフのおっさんが休暇でも取ってんじゃないの？働き過ぎで疲れたからって、あたしたちみたいに。ははは、んなわけないか。

…… あーあ、早いとこ作戦に一区切り付けて休暇をもらいたいよな……」

ラウラの答えは、マヤの疑問の解決にはあまりならなかったが、ヤグソフなる怪僧がハバリアの政治面だけでなく軍事面にも大きな力を発揮していることはわかった。

侵攻四日目にして、エラーニア軍は早くもハバリア南部の中心都市、ザエフまでの道のりの半分を踏破していた。エーデルラント奪回作戦時以上の進撃ペースである。兵士たちの間には樂觀ムードが漂い始めた。ザエフは、最終目標であるドウムホルクまでの道のりのちょうど中間地点にある。たった四日で全体の四分の一にあたる地点まで来れたということは、このペースを続ければ雨期が訪れるまでにハバリアの首都ドウムホルクを攻略し、ひよつとしたら戦を終わりにすることが出来るかもしれないのである。

そのときマヤの心にあつたのは、樂觀というよりも、期待に胸躍るわくわく感とでもいうべきものだった。ドウムホルクは、兵士たちにとっては単なる軍事目標だが、彼女にとっては彼女自身の存在意義に関わる重大目標である。ピムを高空に上昇させ、北の方向を見渡せば、街道の先にはすでにザエフの町が、そして更にその先にはハバリア南部と北部を隔てるなだらかな山脈が見える。そして、その山の向こうにはその重大目標がある。

だが、マヤたちが北へ進むに連れ、ルーミアの表情は曇りがちになった。その原因は、本人に訊くまでもなかった。マヤがドウムホルクに近づくということは、彼女が向こうの世界に帰る日が近づくことを意味する。それはすなわち、マヤとルーミアが永遠に別れなければならぬかもしれない日が近づくことをも意味している。ずっと以前から、いつかそういう日が来るのだらうという漠然とした思いはあった。それが、ナターシャに異世界への門のことを聞かされた瞬間、急に現実味を帯び始めたのである。

ルーミアは、彼女自身がこのことについてどう思っているのか、マヤには何も語らない。他人に対する気遣いを片時も忘れないルーミアの性格を考えれば当然だらう。向こうの世界へ帰りたいというマヤの気持ちを理解してあげられる人間は、この世にたった二人、マヤの正体を知っているルーミアとルーミアの父だけなのだから。ただ、他の問題ならそうやって他人を気遣っていることさえ表に出すことのないルーミアも、このことに限ってはさすがにそこまで自分を制御しきることはできず、それが表情の曇りとなって現れたらしい。

マヤとしても、もしルーミアに二度と会えなくなるとすれば、それはあまりにもつらい別れである。しかし、そのこと自体よりも、

ルーミアにつらい思いをさせなければならぬことのほうがつらかった。マヤは向こうの世界に帰ることによって、いまこちらに持っているものを「失う」一方、どのようなかたちにせよ元の世界での生活を「得る」ことができる。だが、ルーミアはマヤという存在をただ「失う」だけなのである。

マヤは考えた。ひょっとしたら、異世界への門を使えばあちらの世界とこちらの世界を自由に行き来することができるようになるだろうか？ルーミアの笑顔をいつでも見に来られるのだろうか？いや、自分はこちらの世界に飛ばされたときに死にかけた。異世界への門を通ることが自分の家の門をくぐることと同じぐらい容易なことだとは思えない。

もつとも、別れがつらいからといって元の世界へ帰る決心を変えるつもりは、マヤにはなかった。自分がこの世界にとって異分子であるという精神的な理由。こちらの世界とあちらの世界の物質構造の違いが何かとんでもない破滅的な現象を引き起こすのではないかという科学的な理由。そして、美玖との約束をまだ果たしていないという感情的な理由。これらは今までに何度も考えたことである。そして先日、そこに新たな動機？？ナターシャが命と引き換えにもたらしてくれた情報を無にすることはできない？？が加わった。もはや、このザエフ街道をドウムホルク宮殿めざして北上する以外に進むべき道はないとマヤは思っていた。彼女にとって、「元の世界に帰る」ということは、単にこちらの世界からあちらの世界へ戻るということではなく、元いた自分の居場所に戻り、そうすることで異世界に飛ばされるという異常な体験をいわば「リセット」することをも意味していたのである。

その一方で、彼女をこちらの世界に居続けたいと思わせる、逆の動機も新たに生まれていた。それは、言うまでもなくジュートとい

う存在である。半月ほど前、シュラーズの農場の納屋でルーミアと和解したあと、マヤはジュートと甘い一夜を過ごした。その時にその動機は生じた。しかもその後、手紙でしか彼と触れ合うことができないもどかしさ中で、ますます大きくなっていった。それでもマヤは、そんな甘い想いの中に自分自身が埋没してしまうことを許さなかった。まだ女になったばかりの頃、脳に宿る女の本能に命じられるままいつか男を求めるようになるのだろうかと恐怖したことを思い出し、そう、この想いはマヤの本能なのだ、山矢健太の意志ではないのだと自分自身に言い聞かせ、無理矢理納得しようと努めた。

エラーニア軍の進撃ペースも、そんな彼女をドウムホルクへといざなうかのように、快調さを維持していた。街道を進む地上軍の兵士たちは、敵の抵抗があまりに少ないので、ハバリアにピクニックに来ているのと勘違いしそうになった。ファクティム隊も、ほどなくナクスドルプからもっと前線に近い村に拠点を移し、そこから他の竜騎兵隊とともにザエフの空襲を開始したが、ドウムホルク攻略の最大の障害と見なされている拠点都市に攻撃を加えているというのに、敵の反撃は軽微だった。今やエラーニアの軍関係者の間では、勝利できるかどうかではなく、勝利がいつになるのかが最大の関心事だった。

そんな中、エラーニア軍の精鋭部隊の一つであるエラン第二竜騎兵隊が壊滅したとの知らせが駆け巡った。進撃を開始して一週間後、地上軍の先鋒隊がザエフの門前にまで到達した時のことだった。その突然の知らせを受け、軍上層部はとりあえず事実関係を確認するために情報収集を試みたものの、エラン第二竜騎兵隊の隊員三名が全員戦死していたため、確かな情報を集められず、壊滅の真相を明らかにすることはできなかった。上層部は結局、今回の一件は慢心していたエラン第二隊が敵の弱小部隊に足もとをすくわれたことが原因と結論付け、各部隊にもう一度、気を引き締めるよう訓戒し

たにすぎなかった。

だが、一番慢心していたのは上層部自身であった。数日後、主力部隊が続々とザエフ郊外に到着し始めた頃、今度はアマルータ装甲竜騎兵隊が壊滅したとの報告が入ったのである。ただ今回はザエフ付近にまで自軍の白魔道士が進出していたため、アマルータ隊の竜騎兵の一人が命を救われ、彼女の口からことの真相が明らかにされた。

「敵の竜騎兵の中にすごいのがいる」

翌朝、エラーニア王国軍ハバリア遠征隊総司令部にファクティム装甲竜騎兵隊、ガウス装甲竜騎兵隊、エンケ装甲竜騎兵隊の隊員計九名が集められた。これが現時点でハバリア遠征隊に配属されているすべての竜騎兵力である。ハバリア遠征隊竜騎兵部隊の総指揮官に任じられていたアイリゲン大佐は、彼女たちに

「今までは、各隊ごと個別に空襲、哨戒等の任務を行ってきたが、強力な敵の存在が確認されたことから、警戒のため当分の間、この三隊は一体となって行動することとする。本日はザエフに無理な空襲を加えることは差し控え、ザエフ前面に友軍地上部隊が展開するのを援護する任務に就くこと」

と指示した。

マヤはアマルータ隊が遭遇したという「すごい敵」がどのようなものなのか気になった。マヤたちファクティム隊はシュラーズ戦の折、とてつもなく強いがなぜか無表情な、不思議な敵に出会っている。もしかしたら今回の敵はその時の敵と関連があるのだろうかと思っただのである。ありがたいことに、ラウラがマヤの考えを代弁し

てくれた。

「なあ、ウィル。あたしたちがこの間、シュラースですごい敵と遭遇したって報告しただろ？今回の敵は、その時と同じやつじゃないのか？」

ウィル・アイリゲン大佐は、他の隊の隊員たちも同席している作戦会議の場でラウラがため口を聞いたことを咎める意味を込めて、咳払いを一つした。そして、

「敵兵力は目下、分析中である。詳細がわかり次第、諸君にも知らせる」

と答えた。

竜騎兵たちはその後、すぐさま与えられた任務に就いた。

午前中は何事も起こらなかった。「すごい敵」以外の敵の竜騎兵も、下手に出撃して消耗することを恐れているのか、全く姿を見せなかった。マヤたちは他の二隊とともに、ザエフの南側から東西方向に展開しようとする味方の地上軍の上を飛び回り、敵の動きを見守った。

マヤは先日、シュラースで出会った敵のことをもう一度、思い出してみた。あの竜騎兵の顔、やはり元の世界にいた頃に見たことがある。ただ前回、遭遇したときには気づかなかったが、いま改めて考えてみると、どこかで彼女と直接会ったわけではなく、写真か何かで見かけただけのような気がする。いったい誰なのだろう……。

午後になった。マヤたちは交代で竜を地上へ降ろし、翼を休めさ

せる間にえさを与え、ついでに自らも携行食料で軽い昼食を済ませた。九人全員が休息を終え任務に戻った頃には、昼下がりのけだるい空気が辺り一帯を覆い始めた。強敵に備えて張りつめていたマヤたちの緊張の糸も、わずかではあったが緩み始めていた。

そのとき突然、エンケ隊の竜のうちの一匹が地上に向かってまっすぐに降下を始めた。

いまこのタイミングで他の八人に何の断りもなく警戒任務を中断するなど考えられない。ならば、この突然の降下の理由は一つである。

緊張の糸は再び最高潮に張りつめられた。降下した竜は着陸態勢をとることなく地面に激突した。味方の白魔道士隊がおそらく救助に向かったのだろうが、そのようなことを確かめる余裕はない。マヤたちは全神経を、自分の前方と後方と右方と左方と上方を注視することに振り向けていたからである。

「あそこだ！」

ラウラが叫んだ。彼女から比較的近いところを飛んでいたマヤには、その大きな叫び声が直接聞こえた。ラウラの声が聞こえなかった他の竜騎兵も、ラウラが自分の乗っている竜の頭を急に太陽の方へ向けたことから、すぐに、注意をどこへ集中させればよいかを悟った。

竜騎兵たちはまぶしさに目を細めながら南の上空を見つめた。太陽の中から黒い影が飛び出し、ものすごい勢いでこちらに向かってくる。それも三つも。

次の瞬間、マヤたちエラーニア竜騎兵隊が陣取っている空間を、黒い巨大な弾丸のようなものが三つ貫いた。そう、まさに弾丸だった。空間がひしゃげ、張り裂けるのが見えたような気さえた。こんなものに直撃されたら、どんなに分厚い装甲をまとった装甲竜でもひとたまりもないだろう。

マヤは辺りを見回し、状況を確認した。彼女の悪い予感は見事に的中した。すでにガユス隊の竜が一匹、装甲の隙間から血を吹き出しながら墜落しつつあった。

さすがの精鋭エラーニア竜騎兵たちも戦慄を禁じ得なかった。だが彼女たちが精鋭と呼ばれる所以は、たとえ戦慄していてもいま何をなすべきかを決して忘れないことである。残った七人は誰に命じられることなく、ラウラの周りに密集体形を作った。こうすれば敵は先ほどのような一撃離脱戦法をとることが困難になるからである。案の定、マヤたちのそばを通り過ぎていった三つの黒い影は、遠ざかるのをやめ、一旦、その場に停止した。もしマヤたちが密集しなければ、再び一撃離脱を企てるつもりだったにちがいない。

マヤはその三つの影を凝視した。距離が遠すぎて詳細はわからなかったが、どうやら三匹とも黒い装甲をまとった大柄な竜のようだった。

敵の黒い三匹とエラーニアの七匹はしばらくの間、相手を値踏みするかのように、距離を置いてお互いをにらみ合った。

「行こう」ラウラが言った。「こっちは今、太陽を背にしている。敵は日光がまぶしくてこちらの動きがつかみにくいはずだ」

今度は密集体形をとっていたため、ラウラの声は他の六人全員の耳に届いた。六人とも口では何も応えなかった。だが行動によってラウラの提案に同意したことを示した。

エラーニアの装甲竜七匹は密集体形のまま、文字通り一丸となって敵の装甲竜に突入を敢行した。

すると敵の三匹は、こちらがすぐそばまで近づいてきたのを見計らって、それぞれ別の方向へ散開した。この動きはマヤたちの予想の範囲内だったので、それほど動揺はなかった。と言うよりむしろ、敵がバラバラになったことによって各個撃破のチャンスが生まれたと思った。

しかし、敵のその次の動きは、マヤたちの想像の及ぶものではなかった。実際のところ、敵の三匹がどう動いたのかマヤには理解できなかった。なぜなら、気がついたときにはマヤは敵の三匹に三方を囲まれていたからである。

マヤは度肝を抜かれながらも、持ち前の人並みはずれた空間認識力で、後ろの下方に逃げ道があることを察知した。前方に陣取っていた敵の竜が、マヤめがけて強力な頭突きを繰り出したが、マヤはその一瞬前にピムに下降を命じていた。

その時、マヤの目ははつきりと、頭突きを繰り出した竜を操縦している敵竜騎兵の顔をとらえた。シュラースで遭遇したあの強敵だ。間違いない。無表情なところもあのときのままだ。

敵はマヤを取り逃がしたことを悔しがるそぶりも見せず、次の瞬間にはオクタヴィを包囲していた。あらかじめ決められていたかのよう、全く無駄のない行動だった。しかもその動作がまた途轍も

ない。マヤに頭突きしようとした竜は、頭突き失敗の直後、斜め上後方へ宙返りをしてオクタヴィの竜の腹の下に位置を移したのである。そこにオクタヴィがいるということを認識するのも難しい。なのにその竜の操縦者は、そのような宙返りによって他の二匹とともにオクタヴィを包囲することができると瞬時に認識したのである。とても人間業とは思えなかった。

マヤは、驚く間も惜しんでオクタヴィの救助に向かった。オクタヴィは今、宙返りをした敵に下方を、他の二匹の敵に前後を封じられている。見たところ、オクタヴィの前方に立ちふさがっている敵がマヤの方向からの攻撃に対して比較的無防備のように思えた。そこでマヤはピムにその敵へ突撃するよう命じた。

ところが、その次の瞬間にマヤが感じた驚きは、今日これまでに感じたどの驚きよりも遥かに大きいものだった。その敵竜にまたがっている女の顔がマヤの目に飛び込んだ時、マヤは心の中で叫び声を上げた。

??あの女にも見覚えがある!??

オクタヴィの下にいる竜騎兵だけでなく、前方の竜騎兵の顔も記憶にあると気づいてしまった。この瞬間から、マヤのエース竜騎兵としての勘が狂い始めた。

??一人だけなら他人のそら似ということもあり得るが、二人となると、偶然とは考えにくい??

百パーセント意識を集中していても苦戦しているというのに、マヤはあるうことが、他ごとを考え始めたのである。

??間違いない。あの顔、一年以上前、まだ向こうの世界にいた時に見た顔だ??

マヤの突撃を受けたその敵竜は、寸でのところでピムの頭突きをかわした。その間に、他の二匹の敵もラウラの竜やその他の味方の竜の突撃を受けた。そのため、敵は一旦、オクタヴィを包囲する環を解いた。

??しかも、今のあの女の顔、シユラースでも会ったもう一人の女よりはつきりと記憶にある。確か??

だが敵の竜たちはすぐに、またとんでもなくトリツキーな動きでエンケ隊の竜のうちの一匹を包囲した。

??そう、雑誌に写真が掲載されていたんだ。彼女の名前は??

マヤは包囲されたエンケ隊の竜を助けるべく、再びピムを突進させた。

??バーバラ・スターゼン。全米アクロバット飛行競技選手権女子部門三年連続チャンピオン。アクロバット飛行競技世界選手権チャンピオン、アンドリユー・スターゼンの妹??

マヤがたどり着くよりも一瞬早く、敵は包囲下のエンケ隊の竜にダメージを与えることに成功した。ダメージを受けたエンケ隊の竜は、苦しそうな鳴き声を上げながら高度を下げ始めた。

もちろん、エラーニア竜騎兵たちもただ黙ってやられてばかりいるわけではなかった。マヤと同じく救出に来ていたラウラの竜が、バーバラ・スターゼンかと思われる女の乗った竜の土手っ腹に頭突

きを命中させた。残念なことに決定的なダメージを与えることはできなかった。それでも、敵竜に苦痛を与え、制御を難しくさせる効果はあった。

ダメージを受けた敵竜は徐々に高度を落とし始めた。マヤはささず追撃に移った。本来の彼女であれば、手負いの竜にとどめを刺すなど雑作もないことである。しかし、そこには、もしかしたら自分と同じ世界から来たかもしれない人が乗っている。そんな人を地上にたたき落とすことなど、マヤにはできなかった。

マヤはピムをその敵竜のすぐそばにまで近づけた。そして、戦闘中だということも忘れ、ただ必死に

「Ms．Stasen！ You're Barbara Stasen， right？ You came from the other world， didn't you？ Me， too． Listen， Ms．Stasen！ Hey！ Ms．Stasen， listen to me！ Please！（スターゼンさん！あなたバーバラ・スターゼンさんですよ？ 異世界から来たんでしょう？ 私です。スターゼンさん！ 聞いてください。ねえ、スターゼンさん！ お願いだから、聞いてください！）」

と呼びかけた。

なのに相手の女は、ブロンズ像よりももっと無表情のままだった。

すぐさまマヤの左と右から、残りの二匹の敵が同僚の危機を救うべく近づいてきた。左からやってくる敵は、シュラース上空でも戦ったことのあるあの女の操縦する竜だった。マヤはそちらの竜の

襲撃をかわすことはできた。だが、右方向から彼女を襲った敵竜をかわすことは全くできなかった。なぜなら、彼女の心は、その日最大の驚きによって完全に支配されてしまったからである。右の竜を操縦している女は、なんと、手負いの敵竜に乗っている女と同じ顔をしていたのである。

目の前にもバーバラ。右からもバーバラ。マヤの心の片隅に残っていた最後の平常心のかけらは、ついに吹き飛んでしまった。

??バーバラ・スターゼンが二人……。どうして……??

マヤが驚愕している間に、右から来た敵竜はピムの体に決定的なダメージとなる体当たりを加えていた。

マヤはピムの背中から振り落とされ、ピムとは別々に地上へ墜落し始めた。遠ざかり行く意識の中で、彼女はずっと遠くの空に、薄緑色の派手な衣装をまとった竜騎兵が黒い装甲竜の背中の上に立っているのを見た。

??あれは、ヤグソフ四姉妹のニーナ……。???

マヤの意識はそこで途絶えた。

二週間後、マヤはザエフ近郊に設営されたエラーニア軍の野戦病院のベッドの上で目を覚ました。

「あたし、またルーミアに命を救われたのね。これで何度目だろ？」

マヤはかたわらに付き添うルーミアにそう尋ねた。

ルーミアは「命を助けられるたびにいちいち恐縮してたら、竜騎兵なんて仕事やってられないでしょ」と、自分のほうが姉であるかのような口調でたしなめた。

「ねえ、隊長とオクタヴィはどうしてる？」

「二人とも元気よ」

「よかった。じゃあ、今の戦況はどうなってるの？」

「ザエフはまだ陥^おちていないわ」

「二週間も経っているのに？」

「ええ。ハバリアの竜騎兵の中にすごく強いのがいて制空権をとれないって。それで、ここ二週間は防戦一方。いまエラーニア本国からの援軍がそろつのを待っているところ」

「そうなの」

「エラーニア地上軍の兵力は、侵攻を開始したときの五倍、竜騎兵力も、エラーニアが現在保有する二十三個の竜騎兵隊のうち十九個をザエフ戦線に回したって。総力戦ね」

「っていうか、もともとあんな少ない兵力でハバリアに侵攻したのは無理があった」

「そうかもね。あたしとしては、援軍のおかげでお姉ちゃんにかかる負担が軽くなってくれさえすれば、それでいいんだけど」

「でも、あの強敵とはまた戦わなくちゃならない」

「お姉ちゃんを撃墜したのは、そんなにすごい敵だったの？」

「うん。強かった」

「そう。エース竜騎兵のお姉ちゃんが言うんだから、きっと本当にすごいんでしょうね」

「エース竜騎兵か。そういえばそうだった」

「二、三日したらもう戦線へ復帰でしょ？」

「たぶんね……」

「気をつけてね」

「……………」

「……………」

「……………」

「お姉ちゃん？」

「あ、ごめん。ちょっと考え事してた」

「びつくりした。まだどこか体に悪いところがあるのかと思った」

「あのね、ルーミア。いまルーミアにエース竜騎兵って言われて思
い出したんだけど」

「ええ」

「ずっと前、ナターシャがシユラスであたしをさらおうとしたと
き、彼女、『マヤをエース竜騎兵にするためにこちらの世界へ呼ん
だ』って言ったの」

「ヤグソフだけが使えるっていう、魔道学の常識を超えた魔法、『
ヤグソフの異呪』で呼ばれたのよね？」

「ええ、おそらく。でも、これってちょっとおかしくない？あたし
は今、確かに竜騎兵隊に入って『エース竜騎兵』なんて呼ばれてる
けど、それは、あたしがたまたま飛行機事故で元の肉体を失って女
の子になってたから出来たことでしょ？」

「ああ、そうか。もしお姉ちゃんが事故に遭わず無事にこちらの世
界へたどり着いていたとしたら、お姉ちゃんは男の子のままだった
はず。男の子は竜に乗れないから竜騎兵にもなれない」

「最初からあたしを事故に遭わせるつもりだった、肉体を失わせる
つもりだったと考えられなくもないけど……」

「それは、前にお父さんも説明したけど、あり得ないことだわ。肉
体を完全に失わせて魂だけにして、それを女の魂として再生するの
を意図的に行うのは、現代魔道学の常識に照らして考えれば、絶対

無理。お姉ちゃんのケースは、奇跡中の奇跡」

「でしょ？だとすれば、ナターシャのあの言葉、いったいどういう意味になると思う？単なる言い間違い、口から出任せ、っていう可能性はとりあえず置いて、他に考えられるとすれば、こっちは『パイロット』なんて言葉はないから、竜騎兵って単語を使っただけ、つまり、ただ単にあたしを飛行機に乗せて戦わせるつもりだったってことなのか……」

「『ヤグソフの異呪』を使えば男のまま竜に乗れるようになるってことなのか……」

「さもないければ」

「そうだわ！」

「そうよ。最初から『ヤグソフの異呪』の力であたしを女にするつもりだったっていう可能性がある」

「もしそうだとしたら」

「そして、もしその力を逆の作用にも使えたとしたら」

「お姉ちゃんは、男の子に戻るかもしれない！」

「そういうことになるわ」

「そうね。そういうことになるわね」

「ええ……」

「……あんまり嬉しそうじゃないわね」

「嬉しいわよ。でも、ちょっと複雑な感じもする」

「女の子としての生活に慣れてしまったから不安なの？」

「それもあるし、ルーミアに男の子の姿を見られるのが恥ずかしいっていうのもあるし。でも、どのみちこれは『ヤグソフの異呪でそういうことができる』っていう仮定の話」

「そうね」

「第一、ヤグソフの異呪はヤグソフにしか使えないって言われてるんだから、異呪で性転換ができたとしても、男の子に戻りたいならあたしはヤグソフにお願いしなきゃいけない。『ねえ、ヤグソフのおじさまあ、マヤ、とおっても困ってるの。おねがい、マヤを男に戻してえ』とか言うって」

「何？その声色。媚を売ってるつもり？」

「だめかな」

「全然だめ」

「じゃあ、ルーミアがやってよ」

「いやよ。あたしは男には媚びないの」

「えーっ？ルーミアって見た目はわりと少女キャラだから、もっと

「かわいこぶったほうがもてるのに」

「あたしはそういうふうに見られるのが嫌なの」

「もっと素直になりなさいよ」

「何よ。自分がちょっとジュートといい関係になれたからって」

「あ、ごめん。本気で怒った？」

「まさか。冗談よ。お姉ちゃんの悪ふざけにつきあってあげただけ。……何にせよ、ヤグソフがそんな中途半端な色仕掛けでお願いを聞いてくれるほど親切な人だったら、きつと戦^{いくさ}なんて起こさないわ」

「そうよね」

「話は変わるけど」

「うん」

「はい、これ」

「何？これ」

「ネックレス」

「あたしにくれるの？」

「ええ」

「ふん、ふん、ふん」

「お誕生日プレゼント。三日遅れだけど」

「ああ、そうか。意識を失っている間に」

「そう。十七回目のお誕生日おめでとう、お姉ちゃん」

「ありがとう」

「なんか、半年前のあたしのと看以上にひどい誕生日になっちゃったわね」

「まさかあれよりひどくなるとはね」

「次の誕生日はちゃんとパーティーとか開いて盛大に祝えたらいいな」

「そうね。そのときにはあたしも……」

.....

.....

「……とにかく、次の誕生日は、お姉ちゃんはお姉ちゃん、あたしはあたしで、もっとゆったりした雰囲気の中で祝ってもらえたらいいわね……」

「……そ、そうね……」

「……じゃあ、お姉ちゃん、あたし、仕事に戻っていい？」

「もしかして、ギールにいた時みたいに、この野戦病院でも自発的に兵士を白魔法治療してあげてるの？」

「ええ」

「ルーミアらしいわ」

「じゃあ、またあとで」

「あ、ルーミア」

「何？」

「いろいろと、ありがとう」

「……うん。じゃあ」

ザエフへの総攻撃が開始された。

エラーニア側の地上兵力は、十分すぎるほど十分である。だが制空権がとれなければ、進軍することは不可能、とは言わないまでも非常に困難となる。ファクティム城に拉致されたマヤがルーミアの連れてきたピムに助けられたときのことを思い出してほしい。堅牢な城塞の壁さえピムの頭突き一つでいとも簡単に壊すことができた。

もし竜を十匹集めれば、一日で町を一つ破壊することもできてしまう。まして地面に這いつくばって生身の体をさらしている地上兵が、一旦、敵の竜の攻撃目標になったとしたら、逃げるか、攻撃が外れることを神に祈るほかない。それほど竜騎兵力は大きな影響力を持っているのである。

エラーニアの竜騎兵力は十九隊。一方、ハバリア側は十一隊だが、そのうち八隊は竜がひ弱すぎてほとんど戦力とは呼べないシロモノだった。残りの三隊のうち、二隊は竜騎兵の熟練度は高いが竜のほうやはり丈夫とは言えなかった。そして最後の一隊、これが例の強敵である。

エラーニア側はなんと、十九隊のうち十五隊をその一隊の強敵に振り向けるという大胆な作戦に打って出た。そもそもこの戦線にこんなにたくさんさんの竜騎兵力が回されたのは、その強敵を倒すにはそれぐらいの兵力がどうしても必要だとアイリゲン大佐たちがエラーニア王宮に進言したからである。ハバリア遠征隊の首脳部は、マヤが撃墜された後、すっかりあの強敵に対する恐怖心に取り憑かれてしまったらしい。

マヤたちファクティム竜騎兵隊も、当然、その強敵を攻撃する十五隊の中に加わった。事前に定められた作戦の通り、揺動、包囲、突撃といった行動を同僚たちと連携して行っている間、マヤは何度も敵の竜騎兵の顔を間近に見るチャンスがあった。そのうちの一人はシュラスでも遭遇した女。そして残りの二人がバーバラ・スターゼンではないかと思われる女と、そのそっくりさん。前回と全く同じメンバーである。ただ今回、味方が優勢という状況の中で落ちていて敵の三人の顔を眺めてみると、二人のバーバラ・スターゼンは微妙に顔のニュアンスが異なっているように思えた。

マヤはバーバラ・スターゼンの家族構成について詳しく知っているわけではない。彼女の兄が彼女以上に優秀なパイロットだということは有名だが、もしかしたらバーバラにはそれほど有名ではないよく似た妹か姉がいて、その姉妹とともにこちらの世界に引き込まれたのかもしれない。

もちろんマヤは、今度は戦闘中に彼女たちに話しかけるなどという愚かしい行為に及ぶことはなかった。そうしようにも、相手の女が相変わらずあまりにも無表情で、たとえ耳元で怒鳴ったとしても何の反応も示しそうになかったのである。

戦況と言えば、多勢に無勢という言葉をそのまま絵にしたようなものだった。いくら恐るべき力を持った敵でも、三対四十五という数的劣勢を跳ね返すことは物理的に不可能である。仮にこちらが十匹撃墜されてもまだ三十五匹も残っているのである。実際のところ、敵は十匹以上のエラーニア竜を撃墜した。だが、それでもエラーニア側は次々と新手を繰り出すことができた。さすがの強敵も疲労には勝てず、だんだん動きが鈍くなってきた。

マヤは、もはや大勢は決したと判断した。ファクティム隊は敵竜騎兵をある程度沈黙させることに成功した場合、すぐさまゼーフへ空襲を加えることになっている。ラウラの指示を仰いだところ、敵の反撃を受ける可能性は低いので特にフォーメーションは組まず個別に空襲を行えばよいとのことだった。そこで、マヤはピムの高度を下げ、ゼーフ市街上空へ向かわせた。

ふと、そのとき。

北の方向、戦闘空域からやや離れた空に、一匹の装甲竜が漂っているのが目に入った。黒い装甲をまとった、大柄の竜である。しか

もその背中には薄緑色の竜騎兵服を来た少女が、なぜか座らずに突っ立っている。

「ニーナだ」

マヤは叫ぶが早いか、ピムを薄緑色の竜騎兵めがけて突進させていた。

その竜騎兵は、マヤがすぐそばにやってくるまで、ただぼーっと竜の背中に突っ立っていたが、マヤの接近に気がつく、慌てたように竜の背中に座り直した。

相手の竜はピムの突進をかううじてよけた。マヤはそのままその竜が反撃に移るものと予想し、警戒態勢をとった。

だが、相手の竜騎兵は竜をマヤに近づけることも、逆に遠ざけることもせず、ピムから少し離れた位置にとどまらせ、マヤに声をかけてきた。「久しぶりだな。貴様、マヤとかいったな」

マヤは応えた。「あなた、ニーナね」

竜騎兵ニーナは、以前、ファクティム近郊で出会った時と同様、不敵ににたにたと笑いながらマヤを睨みつけていた。「姉のモーラが世話になったらいいが」

「お世話になったのはこっちよ。一度は命を助けられ、一度は殺されかけたわ」

「それが戦いくさというものだ。貴様も竜騎兵なら、それは覚悟の上だろう？では、マヤとやら、ナターシャはどうだ？あやつは貴様に何か

世話をしてやったかな」

マヤはナターシャの名前を持ち出されてはつとなった。「ナターシャが……ナターシャがあなたに何か言ったの？」

ニーナは顔をしかめ、答えた。「何か言ってくれていれば、我らハバリア軍はザエフでこんなに苦戦しなかった。いや、そもそもエラーニア軍ごときに攻め込まれることもなかった。あやつは、ナターシャはやっぱ裏切り者だ。裏切り者はしょせん裏切り者だったんだ」

「ナターシャのことを悪く言わないで」

「ほほう。あやつのことをそのようにかばうということは、やはり世話になったんだな」

「何のことかよくわからないわ。あたしはエランで彼女と知り合って、友達になっただけ。それだけよ」

「ふん、まあいい。すべては後の祭りだ。貴様のことも、このザエフ戦線の戦況もな」ニーナは自分の乗る竜の頭を北に向け、「では、マヤ、近いうちにまた会おう。戦場で」と言い残してその場を飛び去った。

マヤは一瞬、追撃しようかと思ったが、ニーナの竜の飛び去る速さが並外れていたので追いつけないと判断し、ザエフ空襲という本来の任務に戻ることにした。

結局、エラーニア竜騎兵隊は、例の強敵のうち二匹を撃墜し、残りの一匹にも深刻なダメージを与えて撤退に追い込んだ。敵の他の

竜騎兵隊も、ほぼ壊滅状態に陥らせた。

制空権を得たことを確信したエラーニア軍ハバリア遠征隊総司令部は、地上部隊に対しザエフ突入を命じた。ザエフのハバリア地上軍は死にものぐるいで抵抗したが、それも長くは続かなかった。

五日後、ザエフは陥落した。ハバリア侵攻から一ヶ月でザエフを攻略するという目標を結果的に達成したとはいえ、内容から見れば、予想を遥かに上回る大苦戦だった。侵攻開始当初、一ヶ月以内にドウムホルクを陥^おとして戦^{いくさ}を終わらせることも可能などと楽観したことが、今となっては空虚な妄想として思い出された。

ザエフ陥落の翌日、ハバリア地方は雨期に入った。

数日後、マヤは湯煙の中にいた。

ハバリア侵攻作戦開始前にアイリゲン大佐が約束してくれた通り、ファクティム装甲竜騎兵隊はザエフ陥落後、十日間の休暇を与えられた。本来なら大喜びすべき状況である。だが、ファクティム隊の面々は不満を募らせていた。

「まったく、これのどこが休暇なんだ」ラウラはそう言って、湯の中にそそり立つ岩石にその大きな背中を預けた。「雨期の最中でも敵が行動を起こすこともあり得る。場合によってはファクティム隊の力が必要だ。休暇中、ザエフ近郊から離れないでほしい」だって？ふざけるなっつーの。これじゃあ、ギール城で敵襲に備えてじっ

と待機していたあの時と、大して変わらないじゃないか」

オクタヴィは一方の手で湯をすくい、もう一方の腕にこすりつけるようにしながら「ほんとですわね。わたくし、帰省ぐらいはさせてもらえると思っていましたわ」と言った。

ルーミアは、上のほうへまとめあげた長い髪がずり落ちてこないか、ちょっと気にしながら「せめて、ザエフの近くに、休暇を過ごすのにもっと適した場所が残っていたらよかったのにね」と言った。

ラウラは吐き捨てるように「この間の戦闘で破壊し尽くしたあとだからな」と言った。

オクタヴィは手ですくった湯を、今度は首筋にかけながら「でも、この露天風呂と温泉宿が残っていたのは不幸中の幸いでしたわね」と言った。

ラウラは「まあな」と応えた。

ルーミアが言った。「あたし、温泉って初めて」

オクタヴィが言った。「わたくしもです」

ラウラが言った。「エラーニアには温泉なんてないからな。あたしはまだ小さい子供だった時、親に連れられて一度、この近くの温泉に来たことがある。その当時はまだハバリアが独立する前で、ここはエラーニア領だったから」

ルーミアが言った。「お姉ちゃんはどう？温泉って来たことある？」

ラウラはその時、マヤがうつむいたまま上目遣いにオクタヴィのほうを伺っていることに気づいた。「マヤ、どうした？」

マヤは恥ずかしそうに「う、うん。オクタヴィって着痩せするんだなって思ってた……」と言った。

オクタヴィは応えた。「あら。わたくしって何も着ていないとそんなに太って見えます？」

マヤは慌てて「ううん、そんな意味じゃない。そんな意味じゃ、全然ない」と言った。

ラウラはマヤの言おうとしていることに気づき、マヤの胸とオクタヴィの胸とルーミアの胸と自分の胸を見比べた。ラウラの胸は実は結構、大きい。体自体が大きくて肩幅も広いため目立たないだけである。他方、ルーミアの胸は誰が見てもふくやかである。オクタヴィの胸が標準よりやや大きいことには、ラウラもいま気づいた。だが、マヤの胸は、お世辞にも大きいとは言えない。

ラウラはオクタヴィに「おまえは服を着ていようと着ていまいとスレンダーだよ」と言ってから、マヤに「なあ、マヤ。おまえ、まだ十七だろ？」と尋ねた。

マヤは答えた。「うん」

「じゃあ、これからだよ。まだまだ、胸は大きくなる」

マヤは、自分の胸が他の三人より小さいことを気にやんでいるとラウラに悟られたのが恥ずかしくて、顔を真っ赤にしながら「そう

？」と応えた。

「ああ、そうさ」

オクタヴィも「そうですわよ」と応えた。

ルーミアは何も言わなかった。

ラウラが言った。「それとも、彼氏に何か言われたのか？」

マヤは更に顔を赤らめながら首を振った。

ラウラは続けた。「男には目の性欲と心の性欲があるって話だ。だから見た目がよい女なら、それほど好きでなくても抱ける。でも、本当に重要なのは心のほうだ。体のことを言われてもあんまり気にするなよ」

マヤは男だった時に感じていたことをラウラに指摘され、妙に納得した。「うん。わかった」

ラウラは、マヤとその彼氏、ジュートとの仲がどうなっているのかちよつと気になって、マヤに「この休暇中に彼氏と会う予定とかないのか」と訊いた。ラウラもやはり一人の女性、他人の恋愛の話には興味があるようだ。

マヤはまた顔を赤らめながら「今夜、会ってくれるって」と答えた。

オクタヴィが言った。「よかったですわね」

ラウラが言った。「もうだいぶ長い間、会っていないんだろ？」

ルーミアが口を挟んだ。「二ヶ月ぶりぐらいよね？」

ラウラとオクタヴィは、ルーミアのこの態度を見て安堵した。彼女たちはルーミアがジュートに憧れを抱いていたことは知っている。だから、いまこういう話をしながら、もしかしたらルーミアが気分を害したのではないかと少し心配していたのである。どうやら、ルーミアはジュートのことについては全く吹っ切れているようだった。

ラウラは、マヤに「軍人同士じゃなかなか会えなくても仕方ないよな」と言った。

マヤは「そうね」と答えた。

「でも、あともう少しの辛抱だ。雨期が明ければハバリア北部への進撃が開始される。そしてドウムホルクが陥落すれば、戦が終わるはずだ。戦が終われば、彼氏ともっと頻繁に会えるだろう？たとえ向こうが職業軍人でも」

「だいいいけど」

オクタヴィは「きつともっと会えるようになりますわよ」とマヤを慰めてから少し話題の方向性を変えた。「ねえ、マヤ。マヤはこの戦が終わったらどうなさいますの？マヤはルーミアの家の養女ですから、ルーミアの故郷に帰るのでしょうか？」

マヤはちょっと当惑したような顔をして「どうするかなんて、考えたこともなかった」と答えた。

「ラウラはどうするおつもり？」

ラウラはマヤとは対照的に嬉しそだった。「え？あー、あたしは……あたしも決めてない。あたしは戦が終わったなら除隊して、故郷のファクティムに帰って……花嫁修業でもするか？わはははは、いや冗談、冗談だけだな」

マヤはラウラの態度から彼女が除隊後に何をするつもりなのかを容易に推察できた。きつともうすでにアイリゲン大佐と将来の約束をしているに違いない。ただ、ラウラはアイリゲン大佐との関係をマヤたちにも公言していない。そういうことをこちらから問いたただすのも失礼なので、マヤは何も言わなかった。

オクタヴィは話を続けた。「ルーミアは、故郷に帰ってまたお父様の白魔道治療院を手伝うんでしょ？」

ルーミアは「うん」とうなずいた。

オクタヴィは最後に自分の話をした。「わたくしもファクティムに帰ってお父様の仕事を手伝いますわ。と言っても、アドレアーヌ家のしきたりで銀細工の技術は婦女子には伝えないことになっておりますから、事務的なお仕事のお手伝いですけど」

ラウラはマヤとルーミアに「アドレアーヌ家はファクティムでは有名な銀細工職人の家柄で、職人でありながらエラーニア王宮から貴族に準ずる称号を与えられてるんだぜ」と説明した。

オクタヴィは言った。「ねえ、みなさん、戦が終わってそれぞれ故郷に帰ったあとに必ず一度、会いましょう。みなさんファクティムかその近くにお住まいですから、ファクティムでなら集まること

ができますわよね？」

ラウラは「そうだな。それはいいな」と答えた。

オクタヴィは続けた。「わたくし、このファクティム竜騎兵隊のみなさんが本当に好きですの。かけがえのない友だと思っておりますの。ですから、除隊したあともずっとみなさんと今のような関係を続けてゆきたいのです」

マヤはオクタヴィの言葉を聞いて表情を曇らせた。マヤはいずれ異世界に帰ってしまうかもしれない。そうなれば、オクタヴィの言うように『ずっと』今のような関係が続けることはできない。

オクタヴィはそんなマヤの様子に気がついて「どうかなさいました？マヤ」と尋ねた。

すると、マヤは無理矢理に微笑んで「ううん。何でもない。そうね、もし再会できる機会があるなら、かならずまた会いましょうね」と言った。

その夜、マヤは温泉宿の庭園でジュートと会っていた。

「おい、マヤ」

ジュートはいたく不満そうだった。

「おまえ、どうしてズボンをはいている？」

マヤは不思議そうな顔をして「え？」と訊き返した。

「どうしてスカートををはいていないのかと訊いている」

「どうしてっていわれても、私服はこれしか持ってきてきてないもの。他のみんなエランの基地においてきちゃったから」

ジュートは急に泣きまねを始めた。「そんなあ。エランで会って以来、何ヶ月かぶりにマヤの私服姿が拝めるってんで、きつとミニスルをはいてきてくれると期待してたのに」

マヤはジュートの頭を撫でながら「わかった、わかった。こんど会う時はパンツが見えそうなくらい短いのをはいてきてあげるから、泣かないの」と言った。

ジュートはぱたつと泣きまねをやめ、満足そうにかつと微笑んだ。

マヤはあきれ顔で「怒ってみたり泣いてみたり喜んでみたり。あなたの百面相ぶりには圧倒されちゃうわ」と言った。

するとジュートは、思い出したようにポケットから小さな小箱を取り出し、

「そうそう。おまえに渡したいものがあってな」

と言った。

マヤはジュートから小箱を受け取り

「何？これ」

と言った。

「開けてみる」

マヤが小箱を開いてみると、中には指輪が入っていた。

ジュートは「誕生日プレゼントだ。ちょっと遅くなっちまったけどな」と言った。

マヤは感激の表情で「ありがと。すごく嬉しい」と言った。

「はめてみてくれ」

マヤは言われるまま指輪を箱から取った。ところが、それを左手の薬指のそばまで持っていた時、ふとためらいを覚えた。

ジュートは怪訝そうな表情で「どうした？」と尋ねた。

マヤはもう一度、指輪をはめるよう自分自身に命じた。だが、どうしてもはめることができなかった。これは単なる誕生日プレゼントで、別に永遠の愛を誓うものではない。ちょっとはめてみるくらい何の抵抗もないはず。そうだとわかっているのに、どうしてもその環に指を通せないのだった。

彼女は思った。いずれ自分は異世界に帰ることになるかもしれない。その時は当然、彼とは別れなければならない。彼とこんな関係

を続けることは、もしかしたら彼に対する裏切り行為なのではないか。

マヤは表情を曇らせ「ごめん。この指輪はしてあげられない」と言った。

ジュートは、マヤの突然のこの言葉に驚き、大声で

「なぜだ！」

と言った。

マヤはジュートの目を見ないように首を横に振るだけだった。

ジュートはマヤのあごをつかんで彼女の顔を自分に向けさせた。

「理由を言え」

マヤはおそろおそろジュートの目を見て「理由は……理由は、いずれお別れしないといけないから」と言った。

「故郷へ、東洋へ帰ってしまうってことか」

「故郷へ……、そう、故郷へ帰らなきゃいけないの」

「俺がおまえを故郷へ帰すと思うか」

「だめなの。どうしても帰らなきゃいけないの。どうしても」

「じゃあ、おまえについて俺もおまえの故郷へ行く」

「無理よ。あなたにはあたしの帰るところについてくることはできないわ」

ジュートは声を荒げ、叫んだ。「いいや、俺はおまえの側から離れない。離れるもんか。絶対について行く。どんなことをしたって、どこにだってついて行く。どこにだってな。たとえ東洋だろうが、南洋だろうが、異世界だろうが……」

マヤは彼の言葉の最後の部分に敏感に反応した。「いまなんて言っただ？」

ジュートはばつの悪そうな表情のまま何も答えなかった。

「いま異世界って言わなかった？」

ジュートは黙ったままだった。その態度から、彼が言葉のあやで異世界という単語を使ったわけではないことは明らかだった。

「知ってたの？あたしがどこから来たのか」

ジュートは重そうに口を開いた。「知ってた……というか、そう思い始めていたんだ」

「どういうこと？」

「一年前、俺たちが初めてアヴニ村で会った時のことは憶えているだろう？」

「ええ」

「あのととき俺たちはエラーニア王宮の命令でアウスгент地方に降り立ったという『男の竜騎兵』を探していた。それは知ってるな。なぜそんなことをしていたかと言うと、ハバリアに忍び込ませているスパイが『ヤグソフが戦力として異世界から異呪で呼び出した『男の竜騎兵』が、不慮の事故でアウスгент地方に降りたらしい』と報告してきたからだ。いままで隠していたが、俺は騎士ではなく本当は情報部の将校なんだ」

「ヤグソフが戦力として呼び出した？」

「そうだ。だが、いま考えたら、俺たちは『男の竜騎兵』という言葉にこだわ리すぎていた。特にあの調査隊の隊長のバンク・ベエルつてのが頭の固い奴だったから、余計にそうなつてしまった。だから、俺たちはマヤのことも、オカマでないことを確認すればそれ以上は疑う必要はないと思った。その後も結局、『男の竜騎兵』は見つからず、調査隊は解散ということになった。俺は、引き続きスパイ狩りの任務に就いた。そのうち、俺はおまえと再会し、おまえのことが好きになったが、よく考えると、やっぱりおまえが異世界から呼ばれた人間だと考えればつじつまが合うような気がしてきた。ナターシャとかいう女スパイがおまえに接触していたと知った後は、ますますそう思えるようになった」

「じゃあ、あたしの正体も、もちろん……」

「ああ。俺たちのスパイがハバリアから送ってきた情報の一部が間違っていたとすれば、つまり『ヤグソフが呼び出した男の竜騎兵』の部分が『ヤグソフが呼び出した女のパイロット』だったとすれば、すべてつじつまが合うんだからな」

「え？」

「飛行機械を操縦する人をパイロットっていうんだろ？」

「え？ええ……」

ジュートはちよつと表情をほころばせて「ヤグソフが呼び出すぐらいだから、おまえはさぞ優秀な女流パイロットだったんだろうな」と言った。

「ジュート、あ、あの……」

マヤはジュートの誤りを正そうとしたが、そうする前に彼の唇に言葉を封じられてしまった。

ジュートは唇を離れた後、言った。「さっきは取り乱してすまなかった。俺が異世界になんか行けるはずなのにな」

マヤは首を振った。

ジュートは続けた。「マヤが異世界に帰るのは明日や明後日のことじゃないんだろ？じゃあ、これだけは憶えておいてくれ。異世界がどんなに便利な世界なのかは知らないが、おまえがこの世界にとどまってくれれば、俺はおまえを『この世界が一番いい、異世界に帰らないでよかった』って思えるぐらい幸せにしてやる。俺にはその自信がある」

「ジュート……」

「おまえの正体を誰かにばらすつもりなんかないから安心していい。今日はもう帰る。じゃあ、またな」

ジュートはそう言い残し、去っていった。

庭園の暗闇に一人取り残されたマヤは思った。自分のつく嘘がほとんどん周りの人を不幸にしてゆくような気がする、もう嘘はつきたくない、と。

真夜中少し前、マヤとルーミアは温泉宿の一室にラウラとオクタヴィを呼び出していた。

ラウラは、マヤの打ち明けた話をすべて聞いた後、驚きの表情で「異世界？」

と訊き返した。

オクタヴィも驚きをあらわにした。「こことは違うもう一つの世界……。そんなところがあるなんて。なんて不思議な話ですの」

マヤは「今まで隠しててごめん」と謝った。

ラウラはルーミアに「ルーミアは知っていたのか」と尋ねた。

ルーミアは「うん。ごめんなさい」と言った。

オクタヴィは言った。「でも、これで納得いたしました。先ほど、

わたくしが『戦^{いくち}が終わったらまた会いましょう』って言ったとき、マヤが浮かない顔をなさっていたのは、向こうの世界にお帰りになっってしまうかもしれないからでしたのね。わたくしは、やはり東洋へお帰りになるのかなとは思いましたが、まさか異世界とは想像もつきませんでした」

ラウラが言った。「でも異世界の話よりもっと驚いたのは」

オクタヴィが続けた。「マヤが男の子だったってことですわ」

マヤは恥ずかしそうにうつむいて、「ごめん」と繰り返した。

ラウラが言った。「あたしは別に気にならないよ。元が男の子だろうと異世界から来ようとマヤはマヤ。あたしたちの大切な仲間さ」

マヤは顔を上げ、「ありがとう、ラウラ。こんなことならもっと早く打ち明ければよかったわ」と言った。

ルーミアも自分のことのように嬉しそうな顔をした。

だが、オクタヴィは表情を曇らせ「ただ、一つ困ったことがありますの」と言った。

マヤは心配そうに「どうしたの？」と尋ねた。

「アドレアーヌ家には『女子は、結婚相手とする男子にしか素肌をさらしてはならない』というしきたりがありますの」

「うん、それで？」

「ねえ、マヤ。異世界にお帰りになる前にうちの父に会っていただけますでしょうか？」

「は？」

「でもよかったですわ」

マヤは話の脈絡が全くつかめず、言葉を返すことができなかった。

「わたくし、実を言うと男のかたが少し苦手でしたの」

「……………」

「以前にも申し上げた通り、マヤはわたくしの好みの性格ですから」

「……………」

「異世界とこちらの世界、遠く離れるのはつらいですけど、ご安心ください。わたくしは一生、あなたの妻でいます」

オクタヴィの言っていることの意味をようやく理解したマヤは、びつくりして「ちょっと、オクタヴィ、「冗談でしょう？」と言った。

オクタヴィは大まじめな顔をしたまま、続けた。「わたくしとしては、できればマヤが異世界にお帰りになる前に、式だけは挙げていただきたく思うのですが。ウェディングドレスを着て祭壇の前に立つのが小さい頃からの夢でしたから」

ルーミアは不覚にも、お揃いのウェディングドレスを着た姉とオクタヴィがベッドルームに入ってゆく姿を想像してしまい、声を大

にして「オクタヴィー！お姉ちゃんは、今はれっきとした女なんだから、オクタヴィーと結婚なんかしない！するはずないじゃない！」と叫んだ。

マヤも当惑しきった表情だった。「あたしだって、オクタヴィーのこと、嫌いじゃない、ううん、好きだけど、ほら、いまあたしにはジュートもいるし、オクタヴィーの気持ちはありがたいとは思っけねでも結婚っていうのはちょっと」

その時、ラウラが大声で笑い始めた。「オクタヴィー、もうそれぐらいにしといてやれ」

マヤとルーミアはきょとんとした表情でラウラの顔を伺った。

オクタヴィーは言った。「冗談ですわよ、マヤ、ルーミア」

マヤとルーミアは異口同音に「びっくりした」と言った。

「だいたい、うちにはそんなしきたりはありませんもの」

マヤは「もう。オクタヴィーも人が悪い」と言った。

ラウラは「こいつ、前にもサーラにプロポーズしてからかったからな」と言って苦笑いした。

オクタヴィーはちょっとお姉さんぶった口調で「でも、今回ののはただからかったのではなく、マヤとルーミアがわたくしたちに大事なことを隠していた罰ですわよ」と言った。

ラウラが言った。「そうだぜ。あたしたちのことを信頼してくれ

てなかったってことだからな」

マヤとルーミアは改めて「ごめん」と謝った。

ラウラは、二人に小さくうなずいてみせた。「まあ、何にせよ、これであたしたちには、ハバリアをやっつけてこの戦を終わらせる^{いくさ}って以外に、もう一つ目的ができたわけだ」

オクタヴィが応えた。「そうですね」

マヤは訊き返した。「どういうこと？」

ラウラが言った。「あたしたちが必ずおまえを、ドウムホルク宮殿の最上階に連れて行ってやる」

オクタヴィが言った。「必ず、異世界に帰れるようにしてさしあげますわ。帰りたいんでしょう？」

マヤは言った。「でも、二人にそこまでしてもらう理由が……」

ラウラが言った。「理由は、仲間だからだ。それじゃ理由になっ
てないか？」

オクタヴィが言った。「さっきも言ったでしょう？ わたくしはみなさんが好きだって。わたくしのほうもそれだけの理由ですわ」

マヤは「ラウラ、オクタヴィ、ありがとう」と繰り返すしか言葉が見当たらなかった。

ラウラは言葉を続けた。「となれば、あとはどうやってマヤをそ

こへ連れてゆくかだ」

オクタヴィが言った。「戦^{いくさ}が終わった後では遅すぎますわね」

「たぶんな。ドウムホルク宮殿がエラーニアに接收されてしまったら、入り込むことなんかできやしない」

「それに、異世界への門を開く装置っていうのを破壊してしまうかもしれない」

「ってことは」

「ドウムホルクを攻めるときに行くしかないですわね」

そこで、当事者なのに話から半ば置いてきぼりにされていたマヤが口を挟んだ。「でも、あたしたち、必ずドウムホルク宮殿に行けるとは限らない。他の戦線に回されるかもしれないし、ドウムホルクに回されたとしても宮殿とは違うところで任務をこなさなければいけないかもしれないし」

ラウラは得意げな表情で「大丈夫だ。あたしはエラーニア竜騎兵隊の上層部に顔が利く」と言った。

オクタヴィが応えた。「アイリゲン大佐ですわよね？」

「なぜ知っている」

「みなさんご存知ですわよ」

「そうなのか？なんてこった。まあ、とにかく、あたしに任せろ、

マヤ。必ずドウムホルク宮殿に回してもらえよう掛け合ってる」

マヤはいま一度、「ありがとう、ラウラ」と答えた。

するとルーミアが「よかったわね、お姉ちゃん」と声をかけてきた。

マヤは「うん」と答えながら妹の顔を見た。ルーミアは本当に嬉しそうに微笑んでいた。

11 ドウムホルク

ハバリア地方の雨期は一ヶ月間続いた。

その間に、エラーニア軍は、ハバリア帝国が自国領と見なして占領していた地域の奪回を着々と進め、雨期が終わる頃には、ハバリアの帝都ドウムホルクのあるハバリア北部以外の地域をすべてその手中に収めていた。もはやエラーニア王国軍の勝利は誰の目にも明らかだった。わずか五ヶ月前、ギールで王国の存亡をかけた戦いが行われたことが、遠い昔に見た一夜の悪夢のような、かすんだ記憶となりつつあった。

マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊は、休暇が終わった後も、よそへ配置転換になることもなく、雨期が終わるまでザエフ戦線での警戒任務にあたった。警戒といっても、今のハバリア軍の戦力では、ザエフに駐留するエラーニアの大軍に対し、反抗作戦どころか、ごく小規模なゲリラ戦を行うことさえ難しい。マヤたちがここ半年ほどの間、激戦に次ぐ激戦を戦ってきたことを思えば、この警戒任務は彼女たちにとって、事実上、休暇の延長だった。たまの晴れ間に竜たちを出撃させるのも、軍務というよりは、愛犬家が飼い犬を散歩させるのとほとんど変わらない、いわば空中散歩のようなものだった。

そんなのんびりした日々の中で、マヤは改めて、自分がこちらの世界に飛ばされてから今までにやってきたことを思い返してみた。とにかく必死だった。竜を人よりうまく乗りこなせることしか取り柄もない彼女が元の世界へ帰る手がかりを得るには、必死に戦ってハバリアへ近づく以外、方法がないと思ったからである。その結果、エース竜騎兵と呼ばれるまでになっていたが、彼女自身は軍隊内で

の昇進とか名誉とかそういうものには興味も関心もなかった。だが、シユラーズでナターシャに「マヤはエース竜騎兵になるためにこちらの世界の呼ばれた」と告げられて以降、マヤは時折、自分がエース竜騎兵であることの意味を考えるようになった。

ザエフ攻略戦のとき投入されたエラーニア側の竜騎兵力は全部で十九隊五十七匹。現在、エラーニア王国軍が保有しているすべての竜騎兵力を合計しても六十九匹にすぎない。一方、マヤの撃墜スコアはすでに九十匹を超えている。もちろん、撃墜スコアとは、敵の竜を一匹撃墜したという事実に対して与えられる数字でしかない。白魔法の発達したこの世界では一度撃墜された敵がすぐに復活してまた立ち向かってくることも珍しくない。だから「九十匹の敵を撃墜した」というのは、敵を延べ九十回撃墜したという意味であつて、九十匹の敵をすべて再起不能にした、あるいは亡きものにしたという意味ではない。

それでも、マヤはたった一人で、エラーニア一国が保有する竜騎兵力を遥かに上回る数の敵を、一時的に戦力として使い物にならない状態にし、そのうちの何匹か何十匹かは再起不能にしたわけである。もし仮にエラーニア軍にマヤがいなければ、今ごろハバリア側にはあと何匹か何十匹かの竜騎兵力が余分に存在している計算になる。まして、ナターシャの言っていたようにマヤがハバリア側のエース竜騎兵になっていたとしたら、逆にエラーニア側の竜騎兵力が今より何十匹か少ないことになる。そうになっていたとしたら、エラーニア軍がハバリアへ侵攻するどころか、ハバリア軍がエラーニア全土を蹂躪していたかもしれない。

マヤはふと、エラーニア竜騎兵隊の中で自分に次いで第二位の撃墜スコアを持つ者がいったい何匹ぐらい撃墜しているのか知りたくなって、ラウラに訊いてみた。ラウラは二十数匹だと答えた。それ

を聞いて、マヤは背筋が寒くなった。自分がいかに人間離れたことをしでかしたのかに、今更ながら気づき、怖くなったからである。同時に、一年前、ニーナやジュートたちがアヴニ村近郊に墜落した自分を血眼になってまで探しまわっていた理由が、ようやく理解できたのだった。

七月中旬、ついに雨期が明けた。

エラーニア軍は満を持してハバリア北部への進撃を開始した。フアクティム竜騎兵隊も、もちろん進撃部隊の序列に名を連ねていた。きつと、アイリゲン大佐に対するラウラの根回しが功を奏したのだろう。これで、マヤが元の世界へ帰ることができる可能性が何倍にも高まった。以前、ラウラやオクタヴィが言っていたように、ドウムホルクが陥落すれば、ドウムホルク宮殿はエラーニア軍に接收されてしまうか、最悪の場合、異世界のへの門を開く装置ごと破壊されてしまうことも考えられる。そうなる前にその装置のある場所へたどり着くには、少なくともドウムホルク攻略作戦に参加させてもらわなければならないだったのである。マヤは特に信心深いわけではない。だがこのときばかりは、良い同僚に恵まれた幸運を神に感謝したい気持ちでいっぱいだった。

エラーニア兵たちの士気も、敵の本拠地、ドウムホルク攻略を目指す戦いとあって、俄然、高まった。しかし、今回はハバリア側も満を持していた。エルデラントからザエフを目指してハバリア南部へ侵攻したときのようにはいかなかった。戦いは緒戦から苛烈さを極めた。エラーニア竜騎兵隊は数の上では圧倒的だったが、地中深く掘り下げられた対竜騎兵用陣地に籠る敵を屈服させるのは容易なことではなかった。敵兵が放つ対竜騎兵用石弓は、十分に訓練されていて狙いが正確だった。敵の魔道士隊が繰り出す攻撃魔法も強力だった。

そのうえ、ザエフ戦でマヤたちを苦しめたあの黒い竜騎兵が、行く手に再び立ちはだかった。エラーニア兵たちは、いつしかその強敵を、装甲の色にちなんで「カラス」と呼ぶようになっていた。カラスは一匹か二匹編隊で前線にやってきては、数匹のエラーニア竜を血祭りに上げて帰って行った。ザエフにおいて、エラーニア側は三匹のカラスのうち二匹を撃墜し、残りの一匹にも深刻なダメージを与えたはず。どうやら、ハバリア側はこのひと月の間にダメージを受けたカラスを再生し、更に何匹かを新たに増強したらしい。

とはいえ、ハバリア軍のそういつた奮戦は、あくまでもエラーニア側の攻撃に対する防御として有効だったにすぎない。戦の形勢^{いくさ}を逆転させ、ハバリア軍が攻撃側に回ることができるようになるほどの影響力はなかった。カラスたちも、兵力をまだ再建中のせいか、ザエフ戦のときのような組織的な行動をおこなうこともなかった。それに、勝利を確信して果敢に立ち向かってくるエラーニア軍に対し、敗色濃厚なハバリア軍は、兵力以前に精神面でも劣勢に立たされていた。

ハバリア軍の戦線は、やがてずるずるとドウムホルク方向へ下がりはじめた。エラーニア軍が進撃を開始して一ヶ月後、ついに戦線は突破された。エラーニアの大軍はなだれを打ってドウムホルク方面へ殺到した。

数日後、ドウムホルクはエラーニア地上軍の重包囲下に陥った。

ファクティム装甲竜騎兵隊は、ドウムホルク戦線の最前線にまで進出していた。通常、竜騎兵は相棒の竜を地上で休息させている間に敵地上兵の襲撃を受けることがないよう、味方の地上軍によって安全が確保されている場所に拠点を構え、そこから前線まで飛行して任務をこなす。だが、いまだエラーニアに抵抗する意思のあるハバリア兵がみなドウムホルク市内に押し込められてしまった今となつては、拠点を後方に置く意味などなかったのである。

夕方、前線司令部のウィル・アイリゲン大佐に呼び出されていたラウラが、ファクティム隊の野営テントに戻つて来た。めいめいテントにたたずんで隊長の帰りを待ちわびていたマヤとオクタヴィとルーミアの三人は、テントの入口に隊長が姿を現した途端、一斉に彼女のほうに目をやった。ラウラは開口一番、

「『エラーニア王国軍は明日、日の出とともにドウムホルク総攻撃を開始する。エラーニア竜騎兵隊が敵の竜騎兵力を沈黙させることに成功した場合、ファクティム隊は、地上軍の支援に回る。更に地上軍が市街への突入を果たした場合は、ドウムホルク宮殿の尖塔に突入し、敵兵の掃討にあたること』との命令を受けた」

と言った。

すぐさま、ルーミアとオクタヴィが

「良かったね、お姉ちゃん」

「良かったですわね、マヤ」

と声をかけてきた。

マヤは二人に「うん」うなずいてみせてから、ラウラに

「ありがとう」

と言った。

ラウラは笑顔で応えた。「なに、たいしたことじゃないさ。次の休暇をウィルと過ごす時、ベッドの上でいつもより余計にサービスしてあげればいいだけのことだから」

ルーミアはそれを聞いて真っ赤になった。

ラウラは、今度は高笑いをしながら「冗談だ。ルーミアには刺激が強すぎたか？」と言った。

オクタヴィは言った。「これでわたくしたちは、軍務として、堂々とマヤを尖塔の最上部に連れて行くことができるわけですね」

マヤが言った。「ラウラとオクタヴィには本当に感謝してるわ」

ラウラは「感謝するのは、実際に異世界への門を開く装置ってやつを拝んでからにしろ、マヤ」と言っ、くるりと背を向け、空を見上げた。

マヤたちも、ラウラの背中越しにテントの入口から空を透かし見た。そこには不気味などす黒い影が、赤い夕空をつんざくようにそり立っている。

「あの尖塔にたどり着くまでに敵のどんな抵抗を受けるか、まだわからないんだからな」

ラウラのその言葉を、オクタヴィが補った。「ここは敵の本拠地ですものね」

マヤは二人の言葉に同意した。「そうね。あたしのことなんかよ
り、まずはドウムホルク攻略を成功させるのが先よね」

ラウラが言った。「そういうことだ。とにかく、明日は大変な一日になるだろう。今日は早めに休んでじゅうぶん体調を整えておかなきゃな」

オクタヴィは真面目くさった顔をして、ラウラに「あら。あなたは今夜、アイリゲン大佐のところで過ごすのではないんですの？」と尋ねた。彼女が真面目な顔をするときは、たいてい冗談を言っているときである。

ラウラは「んなわきゃねえだろ」と型通りのツッコミを入れてから、ルーミアのほうを向き直り、言った。「ああ、そうそう、体調の話で思い出した。ルーミアに頼みがあるんだ」

ルーミアは応えた。「『黄光の術』でしょ？」

「お、察しがいいねえ」

「うん。一応、みんなの月経周期は把握してるから。あと三日ぐらいで始まるしょ？」

「さすが、ルーミアだ。このドウムホルク攻略戦が何日続くかわからないから、念のために遅らせておこうと思ってな」

「じゃあ、かけるわね」

ルーミアはそう言って、ラウラのそばに歩み寄り、手をラウラの下腹部にかざした。ルーミアの手からは黄色い光が放射され始めた。十秒ほどして黄色い光が途絶えると、ラウラは「ありがとな。ルーミアの術は確実に効くからいいんだよ。やっぱり魔力が強いからなんだろうな」と言った。

ルーミアは微笑みでそれに応えた後、オクタヴィのほうを向き、
「オクタヴィは大丈夫よね？」と尋ねた。

オクタヴィは「ええ、わたくしは大丈夫」と答えた。

ルーミアは、今度はマヤのほうを振り向き、「お姉ちゃんはどうする？」と尋ねた。

マヤは「あたしは……まだ先だと思う」と答えた。

「あたしたちぐらいの歳の女の子は、まだ周期が安定しないから、もしかしたら、ってことはあると思うけど、でも、前にも言ったように、かけすぎるのは体に良くないから」

「うーん。どうしよう。じゃあ、あたしにも念のためにかけておいて」

「わかった」

ルーミアはマヤの手のひらを下腹部に向け、黄色い光を放った。

妹に術をかけてもらっている間、マヤは以前、妹に聞かされたこの黄光の術についての話を思い返した。なんでも、この術は卵胞ホルモンと黄体ホルモンの量を増やす働きがあるのだという。通常、生理が始まる前にこれらのホルモンは減少するが、妊娠している場合は減少しない。生理が始まる三日から五日前にこの術をかけておけば、体が妊娠したのと勘違いしてしばらくのあいだ生理が起きないようになるらしい。

そんなことを考えているうちに、マヤの胸に寂しさと心細さが込み上げてきた。女として生活するためのいろいろな知識を手取り足取り教え授けてくれたのは、ルーミアである。だが、向こうの世界に帰ってしまったら、もうルーミアはいない。向こうの世界で女として生きることになるのか、男に性転換してもらえるのかどうかはわからないが、どちらにせよ、男に生まれながら魂を女のものに再生されてしまった苦悩を、一生、背負って生きて行かなければならないのには変わりない。そんな苦悩を、向こうの世界の人間に容易に理解してもらえないとは思えない。もし理解してもらえなかったとしたら、たった一人でその苦悩に耐えていかなければならないのである。

たとえそうであっても　マヤは心の中で強がりと言った
あたしは元の世界へ帰らなければならぬ。元の自分を取り戻さなければならぬんだ

術が終わると、ルーミアはマヤたち三人の顔を順に見回しながら、「他に調子の悪いところ、ない？あたしの魔法で治せるような不調なら、治してあげるけど」と尋ねた。

三人は首を振った。

ルーミアはそれを見届けて満足げにうなずいた。

だがその時、ラウラが不意にルーミアを睨みつけた。

マヤは不思議に思っ、ルーミアのほうに目をやった。ルーミアはラウラとオクタヴィの顔を比べるかのように交互に見つめていた。

ラウラとオクタヴィがルーミアに更に意味ありげな視線を送った。ルーミアはそれに促されるように、おずおずと口を開いた。

「あのね……お姉ちゃん」

マヤは、狐にでもつままれたような気分だった。「な、なに？」

「お姉ちゃんたちがドウムホルク宮殿の尖塔に突入する時、あたしも一緒に連れてってほしいんだけど……」

「え？」

「お願い」

妹に突然、意外なことを言われ、マヤはいささか驚いたが、妹の真剣なまなざしを見つめているうちに、驚きよりも切なさの方が大きくなっていった。マヤとしても、もしあの尖塔の最上階で異世界への門とやらを開くことができ、そのまま元の世界へ帰ってしまうのであれば、尖塔に妹を連れて行って最後の瞬間まで一緒に過ごしたいのはやまやまである。だが、あの尖塔は危険すぎる。マヤは、戦場の真ん中にルーミアを連れて行けるわけないじゃないと言って妹の頼みをはねつけようとした。

ところが、マヤの口からその言葉が出る直前、彼女は二つの強い視線が自分に浴びせかけられているのに気づいた。見ると、ラウラとオクタヴィがマヤに無言の圧力をかけていたのだった。

マヤは苦笑いをした。「もうすでに、ラウラとオクタヴィを懐柔済みなのね」

ルーミアは素直に「ええ」と答えた。

「まあ、普段は決してわがままを言わないルーミアが、たまに言うとなれば、準備万端、整えてあるのも当然よね。三対一じゃ、勝ち目はないわ」

「じゃあ、連れてってくれるの？」

「あたしが断つても、どうせラウラが『隊長命令だ』とかなんとか言つて連れていかせる算段になってるんでしょ？なら、断つても仕方ないじゃない」

「ありがとう、お姉ちゃん」

ルーミアはそう言つて、マヤの腕にすがりついてきた。

「ただし、敵の竜騎兵隊を沈黙させることに成功してからだからね。それまではここでおとなしくしているのよ」

「うん」

ラウラとオクタヴィはルーミアに「やったな」「うまく行きましたわね」と声をかけた。マヤが彼女たちのほうに目をやると、二人

はマヤに、今度は圧力の視線ではなく、祝福と激励の視線を送ってきた。

マヤは二人に感謝の微笑みを返した。

その後、ファクティム隊の野営テントをジュートが訪ねてきた。彼はラウラに敬礼をしながら「エラーニア随一の竜騎兵であるマヤ・クフルツ殿と戦略上、重要な話をしたいので、差し支えなければ彼女の身柄をしばらくお借りしたい」と言った。

もともとにやけ顔のジュートがいつもにも増してにやにやしなからそう言うのを見て、ラウラもオクタヴィもルーミアもすぐに、彼が本当に「戦略上、重要な話」をするためにマヤを呼びにきたのではないことを悟った。ラウラは「許可しよう」と言ってマヤを送り出した。ジュートは「自分の所属する情報部がこの近くに民家を借り上げており、マヤ・クフルツ殿との会談はそこで行うつもりなので、緊急の場合は呼びにきていただきたい」と言った。ラウラはジュートに勝るとも劣らぬほどにやにやしなから、マヤに「明日の朝までに帰ってこい」と言った。マヤは肩をすくめて「すぐに帰ってくるわよ」と応えた。

ジュートはマヤを連れてテントをあとにし、五十メートルほど離れたところに建っている一軒の民家に彼女を案内した。見たところ、民家はひっそりとしていて、情報部の人員が出入りした形跡も見当たらなかった。ジュートはなぜか、玄関の扉を開かず、代わりに家の裏手にマヤを導いた。そして庭に面した窓を開き、そこから窓枠を乗り越えて部屋の中へ入った。マヤは、窓の中からジュートが差し伸べてくれる手につかまって窓枠を乗り越える時、さつきジュートが言った「情報部がこの民家を借り上げた」という言葉も嘘だったことを察した。この家はおそらく空き家なのだろう。無断で空き

家に侵入するという行為がこちらの世界でも犯罪にあたることは、マヤも重々、承知している。それでも彼女は、ジュートを咎めようとは思わなかった。一瞬間だけ、誰かに見つかったらどうしようという懸念が頭をよぎったが、今のマヤには、彼と一緒に何が起こつても怖くはないと言い切れる自信があつた。

マヤが家の床に降り立つや否や、ジュートは彼女を乱暴に抱きしめ、唇を重ねた。マヤはそれに積極的に応えた。ハバリア北部への侵攻作戦が始まってからここ一ヶ月、彼と一度も会えなかったので、彼女自身も彼に対する欲求が抑えられなかったのである。

二人がキスの嵐の中に身を委ねている間に、日は落ち、辺りはすっかり暗くなっていた。緯度の高いこの地域では、夏至から二か月経った今の時期でも日没は午後八時頃である。一方、この世界の月は一年中、午後六時に昇って午前六時に沈む。キスと抱擁が一段落した後、窓から空を見上げると、月がもうだいぶ高くまで昇っていた。東に面したその窓から月光のシャワーがこぼれ落ちる中、二人はそれからしばらくの間、とりとめのない話をした。ジュートはマヤに将来の夢などを語って聞かせた。マヤはうんうんとうなずきながら彼の言葉に耳を傾けた。

二ヶ月前、マヤが異世界から来た人間であることを知っていると彼に打ち明けられた後も、マヤはザエフで何度も彼と会い、そのたびに、自分は元は男だったことや、ドウムホルク宮殿の尖塔の最上階から異世界に帰ってしまうかもしれないことを正直に話そうと思つた。だがどうしてもできなかった。彼女は悩んだ挙げ句、ラウラに相談した。ラウラは、男は夢を見る生き物だ、最後まで夢を見させてあげるべきだと応えた。マヤはそれでは裏切りにならないか、彼を裏切りたくはないと言った。しかし、ラウラは「もし尖塔から異世界に帰ることを彼に告げたら、彼は絶望のあまり、マヤを監禁

してでもそれを阻止しようとするんじゃないか。そうだったら、一番可哀想なのは彼自身だ。彼はこの先ずっと、マヤに対して負い目を感じながら生きることになる。男だったことを打ち明けるのも同じことだ。マヤは言いたいことを言って満足できるが、彼は一方的に苦しむだけだ」と言った。それを聞いた時、マヤの迷いは消えた。

マヤは思った。男が女につく嘘はすぐにばれるが、女が男につく嘘は決してばれないという話を聞いたことがある。まさにその通りだ。せつかく女になったんだから、悪女のまねをして男をだましてみるのも悪くはない、と。

月が東の空から南の空へ移動し始めた頃、ジュートはマヤにおやすみを言って立ち去ろうとした。明日、日の出とともにドウムホルク攻略戦が始まる。エース竜騎兵のマヤは、明日の活躍に備えて今日はゆっくり休んだほうがいいというのである。

ところがマヤは、窓枠を乗り越えて出て行こうとするジュートを後ろから抱きしめたのだった。

ジュートは何も言わずにマヤのほうを振り向き、いま一度、彼女を抱きしめてキスをした。

窓が東に面していたため、月光はまもなくその部屋に差し込まなくなかった。真っ暗になったその部屋で、その夜、何が起こったのか、知る者は誰もいない。

この地に二十一年間存在し続けたハバリア帝国という国家が歴史
上から姿を消すときが近づきつつあることを、誰もが感じていた。

エラーニア兵もハバリア兵も、日の出の時刻の一時間前にはすで
に準備を整えていた。エラーニア兵は勝利への期待感と故郷で帰りを
待つ家族への想いを、ハバリア兵はハバリア人としての意地と先に
逝った戦友への想いを、それぞれ胸に秘め、最後の舞台の幕が開
く瞬間をただ静かに待ち続けた。

やがて、地平線の彼方から一筋の日光が地上へと降り注いだ。

その直後、エラーニア弓兵の弓から、ハバリア軍の陣地に向けて
一斉に矢が放たれた。引き続き、魔道士隊の放つ攻撃魔法が陣地の
上で炸裂する。最後の舞台は、これまでの多くの舞台がそうであつ
たように、激しく荒々しいシーンで開始された。

マヤたちファクティム竜騎兵隊は、他の竜騎兵隊とともに、日の
出と同時にドウムホルク上空へ飛び立った。もし敵竜騎兵隊が出て
きた場合はそれを殲滅し、全く出てこない、あるいは出てきたとし
ても兵力が微弱な場合は、地上軍の支援を行うことになっている。
そしてもし地上軍がドウムホルク突入を果たした場合は、昨日、言
っていたように、マヤはルーミアを連れて尖塔に向かうことができ
る。

エラーニア竜騎兵隊の兵力はザエフ戦のときよりも二隊増強され
て二十一隊六十三匹、一方、ハバリア側の竜騎兵力はこれまでの戦
いでほとんど壊滅に近い打撃を受けている。と言っても、残存して
いる敵竜騎兵力の中には例の「カラス」がいる。ザエフ戦において
たった三匹で四十五匹の敵を相手に互角に渡り合ったことを考えれ
ば、たとえ数匹が残存しているにすぎないとしても、彼らを見殺しにす

ることは到底、不可能である。エラーニア軍上層部が二十一隊もの竜騎兵力をこの戦いに投入した理由は、そこにあった。

マヤは敵の動きに対する警戒を怠らないよう留意しながら、目の前で威容を誇示している怪しげな黒い尖塔をいま一度、観察した。尖塔はドウムホルク市街のちょうど中心に位置するドウムホルク宮殿から、天を突き上げるかのようにそそり立っている。形は、側面から見る限りエッフェル塔のように細長い三角形をしているが、断面はエッフェル塔とは違い円形である。つまりこの塔は円錐形ということになる。高さに関しては、こちらもおそらくエッフェル塔と同程度、三百メートルはあるうかと思われた。ただ、エッフェル塔が建設当時の技術の粋をこらした幾何学的な美しさに彩られているのに対し、この尖塔は、表面を覆うのつぺりした壁の色といい、そこから放たれる雰囲気といい、例えようのないまがまがしさに満ちあふれている。マヤの目には、この巨大で異様な塔がこちらの世界の通常の建築技術だけで建築されたようには見えなかった。もしかしたらこれもヤグソフの異呪のなせる技なのかもしれない。

マヤたちはしばらくの間、ドウムホルク上空の警戒飛行を続けたが、敵竜騎兵は姿を見せなかった。日の出前にすでに高空に飛び上がっており、日の出とともに上から奇襲してくる可能性も考え、東西南北、および上空のすべての空域に目を凝らした。だが、敵の影はどこにも見当たらなかった。

マヤは思った。ドウムホルクが包囲されるまでに多くのハバリア兵が戦場から逃亡したという。ザエフ戦の際にカラスに乗っていた竜騎兵がマヤの元いた世界から来た女だったのは、おそらく間違いない。そのうちの二人は撃墜されて戦死したらしいが、一人はまだ残っているはず。彼女とはできれば戦いたくない。願わくば、彼女にもこの戦場から逃亡してほしい。いや、彼女だけではなく、

すべてのハバリア竜騎兵に逃亡していてほしい。そして戦うことなく安全にルーミアを尖塔へ連れてゆかせてほしい、と。

しかし、そのような淡い期待はまもなく裏切られた。ドウムホルク宮殿の裏手から、黒い影がゆつくりと浮上してきた。その数は、なんと七つ。しかもそのいずれもが、黒い装甲をまとった大柄で力強そうな竜だった。敵はこそそと隠れて奇襲するどころか、無敗のボクシングチャンピオンがタイトルマッチのリングに姿を現す時のように、あとから堂々と戦場に登場したのである。

竜騎兵戦が開始された。これまでの戦いでカラスに対しては密集体形が有効であるという教訓を得ていたことから、マヤたちはささず自分の乗る竜をラウラの竜のほうへ近づけた。

ところが敵は、先ほどの登場時に見せた余裕ありげな態度が決して虚勢ではないことを、すぐに証明した。文字通りあつという間だった。マヤたちが密集体形への移行を完了したときにはもう、五匹のエラーニア竜が血を噴き出しながら墜落しつつあったのである。

エラーニア竜騎兵たちは多少驚きはしたものの、カラスの並外れた強さは織り込み済みだったので、気を動転させることなく、事前に立てた作戦通りの行動を開始した。すなわち、密集体形を崩さないよう注意しながら、一部の隊がわざと隙を作って敵の何匹かをおびき出し、敵の陣形がバラバラになったところを包囲して各個撃破するというものである。第二次ゼフ戦で有効だったこの戦法でもう一度、事に当たろうというのである。

だが、今回のカラスは七匹である。そのうち三匹をおびき出したとしても、まだ四匹がおびき出されずに残っている計算になる。それではバラバラになったとはいえず、各個撃破もできないことにな

る。実際、エラーニアの努力が功を奏して敵は三匹と四匹の二つのグループに割れてしまった。だが、そのどちらのグループをとつても、エラーニア竜三十匹分の力を持っているのである。むしろその二つのグループに対処するためにエラーニア側のほうが二つ手に分かれることを余儀なくされ、その結果、却って攻撃力が分散してしまった。

しかも、一匹一匹のカラスの動きも、ザエフ戦の時より更に敏捷に、更に複雑なっているように見えた。右斜め上の竜に噛み付いたかと思えば、その直後には左後ろ下方に位置を移して別の竜に頭突きを加えた。そのような複雑な操縦ができるテクニクもさることながら、相手の場所を瞬時に判断できる空間認識力、空間解析力はまさにコンピューター並といえた。もつと不思議なのは、そのような複雑な行動を通信機もなしに他のカラスたちと連携して行えることだった。マヤは、戦の神が彼らを一本の操り糸か何かで操っているのだろうかと思いたくなった。

エラーニア竜騎兵隊は、なんとかしてカラスたちをバラバラにしようとした。だが、カラスたちはそんな努力をあざ笑うかのように、近づくエラーニア竜というエラーニア竜をその驚異的な敏捷性で瞬時に包囲して一匹ずつ血祭りに上げた。エラーニア竜が反撃しようとする、目にも留まらぬ速さで散開してそれを逃れ、またすぐさま他のエラーニア竜を包囲した。エラーニア竜騎兵隊はほとんどなす術もなく、損害だけを増やす結果となってしまった。

一時間後、ドウムホルク上空には、四十六匹のエラーニア竜と七匹のカラスの姿があった。エラーニア側がわずか一時間で十七匹も撃墜されてしまった一方、ハバリア側は一匹の損害も出していなかったのである。

エラーニアの竜騎兵たちは焦燥感に駆られ始めていた。

マヤは、まずい、と思った。彼女は元の世界にいたとき、テレビゲームのいわゆる戦略シミュレーションを暇つぶし程度ではあったがプレイしたことがあった。戦略シミュレーションでは、全滅するまで戦えと指揮官（プレイヤー）が命じれば、仮想空間の兵は死を恐れることなくその場に立ち止まって戦い続ける。だが現実の戦いではこうはいかない。生身の兵は全滅するまで戦うどころか、通常は味方が敵の三分の二程度にまで減った時点で劣勢を悟ってパニックに陥り、指揮官の意思に関係なく退却してしまうのである。マヤが見る限り、エラーニアの竜騎兵隊がそのようなパニックに陥るのは時間の問題と思われた。もし竜騎兵隊が退却してしまうようなことになれば、ハバリア側はドウムホルク上空で局地的な制空権を握ることとなり、カラスたちにエラーニアの地上兵を踏みつぶすただけ踏みつぶさせることができる。その際、問題となるのは、ルーミアを前線においてきてしまったことである。マヤは今更ながら敵の反撃力を甘く見て妹を戦場の近くに連れてきてしまったことを後悔した。

それだけではない。カラスたちのあの実力があれば、ひよっとしたら、誰もがエラーニアの勝利を確信しているこの戦況をくつがえすことも不可能ではない。確かに地上兵力はエラーニア側が圧倒している。だが、前にも述べたように、一匹の竜騎兵は千人の地上兵に相当する力を持っている。ましてや敵はあのカラスである。ここでエラーニア軍が負けたら、ハバリア軍は奇跡的に息を吹き返し、ハバリアからエラーニア勢力を追い出すことも、いや下手をしたらエラーニア全土を席巻することさえ、荒唐無稽とはいえなくなるのである。

カラスに弱点はないのだろうか。マヤはラウラたちとともに敵を

揺動したり、反撃したり、包囲された味方の竜を救出したりといった行動を繰り返しながら、カラスたちを改めてよく観察してみた。七匹のカラスのうち、一匹はシュラースとザエフでも戦ったことのあるあの女が操縦している（ということは、ザエフ戦のとき撃墜された二匹というのは、どうやらバーバラ・スターゼンとそのそっくりさんだったことになる）。残りの六匹のうち、三匹のカラスについては、操縦している女の顔を間近に見ることができたが、他のカラスにはそこまで近づく機会がなかった。マヤは、近くで見ることができたその三人の顔に、見覚えがあるような気もしたし、ないような気もした。いずれにせよ、彼女たちがマヤと同じ世界から来たものだとは断定する証拠は何もなかった。ただ、今回遭遇したこの七匹を操る女がみな、ザエフ戦の時のバーバラ同様、恐ろしく無表情なことだけは確かだった。

更に六匹のエラーニア竜が撃墜された。カラスのほうはと言えば、一匹がエラーニア軍内で最も精鋭の部隊、エラン第一装甲竜騎兵隊の攻撃を受けて多少のダメージを被ったものの、その行動力、攻撃力には何の影響もなかった。

さすがのマヤも冷静さを失い始めていた。いま敵の攻撃をよけたとき、ドウムホルク宮殿の尖塔が彼女の視界に入った。だが、もはや尖塔に突入して異世界に帰るどころの騒ぎではなかった。彼女は次第に、味方が退却を始めた場合どうやって自分自身の身の安全を図るか、前線に置いてきてしまったルーミアをどうやって救出するかといったことを考えるのにより多くの頭脳を使い始めた。

ふとその時。

尖塔の向こう、遙か遠くの空に一匹の黒い竜が漂っているのを、マヤの目はとらえた。

そう言えば　彼女は考えた　二度にわたるザエフ戦の折、ニーナの乗った竜が、ちょうどあんなふうに、ずっと遠くの空を漂っていた。いまあそこに見えるあの竜、遠すぎて操縦者が誰なのかまでは判別できないが、もしかしたら、あの竜にもニーナが乗っているのだろうか

突然、一匹のカラスがピムめがけて突撃を敢行してきた。マヤは持ち前の操縦テクニクでなんとかそれをかわした。彼女は一瞬とはいえ戦場で他ことを考えたことを反省した。ザエフではそのせいで撃墜されるという憂き目に遭っている。今は、遠く離れていて攻撃してこない敵のことなど放っておいて目の前の敵に集中すべきであろう。

しかし　マヤはそれでも考えるのをやめなかった。何かとても重要なことが頭に浮かんできそうな気がしたからである　もしあれがニーナだったとして、ニーナはあんなところで一体何をしているのだろうか。彼女とは一年前、アヴニ村上空で一度、ファクテムの上空で二度、戦ったことがある。彼女は竜騎兵隊指揮官であると同時に優秀な竜騎兵でもあった。いま彼女は、カラスたちの指揮をとっているのだろうか。それにしてもは遠く離れすぎている。では、ただ部下の竜騎兵たちの戦いぶりを、高みの見物しているだけなのか。指揮官が安全なところに身を置いて部下に戦わせるという状況は考えられなくもない。だが、エラーニア防空網を突破するという危険を冒してまで「男の竜騎兵」を探しにアウスгент地方へやって来るほど勇敢な彼女が、この場面で高みの見物を決め込むのだろうか

マヤはどうしてもその竜騎兵が気になり、戦場を勝手に離脱したと咎められるかもしれないのを覚悟の上で、その竜騎兵の姿がはっ

きり見える位置までピムを近づけてみた。

薄緑色の派手な衣装をまとったあのいでたち、やはりニーナの可能性が高い。竜の首の付け根にまたがらず、背中にぼーっと突っ立っているあの姿勢も、ザエフのときと同じだ。ただ、いまこうやって改めて見てみると、彼女はあそこに突っ立って、単に映画鑑賞のように受動的に何かを眺めているわけではないような気がする。それを証拠に、彼女の肩や腕が小刻みに動いている。彼女のあの目、あれはどちらかという、離れたところにある何かに対して能動的に働きかけようとしている目に見える。例えば……そう、例えば、ルアーフィッシングとか、ラジコンヘリの操縦をしているときのように……

その瞬間、マヤの頭に、ついに「ある考え」が浮かんた。

それは途方もない「考え」だった。思いついた彼女自身にさえ大きな衝撃を与えずにはおかなかった。彼女はその「考え」の信憑性を裏付けるべく、いままでに彼女がこちらの世界で見聞きし、体験してきたことを思い返してみた。

飛行機を操縦中にこの世界に呼び込まれたこと、

ニーナやジュートたちがアウスгент地方で自分を探しまわっていたこと。

ナターシャにおかしな薬を飲まされ拉致されそうになったこと。

ザエフ上空でバーバラ・スターゼンかもしれない敵と出会ったこと。

それらすべてが同じベクトルを持ち、ある一点を指し示してるように思えた。その一点が何なのかに気づいた時、マヤは迷うことなくニーナとおぼしき敵竜騎兵めがけてピムを突進させていた。

敵竜騎兵は、ピムがすぐそばまで近づいたのに気づき、慌てて竜の背中に座り直して竜を操縦する姿勢をとった。この反応は、ザエフ戦でニーナが示した反応と同じだった。マヤはすでに、その竜に乗っている竜騎兵が間違いなくニーナであることを確信していた。敵竜騎兵はピムの頭突きを間一髪のところでかわした。ここまではザエフ戦の時と全く同じ展開だった。しかし、ザエフではこの後、ニーナがピムから少し離れたところにとどまってマヤに話しかけてきたのに対し、今回は、ピムからどんどん遠ざかるうとした。

マヤはすかさず敵竜騎兵　ニーナを追撃した。それでもニーナは反撃するそぶりを見せず、ただピムの突撃から逃れようとするだけだった。一年前、ファクティム上空であれだけ積極果敢にマヤたちを攻め立てた彼女からは想像もできないほど消極的な反応だった。彼女がこのような反応を示す理由があるとすれば、それは何か反撃に移ることができない事情があるからとしか考えられない。マヤはもう一度、ニーナの拳動を伺った。ニーナが目の前のピムに半分の神経しか集中していないのは明らかだった。では残りの半分はどこに集中しているのか。マヤにはもうそれがわかっていた。

マヤは振り返り、エラーニア竜騎兵隊とカラスが交戦している空域に目をやった。カラスのうちの一匹がエラーニア竜の突撃をくらって墜落しつつあるのが見えた。

ピムは更にニーナの乗る竜を執拗に追い回した。しばらくしてからマヤが再びカラスの動向を確認すると、すでにカラスは五匹に減っていた。

マヤはなおもニーナを追撃し続けた。ニーナは相変わらずマヤに半分の神経しか集中していないように見えたが、それでも、エース竜騎兵であるマヤの追撃をかわし続けることができるのは、さすがだった。とはいえ、ニーナの表情に次第に焦りの色が濃くなりつつあるのも確かだった。

ピムの何度めかの頭突きをかわした時、ニーナはついにある決断を下したような表情を見せた。マヤはその表情の意味するところを察し、三たび、カラス対エラーニア竜の戦いが行われているはずの空域に視線をやった。案の定、五匹のカラスたちは、先ほどまで相手にしていたエラーニア竜たちに背を向けて、まっしぐらにマヤのほうへ向かって来つつあった。

あの五匹に囲まれたら、マヤといえどもひとたまりもない。だが、ニーナにあと一步のところまで迫っているいまこのタイミングで追撃をやめてしまうなど、エース竜騎兵のやることではない。マヤは一か八か、持てるすべての力を振り絞って、ニーナの乗る竜に突撃を敢行した。

ピムの頭はニーナの乗る竜の腹にもろに食い込んだ。ニーナの竜は苦しそうなうめき声を上げ、地上に落下し始めた。ニーナはその背中からマヤを睨みつけ、

「おのれ、マヤ。貴様、またしても！」

と、大きな叫び声を上げた。やがて、ニーナの竜の姿はニーナと子ども、ドウムホルク郊外の森の中に消えた。

マヤはそれを見届けるや否や、すぐさま五匹のカラスたちの動き

を確認すべく振り返った。カラスたちはピムの近くまで迫ってきていた。マヤは一応、防御態勢をとった。しかしカラスたちは、マヤの予想通り、彼女のいる場所を通り越して、そのまま真っすぐ飛び去ってしまった。おそらくカラスたちは、こちらに向かう時に背中の竜騎兵からマヤのほうに向かって飛べと命じられたきり何の命令も受けていないため、ただまっすぐに飛んで行ってしまったのだろう。

いまマヤのそばを通り過ぎて行った竜騎兵の中に、シュラースとザエフでも会った例の女がいた。シュラースで会ったときからずっと、どこかで見たことがある顔だとは思っていたが誰なのかどうしても思い出せなかったその女。マヤはこの時、ようやく誰なのかわかった。いや、正確に言くと、マヤはそんな女は知らない。ただ、その女の顔からもう少し皮下脂肪をとって精悍な顔つきにし、肌の色から白みを取り去り、更に口の周りに髭をたくわえさせれば、アクロバット飛行競技ヨーロッパ選手権チャンピオンのジュリオ・マルティーニというイタリア人の顔になることに気づいたのだった。

二十匹ほどのエラーニア竜がカラスたちを追いかけて行った。カラスたちが何らかの理由で突如、撤退を始めたものと思い込み、追撃に移ったらしい。

ほどなく、ラウラとオクタヴィもマヤのところにやってきた。ラウラはしきりに首を傾げながら、マヤに「いったい何があったんだ？カラスどもはなぜ撤退したんだ？」と尋ねた。マヤは「詳しいことは後で」とだけ答え、すぐさまピムをドウムホルク市街地の周縁部、エラーニア地上軍とハバリア地上軍が激戦を繰り広げている戦場へと向かわせた。敵竜騎兵を沈黙させることに成功したので、事前の計画通り、地上兵の支援に回ることにしたのである。

もともと数の上で圧倒的な兵力を誇るエラーニア地上軍が竜騎兵の支援を受けたこの状況は、まさに鬼に金棒という言葉がぴったリだった。市街地周縁部の陣地に籠るハバリア軍は、ハバリア人の意地と誇りにかけて全力を尽くして応戦した。だが、それも長くは続かなかった。

エラーニア地上軍はほどなく周縁部陣地の突破を果たし、ドウムホルク市街地へ侵入を開始した。ハバリア兵は市内各所で建物内に潜んでいまだ抵抗を続けていた。とはいえ、エラーニア兵の誰かがドウムホルク宮殿にエラーニアの旗を掲げてしまえば、帝国は名実ともに消滅する。その時がもうすぐそこまで迫っていることを予感していない者は、もはや一人もいなかった。

マヤたちファクティム竜騎兵隊は、すでにピムの背にルーミアを乗せて尖塔へ向けて飛行中だった。

ラウラとオクタヴィは、カラスたちが唐突に撤退してしまった理由をマヤから説明された。その説明にはこちらの世界の人間には難解なところがあったため、二人とも完全には理解できなかったが、マヤがたった一人でエラーニア竜騎兵隊を窮地から救ったことだけはわかった。二人はそんなとてつもないことをしでかす同僚とともに戦えたことを、心から嬉しく思い、誇りに感じた。

二人は思った。マヤが異世界に帰れるよう自分たちが手を尽くすことに対して、マヤは何度も何度も感謝の言葉を口にした。けれども実際には、自分たちがマヤから得たもののほうが多いような気が

する。そんなマヤに報いるためにも、なんとしてもマヤを無事に尖塔の最上階に届けなければならない、と。

ラウラは目の前に迫りつつある不気味な尖塔を睨みつけながら、「マヤが異世界へ帰るその瞬間まで、油断は禁物だぞ」と、隊長らしい言葉を隊員たちに向け、警戒を促した。

マヤたちは隊長に言われた通り、敵の残存竜騎兵が襲撃してこないかと、前後左右と上方と下方を見回してみた。上空にはエラーニア王国軍の紋章を付けた竜の姿しか見当たらなかった。だが下方、ドウムホルク宮殿前の広場に、黒い津波のようなものが押し寄せて来ているのが目に入った。どうやら、エラーニア兵の姿を見てようやくハバリア帝国の敗北を確信したドウムホルクの民衆が、宮殿前広場に立つ皇帝の像を引き倒そうとしているらしい。

更に地上を見渡してみると、市街各所で民衆が街路に繰り出し、人だかりを作っているのが見えた。その中にはエラーニア軍の兵士の姿も見えて取れた。もちろん戦闘している様子はない。民衆たちはエラーニア兵を解放者として迎え入れ、ともに喜びを分かち合っているのである。民衆とはしたたかなものである。こうすることで、この間までの民族対立はみんな皇帝のせいだ、俺たちは必ずしも賛成していなかった、とでも主張しているつもりなのだろう。

中には喜び方を間違っている者たちもいた。金持ちの屋敷と思われる大きな建物から、金目の品を持ち出そうとしている。しかも悪のりした数人のエラーニア竜騎兵が、相棒の竜を使って屋敷の壁をぶちこわし、盗人たちの手助けをしている姿も見える。

ドウホルク市内は今や完全に無秩序状態だった。さすがに盗みのような明らかな悪事を働く者の数は多くはなかったが、ドウムホル

ク宮殿やその周辺の皇室関係とおぼしき建造物の破壊に手を貸すものはかなりの数に上った。一般のエラーニア兵は、敵の親玉の所有物を壊すことを犯罪とは見なしていないようだ。その親玉の起こした戦^{いくさ}せいで今まで彼らがどんな苦勞をしてきたかを思えば、無理からぬことではあった。

ラウラはしかし、「まずい」とつぶやいた。マヤもオクタヴィも口では何も応えなかったが、隊長の言葉の意味は理解していた。一部の民衆が、宮殿のだ真ん中にそびえ立つ尖塔の根元にまで押し寄せ、破壊活動を開始したのである。しかも、ご丁寧なことに、数匹のエラーニア竜が「正義」の名のもとに行われているその活動に加わっていた。この尖塔がいくら巨大でも、数匹の竜が頭突きや体当たりを続ければ、いずれ壁に穴があく。そうなれば、尖塔は直立するために必要な強度を失い、下手をしたら横倒しになってしまうかもしれない。

民衆は今、狂乱状態にある。彼らに尖塔を破壊しないよう頼みに行くのは、時間の無駄なだけでなく、身の安全という観点からも無意味なことのように思えた。

「尖塔の中へ急ごう」

隊長が言った。マヤとオクタヴィは力強く「ええ」と応えた。

彼女たちはもうすでに、尖塔のすぐそばまで到達していた。そこは地上から二百五十メートルほどの高さの場所だった。彼女たちは念のため、尖塔の周りをぐるっと一周してみた。人間が中に入るための設備が見当たらないことを確認すると、ラウラは相棒の竜に、尖塔の壁に弱めの頭突きを加えるよう命じた。

幸いなことに、たった一回の頭突きで人ひとりが通れる穴をあけることができた。おそらく、尖塔全体が重くなりすぎると直立させることが困難なことから、上に行くほど壁を薄くして軽量化を図っているのであろう。いずれにせよ、地上二百五十メートルのこの場所を選んだのは正解だった。これ以上高いところだったとしたら、竜の頭突きによって壁に大穴があき、塔がそこから折れ曲がるように倒壊していたにちがいない。

隊長はすぐさま、穴の中に竜の頭を突っ込ませ、竜の長い首を伝って穴の中に入った。彼女がまず塔の内部に侵入し、安全かどうか見極めるためである。しばらく後、彼女は穴から顔を出してマヤに手招きをし、それから相棒の竜に塔の付近を飛び回って待つよう命じた。

ラウラの竜が飛び去った後、マヤはピムを穴に近づけた。そして、ラウラがやったのと同じようにピムに頭を穴へ入れさせ、まずルーミアに先に穴から中へ入るよう言った。ルーミアは立ち上がり、万が一にも足を滑らせたりしないよう一步一步足取りを確かめながら、ピムの首を通って尖塔にあいた穴のほうへ歩み寄った。

と、その時。

ラウラの竜が穴をあけた場所より十メートルほど高いところで、突然、尖塔の壁に一メートル四方ほどの大きさの出口が開き、中から薄緑色の物体がピムの背中めがけて落下してきた。

マヤはびっくりして、自分の背後に落ちたその物体が何なのか確認すべく振り返った。そこにはマヤと同じぐらいの歳の少女が、世にも恐ろしげな表情で仁王立ちしていた。

「ニーナ！」

マヤの上げた叫び声に、ニーナは

「マヤ……貴様だけは……絶対に許さん」

と応えながら、腰から短剣を抜きはなつた。

下手にピムを動かすとルーミアが落下してしまうため、ピムを揺さぶってニーナを振り落とすことはできない。しかもマヤは今、ニーナに背中を向けて座っている。腰の小剣を抜いて振り向く間にニーナに切り裂かれてしまう。ラウラに助けを求めようにも、彼女はすでに尖塔の中にいる。

ニーナはにたにたと嫌らしい笑いを浮かべ、短剣を振りかざしながら、マヤににじり寄ってくる。万事は休したと思われた。

ところが、その次の瞬間。

上方から再び何かがピムのほうへ落下してきた。だが今度の落下物はピムの背中の上に乗っかりはしなかった。その落下物はニーナを絡めとるかのようにまとわりつき、そのままニーナともどもまっすぐ地上へ向かって落ちて行つたのである。

マヤは一瞬、何が起こつたのか理解できなかった。首を後ろにひねって視界の片隅にニーナを見ていたため、あまりはつきりとは見えなかったからである。しかし、ピムの頭の上に立って視界の正面で一部始終をつぶさに見つめていたルーミアには、いま起こつたことが何だったのかはつきりと理解できた。

ルーミアは顔面蒼白になって「オクタヴィー！」と叫んだ。

マヤはピムの少し上方を飛んでいたはずのオクタヴィーの竜を見上げた。竜の背中にオクタヴィーの姿は見当たらなかった。慌てて視線を下方へ移してみると、落下物はいままさに地上へ激突しようとしていた。

ルーミアの叫び声を聞きつけたラウラが、尖塔の壁の穴から顔を出した。彼女はマヤたちが地上を見て呆然としている様子と、オクタヴィーの竜に誰も乗っていないことから、すぐに状況を察し、

「何があつた!？」

と、声を張り上げた。

ルーミアが答えた。「オクタヴィーが……オクタヴィーが、敵の竜騎兵と一緒に地上へ……」

マヤはすぐに我に帰り、いま何をなさなければならぬかを悟った。「ルーミア、ピムの背中に乗って!」

まだ茫然自失状態のルーミアは、姉の言葉の意味もわからないまま、ただ命じられた通りピムの首伝いに背中の上へ戻ってきた。マヤは妹を自分の背後に座らせた後、ピムにオクタヴィーが墜落した地点に向かって下降するよう命じようとした。

だがその時、ラウラが塔の壁の穴から這い出し、ピムの頭の上に飛び移ってきた。そして、首を大きく左右に振りながら、

「ためだ、マヤ」

と叫んだ。

マヤは隊長の行動の意味がわからなかったが、とにかくオクタヴィを助けに行きたかったので

「ラウラ、どいて」

と乱暴に叫び返した。

ラウラは「オクタヴィを助けに行っている暇なんかない。見ろ」と言っ、マヤに尖塔の根元あたりを注目するよう促した。

マヤは言われた通り、その場所に目をやった。その周辺で破壊活動に従事している竜の数が先ほどの倍、五、六匹にまで増加しているのが見て取れた。

ラウラは続けた。「やつら、この尖塔を本気で横倒しにするつもりだ。急がないとおまえは異世界に帰れなくなってしまうぞ」

マヤは言い返した。「そんなこと、オクタヴィの命に比べたら小さなことだわ。そこをどいて、ラウラ。ルーミアを連れて行ってオクタヴィに白魔法をかけてもらうんだから」

「落ち着け、マヤ。白魔道士はルーミア以外にもいる。エラーニアからたくさん軍属白魔道士が来ているのは知っているだろう？それに、今ならハバリア人の白魔道士だってエラーニア人を助けるのを拒んだりはない」

「けど、こんな高さから落ちたら、オクタヴィの体はひどい損傷

を受けて、魂がすぐにあの世に行ってしまうわ。あたし、マキナスの森に墜落したときそうなりかけたもの。だから今すぐに、今すぐに助けに行かないと」

「だが、おまえはザエフで撃墜された時、ここよりもっと高いところから落ちた。その時、落ちた場所が敵の前線近くだったので、味方の白魔道士隊に救出されるまで一時間近くかった。それでもおまえは死ななかったじゃないか」

「でもオクタヴィは死ぬかもしれない」

するとラウラは、頑固親父のようにマヤを怒鳴りつけた。「おまえはオクタヴィのことが信じられないのか!」

その語気があまりに強かったので、マヤは反論できなかった。

ラウラは続けた。「オクタヴィは体つきはスレンダーだが、決してひ弱じゃない。あいつが今までに体の不調を訴えたのを聞いたことがあるか? な? 信じてやろう、あいつのことを。あいつの体力を、生命力を」

「ラウラ……」

「それにあいつは、おまえが異世界に帰れる可能性を放棄してまで自分を助けたと知らされても、喜ばないどころか、逆に、信じてくれなかったことに対して腹を立てるかもしれない。ザエフの温泉宿でもそういうことがあっただろ? あいつはそういう奴だ。あいつを本気で怒らせたなら怖いぜ。今度こそ、本当に結婚させられちゃうんじゃないか」

ラウラはそう言って、マヤにウィンクしてみせた。

しばらくの間、沈黙があった。

不意に、ルーミアが背後からマヤの肩を叩いた。マヤは振り向いた。妹は小さくうなずいてみせた。

マヤは再び口を開いた。その表情は笑顔だった。「そうね。いくらなんでも結婚せられるのはごめんだわ。あたし、信じる。オクタヴィを信じてあげることにする」

ラウラは「そうだ。信じよう」と応えた。

「急ぎましょう、ラウラ。尖塔の最上階へ。異世界の門を開く装置のところにへ」

「よし、行くぞ」

隊長のその言葉は、ファクティム竜騎兵隊が進むべき方向を指し示す矢印を、彼女たちの心の中にしっかりと刻み付けた。彼女たちはもう二度と迷うことはなかった。

マヤは一応、ピムにこの周囲を飛び回って待つよう命じ、ラウラとルーミアに先に壁の穴に入らせてから、自分も穴をぐぐり抜け、尖塔内部へ侵入した。

見ると、内部は、不気味に黒光りしている外面とは対照的に、まぶしいほどの白で覆われていた。と言っても、その白色は清楚な美しさを醸し出すようなものではなく、むしろ冷たさ、無機質感を連想させた。外壁とは別の種類の不気味さ、妖しさを放っていたのだ

った。

すぐさま、ラウラが「こっちだ」と言って、付近の壁に埋め込まれている白い扉を指さした。彼女が扉を開いてその大きな体を扉口の中へ滑り込ませたのに引き続き、マヤとルーミアもその中へ踊り込んだ。

中は、白い壁に囲まれた白い螺旋階段になっていた。天井全体が鈍い白色光を放って階段や壁を照らしていたため、白が強調されすぎて、より一層、無機質に見えた。

三人はラウラを先頭に、マヤをしんがり殿にして螺旋階段を早足で登り始めた。階段は上へ上へとどこまでも続いているかのように思えた。視界には白い壁と白い階段、耳に聞こえてくるのは自分たちの足音と呼吸音だけ。彼女たちは次第に、催眠術にでもかかったような気分になってきた。

数分後、彼女たちはようやく単調さという名の苦痛から解放された。解放してくれたのは目の前に立ちはだかる大きな黄色い物体だった。

「久しぶりだな、マヤ」

それは、黄色い派手な装束を身にまとったアマゾネス、モーラの姿だった。彼女は去年の冬、デイン砦近くの森でサハラカンを倒すのを手伝ってくれた時のように、優しい微笑みをマヤたちに投げかけていた。

「モーラ！」

マヤは、ラウラとルーミアの背中越しにモーラを見上げながら、驚きの声を上げた。

モーラは応えた。「ナターシャがずいぶんと世話になったらしいな。天国の姉に成り代わって感謝しておくよ」

マヤは言った。「モーラ、お願い、あたしたちをこの塔の最上階に行かせて。時間があまりないの。あたしどうしても、どうしてもそこへ行かなきゃいけないの」

「異世界への門を開くために、か？」

「そう。お願い」

モーラの目が、急に激しい光を放ち始めた。エラーニア王宮前でマヤと立ち合った時のあの目の光と同じだった。「気の毒だが、それはできない」

マヤは「どうして？」と声を張り上げた

モーラは応えた「俺は近衛アマゾネス兵団の指揮官だ。たとえ部下を一人残らず失ってしまったとしてもな。俺はこの戦いで、部下五百人の命と引き換えにたった一万人のエラーニア兵しか血祭りに上げられなかった。ハバリアで最も腕の立つアマゾネスたちを集めた部隊を任されていたというのに。だが、こんな情けない指揮官の俺でも、部下たちは慕ってくれていた。勝利を信じて戦い続けた彼女たちのためにも、俺は最後までエラーニアと戦い続けなければならない」

マヤは言い返した。「もう戦いは終わ^{いくさ}ったわ！」

モーラは腰から短剣を抜きながら「俺にとってはまだ終わっていない！」と叫んだ。そして短剣の切っ先を、彼女の目の前に立っているラウラに向けた。まずは手近な敵から片付けようというのである。

ところがラウラは、何を思ったか余裕たっぷりに「ふふん」と鼻で笑い飛ばした。「ヤグソフ四姉妹のモーラか。相手にとって不足はないな」

モーラはラウラを睨みつけた。「なに？」

「あたしはたまたま竜を操縦する能力があつたから竜騎兵隊に入つたが、本当は格闘術も得意なんだぜ」

「ほう。ハバリアグマを絞め殺したこともあるこの俺とやり合おうというのか。おもしろい」

「得意の長槍を振り回せないこんな狭い階段を待ち伏せ場所を選んだのは間違いだったな」

「ほざけ！」

モーラはそう叫びながら、渾身の力を込めて短剣を繰り出した。

するとラウラは、短剣を持つモーラの右腕を下から取り、彼女の突進してくる勢いを利用して後方に投げ飛ばした。

マヤとルーミアは飛んでくるモーラの巨体をよけるために、その場にしゃがみ込んだ。ものすごい衝突音がマヤの後方から聞こえて

きた。マヤとルーミアが振り返ってみると、モーラはマヤより少し下の階段の上で大の字になっていた。

ラウラは得意げに「格闘戦は力が強いほうが必ずしも有利とは限らないんだぜ」と言った。

しかし、モーラはすぐにその場で体を起こし、よろよろではあったが立ち上がり始めた。驚異的な体力だった。普通の人間なら五メートルも投げ飛ばされて固い床に全身を強く打ち付ければ、脳しんとうぐらいは起こすだろう。

それを見て、ラウラはこのアマゾネスはやはり一筋縄では行かない相手だと悟った。彼女はマヤとルーミアに「先に行け」と命じた。

モーラはすでに立ち上がり、マヤたちのほうへにじり寄ってきていた。

マヤは一瞬、躊躇した。ラウラがあのもーラと戦って無事でいられるのかどうか心配になったからである。

だが、ラウラはマヤの心の声が聞こえたかのように「大丈夫だ。あたしを信じる」と声をかけてきた。

マヤは先ほど胸の奥に、進むべき方向を示した矢印が刻み付けられたことを思い出した。彼女はもうためらわなかった。

「わかったわ、ラウラ」

彼女はそう言って、ルーミアの手を引いて階段を駆け上がり始めた。そして、しばらくして下から格闘が再開された音が聞こえ始め

た時、足を止めずに後ろを振り返り

「ありがとう、ラウラ」

と叫んだ。

上へ進むにつれ格闘の音は聞こえなくなり、行く手は再び無機質さと単調さだけに支配された。

白い階段と白い壁の連続。

マヤとルーミアの感覚は半ば麻痺した。二人は次第に、自分たちがいま何をやっているのか忘れそうになった。頭に浮かんでくるのは、ずっと前の楽しい思い出ばかりだった。平和に満ちたアヴ二村で本当の姉妹のように何気ない日常生活を送っていたあの二週間。たった二週間だけだったにもかかわらず、今ではなぜか永遠の長さを持つ思い出のように感じられた。

二人は不思議な気分だった。彼女たちがいつしよに過ごしたのは、わずか一年あまりという短い期間にすぎない。なのに、本当の姉妹以上に強い姉妹の絆で結ばれている二人。しかも姉は異世界人で元は男である。そんな二人が今、手を取り合って階段を上っているなぜ？姉が異世界に帰るため。お別れをするため。なぜお別れしなきゃいけないの？なぜそんなに仲の良い姉妹が離ればなれにならなきゃいけないの？それが姉の望みだから。それはおかしいんじゃない？本当に強い絆で結ばれているならずっといつしよにいてあげべきじゃないの？

マヤはルーミアの手を強く握りしめた。ルーミアはマヤの手を握り返した。絆で結ばれているから、だからこそ別れられる。だから

らこそ離ればなれでいられる。決して切れない絆だから

どこまでも続くかと思われた白い階段は、やがて二人の目の前で途絶えた。最後の一段は白い扉の前にあった。マヤはルーミアを一歩下からせてから、腰の小剣を抜き、ゆっくりと扉を開いた。

そこは十五メートル四方ほどの広さを持つ大きな部屋だった。

マヤはぐるりと辺りを見回してみた。この部屋も壁や床や天井が白で統一されている。床から天井へ向かって伸びている四本の柱も白色である。壁には大きな窓が付いており、そこからバルコニーへ出てゆけるようになっていた。今まで登ってきた螺旋階段が無機質で寒々しい感じだったのに対し、この部屋は壁や天井が白い美しい装飾品で飾られているため、少なくとも無機質さはなかった。だが、それらの装飾品はあまりにも繊細すぎ、現実の世界のもののようにではないかのように見えた。

姉に引き続き、ルーミアもその部屋に足を踏み入れた。マヤは敵の気配はないと判断し、とりあえず小剣を腰の鞘に納めた。そして再びルーミアの手を引いて、部屋の中央へ進んだ。

そのうち二人は、部屋の片隅に白い大きな構造物が置いてあるのを目にした。近づいてみると、それは天蓋付きのベッドだった。二人は手をつないだまま、更にベッドのすぐそばまで歩み寄り、中を覗き込んだ。

ベッドには初老の男性が目を閉じて横たわっていた。豪華な装束に身を包み、手は宝石をちりばめた短い杖を握ったまま、胸の上に置いてある。深い眠りにについているのか、微動だにしない。

マヤはルーミアの顔に目をやった。妹ならこれが誰なのか知っているかと思ったからである。しかしルーミアは姉の言おうとしたことを察し、マヤが口を開く前に、ただ首を左右に振ってみせた。

すると、突然。

彼女たちの背後から

「ヤグソフ・ダカイ」

という女の声がした。

マヤとルーミアは慌て後ろを振り返った。だがそこには誰の姿も見当たらなかった。

女の声が再び聞こえてきた。

「それはヤグソフ・ダカイ。ハバリア皇帝付きの僧侶。そしてこの尖塔の本当の主^{あるじ}」

声は、どうやら柱の陰から聞こえてきているらしい。マヤはその柱の向こうにいて思われる声の主に向かって

「誰？」

と叫んだ。

ところが、声の主が次に発した言葉はマヤを驚愕させずにはおかなかった。

《久しぶりね、山矢君》

その言葉は日本語であるばかりでなく、こちらの世界ではルーミア以外、誰も知らないはずの名前を呼んでいたからである。

声の主はゆつくりと柱の陰から歩み出た。それは魔道士服を着た若い女だった。ただ、その魔道士服の色は、華美な色を避ける傾向のある魔道士たちの習わしに反し、非常にけばけばしいピンク色だった。

マヤはその女の顔に見覚えがあると思った。と言っても、バーバラ・スターゼンらアクロバット飛行パイロットとは違い、この女には直接、何度も会って言葉を交わしたことがあるような気がした。それを証拠に、彼女の声にも聞き覚えがある。

女はまた日本語で

《あら、つれないわね。かつての恋人の顔を忘れてしまうなんて》
と言った。

この鼻にかかった甘ったるいしゃべり方、こんなしゃべり方をしていた人物と言え、確か……

《といっても、あたしが勝手に恋人気取りであなたにつきまとしてただけだね》

マヤはようやく思い出した。

「八木沢……八木沢ソーニャ！」

そう、山矢健太の通っていた高校の一年先輩で、スペイン人だがイタリア人だかのハーフと言われていた、大人っぽい女子高校生。なんだかんだと理由を付けては山矢につきまといっていた、あの八木沢ソーニャ。この女の顔、この女の声、この女のしゃべり方、間違いない彼女だ。

ソーニャは日本語で話し続けた。《ようやく思い出してくれたのね、山矢君》

マヤはソーニャにつられて日本語で言葉を返した。もちろん男言葉である。マヤは日本語を使っていたとき男だったので、男言葉でしかしゃべり慣れていないのである。《そうか……おまえ、あの八木沢……か》

《元気にしてた？》

《まあ……な》

《あら、あたしと話すときはやっぱりぶっきらぼうになるのね。それとも、日本語じゃうまくしゃべれない？》

《一年以上……話して……ない……から》

《無理しなくてもいいわよ》

《いや……大丈夫……だ》

《本当に？》

《ああ。だが……おまえ……なんで、こ……こんなと……ここに……い……るんだ?》

ソーニヤは見るに見かねて、エラン語で「大丈夫じゃないみたいね。エラーニアの言葉で話しようよ」と言った。

マヤはすぐにアウスグ語で「でも、ソーニヤ、あなた、どうしてこんなところにいるの?」と言い直した。アウスグ語はエラン語とアクセントや一部の日常用語が異なっているだけなので、ちゃんと通じる。

ソーニヤは嬉しそうな顔をして「やっぱりそのしゃべり方のほうがいいわ。あなたみたいなかわいらしい女の子が男言葉で話すなんて、なんか変だもの」と言った。

マヤはかわいらしいと言われたことにちょっと照れながら「あなたみたいに美人でスタイルのいい人にかわいいとか言われても嫌みにしか聞こえないわ」と言い返した。

「あら、エラーニアの言葉でなら、ちゃんと冗談も言えるのね」

「冗談のつもりはないんだけどな。だけど、アウスグ語がちゃんとしゃべれるのには理由があるのよ。ルーミアに特訓してもらったの。紹介するわ。これ、あたしの妹、ルーミア」

姉にそう言われ、ルーミアはソーニヤに「はじめまして」と挨拶した。

ソーニヤは「はじめまして、ルーミア」と応えた。

マヤはそこで、先ほどの質問を繰り返した。「さっきの質問だけど、ソーニヤ、あなた、どうしてここににいるの？あなたもこちらの世界に引き込まれたの？」

ソーニヤはしかし、妖しく微笑んただけだった。

その時、マヤはふと疑問に思った。ソーニヤはなぜ、女の姿をしている自分が山矢健太だとわかったのだろうか。

ソーニヤはいま一度、マヤに妖しい微笑みを投げかけてきた。

彼女の顔を見ているうちに、マヤはもう一つ、重要なことを思い出した。山矢健太がこちらの世界に飛ばされたとき紫色の光を放ったあの怪しげなペンダント、あれは確か、ソーニヤから手渡されたものではなかったか？

ソーニヤはまた一段と妖しく微笑みながら、ようやく先ほどの質問に答えた。「あたしがここに居るのは、ここがあたしの家だからよ」

「家？ここが？」マヤはその微笑みの妖しさに圧倒されながらも、おそろおそろ尋ねた。「ソーニヤ、あなた、こつちの世界の人間だったの？」

「そうねえ、こつちの世界の人間かと訊かれていいえと答える理由はないわね。ここ以外の場所を自分の家だと思ったことがないのは確かだし」

「でも……さっきあなたは、ヤグソフ・ダカイって人がこの塔の主だつて言ったじゃない」
あるじ

ソーニヤは答えた。「ええ、その通りよ。だってヤグソフ・ダカイは、あなたたちが怪僧ヤグソフって呼んでいるあの人は、あたしの父だもの」

マヤは愕然となった。「それって、まさか、まさか……」

ソーニヤはマヤのその質問に直接は答えなかった。「妹たちがいろいろお世話になったそうね」

「妹……。ニーナ、モーラ、ナターシャのことね。ソーニヤ、あなたは……。あなたはヤグソフ四姉妹の一人だったのね。ソーニヤ・ヤグソフだったってことなのね」

「ふふ。その呼び方は正しくないわ、山矢君。知ってるでしょ。ハバリアでは名字が先で名前があと、しかも、女は名字の最後に a をつける習慣があるって」

「ヤグソフ (Y a g u s o v) …… ヤグソワ (Y a g u s o v a) ? ヤグソワ・ソーニヤ……。八木沢ソーニヤ!」

「あたしはずっと本名を名乗ってたのよ。まあ、漢字を当てはめるためにちよつと変えたけど」

「そついう……。こと……。だったの」

ソーニヤの表情はもはや妖しさを通り越して恐ろしいと言ってよいほど不気味な微笑みになっていた。「そついうことよ、山矢君」

マヤはその恐怖の表情にほとんど打ちのめされていた。「じゃあ、

あたしをこの世界に呼び込んだのも……？」

「ええ、そう。あたしがその張本人」

「で、でもどうして」

「それは、あなたも薄々気づいているはずよ。だからこそ、さっきの竜騎兵戦の時、目の前の敵をほったらかしにして、ニーナのほうに攻撃をかけたんでしょ？あたし、ここから一部始終を見てたわ」

「あれは……あれは『カラス』たちが、あの黒い竜騎兵たちが、ニーナに遠隔操作されてると思ったから」

「その通りよ。ニーナの着ている竜騎兵服には、着ている者の思考を遠くにまで飛ばす力がある。そして遠隔操作される側の着ている服にはそれを受け取る力がある。あたしがそういう服を作ったの。異呪の力でね」

「異呪？ソーニャ、あなたも異呪が使えるの？」

「ええ。あたしがあなたの住んでいた世界に飛んで行くことができるのも、あなたをこちらの世界に飛ばすことができたのも、みんな異呪のおかげ」

「バーバラ・スターゼンやアンドリユー・スターゼンやジュリオ・マルティーニをこちらの世界へ飛ばしたのも？」

「ええ。そういう異呪を封じた宝石をペンダントに付けて、プレゼントしたのはあたしよ」

「アンドリユーやジュリオに女の肉体を与えて竜に乗れるようにしたのも？」

「ええ」

「遠隔操作する時に彼らの意思が邪魔にならないよう、彼らの魂をあのに飛ばして肉体だけで生きていけるようにしたのも？」

「ええ、そういう薬を作って彼らに飲ませたのもあたし。もっとも、あなたにそれを飲ませたのはナターシャだけだ」

「じゃあ、もしあたしがこちらの世界の飛ばされたとき、首からペンダントを外していなければ……」

「あなたは、異世界からの転送座標が狂ってアウスグント地方に墜落することなく、正確にこのドウムホルクに転送されていた。そして魂を抜かれ、女の肉体を与えられ、ニーナの手足となって大活躍していたでしょうね。そうならハバリアは、きっと今頃、エラーニアを滅ぼして次の国の侵略に着手していたかも、いいえ、あなたのその飛行技術がハバリア軍にあれば、もしかしたら他国をもう三つか四つは滅ぼしていたかもしれないわね」

マヤの隣でルーミアが「ひどい」とつぶやいた。マヤはルーミアの肩を抱いてなだめてあげながら「でも、でもどうしてそれがあたしやあたしたちの世界の住人でなければならなかったの？ どうしてわざわざ異世界の人間を連れてくる必要があったの？」と尋ねた。

ソーニヤは答えた。「ねえ、山矢君、あなた、こちらの世界に飛ばされて初めて竜に乗ったときのことを覚えてる？ きつとあなたは何の苦勞もなく、人よりもずっと上手に竜を乗りこなすことができ

たはずよ。なぜだと思う？それが、あなたたちの世界の人間がこちらの世界に飛ばされる時に得る能力だからよ」

「飛ばされる時に得る能力？」

「そう。理由はわからないんだけど、人は世界を越えるとき、いくつかの特殊な能力を得る。それは、どの世界の人間がどの世界へ飛ばかによって決まっているの。あなたたちの世界の人間がこちらに飛ぶと、いま言った、竜を巧みに操る能力を得る。そして、あたしやお父様が生まれた世界からこの世界へ飛んだ時は、不思議な魔力を身につけた。それが異呪」

「え？『あたしやお父様が生まれた世界』って、どういう意味？もしかして、ソーニヤ、あなたやあなたのお父様は、この世界の人間でもあたしたちの世界の人間でもないの？」

「ええ、そうよ。あたしの父はね、あたしたちの世界にいた頃は考古学者だったの。父は新都地域　100年ほど前から都のおかれている地域　の出身だったけど、研究は主に、太古の遺跡や歴史的建造物の多い、旧都地域でおこなっていた。ところが二十二年前のある日、新都近くの遺跡で偶然、この世界に飛んでくることのできる宝石を発見した。きつと、あたしがあなたに渡したペンダントと同じ力を持った宝石だったんでしょ。そんなものを誰があたしたちの世界に持ちこんだのかは知りようもないけどね。父は宝石のことは秘密にする一方で、それが発掘された遺跡については、新都地域が歴史的にも旧都地域より優位だったことの根拠として学界に発表した。だけど父の論文は、学術的な説得力に乏しいと批判され、学界では全く相手にされなかった。絶望した父は、故郷を捨て、まだ赤ん坊だったあたしを連れてこちらの世界へ移り住むことを決心した。そして異呪の力を利用してこの世界に自分の思い通りの「新

都」を作ろうと考えた。ドウムホルクに政治、経済、生産、情報、文化、教育、すべての機能を集中させて、世界支配の中心地に仕立て上げるつもりだった。まだ若かったハバリア候に取り入ってハバリア帝国をつくらせたのはそのため。民族紛争を利用してエラーニアに攻め込んだのは、その第一歩だった。

でも、父の野望はエラーニアの予想以上の抵抗により、停滞を余儀なくなれた。そんな中で『あなたたちの世界の人間がこちらの世界では竜を巧みに操れる』っていう事実を発見できたことは、一条の希望の光だった。ただ残念なことに、それは今から三年ほど前にすぎなかった。あなたたちの世界の人たちに戦ってくれるよう頼んだり、脅して戦わせることも考えたけど、それではその人たちが裏切ってハバリアの脅威になる可能性があった。ちょうど今の山矢君のように。だから肉体を生かしたまま魂を飛ばしてしまう薬や、思考を遠くまで飛ばす服を開発する必要があった。それらの開発に成功したのは、一年ほど前。しかも、その服は大量生産のできない品だったから、ドウムホルクが包囲されてしまうまでに十着ほどしか完成しなかった。もしもつとずっと前にこれらのことが行われていれば、この世界はとつくの昔にお父様のものになっていたわ」

「それじゃあ、アクロバット飛行パイロットばかりをこちらの世界に連れてきたのは……」

「ええ。どうせ連れてくるなら飛行技術に長けた人のほうがいい、ってこと。将来を嘱望されていた天才少年パイロットのあなたに目を付けたのもそのためよ」

マヤもルーミアも、受けた衝撃があまりにも大きかったため、しばらく何の言葉も口から出てこなかった。

ソーニャはそんな二人の様子を見て、またいつそう不気味に微笑んだ。「わかった？山矢君。そういうわけだから、あたしはあなたをやっつけなきゃいけないの。あたしはあなたの敵だから。ヤグソフ四姉妹の長姉、ヤグソワ・ソーニャだから」

マヤは、ソーニャの発する恐怖のオーラに精一杯あらがいつながら、応えた。「もう戦は終わつたのよ。これ以上あたしたちが戦うことに何の意味があるって言うの？」

「意味ならあるわ。あなたはあたしたちの計画を台無しにした。あなたがペンダントを外さなければ、ドウムホルクにたどり着いてさえいれば、あたしたちはこの戦に敗れることはなかった。だから、だからあたしはあなたを倒さないと気がおさまらない」

「あたしがペンダントを外したのは単なる偶然よ。意図的にやったことじゃない。それに、もしあたしがドウムホルクに飛ばされて二ーナの言いなりに戦っていたとしても、ハバリアが勝てたとは限らない。誰かが二ーナによる遠隔操作だつて気づいていたかもしれないし、エラーニア軍が他に何か対策を考え出していたかもしれない」

ソーニャの顔からついに笑みが消えた。「でも、ハバリアが一発逆転勝利できたかもしれないこのドウムホルクの戦いで、ご丁寧に二ーナの邪魔をしてくれたのは、他ならぬあなたよ！死に行くお父様に、思い描いていた野望が瓦解するところをまざまざと見せつけてくれたのは、あなたなんだから！」

彼女は右手を前に突き出した。すると、その手のひらの上に直径五十センチほどの火の玉が発生した。何かの攻撃魔法を繰り出すつもりにちがいない。その大きさといい勢いといい、マヤがいままで見た同種の攻撃魔法に比べ、格段に強力な力を持っているのは明らか

かだった。

マヤは、竜騎兵たちが護身用に携帯することになっている防御魔法石を腰のポシェットから取り出し、それを自分たちとソーニヤの間の床に投げつけた。

ソーニヤの放った火の玉が炸裂した。火の玉は、防御魔法石によって作り出された魔法障壁をもとせず、マヤとルーミアを障壁ごと吹き飛ばした。

マヤとルーミアは三メートルほど離れた床に叩き付けられた。だが幸いにして、そこに柔らかい絨毯が敷かれていた。

マヤは妹に「大丈夫？」と声をかけた。ルーミアは「うん」と答えた。どうやら二人とも軽い打撲以上の怪我を負うことはなかったようだ。

とはいえ、ソーニヤが次の攻撃魔法を放つのは時間の問題だった。見ると、もうすでに手のひらの上に火の玉を乗せている。しかもそれは先ほどよりもっとずっと大きな火の玉である。マヤは、焼け石に水と知りつつも、再びポシェットから同じ種類の魔法石を取り出し、それを床に投げつけようとした。

が、その時である。部屋の片隅にある、螺旋階段へと続く扉から、何か白いものが飛び出てきた。その白いものはソーニヤめがけてまっすぐ突き進んでゆき、おそらく長剣と思われる細長い金属を振り回した。

ソーニヤは巧みに身を翻してそれをかわすことはできたが、手のひらに生成されつつあった火の玉を床に落としてしまった。そのた

め、火の玉は炸裂することなくその場で消えた。

ソーニャに突進したその白いもの　騎士装束を着た男の後ろ姿はマヤたちのほうを振り返り、「マヤ、ルーミア！」と叫んだ。

マヤは「ジュート！」と叫び返した。もう二度と会えないと覚悟していた彼と再会できた喜びの気持ち。こんな場所に彼が現れたことを意外に思う気持ち。ソーニャに戦いを挑んだ彼の身を案ずる気持ち。その叫び声にはいろいろな気持ちが込められていた。

ソーニャは、またすぐに手のひらの上に火の玉を生成し始めた。ジュートも負けじと彼女に斬りつける。だが今度は、彼の剣はソーニャの体に到達する前に見えない壁のようなものにはばまれ、振り下ろすことができなかった。ソーニャはいつの間にか、防御魔法を展開していたのだった。攻撃魔法と防御魔法を同時に使うとは、やはり彼女は並の魔道士ではなかった。

火の玉はソーニャの手の上で膨張を始めた。ジュートはそれでも剣を振り回した。防御魔法はそんな彼の努力をあざ笑うかのよう、剣を跳ね返した。火の玉はもう炸裂寸前である。マヤたちは、今度こそ絶体絶命だった。

ところが。

火の玉は急に勢いを失い始め、やがて小さくしぼんで消えてしまった。

マヤとルーミアとジュートは何が起こったのか理解できず、啞然となった。

ソーニヤはその場でがつくりと膝をつくと、口に手を当て、激しく咳き込んだ。咳を一回することに、口に当てた手の指の間から床に向かって鮮血が飛び散った。

やがて咳は収まった。だが、彼女は苦しそうにげいげいと呼吸をしたまま、その場から立ち上がろうとはしなかった。

マヤは腰から小剣を抜き、ゆっくりとソーニヤのほうに歩み寄った。そして、ジュートのすぐそばに到達した時、立ち止まってソーニヤの様子をいま一度、伺った。ソーニヤはやはり、苦しそうにうずくまったままだった。

ジュートがマヤの肩を抱いた。マヤはジュートと顔を見合わせた。ソーニヤがいつたいていどうしてしまったのか、ジュートが知っているかと思ったからである。だがジュートのほうも、マヤに不思議そうな表情を見せるだけだった。

すると、ソーニヤはうつむいたまま「もう限界みたい」とつぶやいた。

マヤはおそろおそろ「どういうこと？」と訊き返した。

ソーニヤは答えた。「異呪はね、術者の命を消費する魔法だったの。そのことが判明したのは半年ほど前、お父様が突然、血を吐いて倒れた時のことよ。そのせいでお父様は異呪を満足に使えなくなった。戦闘に耐えられるほど丈夫な竜をこの寒いハバリア地方で育てるには異呪の力が必要だったのに、それができなくなってしまった。それ以降、ハバリアの竜騎兵力は衰える一方だった。山矢君も、きつとそう感じてたんじゃない？ だけど、あたしはその頃、アンドリユー・スターゼン、バーバラ・スターゼン兄妹をこちらの

世界に引き込むために、彼らと親しくなろうと一生懸命だったので、こちらの世界で起こっていることを把握していなかった。だから、こっちに帰ってきて竜騎兵力を再建することができなかった。

父はさつき死んだ。今までに使った異呪が少しずつ生命力を蝕んでいたのね。最高級白魔道師たちも最後は匙を投げたわ。次はあたしの番」

マヤは「ソーニャ……」と声をかけるしかできなかった。

ソーニャは尋ねた。「ねえ、山矢君。あなたが命の危険を冒してまでこの部屋にやってきたのは、異世界への門を開くためでしょ？」

「え？ええ」

「一つ質問させて。あなた、どうしてそこまでして異世界に帰りたいの？あなたはこちらの世界で何不自由なく生活できるはず。確かに、こちらの世界は山矢君の世界ほど機械文明が発達していないから、不便な部分はある。でもその代わり、こっちには魔法がある。白魔法のおかげで、こっちの世界の人たちはほとんどみんな天寿を全うできる。ガンなんて病気はとっくの昔に撲滅されてる。体が不自由になってもすぐに治してもらえる。決して住みにくい世界じゃないでしょ？」

それにあなたには、仲の良い妹さんがいる。アヴニ村に墜落したという東洋人の少女が本当は山矢君なんじゃないかっていう疑念は、あたしたちも持っていないわけじゃなかった。最終的にそうでないとは判断したのは、異呪を使わずに男の魂を女の魂として再生できる可能性があまりにも低かったからだけど、それ以外にも、あなたがアヴニ村で妹さんといっしょに生活している様子がとても楽しそう

だったからっていうのもあるのよ。ナターシャや他のスパイがしばらくあなたを監視して報告してくれてたの。異世界に飛ばされていきなり性転換された男の子なら、普通、もっとショックを受けるはずだって。でも今は知ってる。みんな妹さんのおかげだったてね。そんな大切な妹さんと別れることを、あなたは どうして選ぶの？

それだけじゃない。あなた、彼氏だっているんでしょ？あなたの肩を抱いているこちらの男の人、この人とはそういう関係なんですよ？どうして彼と別れてもかまわないって思うの？」

マヤは、いつの間にかルーミアがすぐそばに立っていたのに気づき、まず妹の顔を見、次に、かたわらに寄り添うジュートのにやけ顔を見上げた。それから、ソーニヤのほうを向き直り、言った。「理由は、いろいろあるような気もするけど、本当のところは、あたしにもよくわからない。ただ、あたし、元に戻さなきゃいけないっていう思いがずっと心の中にあるの。取り戻したい、復帰したい。そんな漠然とした思いがあるの。それが一番の理由かもしれない」

ソーニヤは言った。「できると思う？」

マヤは答えた。「わからない。でも、そうする。もう決めたの」

ソーニヤはゆっくりと立ち上がった。そして視線をルーミアとジュートのほうに一旦、やってからマヤのほうに戻し、言った。「あたしのこの体では異呪を使うことができるのはたぶんあと三回くらい。そのうちの一回はこの塔がもうしばらく倒壊しないよう支えるために、一回は異世界への門を開く装置を作動させるために、そしてあと一回は性転換の異呪をかけるために使うことにするわ。山矢君を男に戻してあげるためにね」

その言葉はあまりにも突然だったので、マヤは一瞬、我が耳を疑った。「え？今、なんて言ったの？」

ソーニヤは答えた。「異世界への門は異呪の力がないと動かないのよ。だからあたしが動かしてあげるの。あなたを異世界に帰すために。そして男にも戻してあげる。山矢君がそう望んでいるなら」

マヤはまだソーニヤの言葉が信じられなかった。「どうして……どうして急に、そんなこと……」

ソーニヤは言った。「あたしね、生まれた世界には一度も帰ったことがないの。お父様が自分は今二度と帰らないって決めてたから、あたしもそうしてあげようって。でも一度だけ聞かされた話によると、山矢君の世界と似たような世界だったみたい。それでも、あたし、何度か考えたことはあったの。もしあたしがこちらの世界に移り住んでいなければ、あたしは元いた世界で今頃、どんな生活を送っていたんだろうって。山矢君の高校に通っていた頃、日本の街を歩いていてあたしと同年ぐらいの、二十代前半の女の子とすれ違つと、ああ、あたしは本当はこんな女の子になっているはずだったのかな、なんて思うこともあったわ。

うまく言えないけど、あたし、今の山矢君の話を聞いて、山矢君に託してみようと思ったの。本来の自分を取り戻すっていう願望を」

「だけど、あたしがあなたのお父様の野望を破壊した元凶だって、さつき言つたじゃない」

「お父様の野望がついえた本当の理由は、いま言つたように、お父様が異呪を使えなくなつたからよ。最初から無理があつたの。異呪

の力だけで世界を征服するなんて。さっきあなたに言ったことは、単なる八つ当たり。それはわかってた。でもそうでもないと気が済まなかったの。バカみたいね」

「ソーニャ……」

ソーニャの顔に微笑みが戻った。「それにもうひとつ、向こうにいた頃は山矢君、あたしがどれだけ頼んでもファーストネームで呼んでくれなかったのに、さっき再会してからは何度もあたしのことをファーストネームで呼んでくれてる。あなたを元に戻すのは、そのお礼」

マヤの顔も再び笑顔になった。「わかったわ、ソーニャ」

ソーニャは、何かの魔法をかけるために右手を振った。まもなく天井から、人ひとりがやつと通れるほどの幅しかない小さな階段が降りてきた。「門を開く装置はこの上よ。来て。この塔がしばらく倒壊しないようにする異呪はかけておくけど、こんな大きな塔だからあまり長くは持たないと思うわ」

マヤは「ちょっと待って。すぐに行くから」と答えた。

ソーニャはそれを聞いて、先に小階段を登っていった。

すると、ルーミアとジュートが声をかけてきた。「良かったわね、お姉ちゃん」「良かったな、マヤ」

マヤは二人にうなずき返してから、ジュートのほうを向き、ちょっとはにかみながら、言った。

「今のソーニヤの話、聞いてたでしょ」

ジュートは答えた。「ああ」

「じゃあ、あたしの正体もわかったわよね」

「ああ」

「怒った？」

「いいや」

「本当に？」

「ああ、だって俺はもともと男のほうが好きだから」

「え？それって、ジュート、あなた本当はホ……」

「本気にするなって」

「びっくりした。でも、そうよね、あなたほどの女好きが、まさかね」

「そうだとも」

「なに威張ってんの。あたしは皮肉を言ったのよ」

「とにかく、俺にとってマヤはマヤ。男だとか女だとか言う以前に、おまえは俺の愛したマヤさ」

「うん」

ジュートはマヤの頬に手を添えた。マヤは一瞬、かたわらにいないはずのルーミアが気になって、横目で彼女のほうを伺った。だが、ルーミアは気を利かせて、先に小階段を登って行くところだった。

二人はしばらくの間、唇を重ねた。

唇を離れたあと、マヤはジュートとともに、壁に付いている大窓を開けてバルコニーへ出た。ピムに最後の命令を言い渡すためである。

マヤが呼ぶと、ピムはすぐに彼女のところへやってきた。

マヤはバルコニーの欄干越しに言った。「ピム、今までありがとう。もうしばらくしてあたしの存在感がこの世界から消えたら、あなたはここでルーミアを背中に乗せて、マキナスの森に帰るのよ。わかったわね。あ、それと、この赤い装甲はもう必要ないから、アヴニ村の鍛冶屋のお爺さんにでもはずしてもらってね」

ピムはもちろん何も答えない。しかし、マヤの目にはピムがちゃんと承諾の返事をしたのが見えていた。

マヤはピムの鼻先に口づけをした。ピムは心なしか、照れくさそうにしている。考えてみれば、ピムは人間で言えばマヤと同じくらいの歳、しかもオスなのである。

ピムはマヤのもとを飛び去った。マヤはその後ろ姿にいま一度、ありがとうと言った。

バルコニーから部屋へ戻って行こうとした時、マヤはたと気づいた。「そういえば、ジュート、あなたどうやって地上へ戻るの？あなたは男だから竜には乗れないし、今からあの長い長い螺旋階段を駆け下りても倒壊してしまう前に地上にたどり着けるかどうか……」

ジュートは「抜かりはない。ほら、見ろ」と言っ、て、騎士装束のマントをはね上げた。

マヤはジュートが背中に背負っているものを見てびっくりした。
「パラシュート？」

「ああ、俺はさっき情報部の上司に、この塔に潜入して破壊される前にできるだけ情報を集めて来る任務に就かせてくれって掛け合ってたんだ。マヤたちの竜がこの塔に近づこうとしているのを見て、きつとマヤたちは塔で何かするつもりだって思ったからな。潜入してみると、この塔にはいろいろ珍しい物があつてな。あの螺旋階段、途中まではひとりで動いて人を運んでくれる高速自動階段だったんだぜ。途中で止まっていたのは、たぶん下の連中の破壊活動のせいだと思う。とにかく、あの自動階段がなければ、俺はとも最上階まで登って行く気になんかならなかったよ。それで、ここへ来るまでにちよつと塔内を物色してみたら、このパラシュートってやつを見つけたってわけさ。おそらく、おまえたちの世界から呼ばれたパイロットたちの所持品だったんだろう。ご丁寧に使い方の説明図まで置いてあった」

「そうなの。でも使う時は気をつけてね」

「ああ。それと、マヤに知らせておきたいことがある。俺がこの塔に登り始めた時、上からオクタヴィともう一人、敵の竜騎兵服を着

た奴が落ちてきた。だが、たまたまそばにいた女性白魔道士が、すぐに二人に再生魔法をかけ始めてたよ。あれだけ処置が迅速なら、死ぬことはまずない。魂はじきに帰ってくるだろう。心配してんだろ？彼女のこと」

「ええ。それなら助かりそうね。安心したわ」

「もう一つ、螺旋階段を登ってくる途中、体のでっかい女が二人、階段の上で伸びてた」

「それって、ラウラとモーラ？」

「ああ。二人とも殴り合って足腰立たなくなってへばってた。でも、俺が『ハバリア皇帝がさつき、正式に降伏文書に署名した』って話をしたら、モーラは戦うのをやめたよ。ラウラの竜と一緒にここを脱出するって言うってた」

「そう、よかった。ラウラを信じて、本当によかった」

ジュートは不意にマヤを抱きしめた。マヤもジュートの胸にすがりついた。

マヤは言った。「ルーミアのこと、お願い」

ジュートは応えた。「わかった。おまえが姉として彼女にしてやったほどのことは到底、できないが、俺は俺なりのやり方で、彼女のお兄さん代わりをしてあげるつもりだ」

「ありがとう」

ジュートは更に強くマヤを抱きしめた。

「ここでお別れだ、マヤ。残りの時間はルーミアに譲るよ」

マヤは言った。「でも、あたしが異世界に帰ってしまったても本当にいいの？ずっと前、ザエフで言ってたじゃない。あたしを異世界には帰さないって」

ジュートは言った。「さっき、おまえがあのソーニヤって女に帰りたい理由を話しているのを聞いてしまったからな。あんなの聞かされたら、引き止めるわけにはいかないだろ」

「うれしい。わかってくれて」

「お前のことは死ぬまで忘れない。いや、死んだって忘れるもんか」

マヤは「あたしもよ」と言っ、ジュートの胸に顔をうずめた。
やがてジュートの胸は涙で濡れ始めた。

二人は最後に、もう一度キスをした。

キスを終えた途端、マヤは「さようなら」と言い残し、振り返ることなく上の階へ続く小階段を駆け上がった。いった。

12 帰還

小階段を駆け上って行く途中、マヤは塔全体がほんの少しだがグラグラと揺れ始めているのを感じた。

上の階へ登ってみると、まず目に入ったのは、高さ二メートルほどの白い卵形の構造物だった。それは正面の壁に半ば埋まるように備え付けられており、その根元からいまマヤの立っている場所までは傾斜のゆるいスロープが伸びてきていた。

マヤは更にぐるっと辺りを見回してみた。その部屋は、一辺が五メートルほどの四角い部屋で、階下の大きな部屋同様、壁や床が全体的に白で統一されているが、窓はなく、天井全体が鈍い白色光を放って部屋全体を照らすことで内部を明るく見せていた。

ソーニャは、楕円形の構造物の横にある操作パネルのような物を操作するのに余念がない。ピンク色の魔道士服をひるがえして行ったり来たりしている。一方、マヤより一足先にここに登ってきていたルーミアは、階段を上り詰めたところに立って、やや不安げな面持ちでマヤの到来を迎えてくれた。ルーミアはやはり、ソーニャへの恐怖が拭いきれず、少し心細かったのだろう。

マヤはルーミアに「塔が倒壊する前にピムの背中に乗ってここを脱出してね。ピムに頼んでおいたから」と言った。

ルーミアは「わかった」と応えた。

マヤはそこで苦笑いし、「それと、ジュートがね、あなたのお兄さん代わりになってくれるって」と言った。

ルーミアは表情をほころばせた。「ええっ？ジュートが？お兄さん？」

「頼りないお兄さんだけど、よろしくお願いね。ってあたしが頼むのは変かな」

「ううん、そんなことない。だって、もしお姉ちゃんが元の世界に帰らなければ、いずれそうなるだろうって思ってたから」

「それって、あたしがジュートの奥さんになるってこと？よしてよ。あたし、まだ十七なのに」

「でも、まんざらでもなかったでしょ」

「実を言うと、一度、ザエフの温泉宿でそういう意味のことは言われたわ」

「ほら、やっぱり」

「だけどあたし、それに対して何の返事もしていないもの」

「じゃあ、もし元の世界へ帰れなかったらどういう返事をするつもりだった？」

「わからないわ。あたし、何があっても帰るつもりだったし、帰れるって信じてたし」マヤは顔を赤らめ、言った。「でも、もし……もし帰れないってことになったら、たぶん……」

ルーミアは嬉しそうに応えた。「そう。それじゃあ、あたしもジ

ユートのことを義理のお兄さんとして認めてあげることにする」

「ありがとう。でも、あたしとしてはちょっと心配かな。ルーミアはいつもは優しくていい妹だったけど、たまに厳しいこともあったから。あんまり彼のこといじめないでね」

「もう。あたしがいつお姉ちゃんに厳しくしたって言うのよ」

「あたしがザエフの野戦病院に入院してた時、あたしの媚の売り方が下手だって言ったじゃない」

「だって、あれは本当に下手だったんだもん」

二人はそれからしばらくの間、楽しそうに笑い合った。自分たちの置かれた状況のことなど忘れてしまったかのように。

やがて、作業を終えたソーニヤが二人のほうに歩み寄ってきた。やや表情が硬い。彼女は先ほど、異呪のかけ過ぎで血を吐いた。やはりその影響なのだろう。

「装置の準備はできたわ。次は、山矢君を男の子に戻す異呪をかけるわね」

マヤはちよつと当惑した面持ちで「今？ここで？」と尋ねた。ルーミアに男に戻った姿を見られるのが恥ずかしかったからである。

ソーニヤは言った。「ええ。と言っても、異呪が効果を現すのは五時間ぐらい先よ。他の異呪と違って、性転換の異呪は魂に直接影響を与える魔法だから、さすがに即効っていうわけにはいかないのよ」

マヤは胸をなで下ろしながら「そう」と応えた。

ソーニヤは続けた。「それで、念のために訊くけど、山矢君、誰かに防御魔法とか、何かの封印をかけてもらってる、なんてことはないわよね？」

「何もかけてもらってないけど」

「そういう魔法や封印は、異呪の効果の妨げになるから」

「ええ、大丈夫よ」

ソーニヤはマヤが首にかけている鎖を指さし、言った。「そのネツクレスは？」

マヤはネツクレスを手に取り、「これはルーミアが誕生日にくれた普通のネツクレス。魔力はないわ」と答えた。

「わかったわ。それじゃあ、異呪をかけるわね。ルーミア、そこを離れて」

ルーミアは言われた通り、マヤの立っている場所から数歩退いた。ソーニヤはそれを確認した後、目を閉じ、両腕を大きく広げた。すると、マヤの体が青白い光のベールのようなもので包み込まれた。時間が経つにつれ、その光の色は次第に青みを増し、ベールの中にあるマヤの体を見えにくくした。

マヤは不安そうな表情で光のベールの中にじっと立っている。ルーミアはそんな姉の様子を、当事者である姉以上に不安げに見守っ

た。姉の体自体には何の変化も見られない。ただ、姉の魂に対して、無理矢理に性別を変えようとする力が働いているのはわかる。ルーミアほどの白魔道士であれば、そのようなことを見通すのはさほど困難なことではなかった。どうやらこの異呪は、以前、山矢健太がマキナスの森に墜落した際、彼を女と思い込んだルーミアが誤って施してしまった処置、つまり男の魂を女の魂として再生し、そうすることで肉体をも女のものに再生しようとしたあの一連の処置を、意図的に行える術に違いなかった。もっとも、アヴニ村のケースでは、一度、肉体が失われてそこから女性の肉体が再生されたので、マヤは完全な女性としてよみがえることとなった。この異呪の場合、おそらく、肉体の消滅、および再生を一瞬にして、しかもリスクを伴わず行えるのではないかと推測される。それがどのような原理に基づいているのかは、異呪の使えないルーミアには想像もつかなかったが。

数分後、姉の体を覆っていた光のベールは消滅した。もちろん、姉の体には見かけ上、変化は全くない。

ルーミアはすぐさま姉のもとに駆け寄り、「どう？ 具合は」と尋ねた。

マヤは「全然平気。っていうか、手応えがなさすぎて、逆に心配だわ」

ソーニヤは閉じていた目を開き、広げていた腕を下ろした後、言った。「大丈夫よ。性転換の異呪はちゃんとかかったはずから」

マヤは「ありがとう、ソーニヤ」と応えた。

ソーニヤは首を振った。「お礼を言うのは筋違いよ、山矢君。こ

れは、あなたがあたしたちのせいで受けた被害を復旧してるだけ、元に戻してるだけなんだから」

「そうね。そうだったわね」マヤはちよつと微笑んでから「ところで、ソーニヤ、あなたはその後、どうするの？この塔を脱出するならルーミアと一緒にピムの背中に乗って行けばいいと思うけど」と言った。

ソーニヤは静かに「あたしは脱出しないわ」と応えた。

マヤは驚いて「どういうこと？」と尋ねた。

「あたしはお父様とこの塔と運命をともにする」

「どうして、そんな……」

「あたしの命はどうせ長くはもたない。それに脱出したところで、あたしはこの戦^{いくさ}を指揮した者の一人として、捕まり次第、処刑されるだけだもの。あなたの世界の戦争のようにわざわざ戦争犯罪人を裁判にかけてなどくれないわ」

「じゃあ、モーラやニーナも……」

「ええ。でも彼女たちは生まれつきの戦士。お父様にそういうふう
に育てられたから。だからそうなることも覚悟の上よ。それにね、
あたし思うの。異世界に関わりのある者は、この戦^{いくさ}が終わると同時にこの世界からは消滅すべきだって。本来、この世界にあるべきでないものは、やはり消え去らなければならないって」

マヤは何と応えてよいかわからなかった。

ソーニャは無理に笑顔を作って、言った。「だけどあたし、後悔はしていない。たった二十三年の人生だったけど、普通の人が経験できないようなことをたくさんさせてもらったんだから。それに、元に戻るなら戻りたいっていう願望は、ちゃんと山矢君に託したものだ。だから、今は安心してあの世に行ける」

「ソーニャ……」

「お願いね、山矢君」

不意に、ルーミアの手がマヤの手を握りしめた。マヤはルーミアのほづを振り返らずに手だけを握り返した。

マヤは妹の励ましに勇気づけられ、ソーニャに力強く

「わかったわ」

と応えた。すると、ソーニャは嬉しそうな顔でマヤにうなずいてみせた。

その時、尖塔全体がまたグラグラと揺れているのが感じられた。

マヤとルーミアはまずお互いに顔を見合わせ、次にソーニャの顔を伺った。

ソーニャは二人に促されるように

「じゃあ、異世界への門を開くわね」

と言った。そして、その場でくるりと背を向け、楕円形の構造物の横についている操作パネルのほうへ歩いて行こうとした。

ところが足を一步踏み出した途端、彼女は急にその場に崩れ落ちるようにうずくまり、口を手で覆ってゴホンゴホンと苦しそうに咳き込み始めた。

マヤはすぐに彼女のところに駆け寄り、「ソーニャ、大丈夫なの？」と尋ねた。

ソーニャはヨロヨロと立ち上がり、「大丈夫よ。でも、もう時間があまりないかもしれない」と応えてから、また操作パネルのほうに向かって歩き出した。

マヤはそれを見届けた後、ゆっくりとルーミアのほうを向き直った。

姉妹の別れの時が近づきつつあった。マヤの心の中には、悲しさ、寂しさ、心細さ、そういった種類の感情が渦巻いていた。

「ルーミア……」

彼女は妹の名前を呼んであげるだけで胸が一杯だった。

ルーミアは、普段と変わらない微笑み顔を姉に向けた。

「お別れね、お姉ちゃん」

と応えた。

マヤはこらえきれず、涙を流した。

「ルーミア……。いろいろとありがとう」

ルーミアはそれでも笑顔のまま応えた。「こちらこそ」。

マヤは首にかけているネックレスを再び手に取り、言った。「ルーミアがくれたこのネックレス、大切にするわね」

ルーミアは耳たぶにぶら下がっているイヤリングを指先でつまみながら答えた。「あたしも、お姉ちゃんがくれたこのイヤリング、お姉ちゃんだと思って一生、大事にする」

「お義父さんによろしく言っというてね。命を救ってくれてありがとう、お仕事がんばってください、あたしは向こうの世界に帰ってもずっとお義父さんの娘です、遠くから励ましてますって」

「わかったわ」

「ルーミアも、これから白魔道士の仕事、がんばってね。でもできれば、もう戦場には行かないで。やっぱりあなたに戦場は似合わない」

「うん。お姉ちゃんがそう言うなら、そうする。お姉ちゃんのほうも、帰ったらまた『ひこうき』の操縦士をやるんでしょう？がんばってね。体に気をつけて」

「ええ」

二人はお互いの手を取り合った。

マヤは妹の手をぎゅっと握りしめ、

「あたし、ルーミアのこと好きだった。大好きだった。だからルーミアのことはどんなことがあっても絶対に忘れないから！」

と言った。

すると。

ルーミアは笑顔のまま、ぼろぼろと涙を流し始めたのだった。

「あれ、おかしいな」彼女はいかにも不思議そうな顔をしてつぶやいた。「あれ、どうしてだろ？おかしいな。あたし、お姉ちゃんを見送る時は絶対に笑顔でいようって決めてたのに。あれ？あれ？」

マヤは驚いた。考えてみれば、マヤは妹の泣き顔を一度も見たことがない。シュラースでナターシャの薬により魂を飛ばされた自分を妹が救ってくれた時は、妹が泣いていたらしいとあとで聞かされたが、実際に泣いているところは見なかった。それ以外の場面でも、どんな悲しいこと、どんなつらいことがあっても妹は決して涙を見せなかった。そんな妹が今、自分のために涙を流している。

「ルーミア！」

マヤはたまらなくなつて、ルーミアを胸の中に抱きしめた。

「お姉ちゃん！」ルーミアは、遂にマヤの胸にすがりついた。「あたしも、お姉ちゃんのこと、大好き！絶対、絶対忘れないから！」

二人の心の中でいま一瞬、時が止まった。その永遠の時間の中で二人は手をつなぎ、アヴニ村を、マキナスの森を、そしてクフルツ診療院を巡り歩いている。そこには村人やクフルツ先生の笑顔がある。ピムの背に乗って飛び立てば、すぐに彼女たちのもとにラウラとオクタヴィの乗った竜が寄り添ってくる。そしてピムを地上に降ろすと、そこは教会堂の前。白いタキシードを着たジュートがウェディングドレス姿のマヤを抱きとめる。そしてルーミアやラウラたちやそのほか多くの人たちが祝福の拍手でそれを迎える。

しかし、それは一瞬の夢にすぎなかった。二人はもう現実に帰らなければならない。

姉妹はどちらからともなくお互いの体を引き離れた。

マヤは最後に

「さようなら。ありがとう」

と言って、楕円形の構造物のほうへ走り去った。

構造物の横で待機していたソーニャは、パネルを操作して構造物のこちら側の一面を開放した。ちょうど卵の殻の一側面をそっくり除去したような形になった。

ソーニャは「中に入って」と言った。「向こうの世界に着くには半日ぐらいかかるわ。その間、山矢君は気を失うけど、大丈夫、向こうの世界ではちゃんと安全なところに到着するようになっていくから」

マヤは構造物の中に入り込み、ルーミアのほうを向いて立った。

見ると、ルーミアは涙を流しながらも、なんとかして笑顔を作ろうと必死になったいる。マヤも涙をこらえ、最後の笑顔を妹に見てもらおうと努力した。

突然、マヤの視界は白い霧のようなもので包まれた。

数秒後、マヤは体がふわっと浮き上がったような気がした。そしてそのまま、構造物を突き抜けて、ゆっくりと上昇し始めたのだ。彼女は驚いて、自分の体がどうなってしまったのか確かめるために視線を下にやった。ところがそこに自分の体はなかった。つまり彼女は魂だけの存在になって上へ上へと浮かび上がりつつあったのである。もしかしたら、この異世界への門は、魂だけを別の世界に転送して肉体は目的の世界で分子レベルから再構成するのかもしれない。何にせよ、この異呪の原理など、今となっては知りようもなかった。

マヤの魂は、尖塔の頂上を通り越した後もゆっくりゆっくり天高くへと登り続けた。十分ほどしてもう一度、下を見下ろすと、塔がぐらりと倒壊を始めた。その直前、塔の最上階から、ルーミアを背に乗せたピムと、ジュートのぶら下がっているパラシュートが降下してゆくのが見えた。

マヤは眼下に広がる世界に向かって

「さようなら、異世界」

とつぶやいた。

その後、マヤの意識はだんだんと遠のいていった。そして更にその十分後、彼女は気を失った。

＊

街の上空を丸一日覆い続けた雨雲は、昼過ぎに東の空へ移動し始めた。

傘をさして街を歩いていた人々が次第に傘をたたみ始めたのを見て、本多智美はようやく、雨がやみつつあることに気づいた。彼女は手のひらを上にして右手を前へ差し出し、雨粒が手に当たらないことをじゅうぶん確認してから、傘をたたんだ。

空を見上げると、東半分はまだ厚い雲に覆われているが、西の方はもうすでに雲の切れ間から断片的に秋の青空が覗いている。このまま太陽が西に傾けば、それらの切れ間から陽も差し込むことだろう。もしかしたら、きれいな夕焼けが見られるかもしれない。智美はかつて学校で「夕焼けが見えた日の翌日は晴れになる」と教わったことを思い出しながら、濡れた路面を踏みしめ、再び歩き始めた。

彼女の向かった先は、一軒の喫茶店だった。ごく普通の喫茶店である。彼女はこの店に今までに何度か来たことがある。高校時代の友人、川名理恵が久々に集まろうと言いつつ出ず時は必ずこの店を待ち合わせ場所に指定するからである。この店は市内の某駅付近にある。

鉄道網の関係上、この駅付近でみんなが集まるのが一番都合がよく、しかも、理恵の通う大学からほど近いため、理恵自身は比較的楽にこの店に来れる。それが彼女がこの店を指定する理由なのだという。

智美は店のドアを開き、店内を見回した。案の定、理恵は先に来ていつもの席にたたずんでいる。ああ見えて、理恵は時間にはバカがつくほど正確なのである。

「お久しぶり、理恵」

理恵は智美にその声をかけられて初めて智美の存在に気づき、読んでいた雑誌から目を上げて、応えた。

「あ、智美。おひさ」

智美は理恵の向かい側の席に腰掛け、「待った？」と尋ねた。

背の低い理恵は背の高い智美の顔を見上げるようにしながら「いまちょうど約束の時間ね？なら、あたしが待った時間は十分。あたしは待ち合わせの時はいつも、ちょうど十分前に待ち合わせ場所に来ることにしているから」と言った。

智美は嬉しそうに「そうだったわね。ふふ、理恵、昔と全然、変わらない」と言った。

理恵は応えた。「変わったわよ。だってもう二十歳よ、二十歳。二十歳って言ったら、親の許可を得ないで結婚ができる歳よ。これってもうおばさんじゃない」

智美は、親の許可を得ないで結婚ができることとおばさんである

ことがどう関係しているのか疑問に思いつつも、敢えて口にはせず、代わりに「でも、二十歳って言われても、なんか実感わかないわね」と応えた、

理恵は言った。「あんたは来年、もう就職だしね」

智美は、注文を取りにきたウェイトレスに紅茶を注文した後、応えた。「短大ってホント、あっという間に終わっちゃうのね。変化の早さに我ながらちよつと戸惑ってる感じはする」

理恵は西洋人が呆れたときによくやるような仕草を、大げさに真似してみせた。「もつとも、もうちよつと変わってほしい人も、約一名いるけどね」

智美はその仕草がおかしかったのか、軽く笑いながら「美玖のとね」と言った。

「ええ、そうよ。あの娘には、いい加減に約束の時間を守ることを覚えさせないと」

「理恵つたら、まだ美玖の『保護者』をやってるの」

「あんたもよ、智美。あの娘がお嫁に行くまであたしたちがちゃんと保護してあげるって決めたでしょ」

「そうね。そうだったわ」

「そうよ」

智美はちよつと表情を曇らせ「だけど……」と言った。

「何よ」

「あたしたち、本当に美玖を『保護』してあげることができたのかな。美玖のためにしてあげられることを、みんなしてあげられたのかな」

理恵は真面目な顔をして「たぶん、できたと思う。だって、あの後、あの娘はちゃんと部活にも顔を出すようになったし、そのおかげで地区大会で入賞もできたんだし。それに、一浪はしたけど大学にも入れたんだし」と応えた。

「だけど……あたし、思うの。美玖が部活や受験勉強に打ち込んでいたのは、ただ目の前に突きつけられた現実から逃れたかったからじゃないかって。忘れたかったからじゃないかって」

「たえそうだとしてもよ。あたしたちはしてあげられることをした。美玖も精一杯、立ち直ろうと努力した。お互い、ベストを尽くした結果よ」

「そうなのかな。でもあの娘、あれから一度も男の子とつきあったことないでしょ。何人か告白してきた男の子がいたって話なのに」

「男なんて、できるときもあるしできないときもあるわよ。あたしなんか、自慢じゃないけど彼氏いない歴二十年なんだから」

「それはそうだけど」

理恵はそこで、先ほどまで読んでいた雑誌を、智美のほうへ差し出した。「今、そのことと関連があるかも知れない記事をこの雑誌

で読んでいたところよ。ほら、見て」

智美は理恵から差し出された逆さ向けの雑誌を受け取り、自分のほうへ向けてから、その記事に目をやった。そこには

「四年目の真実？？あの『アクロバット飛行パイロット連続行方不明事件』は一体、何だったのか：不明になった十人はどこに：いまだ手がかりはゼロ：くすぶる某国の某略説：UFO説を唱える識者も」

と書かれていた。

理恵は言った。「ホント、なんだったんだろうね」

しかし智美は、喫茶店の入口のほうを横目でうかがいながら「ち、ちよつと、理恵、美玖がもうすぐここへ来るのよ。あの娘がこんな記事を見たら……」と言った。彼女の心配症は昔のままである。

「大丈夫よ。すぐにしまえばいいだけのことじゃない」理恵はあつけらかんと応えた。「それにしても、こんな大事件の被害者のうちの一人が自分の彼氏だったら、普通、二度と立ち直れないぐらいのショックを受けるわよねえ。やっぱり、立派に立ち直れたあの娘と立ち直らせたあたしたち自身ををほめてあげるべきよね」

ちょうどその時、智美の注文した紅茶がウェイトレスによって運ばれてきた。だが智美は、紅茶よりも、理恵の話よりも、美玖がもうこの店にやって来るかもしれないことが気かりで仕方がなかった。

すると。

喫茶店の入口の扉が開いた。

智美はそこから誰が出入りしたのか、しなかったのか、確認するよりも前に、ただ慌てて雑誌を閉じた。

理恵は扉のほうに目をやった。智美も、雑誌を閉じ終わった後でそちらを注目した。

そこには、髪を肩よりも少し長く伸ばし、いかにも今風の女子大生っぽい服を着、ほんのりと化粧をした美玖の姿があった。

理恵と智美はいささか驚いた。美玖の雰囲気が以前に会った時に比べ、全体的にあか抜けた感じになっていたからである。

美玖はすぐに理恵たちの存在に気づき、彼女たちの陣取るテーブルに歩み寄ってきた。

「ごめん、待った？」

理恵は美玖のその言葉に対し、また大げさに呆れてみせた。「ええ、じゅつぶん待ったわよ。あのね、美玖、もうそろそろ時間を守ることを覚えなさい。遅れるなら遅れるで携帯に連絡ぐらい入れなさい」

智美は「まあまあ。たった数分遅れただけなのに、そんな大げさな」となだめたが、声があまりにも小さく、理恵の耳にも美玖の耳にもほとんど届かなかった。

美玖はからからと陽気に笑いながら「ごめん、ごめん。あと十分

遅くなるようなら連絡しようと思ったんだけど」と応えた。

理恵は保護者さながらに「まったく、あんたって娘は」と言った。

美玖は智美の隣の席に腰を下ろした。ほどなくウエイトレスが注文を取りにきた。美玖はホットカフェオーレを注文した。

智美はそんな美玖の様子をまじまじと見つめながら「ねえ、美玖、あなた、髪の毛伸ばし始めたの？」と尋ねた。本当は、化粧もしてるのね、着ている服の感じも変わったわね、何かいいことでもあったの、と訊きたかったのだが、智美にはもちろんそんなことをあからさまに訊く勇氣はない。

美玖は「うん。最近、伸ばし始めた」と答えた。

理恵はしかし、智美が訊きたかったことよりも一歩進んだことを美玖に訊いた。「男でもできた？」

理恵のこの口調に、智美は今まで何度かはらせられたことか。これは高校時代、いやその前の中学時代、小学生時代から何年たっても変わっていないことの一つなのである。

当の美玖はというと、智美のそんな心配をよそに、無邪気に明るく「うん、できた」と答えた。

さきほどこの店に美玖が現れた時に理恵と智美が感じた小さな驚きは、次第に大きくなり始めていた。美玖は外見の雰囲気だけでなく、態度や振る舞いまでもが、前回に会ったときよりも明るく、はつらつとしたものになっているように感じられたからである。

理恵はしたり顔で「やっぱりね」と言った。

智美は率直に「それはおめでとう」と言った。

理恵は更に「どんな男？」と尋ねた。

「あ、また理恵お得意の『保護者モード』ね」美玖は親友におせっかいを焼いてもらえたことが嬉しくてたまらない、と言った顔をして、答えた。「大学のサークルの学際活動で知り合った、大の男の子。あたしと同じ年で、学年も、一浪してるからあたしと同じ。一年生」

智美は独り言のように「へえ、大生なんて、すごい」とつぶやいた。

理恵は「つきあい始めて、どれくらい経つの？」と尋ねた。

「まだひと月経つか経たないかってとこ」

「そう」

美玖はいつそう嬉しそうな顔をして「どうせまた『保護者のあたしたちにちゃんと紹介しなさい』とかなんとか言うつもりなんですよ」と言った。

理恵は「わかってるじゃない」と言った。

美玖は「もう少し落ち着いたら、ね」と応えた。

理恵と智美の驚きはますます大きくなった。美玖のこの態度、単

に前回に比べ明るくなったというより、彼女が今まででもっとも幸せだった時期の明るさ、あの最高の明るさを取り戻したかのように見える。そう、まるで山矢健太と知り合ったあの時期の明るさを取り戻したかのように見えるのである。

その時、美玖のカバンの中から着信音が聞こえてきた。

美玖は「あ、メールだ」と言いながら、カバンの中からごそごとと携帯電話を取り出し、携帯の画面に映る文字を見た。その途端、彼女は今日、理恵たちと再会してから今までに見せた中でもっとも嬉しそうな笑顔で微笑んだ。

理恵は美玖の笑顔を見てみると、自分まで嬉しい気分になってきた。「噂の彼からのメールね」

しかし美玖は「ううん。これは友達から。もちろん女のね」と答えた。

理恵は美玖のその答えにやや拍子抜けした。もし彼氏からのメールなら、その内容についてまたおせっかいを焼いてやろうと思っていただけである。だが考えてみれば、美玖が彼氏からのメールに対してだけでなく女友達からのメールに対してさえこのように明るい態度を取れるのは、現在の彼女の精神状態がよほど良好だからだとも言える。

智美が理恵のほうへ視線を移してきた。彼女も理恵と同じことを感じている、と言いたげである。

二人は思った。美玖のこの変化は彼氏ができたことに原因があるのかもしれない。ないのかもしれない。理恵はおせっかいを焼くのは

好きだが、それは詮索好きと同義語ではない。だから、美玖が態度や言葉で表した以上のことを根掘り葉掘り訊くつもりは毛頭、ない。美玖はいずれこの変化の理由を話してくれることもあるだろう。ただ、いま重要なのは理由ではなく、その結果として美玖が明るさを取り戻せたことである。美玖は山矢健太が行方不明になって以来ずっと、表面上は普通に振る舞っていても、どこかしら寂しげな雰囲気やを漂わせていた。そんな美玖の顔に、高校一年の時に見せたあの太陽のような輝きが戻ってきたのである。二人にとっては、それでじゅうぶんだった。

「さて」美玖は返信メールを打ち終わった後、顔を上げ、言った。
「あたしの話はここまで。次は智美の番ね」

智美は「え？」と言った。

「その後、彼氏とはどう？」

「うん、それなりに……」

理恵が口を挟んだ。「この間、双方の両親公認のもとで、二人きりの一泊旅行に行ってきたって。いわゆる婚前旅行ってやつ？」

智美は赤くなって「その言い方はちょっと気が早いんじゃない……」と言った。

美玖はウェイトレスが運んできたホットカフェオーレを受け取った後、今度は理恵に向かって「そういうあんたは？」と尋ねた。

理恵は「あたしは、今は学業が恋人だもん」と答えた。

智美は「司法試験つてすつごく難しいんですよ？」と言った。

美玖が言った。「がんばって立派な悪徳弁護士になってね」

理恵が言った。「あたしが目指すのは検事よ。司法試験の合格者は、弁護士以外にも、検事や裁判官になることもできるのよ」

美玖が言った。「理恵が検事ねえ」

理恵は負けじと「見てなさい。あたしが検事になった暁には、世の悪人どもを一人残らず有罪にしてみせるんだから」と高らかに宣言した。

美玖は半ばあきれ顔で「ま、そう言われてみれば、理恵は検事に向いてないってことはないかもね。あんたのその弁舌能力と、おせっかい能力があればね」と言った。

理恵は「そうでしょ。そうでしょ」と言った。

智美は小声で「おせっかいはこの際、あまり関係ないと思うんだけど……」と言った。

三人はそれから何十分もの間、昔話や現在の話や将来の話に花を咲かせた。

翌日は智美の予想通りの快晴だった。空気中を漂う汚れた成分が

雨で流されてしまったため、都会の真ん中では滅多に見ることのできない本当の青空が広がっている。できることならこの空に飛び込んで体中にその青い空を感じ取りたい。そんな気分させるほどの心地よい秋空だった。

美玖は昨日、喫茶店で女友達からメールを受け取った。それは今日、その女友達と一緒に出かけることを約束する内容のメールだった。美玖は今、その約束通り、ターミナル駅の待ち合わせスポットでその友達を待っているところだった。美玖が約束の時間前に待ち合わせ場所に現れるのは珍しいことである。実際のところ、携帯電話の普及した今となっては待ち合わせ時間を守ることにそれほど意味はない。いや、場合によっては待ち合わせそのものにもあまり意味がないこともある。にもかかわらず彼女がこのように約束時間を厳守したのは、単に昨日、理恵に時間を守るよう言われたからではなく、彼女にぜひそうしたいと思わせるほどの何かが、今日のこの約束にあったからである。

しばらくして女友達が現れた。今の美玖同様、どこにでもいそうな、ごく普通の女子大学生だった。

二人はお決まりの挨拶を二言、三言、交わしてから、待ち合わせスポットを後にし、電車に乗り込んだ。

彼女たちは電車が駅を発った後もとりとめのない雑談を続けた。電車の中で彼女たちに目を止めた者のほとんどは、おそらく、彼女たちのことをいわゆる「何の悩みもない」お気楽極楽な女子学生だと思ったことだろう。美玖が心の中にどんな大きな傷を持っているかなど、その外見から知るすべはないのだから無理からぬことである。

やがて、美玖は思い出したように「そういえば、ねえ、このあいだ言ってたこと、どうなった？」と、女友達に尋ねた。

女友達は「それって、あのことよね？」と訊き返した。

「うん。あなたが両親に会ってくるっていう話」

女友達は美玖のその言葉に対し、ためらいがちにこくりとうなずいて見せただけだった。

だが、美玖にはそれだけでじゅうぶん通じていた。「そう。よかったわね」

女友達は微笑みながら「うん、よかった」と答えた。

美玖は「『案ずるより産むが易し』ってことね」と言った。

女友達は「相良さんの言う通りにして間違いはなかった。ありがとうね」と言った。

美玖は「何よ、改まって」と、照れくさを吹き飛ばすように言った。

女友達は「でも、相良さんのおかげだっていうのは、本当だもの」と言った。

美玖は照れ隠しに、話題を変えることにした。「ねえ、古津さん」

女友達は「何？」と言った。

「一つお願いがあるんだけど」

「どんな？」

「古津さんのこと、名字じゃなくて名前で呼び捨てにしちゃだめ？」

「別にいいけど」

「で、あたしのことも名前で呼んでほしいな」

「うん。わかった」

「あたし、ずっと前からあなたには名前で呼び捨てにしてもらいたかったんだ」

「そうだったの？」

「ねえ、呼んでみて」

「今？」

「うん。あたしもあなたの名前を呼んであげるから」

「わかった。じゃあ、呼ぶね」

「うん」

「美玖」

「なあと、麻^ま弥」

その途端、女友達？？古津麻弥は吹き出した。「なんかあたしたちってバカみたいじゃない？」

美玖もたまらず笑い出した。「バカまるだし」

二人のけたたましい笑い声は車両の中に響き渡った。その様子を見ていた乗客たちは、改めて彼女たちを「今時の女子学生」だと断定した。

まもなく、電車はとある郊外の駅に到着した。二人はそこで電車を降り、バスに乗り換えた。

バスに揺られている間、無尽蔵かと思われた二人の話題もさすがに尽き、ふと会話が途切れた。古津麻弥はバスの小さな窓から、抜けるように青い秋空を見上げながら、この四年の間に自分の身に起こった数々の出来事を、もう一度、思い返してみた。

麻弥、すなわちマヤが異世界への門を通る途中に気を失い再び目覚めた時、彼女は六畳ほどの広さの部屋に置かれたベッドの上に仰向けになっていた。彼女はまず自分の体を点検したが、男に戻った様子はなかった。もしかしたら性転換の異呪の効果がまだ現れていないのかと思い、とりあえずその部屋の様子などを調べながら、効果の現れるのを待つことにした。どうやらその部屋はワンルームマンションの一室らしかった。更によく調べてみると、片隅に置かれたテーブルの上に、未記入の戸籍謄本、本籍地移転届、住民票、住民票移転届、とある女子高への転学届けなど数通が広げられているのが目に入った。

彼女は丸一日、その部屋で男に戻るのをじっと待った。だが、性

転換の異呪は遂に効果を現さなかった。その頃にはすでに、彼女は性転換の異呪が効かなかった理由に気づき始めていた。この異呪をかける時、ソーニヤは防御魔法や封印が異呪の妨げになると言った。よく思い出してみれば、マヤはドウムホルク攻略戦の直前、ルーミアに生理を遅らせる魔法をかけてもらった。そのときラウラが言っていたように、ルーミアの魔力は普通の魔道士より強力である。きっとその魔法が卵胞ホルモンや黄体ホルモンといった女性特有のホルモンの分泌を促す活動を行ったことが、魂と肉体を男に戻そうとする異呪に対して防御魔法のように働いてしまったのである。

マヤの受けた衝撃は大きかった。彼女はもとより、元の世界に戻れたとしても、男に戻れるとは思っていなかった。女のまま元の世界に帰ってもなんとかなると思っていた。それが、ドウムホルクの尖塔の最上階でいきなりソーニヤに男に戻してあげると言われたため、完全に元の自分を取り戻せるという過剰な期待を抱いてしまった。そのことが却って、男に戻れなかった衝撃を大きく感じさせたのだった。

マヤはそれでもなんとか自分を奮い立たせ、両親のもとに帰ろうとした。だが、どうしてもその勇気が湧いてこなかった。もし両親に自分が山矢健太だと言って信じてもらえなかったら、彼女は国籍のない不法入国者のような存在となる。それはすなわち、彼女がこの世界で、文字通り天涯孤独、本当のひとりぼっちになってしまうことを意味する。

しかも彼女には、自分が山矢健太であることを両親に信じてもらえる自信が全くなかった。彼女は部屋の壁についている大きな鏡に自分の姿を映し出してみた。誰がどう見ても十七歳の女の子だった。この子は実は男だなどと言い出す者は、心を病んでいると見なされかねないとも思えた。

もしここにルーミアがいたとしたら、きっとマヤのことを励ましてくれたに違いない。だが妹はもういない。マヤは妹の存在の大きさを改めて実感した。と同時に、向こうの世界でいきなり女として暮らすことを余儀なくされながら精神に異常を来すこともなく生きてこれたのは、みんなルーミアのおかげだったことを思い知った。

マヤはそれから数日間、飲まず食わずでただ部屋にじっとしていた。次第に混濁してゆく意識の中で、彼女は何度かルーミアの幻を見、その度に「あたしを励ましにきて。お願い」と話しかけた。無論、ルーミアが現実姿を現すことなどあるはずもない。絶望したマヤはやがて、妹に会える最も簡単な方法は、先に天国に行って待つことだと思ふようになった。もともと向こうの世界に飛ばされた時点で失われていたはずの命である、惜しくはないとも思えた。天国に行けばナターシャに再会できるのだからそれも悪くはない。このまま何も食わずにじっとしていれば、いずれ自分は天に召される。そうすれば……

そんなマヤを救ったのは、そのワンルームマンションの一階の住人でありオーナーでもある老婆だった。彼女は「あなたはソーニャさんのお友達ね？ソーニャさんにはずいぶん優しくしてもらったわ。私が心臓発作で死にかけている時に、救急車を呼んで助けてもらったこともあるのよ。ソーニャさんはもうここには帰ってこないんでしょう？なら、せめてあなたに恩返しをさせてちょうだいね」と言って、マヤが栄養失調から回復するまで看病してくれ、更にその後も料理を作って持ってきてくれたりと、いろいろ世話を焼いてくれた。後で聞いた話では、老婆は旧華族の出身で、かつては広大な不動産を所有していたのが、生活費やら税金やらで消費されて徐々に減ってゆき、今では市内にあるこのマンションだけになってしまったのだという。老婆はソーニャがこちらの世界の人間でないことにも、

何らかの悪事を働くための拠点としてこの部屋を使っていたことに薄々感づいていたらしい。それなのに老婆がソーニヤに協力するのをやめなかったのは、もしかしたら、自分をこんな境遇に陥れた世間に対しさやかながら仕返しをしてやろう、とでも思っていたからなのかもしれない。

マヤは決心した。自分は山矢健太に戻れなかった。もちろんマヤ・クフルツに戻ることもできない。ならば新しい人間としてやり直すしかないのではないか。驚いたことに、部屋に置かれていた戸籍、住民票、転学届けなどの書類を手についた途端、その氏名欄にひとりで「古津麻弥」という文字が浮かび上がった。もちろん氏名だけではない、空白だったその他の欄すべてに、つじつまが合うような適切な文言が自動的に浮かび上がってきたのだった。ソーニヤは言っていた。人は世界を超えるとき、特殊な能力を得ると。ソーニヤやその父親は、ルーミアたちの世界に飛んだ時、異呪を手に入れた。とすれば、ソーニヤがこちらの世界に飛んだ時には、何か別の能力を手に入れたはず。このようにして書類にひとりで文字が浮かび上がったのは、たぶんこれがソーニヤの得た「偽造能力」によって作られた文書だからなのだろう。そしておそらく、ソーニヤが山矢健太の高校に帰国子女として入学できたのも、この偽造文書のおかげだったのだろう。

一旦、新しい人間としてやり直すことを決心すると、マヤは気持ちが軽くなったような気がした。「自分は山矢健太だ、なのに実の両親にさえそのことをわかってもらえず、理不尽に孤独な立場に置かれる」と考えるのはつらいことである。だが「自分は天涯孤独の古津麻弥という女の子、ずっと一人で生きてきた、だから全然、寂しくない」と思い込めば、不思議とつらいと感じずに済んだ。

マヤは、まず近所の市役所に戸籍、住民票移転届などを提出した。

彼女はなぜか某県の山間部の町から移転した事になっていたが、市役所の職員が町役場に転籍確認をとつても、全く怪しまれることはなかった。

次に彼女は転学届ほか必要書類を転入先となつてゐる女子高に提出した。時期的にも、ちょうど三月になつたばかりで、転入するはもつてこいのタイミングだった。但し、一年半異世界にいて学力が不足していることを自覺していたため、本来の学年より一年下に転入させてもらうことにした。もちろん、書類がそろつてゐるからと言つて、それだけで転入させてもらえるわけではない。彼女が未成年である限り、後見人が必要だったし、学費などの経済的裏付けも必要だった。後見人のほうはマンションのオーナーが快く引き受けてくれた、というよりオーナー自身が、学校など行かずに働くと言ひ張るマヤに入学を勧めた張本人だった。その際、オーナーが旧華族の出身であることが学校側の信頼を得る上で大きな役割を果たした。経済的な面に関しては、もちろんアルバイトも始めたが、ソーニヤがこちらの世界で活動するために用意したと思われる銀行預金、かなりの額、残つていたため、それでまかなう部分のほうが大きかった。合法的な手段で得られたお金だとは思えなかったが、マヤにはそれを使わせてもらう以外、ほかに手だてがなかった。

マヤは四月から女子高の二年生、古津麻弥としての生活を始めた。意外なことに、友達はすぐにできた。彼女は男っぽい、不思議な魅力を持った女の子として、クラスのみんなから注目を集める存在となつたからである。女の生活を異世界で一年ほど経験したぐらいでは、それ以前に身につけていた仕草や振る舞いの男っぽさはそう簡単に消えるものではない。それに、彼女は日本語の女言葉をしゃべり慣れていないため、どうしても口ごもつてしまふ。そういう中性的でクールな感じが、女子校の生徒たちの目には魅力的に映つたのである。更に、彼女がワンルームマンションで一人暮らしをしてい

ることが知れると、彼女の友人たちは、毎日のように彼女の部屋に集まってきた。たまにその部屋で無断外泊をする生徒もいたため学校側に問題視されてしまうこともあったが、麻弥自身は、そうやっていつもいつも友人に囲まれていることで過去の自分を思い出す暇もないことを、ありがたいと思った。

とは言え、何度も述べたように、マヤはアヴニ村でルーミアによって「再生」された時、魂のレベルで女性化された。そのため、毎日、女子高生の友達に囲まれて平凡な女子高生としての生活を送っているうちに、少しずつ女っぽいや言葉遣いや仕草が身に付いてしまった。また、彼女自身も自分がそうやって変化してゆくことを特に拒もうとしなかった。二年後、高校を卒業する頃には、彼女はごく普通の女子高生と化していた。少なくとも、表面的にはそのように見えた。友人たちの中には彼女のそういう変化を残念がる者も少しはいたが、大部分の者は自然の成り行きと受け止めた。

卒業後、彼女は近郊の私立女子大に入学した。もちろん奨学生としてである。その頃にはソーニヤの置いて行ったお金も残りが少なくなり、またいろいろ面倒を見てくれていたマンシヨンのオーナーも高齢のため健康を害し、入院しがちだったからである。

オーナーの老婆は間もなく死んだ。麻弥は今度こそ身寄りがなくなってしまった。だが、今や彼女の周りにはたくさんの友人がいた。彼女はもう寂しいと思うことはなかった。学業にアルバイト、そしてその合間を縫って大学の福祉サークルの活動にまで精を出し、彼女は日々、女子大生として充実した生活を送っていた。山矢健太としての記憶も、マヤ・クフルツとしての記憶も次第に薄れ始めた。彼女はそのまま古津麻弥という女性として一生を終えることに對して、何の疑問も持たなくなっていた。

しかし、運命の女神は、麻弥をもてあそぶのがよほど楽しいのか、彼女に更なる試練を与えたもうた。

福祉サークルの活動の一環として、麻弥はひと月前のある日、都心の一流ホテルで開かれる福祉関係の団体の会合に出席することになった。会場がホテルである以上、それなりの格好をしてゆく必要があったので、彼女は一張羅を着込んだうえ、滅多に使わないためタンスの奥にしまい込んであったアクセサリーを引っ張り出してきて身に付けた後、いそいそと会場へ向かった。会場となっているホテルの入口の扉を開いた時、向こうから扉を開けようとした人物と鉢合わせするかっこうになった。その人物が、なんと美玖だったのである。美玖はよその大学の福祉サークルのメンバーとしてたまたま同じホテルに来ていたのだった。

麻弥の意識はそこで、過去の回想シーンから、バスの窓の向こうに見える青空へと引き戻された。バスのアナウンスが彼女が降車すべき停留所の名前を告げたからである。

麻弥と美玖が降り立った場所は、小さな飛行場の前だった。もっぱら個人および小企業の所有するプロペラ機やヘリコプターが離着陸するためのこの施設は、アクロバット飛行パイロットだった山矢健太が四年前まで毎日のように通いつめた場所である。

二人はしかし、飛行場の表玄関には足を踏み入れなかった。美玖は麻弥の手を取って彼女を滑走路の端っこのほうへと導いた。更にそこからぐるっと回って滑走路の向こう側に出ると、そこはただっ広い原っぱだった。川と滑走路の間にあるこのスペースは、飛行場への離着陸コースから外れているため、上空でアクロバット飛行をするのには最適の場所なのである。

美玖は原っぱの上に腰を下ろし、空を見上げながら、言った。「ねえ、麻弥、覚えてる？四年前にも、ちょうど今みたいに、真っ青な秋空の広がる日があったよね」

麻弥も美玖の横に座り込み、天を仰いだ。「うん、よく覚えてる。確か、相良さ……美玖が友達をつれて、あたしのアクロバット飛行の練習を見に来た日だね？」

「そう。今だから言うけど、あたし、あの時、山矢君にお弁当を渡そうとしてたんだよ」

「え？あたしに？全然、知らなかった」

「渡そうとした直前に八木沢さんに割り込まれちゃって」

「そうだったんだ」

「そのあと、山矢君と八木沢さんの関係を勝手にあれこれ想像して落ち込んだり、理恵や智美に励まされたり、なんてこともあったんだよ。青春のページって感じだよ。あたしも若かったんだね」

「その言い方、なんかすごく年寄りくさい」

「年寄りだよ。もう二十歳だもん」

二人は顔を見合わせ、意味もなく微笑み合った。

麻弥は視線を青空のほうへ戻し、言った。「ねえ、前から訊こうと思ってただけだよ」

美玖は両手を背後の地面につき、体重を後方に預けながら「何？」と言った。

麻弥は続けた。「ひと月前、ホテルのホールであたしたちが再会したとき、美玖はどうしてあたしが山矢健太だつてすぐにわかったの？」

美玖は嬉しそうな顔をして、答えた。「一目瞭然だよ。だつて麻弥の仕草、山矢君だった頃と全然、変わつてなかったもん」

「え？ほんと？」

「それに顔立ちにだつて山矢君の面影があつたし」

「そうなの？」

「そうだよ。確かに仕草も容姿も全体的には女っぽくなつてた。でも、部分的には昔と変わつていないところもたくさんあつた。それにあたし、山矢君と同じクラスだった時、授業中も休み時間もずっと山矢君のこと見てた。山矢君の一挙手一投足を目に焼き付けようとしてたんだよ。だから、あたしには自信があつたんだ。ただ山矢君に似てるだけの人と、山矢君本人を見分ける自信がね」

「そう、そういうことだつたんだ。あたし、美玖の前で、山矢健太しか知らないようなことを間違つてしゃべっちゃったのになつて、ちよつと反省したりとか、もしかしたらいままでにも他の人の前で言つちやいけないことを言つちやつたことがあるのになつて、不安になつたりもしてたんだ。それを聞いて安心した」

「麻弥はそんなに口の軽い娘じゃないでしょ。まあ、高校一年の頃

の山矢君みたいに『口が重い』ってわけでもないけど」

麻弥は「だけど、あのあと美玖にひとけのないところに呼び出されて『やっぱり山矢君はUFOに拉致されてたのね。そして性転換実験の被験者にされた挙げ句に放り出されたのね』って言われた時は、びっくりした」と言っ、おかしさをこらえるようにくすくす笑った。

美玖は口を尖らせて「何がそんなにおかしいのよ。麻弥は異世界に拉致されてたんでしょ。当たらずと言えども遠からずじゃない」と言っ。

「ごめん、ごめん。確かにそうだよ」

「あたしは大真面目だったんだからね。そのうち警察に通報しようか、NASAに真相の解明を要求しようかって思っ。もし麻弥が本当のことを打ち明けてくれなかつたら、もう実行に移すところだったんだよ」

「美玖つたら、あたしのあとをつけて家の場所を探り出して、毎日マンションの前で待ち伏せしてるんだもん。最後には根負けしたわよ。そんなにあたしの正体を暴きたかつたの？」

「暴きたかつたっていうより」美玖は目を伏せ、言っ。「『山矢君』に会わせてほしかつたから。『古津麻弥』とじゃなくて、もう二度と会えないかもしれないって覚悟していた彼と、山矢君ともう一度、話ができるなら、してみたいって思っから」

「そうだったんだ……」

麻弥が美玖のこんな表情を見たのは、高校生時代を含めても初めてのことだった。

だが、美玖はすぐに目を上げ、またいつもの表情に戻った。「ねえ、異世界のこととは、やっぱり公表するつもりはないの？」

「うん。したって誰も信じてくれないだろうし、信じてもらおうと思っても何の証拠もないし。まあ、あたし以外の九人の行方不明パイロットの家族の人たちに気の毒だとは思っけど。異世界に引き込まれて魂を抜かれたってことを知らされない限り、無事の帰還を信じていつまでも待ち続けるんじゃないかな」

「じゃあ、異世界のことを知っているのは、麻弥とあたしだけってことね」

「それとあたしの両親」

「ああ、そうか。打ち明けたって、さつき電車の中で言っただよね」

「美玖に『ご両親なら絶対にわかってくれるから』って勧められた時には、正直、不安で一杯だったんだけど、家を訪ねてみたら、一目見てすぐに気づいてくれた。いま美玖が言っみたいに、やっぱり仕草とか顔立ちに昔の面影があるんじゃないかな」

「それで、麻弥はこれからどうするの？ご両親のもとに帰る？」

「ううん。山矢家にある日突然、女の子が住み着いたら、近所の人に変に思われるかもしれないからね。あたしは今まで通り、古津麻弥として暮らすことにする。それで、もし戸籍とかが偽造だつてばれそうになったら、その時には『健太は実は女性半陰陽だった』と

でも近所の人に説明して、山矢家に帰るわ」

「そう」

今、二人の間を涼やかな秋風が吹き抜けていった。心地よい風だった。

ふと滑走路のほうに目をやると、オレンジ色とクリーム色のツートンカラーのプロペラ機がちょうど離陸しようとしているところだった。

麻弥はプロペラ機が滑走路を飛び立っていったのを見届けた後、再び口を開いた。「本当言うよね、このひと月の間、すっごくつかったんだ」

美玖は意外そうに「え？どうして？」と言った。

「あたし、二年半前にこつちの世界に帰ってきてからずっと、自分は古津麻弥だって思い込むことで、苦しさから逃れようとしてきた。男に戻れなかった苦しさとか、両親に自分のことをわかってもらえないかもしれない苦しさとからね。実際、昔のことは思い出さないうちにもしてきたし、頭に浮かんできそうになってもすぐに沈めてしまえるようになってた。そのおかげで大学生としてそれなりに充実した日々を送ることもできた。

なのに、そこへ美玖が現れた。そんなバカなっと思った。たくさん人間が住むこの街で、どうしてあたしと美玖が同じ時に同じ場所にいなきゃいけないの、そんな偶然あり？って思った。あたし、運命の女神様によほど嫌われてるのかなって思ったりもした。今から考えたらとんでもない話だって思うけど、あたし、美玖のことを

逆恨みしてた時期もあったんだ。あなたさえ現れなければ、あたしの平穏な大学生活がかき乱されることもなかったのにつて」

「知らなかった」

「あ、でも、今は違うよ。むしろ感謝してる。美玖があたしの殻を破ってくれたつて。あたしがこの二年半の間、ずっとまとい続けた偽りの殻を破ってくれたんだつてね」

「偽りの殻？」

「うん。あたし、このひと月の間に、ずっと封印していた異世界での記憶をもう一度、呼び起こしてみたんだ。いま思い返してみると、あたし、あの頃、異世界から帰ってくれば、ただ帰って来さえすれば、それだけで元に戻るような気がしてた。元の自分を取り戻せるような気がしてた。でもね、考えてみたら、最初から元に戻るはずなんてなかったんだ」

「どういうこと？」

「あたしが異世界で過ごした一年半の間にだつて、異世界は少しずつ変化していたし、こつちの世界だつて変化してた。街にだつて、あたしの知らない店ができてたり、あたしの知らない音楽が流れたりもしてた。あたし自身だつて成長した。女になったばかりのころAカップだった胸も、こつちに帰ってくる頃には寄せて上げればBカップのブラが付けられなくもないぐらいにはなつてたしね」

麻弥はそう言つてちよつとおどけたように微笑んでみせた。

美玖は相づち代わりに「ははは」と軽く笑つた。

麻弥は続けた。「うまく言えないけど、人は立ち止まることのできない存在なんだって、立ち止まっちゃいけない存在なんだって思ったんだ。もちろん、いつまでも変わらない良い物だってあるし、そういうものを守っていかなきゃいけないのも確かだけど、でもそれは、立ち止まれないからこそ守る必要がある、前に進むためにこそ守るのであって、立ち止まるために守るんじゃない」

「うん」

「あたし間違ってた。こつちの世界に帰ることで、元の自分に返ろうとした。それができないってわかったらすべてをゼロにしてやり直そうとした。テレビゲームでもプレイしてるつもりだったのかもね。うまくいかないなら、セーブポイントまで戻るか、最初からプレイを始めるかすればそれでいいんだ、ってね。でも、現実はそのじゃない。いつも『今、この場所』が出发点なんだよね。昨日まで積み重ねてきたものの上にあるスタート地点から明日に向かって飛び立つ。あたしたちにはそれしかできないんだよね」

「そうだね」

「あたし決めたんだ。もう一度、操縦桿を握ろう、もう一度、アクロバット飛行パイロットを目指そうって」

「ほんと?」

「うん。それが、あたしにとっての『今』のスタートだから」

「そっか」

「今日、美玖を誘ったのはそれが言いたかったら。美玖には真っ先に報告しなきゃって思ってたね」

「じゃあ、また山矢君のあの華麗なアクロバット飛行が見られるんだね。がんばってね」

「うん、ありがとう」

「練習の時には、またお弁当作って持ってくね。あ、でも、麻弥はずっと一人暮らしだったから、あたしなんかよりずっとお料理が上手だよ。それなら持ってゆく必要ないか」

「ううん、あたし、料理はそんなに上手じゃないよ。それに美玖のお弁当、食べてみたいから。ぜひ持ってきて」

「わかった。じゃあ、練習の時だけじゃなく競技会の時にも持ってくね」

「競技会にいつ出られるかわからないけど、その時はお願い」

「でも、また八木沢さんみたいな人と麻弥を取り合うことになったらどうしよう……って、あ、そうか。麻弥は今、女の子だった」

「わからないわよ。もしかしたら、女のあたしにそういうことを思う娘こが現れるかもしれない。っていうか、女子高に通ってた頃、実際にいたような気もするけど」

「それじゃあ、その娘がまた麻弥に怪しげなペンダントを渡すかもしれないね」

「あたし、また異世界に飛ばされちゃうの？よしてよ」

「大丈夫、今度はもうちょっと早く『ペンダントをはずして』って祈ってあげるから」

「え？」

麻弥は美玖のその言葉を聞いて驚きを禁じ得なかった。山矢健太が異世界に引き込まれそうになった時、彼は複葉機の操縦席で確かに「ペンダントをはずして」という声を聞いた。その声に命じられるままペンダントをはずしたおかげで、山矢はドウムホルクではなくマキナスの森に落ち、その結果、こうして命を長らえている。あの声、命をつなぎ止めてくれたあの声は美玖の声だったのか？まさか。

美玖は麻弥が急に口ごもったことを不審に思い、「どうしたの？」と尋ねた。

麻弥は「ううん、何でもなし」とだけ応えた。あの声が本当に美玖の声だったのかどうかを詮索しても意味はないし、また証明のしようもないと思ったからである。ただ、麻弥は実際、異世界に飛ばされたり、そこで魔法を操る者たちと出会ったりした。こちらの世界でそんな魔法じみたことが起きたとしても不思議はないだろう。だとすれば、麻弥と美玖が偶然、再会できたのも、実は、山矢に会いたいという美玖の強い想いのなせる技だったのかもしれない。あるいは……

ふと麻弥の頭にルーミアの笑顔が浮かんできた。ドウムホルクでの別れ際、「ルーミアのことは絶対に忘れない」と約束したにもかかわらず、麻弥は忘れないどころか、この二年半の間、忘れようと

努力さえした。麻弥と美玖をひき会わせたのは、あるいはもしかしたら、ルーミアの想いだったのかもしれない。姉が偽りの殻に閉じこもっているのを感じ取り、叱咤激励するために美玖と会わせようとしたのかもしれない。それを証拠に、麻弥は美玖とホテルで再会した日の朝、正装すべく、タンスの奥にしまい込んであったアクセサリーを身に付けたが、後でよく考えてみると、そのとき首にかけたネックレスが、実は、異世界にいたころルーミアがプレゼントしてくれた、あのネックレスだったのである。こちらの世界に帰ってきてから一度も付けたことのなかったそのネックレスを初めて身に付けたまさにその日に美玖と再会するなど、単なる偶然だと言われてもにわかには納得しがたい。きっと、そのネックレスがルーミアの想いをこちらの世界に届けてくれたに違いない。そんなふうに思えてならない。

?? あたしは最低の姉だ?? 麻弥は、今日も首にかけてきたそのネックレスを握りしめ、心の中でつぶやいた?? ルーミアはこんなあたしを許してくれるだろうか? 許してくれなかったとしてもしかたがない。でも今のあたしにできる罪滅ぼしといえば、ルーミアも望んでいたように飛行機の操縦桿を再び握ること、それと、ルーミアを二度と忘れないようにすることだけだ。ごめんね、ルーミア。遠く離ればなれになっけていても、やっぱりあなたはあたしの大切な妹??

彼女はその時、もう一つ、別のことを思い出した。異世界から帰る直前、マヤはソーニヤに「元の自分を取り戻す」という願望を託された。しかし、麻弥は現在、その願望を現実のものにしてあげたと言えるのだろうか。

?? たぶん、取り戻したとは言えない。だけどあたしは今、単に以前の自分を取り戻すのではなく、それ以上のことをしてみせよう

としている。美玖や両親にとっては少年パイロット、友人たちにとっては女子大生のあたしが、これから女性パイロットという新たな古津麻弥に変わってゆこうとしている。こんなあたしの想いを、きつと天国のソーニャもわかってくれるはず？

不意に美玖が立ち上がった。西のほうから、先ほど飛び立ったプロペラ機が飛んでくるのを見て、きつとアクロバットを始めるのだからと予想し、立つことで視界を広げようと思ったのである。

麻弥も彼女につられて立ち上がった。

予想通り、プロペラ機は空中で複雑な模様を描き始めた。以前の山矢の操縦ほどではなかったが、それでも、見るものの目を釘付けにするほどのすばらしい操縦テクニックを披露してくれた。

しばらくそれを見つめていた麻弥が、ふと口を開いた。「そういえば、美玖に伝言があったんだ」

美玖はプロペラ機から目を離すことなく応えた。「誰から？」

「四年前の山矢健太から」

「どんな？」

「『俺は美玖のことが好き』っていの」

「そう」

「うん」

「実はあたしも、麻弥に伝言があるんだ」

「誰から？」

「四年前のあたしから」

「どんな？」

「『あたしも山矢君のことが好き』」

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1505p/>

紅の装甲竜騎兵

2010年11月26日14時16分発行